

四高専建築シンポジウム公開設計競技応募要項
http://www.yonago-k.ac.jp/Archi/HomePage/sympo/youkou/oubouyoukou

2. テーマ

衰退傾向著しい「地方商店街活性化の契機となる施設」の計画案を求める。

3. 設計条件

敷地：米子市四日市町82 (地方銀行跡地)
敷地面積：約860平方メートル
構造及び計画規模：自由

4. 競技会の主催者

主催者：米子工業高等専門学校建築学科
事務局：米子高専建築学科 建築シンポジウム実行委員会
連絡先：〒683-8502 鳥取県米子市彦名町4448
TEL 0859-24-5177 (担当教官 西川)
FAX 0859-24-5049 (学科事務室)
E-mail : sympo@yonago-k.ac.jp

URL : http://www.yonago-k.ac.jp/Archi/HomePage/sympo/index.html

5. 応募資格

明石、吳、石川、米子高専建築学科の全学生および
グループ（5名以内）での応募も認めます。

応募資格外者
高専事務局学生

対応答

郵便、FAXあるいはE-mailで受け付けます。
必ず封書で質疑事項1件につき1枚のA4用紙を使ってください。

質疑事項1件につき1枚の用紙で送信してください。
質疑事項1件につき1通のメールを送信してください。
質疑は受け付けません。

A1版1枚（パネル不可）
配置図・平面図・立面図・断面図（いずれも縮尺自由）、透視図（写真、CG可）その他必要
び説明文。

図面裏側右上に所定の用紙に必要事項を記入したうえ貼り付け、期日までに事務局宛持参ま
(建築家 伊東豊雄建築設計事務所
取県建築士事務所協会会長)
（女子短期大学講師）

査査委員による図面審査により入賞者8名を決定。
賞者はシンポジウム当日模型を提出、所定の時間内に計画案
生を交えた討論の後、審査委員により審査発表

15日（木）
5日



四高専建築シンポジウム
公開設計競技 1999

四高専建築シンポジウム
公開設計競技 1999

御挨拶

建築は、社会的問題や都市的問題を抜きには語れません。高専の建築学生も、まず二高専（明石、米子）の間で、建築や都市について発表し、話し合うこと求め、交流が始まりました。こうして始まった建築シンポジウムも1999年で23回目となり、高専の建築学生ならだれでも参加できるコンペティション「四高専建築シンポジウム公開設計競技」を行うことになりました。

コンペの対象地は米子市中心市街地の空店舗・旧鳥取銀行とその周辺となっていますが、本意は、テーマにある「衰退傾向著しい地方商店街を活性化させる施設」の計画案を求めるところにあります。まさに高専がある地方都市の今日的な課題です。

高専間での設計競技は初の試みで、事務局を預かる学生スタッフも作品が集まるまでは心配で心配で仕方がなかったようですが、テーマに対する関心の強さからでしょう、最終的には100点以上の作品が集まり、気苦労も喜びへと変わりました。作品の多くは学生らしく真面目で初々しいものでしたが、中には現実離れしたものや、求めるテーマを可逆的に表わしたものもありました。人々に警鐘を与えようとしているのかもしれません。審査委員長伊東豊雄氏は「応募作品にはそれぞれ製作の思いが作品にも十分に反映されており、これまでのコンペとは違って、楽しく審査ができた。」と言っていましたが、若い学生や生徒を前にすると、先生方も一味違う楽しい審査になったようです。

ここには応募作品を全て掲載していますが、高専に学ぶ建築学生のコンペに取り組む真摯な姿は十分に伝わってくるはずです。これが、一つの試みのきっかけになれば幸いです。

米子工業高等専門学校建築学科
学科主任 和田 嘉宥

公開設計競技応募要項概要.....	01
一次審査経過報告.....	03
一次審査講評.....	04
一次審査結果.....	05
最終審査概要.....	06
最終審査結果.....	07
審査講評.....	08
最終審査入賞者発表.....	11
最終審査経過.....	19
■作品紹介	
最優秀案.....	23
2等案	25
3等案	27
佳作案.....	29
選外佳作.....	39
応募作品.....	42
事務局紹介.....	67

一次審査経過報告

応募作品は9月30日の締め切りで8高専から107作品が集まりました（表1）。一次審査では、最終審査で発表及び審査する8作品の入賞作品を選んでいただきました。

審査は10月8日（金）米子高専の大会議室にて3人の審査委員の先生方により厳正に行われました。審査に先立ち、まずは3人の審査委員の先生方は、コンペの計画敷地の視察に訪れました。その後、米子高専に戻り、簡単に審査の進め方を話し合い、審査開始となりました。審査はPM2：30～5：00までの2時間半にわたり執り行われました。

審査方法は、それぞれの審査委員の先生方に10枚のポストイットを持ち票として持っていたいただき、並べられた作品の中から良いと思われた作品にポストイットを貼って投票していただき、その結果をみて、協議していただきました。そこで1票以上投票された20作品（表2）を集めて、3人の先生で協議していただきました。協議では、まず1票しか投票されなかった作品について、推薦者がコメントしながら協議が進められ、2票、3票の作品についても同様に協議されました。その後、もう一度、票がなかった作品の中からノミネートされる作品がないか意見が交わされ、018が候補に上がってきました。

最終的に、上位21選は1票以上投票があった20作品と話し合いの中で浮上してきた1作品を合わせた21作品となり、その中から入賞8作品、選外佳作5作品が選ばれました。

米子高専	(40)
石川高専	(25)
明石高専	(10)
吳高専	(17)
有明高専	(2)
岐阜高専	(2)
大阪府立高専	(1)
小山高専	(1)

高専別応募作品数一覧（表1）

作品番号	投票者：伊東	樋野	脇田
004		○	
006			○
008	○	○	
011		○	
012	○	○	
016	○	○	○
017			○
022		○	
029	○		○
031	○		
036			○
045			○
064	○	○	
072		○	
085	○		○
088	○		○
092		○	
094	○		
102	○	○	○
105			○

投票結果（表2）

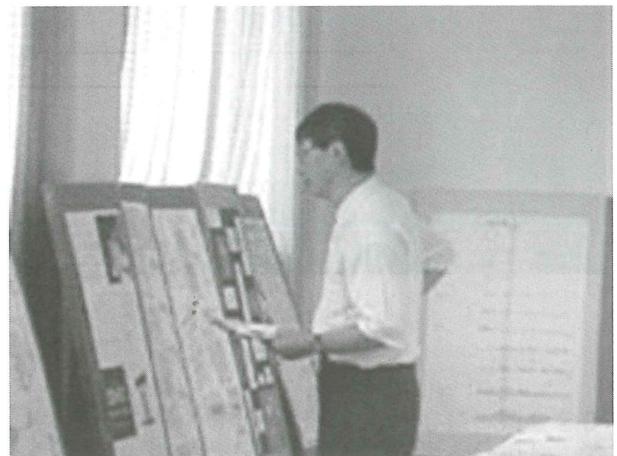
■審査委員長 伊東 豊雄

10月8日に一次審査が行われました。テーマは米子市の本通り商店街で、昔は大変栄えたアーケードのある商店街だったということですが、今は大型スーパー等の進出によってずいぶんさびれて、空店舗になっているところがたくさんあるというところです。テーマとしては大変面白い敷地で、この敷地の裏には旧加茂川という川が流れています、アーケードの通りと裏の川と両方にまたがっており、今も古い銀行の建物が残っている銀行跡地です。この銀行の建物は使ってもいいし、こわしてもいいという条件でこの課題が出されたわけです。このようなテーマは米子でなくても、全国どこの商店街でも今は同じような問題が起こっていて、一般性のある魅力的なテーマだと思います。それに対して、はじめてのコンペティションだったということですが、107点の応募がありまして、私と樋野先生と脇田先生の3人で審査をしましたが、とても力作がそろっていたと思いました。

審査はまず、3人で10票づつの持ち票を投票しまして、1票以上残ったものが、本日、展示されている21作品ということになります。その21作品の中から1点ずつ3人でコメントしながら、この8作品が残る結果となりました。この舞台上にある8作品の入賞作品と、外に展示されている13作品とはえらく差があるように感じられるかもしれません、13作品のうちのいくつかはこの中にあってもなんら遜色がなく、本当にわずかな差だったと思います。そのような方を含めて皆さんには、また来年もぜひがんばってください。

そして、ここに残った8作品は、3つの傾向に分けることができると思います。この銀行の建物を残すにしろ、こわすにしろ、この敷地にだけある企画をして、この敷地の中だけにとどまつて計画しているものがひとつ。それから、もうひとつはもう少しこの建物も修復したり、建て直したりするけれども、その周辺の空店舗も組み合わせて商店街を考えていこうという、もう少し広い視野にたってのまちづくりを計画しているもの。それからもうひとつは、もっと広い視野にたって、何か大きな自然の流れの中でもちといふのはどんな風に考えていいだらうかという、視野をうんと広げてしまつてこの敷地に対する回答をしたという3つのタイプに分けることができると思います。もう少し整理して言うと、町に住んでいる人の立場、店をもっている人の立場にたって、この敷地をどうしたらいいかという、企画をしたり、どのようなアイデアが込められているかという、専門的な言葉で言えば建築のプログラムにかかる提案がどのようなものかというのがひとつ。その企画をどのように建築として表現するかというデザインの問題がひとつ。それともう少し大きな視野にたってまちとか自然をどう考えていくかという思考そのものがひとつ。という3つの異なる提案として捉えることができると思います。

これからどのようにひとつずつ提案がなされていくか、みなさんも考えていただきながら、みなさんもどんどん質問をしていただきたいと思います。我々もこの8つの作品については今は全く白紙の状態で優劣がないという状態ですので、これからプレゼンテーションしていただくのを聞かせていただきながら、最優秀賞などの賞を決めていきたいと考えています。



一次審査結果

入賞8作品

- 008 松森 一行 明石工業高等専門学校5年
『看板建築』
- 012 中川 紗織 石川工業高等専門学校4年
『nurture street』
- 016 大學 美沙 明石工業高等専門学校4年
『商店森』
- 018 沢田 大輔 石川工業高等専門学校4年
『死と廃』
- 029 小林 健介・山木 洋平・木田 千尋 石川工業高等専門学校5年
『Change myself ~学びの形でかわる人・街・心・そして自分~』
- 064 北野 雅士 明石工業高等専門学校5年
『RECYCLE OR DIE』
- 085 高橋 援 明石工業高等専門学校5年
『商店街に「住む」 -立体町屋-』
- 102 永尾 達也 明石工業高等専門学校4年
『「まち」をつくる～まちづくり職人養成プロジェクト～』

選外佳作5作品

- 022 高柳 力也・高柳 七子 有明工業高等専門学校5年・1年
- 036 森川 真嗣・森地 佑太 明石工業高等専門学校3年
- 088 福原 進太郎 明石工業高等専門学校3年
- 094 庄田 亜希子・杉本 智恵・界 幸成 石川工業高等専門学校3年・3年・2年
- 105 森田 純子 明石工業高等専門学校5年

上位21選入選作品

- 004 中澤 潤 石川工業高等専門学校4年
- 006 上原 弘嗣 明石工業高等専門学校4年
- 011 遠藤 真哉・前藤 拓朗・江原 誠・芦谷 祐子・山口 博之 米子工業高等専門学校3年
- 017 村田 龍雲・金谷 亮輔・態尾 隆文 呉工業高等専門学校5年
- 031 前 静香 石川工業高等専門学校4年
- 045 山口 加奈子 岐阜工業高等専門学校5年
- 072 マスミ・メイサム 明石工業高等専門学校4年
- 092 菅浪 康二 明石工業高等専門学校4年

最終審査概要

「第23回四高専建築シンポジウム」

これまで四高専（明石・石川・呉・米子）で行ってきた建築シンポジウムの流れで、第23回四高専建築シンポジウムにて最終審査会を行いました。会場には、三高専の代表学生、米子高専の全学生、入賞者以外にも他高専や一般の方も多数参加していただきました。

期　　日　　1999年11月20日（土）

場　　所　　境港市文化ホール（シンフォニーガーデン）　鳥取県境港市中野町2050

プログラム　開演12：20

■第一部 伊東豊雄氏講演会「21世紀の建築像」

伊東豊雄氏講演会
講演会質疑応答

12：30-14：00
14：00-14：20

休憩

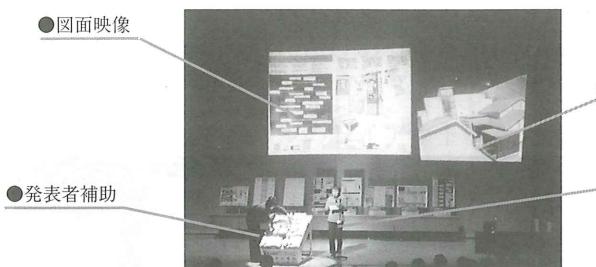
■第二部 公開設計競技最終審査会 「地方商店街活性化の契機となる施設」

審査委員長から一次審査についての講評
入賞者による作品発表・質疑応答
公開審査・審査発表
表彰式
学科主任挨拶

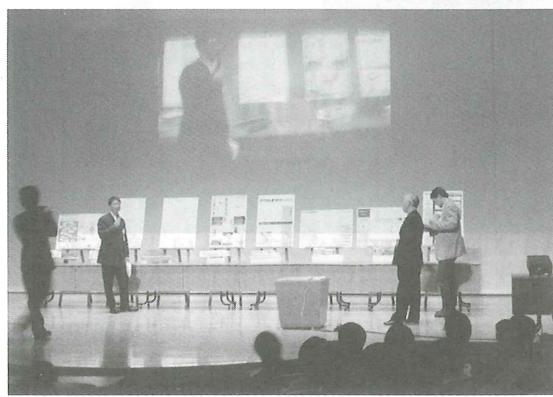
14：40-14：50
14：50-17：10
17：10-17：45
17：45-17：55
17：55-18：00

●当日の発表について

一次審査入賞者による作品発表・質疑応答では、1人8分間の発表と、それに続き8分間の質疑が行われました。作品の発表の後に、審査員の方々や来場者から質問を募り、それに対して発表者が答えていきました。発表は敷地とその周辺の模型、CCDカメラ、作品の図面を使って行われました。CCDカメラで模型を撮影しながら作品の説明を行い、補助者はレーザーポインタでスクリーン上の図面を示しました。スクリーンにはCCDカメラの模型映像と図面が投影されました。舞台上の配置は以下に示す通りです。



入賞者の発表形式



公開審査風景

最終審査ボスター
(デザイン: 明石高専4年 永尾 達也)



最終審査会の運営は、米子高専のシンポジウム実行委員であるリーダーの3年吉川哲史を中心に、司会を3年金田和弘・増本千賀が務めた他、当日までの準備、写真・ビデオによる記録など様々な仕事を分担し、学生主体で行われました。

最終審査結果

□最優秀案

008 『看板建築』
明石工業高等専門学校5年 松森 一行

□2等案

012 『nurture street』
石川工業高等専門学校4年 中川 紗織

□3等案

085 『商店街に「住む」-立体町家-』
明石工業高等専門学校5年 高橋 援

□佳作案

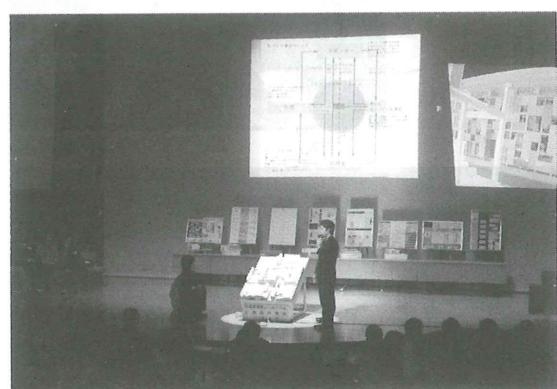
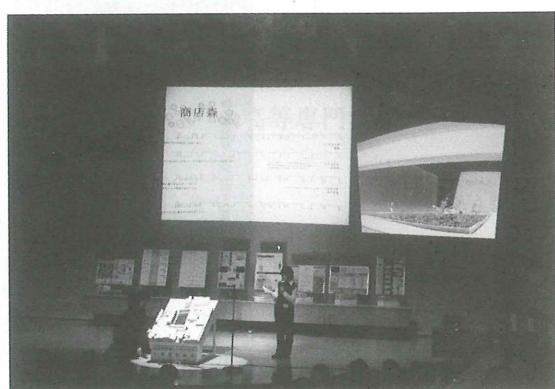
016 『商店森』
明石工業高等専門学校4年 大學 美沙

018 『Change my self～学びの形で変わる 人・街・心・そして自分～』
石川工業高等専門学校5年 小林 健介
5年 木田 千尋
5年 山木 洋平

029 『死と廃』
石川工業高等専門学校4年 沢田 大輔

064 『RECYCLE OR DIE』
明石工業高等専門学校5年 北野 雅士

102 『「まち」をつくる～まちづくり職人養成プロジェクト～』
明石工業高等専門学校4年 永尾 達也



発表風景

■審査委員長 伊東 豊雄

▼伊東豊雄建築設計事務所



この度四高専建築シンポジウムの一環としての公開設計競技において、審査委員長という大役を勤めさせていただきました。コンペティションは初めての試みということですが、学生主体の運営という点でも、また企画内容、テーマなどからも素晴らしいものであったように思われます。学生の背後で陰の力となった先生方の情熱とエネルギーなしには到底実現できなかったことは明らかです。

審査は一次、二次に分けて行なわれました。全国高専建築系学科のうち、四高専を含めた8高専から107点の応募があり、樋野、脇田両名と私の3人で審査した結果、一次では8作品が入賞となりました。一次審査講評で述べておりますので詳細は省きますが、予想を上回る力作ぞろいで8作品のみに絞るのは容易ではありませんでした。特に選外佳作の5作品と入賞作品とのレベルはほとんど違わないものでした。

二次審査は公開で行なわれましたが、このようなオープンな形式の審査は私の願うところででした。我々3名の審査員がそれぞれにどのように各作品を評価し、どのような議論の末に決定するかのプロセスを見ていただくのは我々にとっても、緊張する時間であり、応募者にとって、或いは参加者にとって最も真剣に建築やまちについて考える瞬間のように思われる事だからです。

8作品は選ばれただけあって容易に甲乙つけ難く、各プレゼンテーションもそれぞれに誠実で若々しく好感が持てました。コンピューターの利用も浸透してパネルのレイアウト等も大方は力作でした。

最終審査の経緯も記録されていますので明らかですが、審査員の評価も分かれました。従って最優秀賞、2位、3位に選ばれた作品はほんの少しで順位が入れ替わっても何ら不思議ではありません。

しかし私は最優秀賞となった松森一行さんの「看板建築」がベストだと感じました。松森さんの提案が現実、つまりこの商店街の衰退を直視し、復興する手続き自体を建築化しようとしているからです。建築は決して建築家のアイデアや夢だけで出来るのではありません。建築のつくられる社会的必然性があるのです。この必然性は必ずしも美しいとは言えないし、理想的なものでもありません。経済や個人のエゴイズムや虚勢のためにつくられたりもするのです。建築家としての理想像がどのようにしてそうした現実と関わりつつ、社会のなかの建築に置き換えられていくのか、そのような社会の現実を直視する眼が求められるのです。

2位になった中川紗織さんの「nurture street」と松森さんのわずかな差はこの社会をみつめる力の

差のように私には感じられます。人材育成の場としての商店街という言葉は言葉としての説得力はありますが、それがまだ建築の表現に転化されていないように思われました。この指摘をよく反芻して次回のエネルギーにし差のように私には感じられます。人材育成の場としての商店街という言葉は言葉としての説得力はありますが、それがまだ建築の表現に転化されていないように思われました。この指摘をよく反芻して次回のエネルギーにして下さい。

3位の高橋援さんの「立体町家」は建築デザインの洗練度という点から見れば、8作品中最もよくまとまった提案でした。人が住みつかなくなつた商店街にもう一度人を住まわせたいという発想もとても良かったと思います。ただここに住む人々（家族等）の生活像にいまひとつアリティを感じませんでした。この商店街の人達と話し合って、何故ここから人が出ていってしまったのか、その現実をあなたのなかに痛感していない空疎さを感じたのは私だけでしょうか。

「商店森」の大塚美沙さんと「死と廃」の沢田大輔さんは、いずれも廃墟と化していく商店街をテーマにしていますが、プレゼンテーションは対極的でした。大塚さんは店舗が朽ちて木々に覆われていく姿を美しい森と見立てているのに対し、沢田さんは廃墟を人々のこの街への愛情のなさへの報いの姿と見ているのです。二人に共通するのは現実の外側に自分を置いている点です。とりわけ沢田さんの作品は自暴自棄的な感情とも見られます。その感情に私自信も或る共感を覚えました。しかしながら詩人ではなくて、建築家にお執着するならば、商店街に暮らしている人々の気持ちに立ち返って欲しい。恐らくそこに住んでいる人達の方があなたよりもっと自棄的な気持ちになっているのかもしれません。でもその気持ちを乗り越えて何とかしたいと考えているに違いないのです。解決しようのない現実、そのなかで皆何かを考えながら暮らしているのだというところへもう一度立ち返って欲しいと思います。あなたの怒りやフラストレーションの感情はきっと何かをつくるエネルギーに転化されるはずです。このエネルギーこそ、若い人々にいま最も望まれているもののように思われます。

最後にこの公開設計競技が今後も継続され、発展することを大いに期待しています。

■審査委員 ひの 樋野 あさ 朝昭

▼鳥取県建築士事務所協会会长



この度の公開設計競技の審査にあたり、所感の一端を述べてみます。一次審査の対象作品は107点。短時間のうちに、数点に絞り込む作業はかなりの難行苦行であろうと覚悟していました。特に、応募者が長い時間を掛け、精魂を込めて作り上げた成果品を、その僅か數十分の一か、数百分の一の短い時間で選ぶということは、不遜なことかもしれないとの思いもありました。応募者の主張していることを見落としてはならないとの思い。そして、なによりも選びようによつては審査員である私自身が審査されているという精神的な圧迫がありました。私自身コンペに当選したときは、さすが審査員は見る目があると言い、選に漏れたときは審査員はなにを見ているかと悪態の一つもついてきてただけに、審査側にまわることは敵役にもなる事であり、いささか辛いことでもありました。

さて、私自身は応募全作品を最低三回は繰り返し見たでしょうか、最初は目ならしと同時に傾向を読みました。幾つかのパターンに分類できることが分かりました。今度はそれぞれのパターンごとに2~3点、そして、どのパターンにも属さない、いわばユニークな発想のものを1~2点選び、手持ちの10枚のポストイットカードを貼り付けていき、そのあと三人の審査員が協議して公開審査に進む作品を選んだのであります。結果的には類型ごとの代表作品とその他の作品が残りました。また見落としたものがあつてはいけないので、一応の候補作品を挙げた上で再度全作品に目を通したことを報告しておきます。

今回の設計競技のテーマが「地方商店街活性化の契機となる施設」であっただけに、選に残った作品と漏れた作品との違いは、設定された銀行跡地の計画がどれだけ商店街全体へインパクトを与える設計であったか、そうでなかつたかにかかっていたと思います。残念ながら一次で終わつたものの多くは、銀行跡地の計画のみで完結しており、仮に計画通りの施設が出来たとしても、商店街の活性化に大きく寄与できるとは思えませんでした。普段、学校での設計課題がどのようなテーマで出されるのかわかりませんが、私自身の四十年前の学生時代には「住宅」、「図書館」、「学校」などなど、思い出してみると建物単体としての課題ばかりであったように記憶しています。今回のように社会性をもつたテーマで日頃の課題も出題されないとすれば高専での建築教育を高く評価します。しかし、この道に入つて日も浅い学生諸君にとっては、まず綺麗な図面やパースを描くことが先だと考えているこの時期には、社会性にまで思いを及ぼして設計するということは難しいことであったかもしれません。製図能力も無いよりは有つたほうが良いに決まっていますが、これが建築家となるための絶対的に必要な条件とは思えません。門前の小僧習わぬ経を読む、の例えもあるように製図能力など自然に身に付くものであり、CADの時代なら尚更のことあります。それより

も、学校では課題にてている建物が社会の中で、どのような存在なのかということを深く考えてアプローチしていくよう勉強する事のほうが余程大切なことと考えます。

そのような観点からみると最後に残った8作品はともに商店街の活性化という社会性のあるテーマに真正面から取り組んだ力作ばかりであります。また、世界的な建築家である伊東豊雄先生に選ばれたということは大きな自信になる事だと思います。更なる精進を重ねられ大きく飛躍されるよう期待しています。終わりに、この設計競技の事務局として用意周到な準備をされてきた米子高専の先生方と裏方に徹して献身的に役目を果たしていた学生の皆様の姿に感銘を受けました。心からの敬意をささげます。

また、将来性のある学生諸君のための審査員といふいささか荷の重い任務でしたが貴重な機会をえていただきましたことに厚く感謝申しあげ講評にかけます。

■審査委員 脇田 祥尚

▼島根県立島根女子短期大学講師



中心市街地ならびに商店街の活性化はいまやどこの地方都市もが抱えるテーマである。私のすんでいる松江市でも米子とまったく同様な問題がおこっている。

私は「まちかど研究室」を99年の10月に中心市街地に開設した。かつては松江一繁栄していた白潟商店街の一角に建つ昭和2年建造の近代建築の4階である。木造船の舟底を天井に利用。先代の主人が昭和初期にロンドンにわたり、そこで見てきたデパートを松江でもやってみようとして作った建物である。3階にはベンチャー企業の事務所と建築設計事務所が入っている。

「商店街を考える－白潟本町・天神町・寺町－」と題した島根女子短大の学生による発表会ならびに公開展示、学生による祭りの夜の「あんどん」作成、まちづくり組織「まちづくりサロン」等によるまちなかでの野外映画上映会「まちかどシネマの夜」、また別のまちづくり組織「まつえ・まちづくり塾」による「みんなのチエを白潟本町商店街へ」ワークショップ開催、すぐ南に位置する天神町商店会との共催でのワークショップ開催や、島根大学の学生らによる天神町まちづくり提案発表会などのイベントを通して、この半年間、学生や市民のみなさんの参加によるまちづくり活動を行ってきた。学生、市民、商店街をつなぐための仕掛けをしてきたのである。

また定期的には、島根大学の教員による公開講座や、研究室ゼミの開催、あるいは一般の方々に気軽に訪れてもうための「ほんまちカフェ」の月一回の開催などを行った。今後は3階の企業が学習塾を町内にオープンするに際して、その一部をサロンにする計画があるが、そこをボランティア学生とお母さんたちの交流の場としてしかける予定がある。また近隣商店の経営／事業計画の立案を大学の実習として取り入れる準備をしているところである。

以上からもわかるように「研究室」に参加しているのは建築／都市計画を専門とする人間だけではない。情報経済、財政学、幼児教育といったジャンルの方々も参加している。また企業とも連携しながらのまちづくり提案も必要である。商店街の活性化には総合的なアプローチが必須である。

以上は、私が地方商店街活性化の契機となる施設というテーマに対して出した答えの一端である。

このテーマに際して、ただモノだけ用意しても仕方がないというのはわかりきったことである。考えるべきなのは、どのようにして人と人を、人と場所を「つなぐ」のかということである。集会所を用意したとしても、そこに人を集めためのしきけを用意しなければ、人は集まつてこない。いかにして人の集まるようなしきけをつくってい

くのかが本当は問われるべきである。

こういった社会的なテーマの場合、結局はその出来事がどこまで現実をかえうるかということだと思う。建築はそのための材料でしかない。建築を材料として考えた時、建築という行為をどこまで拡張しえるかということである。

計画の素案づくりに際して、近隣商店街の人々や一般市民の方々をいかにして巻き込みながら、その建築に対する思いを醸成していくか。自分達のまちの自分達の建築としていかにして彼らの意識の中に位置づけるのか。その方法論がまず問われなければならない。それは計画の素案づくりだけではなく、いってみれば建築のすべてのプロセスに関して言えることである。

そこには建築家の職能の問題も大きく関わってくる。建築家とは何をするひとか、という問い合わせである。

設計に際する様々な用件を吸い上げあるいは掘り起こす作業が前提になる。わかりやすく住宅で考えると、とりあえずの第一歩は施主に会いどういったことを考えているのかを知ることにある。

まちの建築を考える時、建築家はまちの人々に会って話をすることをしているのだろうか？周辺にすんでいる人々、その建築の前を通り過ぎる人々たちと話をする機会を設けているのだろうか。多くの人たちの多様なニーズを吸い上げ掘り起こしそれを一つのかたちにまとめていくことが建築家に求められている。そのプロセスをきちんと可能とするような方法論の開発がまず必要なのである。

最終審査入賞者発表

ながお たつや

■ 1. 「「まち」をつくる ~まちづくり職人養成プロジェクト~」永尾達也 明石高専 4年

発表：ぼくは現在の商店街は町ではなくくなってしまっていると考えます。人が住まなくなり、人々のつながりは消え、売るための装置となっていると思います。そのため、デパート、コンビニなどとの競争に負けていると考えています。このような状況から再び商店街をかつての町の姿に戻すことによって、商店街の活性化をはかることを提案します。商店街を町に戻すということは商業だけではなく、工業もあり、人も住んでいるという、商、工、住が一体となりコミュニティをつくりだしているような町にすることです。そこで今回ぼくはまちづくり職人養成所を計画しました。これは、まちづくり職人養成プロジェクトというふつうの地域住民がまちづくりに参加していくための事業に付随した施設です。ではまず、まちづくり職人養成プロジェクトについて説明したいと思います。このプロジェクトではまず、普通の地域住民から、募集をつり、まちづくり職人集団を結成します。この左の図にあるように、老若男女を問わず、だれでも参加をすることができます。この人達は、旧銀行の空間を利用して、教室集会所のような機能をもつ、作業場である土間の部分の先の間でまちづくりの基本的な技術を教わります。奥の階部分が創の間で、座学を勉強します。それで、手前に見える土間の部分が実際の実習や技術を身につける作業場として活用します。それと同時に、今必要と思われるまちづくり事業を興し、そこでこの人達は働きます。具体的には歴史的町並みの保存や、加茂川の修景などの事業を進めながら、まちづくりに必要な知識、技術、理念を学びます。これによって、地域住民がまちづくりに参加できる機会をもつだけでなく、将来必要になる、まちづくりのリーダーを育てることが可能であると思います。そのとき、この地域住民の人達は経験豊かな職人たちを招いて、弟子入りするというかたちをとります。この弟子入り制度は、先生と生徒という関係よりも、もっと厳しいもので、弟子入りしている間はその職人同士で共同生活を送らなければなりません。その共同生活を送るための施設は、旧銀行の奥にある建物で、職人たちは共同生活を送るための左の母屋の部分と、右側の職人たちひとりひとりのための空間である寝床からなっています。このように、商店街に住むというのは、まちづくり職人として、施設だけではなく、加茂川や商店街の維持管理もしなければならないためで、こうすることによって、知識や技術だけではなく、ものづくりの理念も身につけるためです。さらに、まちづくり職人集団として、地域と新しい関係を生み出すことも要求されます。そして、事業に参加していない一般市民にも、もっとまちづくりの認識を深め、参加できるようにするために、土間のとなりの部分に店をつくります。ここでは2種類のものを販売します。ひとつは実際のまちづくりの施工を行う上で必要になってくる、材料です。たとえばタイルや木の苗などを市民に買ってもらって、その材料を職人たちが、町につくりつけていきます。こうすることで、住民が所有するものがまちに組み入れられ、まちへの愛着が深まることがあります。もうひとつはこの職人たちが実習でつくったものです。これを買ってもらって、家や地域に組み入れてもらうことで、逆にまちづくり職人が地域社会へ参加する契機となると考えられます。このようにまちづくりの「つくる」、弟子入り制度での「住む」、店での「商う」という3つそろった施設をつくることで、かつての商店街に存在していたような工房を再現し、かつてあったと思われる長屋空間を創出することを試みています。人に見てもらうための工房や、店を手前に持ってきて、そのための母屋や寝床を奥に持ってきて、それらを石畳の道でつなぐことで、なくなってしまった職人、商人、消費者のつながりを生み出すことを試みています。

■質疑

伊東：とてもおもしろい提案だと思って聞いていましたが、これはある一定期間、あるひとつの職種の人達がここに住んで、変わっていくわけですか？

発表：期間というのは、その人の自由なんですが、習得するには一定の期間必要で、自分が習得したというところまではいなくてはいけないということです。その中でずっと続けていく人がでてくると思います。

伊東：では技のある職人さんはここに住み続けるわけですか？

発表：でも、ある程度技術をみとめたら、弟子入りという制度はなくなってしまうわけで、そうなったときに外にでてもらって、自分で店を開いたり、ほかの地域にいって、同じ様な施設で職人として迎えられる。

伊東：教える方の職人さんは、ずっといるわけですか？

発表：いや、その人はここに住んでもいいのですが、ぼくが考えていたのは、ずっと職人をつづけていて、その職業を引退してしまったような人達に来てもらえばいいかなと思っていたんです。

伊東：これは、商店街がつくるんですか？あるいは、町がつくるんですか？

発表：事業としては、まず最初は、地方自治体がまちづくり事業として、つくってもらうかたちになると思います。それで、その職人たちを雇うのは地域住民が雇うお金を少しずつ地方自治体からもらって運営していく形になると思います。そうすると店の収益金もくわえて、いけると思います。

伊東：はい、ありがとうございます。

樋野：では一点だけお聞きします。このタイプは敷地だけで簡潔したタイプのひとつだと思いますが、商店街の道路と直角に接している横の道路ですが、そこにはリヤカーで野菜売りのおばさんがでていたりして、この道は商店街と大型店を結ぶかなり交通量の多いところで非常にいい場所かなと思っていますが、そこをあえて寝床という昼間閉鎖する施設にされた理由、人通りの多いところに背を向けた理由をお聞かせください。

発表：この寝床はただ寝るためにあるわけではなくて、そのある程度教えてもらっているわけですから、各自がまちづくりとして町をみなければならないし、各自がそこの場所でも自分で何かをつくって売れるような、自分の店をもてるような場所になっています。

樋野：そこでも店が持てるということならわかります。夜だけ利用する場所かなと思ったのですからお聞きしました。

脇田：では簡単にひとこと。商店街活性化のためにひとつ大きなことは、買い物客が増えるということ。商店街で商売しているひとにお金が落ちることがあると思うんですが、この施設ができることで、この地域の方に与えられる利益というのはどういうことを想定されていますか？

発表：ぼくは長い目でみて、商店街を売るためだけの施設と考えるのはよくないと思います。というのは、商店街を売るための施設にしてしまうと、どうしてもデパートとかコンビニとかの競争に負けて、廃れてしまうからで、はどうして、商店街が残っているかというと、商店街を利用したい人がいるわけで、それは地域の昔から住んでいる人達であったり、老人であったりするわけです。その人たちのためにも残そうとするなら、商店街のまわりに人が増えることが前提だと思います。商店街に住んで商店街の住民ともつながり合っている空間をまちづくりで作って行くことが重要だと思います。

なかがわさおり

■ 2. 「nurture street」 中川紗織 石川高専 4 年

発表：まずこのタイトル「nurture street」というのは学ぶこと、創造すること、商いをすることで、すべての人のコミュニケーションの場、また創造の発信の場であってほしいと願ってつけたタイトルです。はじめに私が住んでいる金沢の商店街を考えてみました。にぎわっている商店街というのはやはり若者が求めるようなファッションや美容の小物とかいろいろ売っている店が並んでいて、そうではない商店街というのは年配の方が求めるような店が多いように思いました。地元の新聞に金沢国際デザイン研究所のアパレルデザインプロ科の学生が衰退しつつある商店街の中で売られている服や小物を利用したファッションショーを行うことに決めたという記事が載っていました。この商店街ではイベントの集客効果と中高年のイメージが強い商店街に若者を惹き付けるきっかけとなることを期待して、またこのショーのモデルは地域住民が出演したそうです。そこから考えて、若者を中心に呼び込めるもの、イベントを企画していくようなもの、地域住民が参加していくようなものがポイントとして見えてきました。しかし、イベントとしての企画はその瞬間に人が集まるだけで、活性化したとは言えません。それで先ほど商店街を例に挙げましたが、米子でも全国の商店街でも条件は同じと考えて、先ほどの企画を提案して実行したのは学生であるという事実に目を向けて、このような新しい活動のプログラムを自発的に行っていけるような学生が商店街に学びにくるというはどうだろうと思いました。つまり簡単にいうと、商店街を学校にしてしまおうと考えました。商店街の中にデザインという現代で身近なものにおける技術や知識を学び、社会に貢献できるような人材を育てるデザインカレッジを導入します。例えばファッションデザイン学科、スペースデザイン学科、クラフトデザイン学科などいろいろ想定して、これらの学校を分散配置させます。そしてこのアーケードは米子の学生の通過導線としてかなり利用されていると聞きました。その商店街の中にデザイン分野のプロを目指す学生が学びにくるという行為で、一時的に人が訪れるのではなく、毎日商店街の学校に学びに来るようになります。その場所から各分野で活躍するアーティストが産まれていければいいと思いました。そして、学生の活動の発表の場としてその他の空店舗にギャラリーやスタジオ、またストリート性を生かしたショーを行って自己表現の活動を支援する場所とします。時にプロを目指す学生達の中には将来自分の店を開きたいという希望をする人がいると思います。これを商店街という場所性から考えて、学校の休日を利用して空店舗にインディーズショップを開きます。仕入れから制作からディスプレイまで、自分達で店の経営を工夫することで商売のおもしろさや厳しさを学ぶことができます。それで、自分が制作した作品を商品として売ることで、またそれを買に来るお客様とコミュニケーションが生まれたりします。そして学生が経営する店というのはどんどん流行を取り入れていくので、商品の仕入れる品物が年をとらなくてずっと流行を追い求めていくような店にならいいと思いました。学校というのは、休日や夜間、利用されていないのがほとんどだと思います。それで学校を提供したり、空店舗にコミュニティセンターを導入して、地域の住民に対して、自分の趣味を生かせるような学校のデザイン学科にあるような創作体験教室やセミナーを開きます。それで、いろいろな年代の人達が、この商店街の中で自分の好きな創作活動をしたり、その作品を売るフリーマーケットなどを開いて、学生や地域住民がつくることや商いを楽しめればいいと思いました。それで、デザイン学科ギャラリ

ー、スタジオ、インディーズショップを入れて行くことで、商店街は学校になり、そして、学校は商店街にもなります。この商店街で学んだ卒業生が、自分の店を開いたり、今度は人に教える立場となって、この商店街に帰ってくるようなそんな人材育成の場であってほしいと思いました。

■質疑

伊東：その銀行跡地に設計した建物のことをすこし具体的に説明してもらえますか。

発表：アーケード側からは学校でどのような活動をしているかをわかるように、その学校で活動して、制作された作品をディスプレイするショーウィンドウにして、そしてこちら側がアーケード側で、ここの両面をガラスにして、中庭を見るようになりました。アーケードの中は圧迫感や暗さを感じるので、その中庭を設けて少しでも明るくするようにしました。それで、ここの中はここが授業をする教室で、ここは制作する場所で、コンピュータ室、デッサン室、ロビーとなっています。ここはこの学校で教える教官の部屋としました。

脇田：プレゼンテーションの中に学校を各学科ごとに分散配置というのがあったんですが、学科を分散配置して行ったときに、今そこに提案されている建物というのは、分散していった学科とどのような関係にある施設になっていくのでしょうか。空店舗を利用して、それぞれの学科を分散していくわけですね。そのときに銀行跡地に建っている建物というのは、どのような施設になるのでしょうか。

発表：これは、学科の例として、ファッションデザイン学科というのを入れて、いろいろな施設の中のひとつとして、この敷地にしました。

伊東：その商店街の中にある学科とは直接は関係ないわけですね。学科のひとつがたまたま新しくなって、他の学科は古い街の中にあるということでいいんですか。

発表：他の空店舗にこのように建てていくということです。

伊東：同じように新たに作るわけ？

発表：はい。

伊東：古い建物を使うんじゃないなくて？

発表：は・・い。

伊東：（笑）それはいろいろあるわけだな。空店舗は利用しないで、壊してしまって、作り替える？

発表：学校自体は建て直すんですが、そのギャラリーとか、小さいスタジオとかはそのまま空店舗をいろんなところに配置していくこうと考えました。

伊東：はい。わかりました。

■ 3. 「商店森」 大學美沙 明石高専4年

発表：私は米子の街に住む小学3年生の女の子です。ある夏の日、米子商店街の空店舗となった建物が取り壊されました。そのうちのいくつかを苗畑とすることになり、私の小学校もひとつの苗畑を管理することになりました。1999年10月、小学3年生のみんなで大山の山に登って、樹木の種子を採取し、苗畑に蒔きました。2000年の秋、小学4年生になった私たちは、発芽した苗を苗畑の中から自分の木を1本選びました。毎年秋に、自分たちで植え替えをすることになりました。銀行が取り壊された場所にも、根が生えはじめました。ここに敷地を1/100に割ったうちのひとつの大きさの地面を切り取って持っていました。今、苗が生えはじめたところです。2004年には多年草が茂るようになりました。中学1年生になった私たちは、この土地に私の木を植え替えます。自分の木は他の場所にも植え替えられています。2009年、苗の植え替えにより、土地が肥え、植物の生え変わりの周期が促進され、この土地は低木林に変わります。やがて、月日は経ち、わたしは大人になりました。わたしの木はアーケードを超える高さにまで成長を続けます。2049年、私は39才になりました。銀行跡地は森になりました。この年、自分の木の間伐がはじまります。間伐は私の木のある、銀行跡地からはじまりました。間伐は15年周期で行い、20年後に一通りの間伐が終了します。間伐は2回行われます。2099年、私は89才になりました。銀行跡地は雑木林となっています。2、3年後、野鳥の生息地としての森へと変わります。自分の木は、私が死んでも生き続けます。私がこの木の命を断たない限り、生き続けるのです。この模型が、2199年の地面を表わしたものでした。2199年、もちろん私はもう生きていません。そして、この木は人が立ち入ることのできない深い森となるのです。暗い森の中には、アーケードだけが残っているのです。

■質疑

樋野：非常にユニークな提案だということで、1次審査に残ったわけですが、具体的な問題として、既存の商店街の活性化と、この森とがどう結び付いていくかということを説明してもらえませんでしょうか。

発表：私はこの活性化という言葉の意味としては、この課題には反するかもしれないのかもしれないのですが、もう商店街は活性化はしないと考えました。それで、そうなったときに、この空店舗をどうするかを考えました。活性化とどう結び付けるかというのは、今の状態をどうするのかを考えることだと思ったのですが、そういうことではなくて、もっと長い目で見たときに、私たちがどうするべきか考えたつもりです。

伊東：そうすると、例えば最初に緑になった土地はそこに誰かが住んでいたんですね。その人たちはどうなっちゃうんだろう？

発表：空店舗になった土地なので、もう誰も住まれてないんです。

伊東：そうするとその土地は相変わらずその人が持ってるわけですか？

発表：そうなると思います。

伊東：ホントにそうなると思いますか？

発表：でも、その人はその土地を出て行ったから、その建物は空店舗になって、誰も利用されていないと思うんです。

伊東：そうすると、一種の公共のような土地になっていくということでしょうか？

発表：そうだと思います。（すいません）

伊東：もしオブザーバーの方でここにお住まいの方がいらっしゃいましたら、このプロジェクトをどのように思われるかご意見を伺いたいんですが。

会場：ちょっとお聞きしたいのは、あなたはひとつずつ空店舗ができてきたときに、長い将来にこの地域を森にしたいのです。で、その森っていうのは、お話しの中では立ち入ることもできない森にしたいということは、ただ緑が欲しくてするのか、同じ生かさないのなら、もう緑がある森でいいやということなのか、それを生かして少しでも例えば生活して生活する方がいらっしゃれば、その辺の空間を利用しようとしておられるのか、その辺をお聞かせください。

発表：人の立ち入ることのできない森と言ったのは、200年後のことです。

伊東：はじめ私が考えたのは、地域の人や小学生も含めて、自分の木を一本もって、それを商店街の空店舗となってくる土地に植えていこうという考え方で、木を植えたいからと言って、商店街が廃れたらいいという気持ちで考えたものではありません。

会場：気持ちよくわかるんですが、その点々と森ができるまでですね。

伊東：それはあなたにとって、全部森になるには大変な世纪がかかるんでしょうけど、あなたにとってその思い浮かべられた街並みというものはどのように映るのかなということを聞きたいのと、それがただそこにあって、生かされ方はどうなのかなということをお聞きしたいんです。

発表：私はここに住んでいないので、ここに商店街も行ったんですけど、客観的に、またこの商店街をすごく遠いところから見てるかも知れないんですけど、森の生かされ方というの、そこに自分の木があることで、人がそこに訪れると思います。

脇田：この提案は今、対象になっているひとつの商店街に対して、森になるという話に帰結すると思うんですが、これはイメージとしては、米子の中にもいくつか商店街があると思うんですが、他の商店街もこんな風にならいいな、こんな風になるというイメージで発想してるんですか？

発表：この木を植える場所はこの本通り商店街と元町商店街だけではなく、旧加茂川沿いだったり、もっと西側にある商店街の空店舗にも自分の木を植えていく、やがては海ぐらいまでどんどん広がっていく。空店舗がそんなにすぐには増えてくるとは考えていないで、でも自分の木を植えていくという活動はずっと進めて行きたいので、そういう植える場所がなければ、加茂川沿いとか、海に向かって植えていこうと思っています。

伊東：ぼくは司会者ではないですが、もっとまわりの方もコメントも含めて、おしゃれいただいた方が、商店街ではないですが、これが活性化すると思います。

会場：例えばみかんの箱にひとつ腐ったものが入っていた場合に、全体がそうなっていくことが考えられます。その場合に、何店舗か空店舗があって、それも同様な状態になっていたときに、その間に挟まれて仕事をされてる方のことを考えていらっしゃるのかどうか。それとあと、ここで一番基本的な問題だと思いますが、こここの場所である必要があるのかどうか。それをお聞きしたいです。

発表：はじめと全て森になってしまった時はいいと思いますが、間の森が増えてきて、商店がひとつとかいう状態になってきたときのことだと思うんですが、それでも、わたしは商店のことを考えてないわけではないんですが、そこの周りの木は地域の人が植えた木であって、残っている店というのは、その時点では全く人が立ち入ることができなくなってしまった森ではないので、普通に商売は成り立つと思います。

さわだだいすけ

■ 4. 「死と廃」 沢田大輔 石川高専4年

発表：こんにちは。最初に眠い方は退席してくださって結構です。何人か目についたんで。とりあえずこの会場に商店街からいらっしゃった方は何人ぐらいいらっしゃるか手を挙げていただけますか。

(拳手が目立たない) それでは商店街のことを一生懸命考えても意味がないですね。(いらっしゃいますよ) 少ないです。もっと来て欲しかったんですけど。まず最初に、栄枯盛衰という言葉があるように栄えることだけではなくて、衰えるということも商いではないでしょうか。衰退の原因について、商店街の人と、その周りの人の衰退の問題の捉え方が違うんじゃないかなと思うんですけど。活性化について商店街の人に衰退の原因がもあるなら、外から活性化の契機となるような建物をつくることはできないのではないのでしょうか。なぜなら、建物をつくり、人が集まったとしても、それは衰退の根本的な問題の解決にはならないのでしょうか。つまりひとつ建物を作ったくらいで商店街が活性化されるというのはちょっと理解できないです。衰退と死について、衰退するということは死ぬということに近いのではないか。衰退=悪いという既成概念は正しいでしょうか?そもそも衰退は悪いのか。常識というのは正しいのでしょうか?

死について、死とは直面せざるを得ないもの。必ず訪れるもの。死を告知されるということ。それは私たち自身。否定しようがない事実。死を自覚するということは、私が主体であり、商店街が告知されたら、商店街が主体であるということ。私が死について考えるということは、生を考えるということ。末期患者が死と向き合い、その人を見届けることが重要ではなかろうか。廃虚の存在。これから、滅び行く、死に行くものを見つめる空間は大切ではなかろうか。自分の弱さと無力さを感じる空間。みなさん少しこのテーマについて考えてもらえますか?私が思うに、商店街の人全員が街を活性化させるべきと思い、今衰退している街があるということを認識し、自覚しないかぎり、この米子の商店街は活性化できないのではないかだろうか。

■質疑

会場：あなたの言いたいことを30秒ほどでまとめてください。

発表：それはなぜでしょうか。

会場：あなたの発表態度は非常に不面目で失礼だと私は思います。

発表：では必要なことだけ。基本的に外からっていう活性化について、商店街の人ではなくて、このコンペみたいに外から建物をつくるということは、根本的にこの商店街を理解できるかという問題について疑問があって、たぶん無理だと思うんですよ。本質的に、もしこのひとつの土地だけで伊東さんがいいものを作って、人が集まつたとしても、他の商店街に住んでいる人がぜんぜん客が入らなくて、幸せではなかったら、何の意味もないと思うんですよ。以上です。

伊東：ぼくはあなたの態度は不面目だとも思わないし、すごく一生懸命このテーマに答えようとしているのはよくわかるつもりですが、でもどうしてこの商店街は衰退していくんだろう。

発表：ちょっとデータがなくてよくわからなかっただけで、テーマを出されたのが米子高専で、それが商店街からの要望で、活性化させてほしいという意見だったかよくわからなくて、仮定として、米子高専や周囲の人が勝手に衰退しているという意見だからテーマにしたのではないかと思って。

伊東：そう言うんだったら、あなたの言うようにみんなが考えていないんじゃないかなというのもちょっとショッキングな言い方かもしれないし、ここを歩いて、例えば住んでいる人もいるわけだから、

どうしてなんだろうと聞いてみるのもひとつ的方法なんじゃないかな。

発表：一番重要なのが、商店街の人の一部が活性化についてがんばってもしょうがないわけで、商店街自体を活性化させたいのであれば、その子供まで入れて、全員が一体となってこの問題に取り組んで欲しいと思ったので、全員に問題を自覚させるような建物をつくりたかったんです。

伊東：うん。みんなそう思ってるだろうと思うんですよ。これは質問の時間だから、ぼくが一人でコメントしてはいけないかもしれませんけれども、一人一人はみんなそう思ってるけれどもそれができないっていう、みんな個人の力では、なんとかしたいとみんな自覚して一生懸命考えていても全体としては動けないという仕組がやっぱりあると思うんですよ。いきなり死んでいくしかもうないという前にもう少しやりようがないのかなと、あなたのを聞いていて思ったんですよ。

発表：違う方法で考えたらあるかもしれないけれど。

伊東：そうじゃないとさあ、ずっと建築をつくるのをやめちゃうしかないじゃない。まあ、やめてももちろんいいんだけどさあ、やっぱりぼくだって、ぼくがじゃあ、いきなりここでなんかやつたって、たいしたことはできないと思う。でも今よりは少しは良くなぞかなあと思わなきゃ、とてもできないわけで、みんなやっぱりそりやってそんなにすごいことができるとは思ってないんじゃないかな。

発表：わかってても、その衰退の問題から目を背ける人もいると思うんですよ。その衰退というのが、自分たちの街だから、どうしても納得いかない場合があると思うから、全員がその衰退に対して、本当に向き合えば、ちょっとしかできないって言うけど、やってみないとわからないことで、勝手に決めつけるようなものでもないと思うんですよ。

伊東：それはよくわかるし、あなたがそう言いたい気持ちもわかるし、もうちょっと別の言い方はなかったかなというのをもう一回書いてみてほしいなと思いました。

樋野：私、事務所協会の立場からここに座っておりますが、私の間も大勢ここに来ておりますので、ちょっとその方たちに質問してほしいと思います。鳥取から木下さん、一番後ろに座っておられますが、質問をお願いします。

会場：えー起きておりました。(笑) 私はあなたの名前を忘れましたが、仮にA君だとしたら、A君は街並みなり、アーケードの下のつながりを見ながらどういう風に思ったのかなと想像してますけど、きっと街を活性化させていく、再生していくというのはそんなに簡単ではないよと、だから、もっとできるだけ多くの人達にこの問題を考えもらいたいと、だから安易にものをつくるんじゃないなくて、荒れた状況というものをこんなに悲惨だよというところを逆に見せていくことの方が大事じゃなかろうかという風なことなかなと思って見ていました。少しあなたにより考えて思っておったところですが、しかし、それでいいのかというところはあります。ちょっと質問にはなりませんけれども。

発表：そのことについて、ぼくじゃなくても、みんなにこの商店街これじゃなきゃダメっていうのが、その絶対的な存在理由は意味があって、ないような気がしたんで、余計にただつくるということに対しても、疑問があったということです。

■ 5. 「Change myself ~学びの形で変わる 人・街・心・そして自分~」

こばやしけんすけ きだ ちひろ やまきようへい
小林健介／木田千尋／山木洋平

石川高専 5 年

発表：Change myself、自分自身を変えるという意味なんですけれども、まずこの地方商店街である、米子本通り商店街を活性化していく上で、私達が考えたことは、自分達を変えなければいけないということを考えました。自分達が変わっていくことで、商店街の街自体が自然に変わっていく、建物とかそういうことではなく、自然に商店街全体が変わっていき、活性化していくという考え方を持ちました。ではなぜ自分達が変わらなければならぬかと言いますと、米子高専事務局から送られてきたデータなどを参考に商店街の問題をいくつか挙げてみてその対策案を考えてみたんですけども、その対策案を考えて、どのような提案が適しているか、考えてみたところ、対策案の内容から考えてみても、現地の状況から考えてみても、一つの建物だけで、活性化を計るということは、どうも難しいということです。簡単に例を挙げるとしたら、今年のプロ野球の結果はみなさん覚えていらっしゃいますか。阪神タイガースに野村監督が来たんですけども、結果は相変わらず 6 位でしたね。阪神タイガースのファンの方とかいますか？申し訳ありません。雑談です。

そういった例があって、一つの建物だけじゃあ、活性化はできないとそういう風に考えてきました。あと、この商店街全体を考えた時に、大規模店舗やコンビニエンスストアの進出があると思われました。商店街と大規模店舗の違いはどこにあるのかと、商店街の良いところはどこなのかと、その良さをのばしていくことを考えました。それで、商店街の特有の良さとは何かと、私達は商店街でのものの商いの中で生じるコミュニケーションや心づかい、親切や情報のやり取りに注目してみました。つまり、商売の要素には、物の商いだけでなく、人の心と心であったり、知恵と知恵の商いがあると思いました。これこそ、大規模店ではない、商店街の良さだと考えました。そこで、学びの場というものを考えてきました。その契機の場となる建物として、米子中心商店街活性化対策企画室の設立、ここや、平面図でいうと 6 番なんですけれども、ここやここで、商店街全体の企画や、この相談室、もともといる商店街の人たちが相談しあって活性化していくという部屋なんですけれども、ここ 1 階部分は学びの場ということで、レクチュアルーム、お互いに技術を交換しあったり、そういうことをしあい、学び合っていくというところです。この学びの場の学びというのは、商店街の人や学生の人たちが、商売を学ぶという意味合いをもっております。これが全体に広がっていく、その商店街全体を学びの街ということにして、これ全体をゾーニングしたんですけれども、まずいくつかのプロフェッショナルスクールというものが、年齢の幅広い範囲で専門について学んでいこうということです。こういった商売とかそういうのを考えていく上でもっと深く考えていましたら、経営とか、経済的なところに私たちつながっていくんじゃないかなというのを考えてみました。経済ということで、みなさん、今、経済の状況とかわかりますか？ほくもそんなにかじってないので、浅い知識しかないんですけど、日本は何年か前にバブルが崩壊して、今もまだ不景気の状態なんですけれども、世界の中心と言われるアメリカもそのバブル状況に陥っているという問題があるんですよ。果たして、そのアメリカという国がバブルが崩壊した時にどうなるかということを考えたことがありますかね？おそらく、アメリカがバブルが崩壊することがあったら、日本全体にも影響が及んでくることがあるんじゃないだろうかと思います。そうすれば、みなさん建築やってて、上の方を目指しているんだろうと思うんですけども、建築業界にもいろいろな影響が及んでくるんじゃないかなと思いました。それで、商店街の活性化ということで、商店街の活性化を考えるべきなんだろうけど、その商店街の活性化を考えた上で、経済的にももっと考えていくべきだと考えました。まあ、商店街の経済がなんの関係があるかと思うだろうけど、その小さな経済、ミクロ経済から考えていくことが、マクロ経済の解決までいかないけれども、そういうためには力にはなるんじゃないかなと思いました。

■ 質疑

会場：地元の設計事務所ですけれども。あの、今 5 例目の提案ですけれどもこの高専さんの学生さんが、1 番は職人を育てよう、2 番の方は今専門的な学校にして、空店舗を利用して、プロを目指す養成学校にしようと、そして今 5 番の方も商店街の有志を集めて、そこで企画したり、専門的な勉強会をしようとかそういう話をされておられますよねえ。ただ、今そこでそういうことは今までの商店街さんでもいろいろ企画してやっておられると思います。そこで経済といっておられまして、アメリカのバブルのことを言っておられましたが、現実にアメリカのバブルがはじけておるんすけれどもね、そしてまた株価が高騰してますよね。そういう時代の流れはあると思います。実際この商店街をどのようにして、生きかえらせるかというのが、一番最初の課題だと思うんですけども、みなさんちょっと課題の中から話が逸脱しているんじゃないかなと思うところもありますし、ただ今の 5 番の方の専門的な人を集めてものをやったり、現状の空店舗をどうしようかということは一切考えずに、ただその場所だけを考えているのかお聞きしたいのですが。

発表：学びの場ということは、今利用されていないわけですね。そうしたら、その利用されていないのを、最初にこの建物で学びあって、貸すような形で、自分達の作ったものを売買していくというか。空店舗は最初は貸したようなかんじになって、ここに技術を交換しあってきた人々が来て、その人達がそれぞれの店を借りると言う形で自分達の店をもって、商売をしていくということです。

会場：そうすると 2 番の方にもう一度お聞きしたいのですが、2 番の方は上がっておって自分の意思があまりはっきり言わなかったと思いますが、同じ様な考え方ですね。今 5 番の方が言っておられる考え方と、2 番の方がそこで勉強して、専門的な知識を設けて、そこの空店舗を借りたり貸したりして、物事をしていこうという考えは同じ考え方でございますか？

中川：はい。

会場：ありがとうございます。

伊東：いろいろ経済のことを言われたのですが、そこは古い銀行の建物を使って、それぐらいのことはできそうに思ったんですけども、新しく立て替えるんですけど？あなたがそこで提案しているようなプログラムだったらその古い銀行の建物を使っても十分できそうな気がするし、どうしてそれを壊して新しく立て替えるのか？そしてそれは誰が建てるのかを聞いてみたかったです。

発表：気持ちの切り替えです。

伊東：はい、ありがとうございます。

会場：少し話がわかりずらかったところがあるんですけども、今回の計画は建物単体の計画なのか、商店街を含めたランドスケープとしての計画なのかという位置付けがわかりにくかったので、そのところをお教え願います。

発表：建物一つだけじゃ、最初に言ったと思いますが、無理じゃないかなと思ったんです。全体的に長いスパンでと思って、だから契機になるという建物をテーマとして与えられてたんですけども、自分達の考えでもそれなりに沿っていると思うし、そのうえで全体的に商店街の流れも考えていきたいなと思って、今回の提案を行いました。

きたのまさし

■ 6. 「RECYCLE OR DIE」 北野雅士 明石高専5年

発表：はじめに、この計画で商店街が活性化できると現実的に考え、答えを出しました。米子の商店街を歩いて見ると、かつてはにぎわいを見せていました商店街も、大規模店の進出や過疎化など、時代の波に流れ、衰退の一途をたどっています。空店舗が多く、通行人が店にも入らず、素通りしてただの通路と化しています。通行人が素通りなのは、商店街にも問題があると考えました。昔の商店街にあって、今の商店街に失われているものがあります。それは人と人とのつながりです。昔は商店主と客がコミュニケーションの場でした。しかし現在は店員と客との関係です。商店街にもう一度コミュニケーションの場を与え、そこには人が自然に集まるようになります。人の流れの中心になるように考えました。また近年、ごみ埋立地、焼却炉の慢性的な飽和状態や、ダイオキシンの発生など、今まで放置されているごみの処分方法が問題となっています。本案では商店街に唯一リサイクルの場を設け、その空間が街の中心となり、また集められた商品が商店街で新たな市場を形成する地域に根差した商店街の活性化を試みる提案です。実際の計画に反映させるために4つのREを考えました。日本は他の先進国に比べ、格段に環境意識が低い。行政は経済活動を常に優先させるが、私達はそれを特に問題に思うことすらなく、デモを行ったり、市民集会を開くわけでもない。ここではリサイクル＝再利用、リユース＝再使用の意識を市民にもたせ、時間の経過とともに、リフューズ＝拒否、リリース＝減少に発展していくことをもう一つの目的としています。ひとりひとりの環境意識を高めて、人と人のつながりを強め、活力のある街をつくり、それが周りにも波及し、やがて国家の制度を変えうるような力になることを期待します。本案を具体的に商店街で実行するため、2つのシステムを導入します。一つは私たちがいらなくなつた服、家具、電化製品、そして普段価値がないと思っている、生ごみ、缶、ビン、雑誌類などリサイクルステーションを持って行くと、その価値や量に応じて、カードにポイントがたまる。集まったポイントで商店街の商品を買うことができます。リサイクルステーションに集められた資源の内、生ごみやビン、缶、プラスティックは、一度他の場所に運ばれ、加工され、ビン、缶、雑誌、段ボール、古紙、繊維製品、腐葉土等に姿を変え、再び商店街に戻ってきて、店に並びます。服、電化製品、家具などは選別され、商店街の空店舗で売られます。消費者はリサイクル資源やリユース資源やごみやいらなくなつた家具などを持っていくことによって、ポイントがたまります。そのリサイクルステーションに持ち込まれたリサイクル資源は企業に一旦持ち込まれ、そこで、リサイクル商品に変わって、商店街に戻って、最後に消費者がそれを買うことによって、一周していきます。このように、ひとつの商品がごみとなって、リサイクル資源となります。次に空間の説明をします。ここはエントランスロビーで、人が集まる憩いの場のようになります。人が持って来たごみをここで選別して、分けられます。ここは倉庫となっています。前で集められたごみが選別されて、最後にここで外に出ます。出たごみは商店街でそのまま売られるものもありますが、例えば生ごみなどは腐葉土とかになって、畑に持ち込まれて、消費者のもとに戻ってきます。コンセプトを建築に表わすために、まず鳥取銀行の建物をまずリサイクルしました。ここに入り口が3つあるのですが、この3つは1Fに3つ、2Fに3つリサイクルの場がありますが、そこで、その流れを示すために3つのドアをつけました。天窓もここに3つあります。この建物はガラスで囲まれているのですが、その理由は、人々にリサイクル、リユースを意識して、より一層環境意識を高めてもらうためです。ここではある人の例をとって説明します。ごみがここでは例えばペットボトルがリサイクルステーションに運ばれて、そこから商店街に持ち込まれたごみがもう一度消費者にもどるシステムになっています。

■質疑

勝田：商店街でポイントで買い物をするとあるのですが、商店街の店の方々はどのような形で、利益を得るのでしょうか。ものが出ていくだけのような気がするのですが。

発表：消費者からリサイクルステーションにリサイクル資源がもって行かれて、消費者にポイントが渡されます。リサイクルステーションは企業に有料で、もしくは農家に有料でリサイクル資源や堆肥などを渡します。そのお金をポイントと商店主と交換します。それで一回りします。

樋野：環境問題ということは、これからの大変重要な問題として認識しておりますがはたしてこの商店街にリサイクル工場が、といういろいろと問題があるかと思います。一つはゴミの持ち込み方で、この商店街だけでなく、おそらく他の地域からも集めることになると思います。特に、家具というようなお話しもありましたが、そこまでのアクセスの方法は？例えば手で持つて行くのか、車で持っていくのかといった様な。

発表：それはどちらでもいいと思います。

樋野：車の場合はどういったルートでアクセスするのですか？

発表：（図面を指しながら）ここまで車で来てそこから持つて行けば良いと思います。

樋野：分かりました。あと、もう一つ、井戸端会議ということで人が集まってコミュニケーションをとる様なことがあると思いますけど、ゴミ捨て場会議ということがはたして成り立つかどうかということです。ゴミの前でみなさんが和気藹々とコミュニケーションの場を持つことになるのでしょうか？

発表：ここの場を中心的に集まるということだけでなく、リサイクル、リユースをすることによってこの街を好きになってもらうのです。そして、この商店街から都会に出ていった人達や出ていく人がいなくなつて、人口が増えて、商店街に人が増えることで活性化につながると考えます。

会場：商店街は、かなり興味のある地区なので参加させていただいたのですが、まず一点は建物が建つというのはかなり興味があると思うのですが、ビーアールする様な建物かどうか、また私は市街から車で二十分钟の郊外に住んでいるので、そういう所に住む人の建物になるかどうかという点と、もう一つは、敷地の裏が旧加茂川ということで“加茂川を美しくする会”というものが結成されているのですが、それとか加茂川を整備しようという動きがあるのですが、それに対してすぐそばにリサイクルセンターが建つということに対してどう考えておられるか二点質問したいと思います。

発表：例えば“加茂川を美しくする会”があったとしても、商店街活性化につながるとは思いません。この建物は、システムを商店街に導入することによって、この建物によって商店街の活性化を進めることができると思います。

会場：どうもありがとうございました。

■ 7. 「商店街に「住む」－立体町屋－」高橋 援 明石高専5年

発表：今日、日本の中小都市の多くが中心部の衰退という同じような問題を抱えています。この敷地のある米子市も同様だと思います。では、なぜそうなってしまったのでしょうか。それには都市のポラリゼーション、文教化が関係していると考えます。都市の文教化、ポラリゼーションとは都市がかつて持っていた住む機能というものが、都市の中心部から郊外へと移ってしまい、そこに商店街、商業機能が取り残されてしまったということを意味していると思います。また大規模店舗の進出によって、ものを買う場は便利な大規模店舗に移ってしまいました。これは商店街衰退の主な原因ではないかと考えました。そこでぼくはこの原因を踏まえて、商店街に住むということを提案したいと思います。このように商店街をもの売る町から、人の住む街へと新しい街へと変えることによって、かつてのにぎわいを取り戻せるのではないかと思います。商店街に住むことによって、次のような利点が考えられると思います。一つ目は職住近接による通勤時間の短縮です。人々の勤め先の多くの都市の中心部に集まっていること。また敷地が米子駅に近いことからそう言えるのではないかと思います。二つ目は人と人とのつながりが生まれるということです。元来、商店街は独特のコミュニティを形成していました。それで、そこに住むことによって、人とコミュニケーションする機会が増えて、つながりが生まれるのではないかと思えます。また子供の健全な成長という面でも、小さい時からこのコミュニケーションをとるということは非常に有益だと考えられます。ではここで、実際どのような空間を作ったのか説明してみたいと思います。伝統的な町屋は商売をする空間、住む空間、庭、路地からなっています。それで、ぼくはそこからヒントを得ました。そして立体町屋というものをつくりました。この集合住宅の一つの住戸は二つの次の空間をもっています。それは、このコミュニケーションスペース=売る場、そして、プライベートスペース=住む場です。二つの空間とも、内法3.64mという尺間法に基づいたモデュールになっています。そして、この住戸を立体的に組み合わせ、最終的に路地で結ぶことによって、ひとつの集合体をつくりあげます。この立体的に組み合わせる過程において、ヴォイドというものが生まれます。このヴォイドは空間に光、風といった自然を取り込み、人々との会話を生む働きをします。では実際にどのような建築空間になっているか見てみましょう。模型を見てください。今見えている、このルーバーに囲まれた空間がコミュニケーションスペースで、壁で囲まれた空間がプライベートスペースです。この二つの空間は同じ寸法をもっているわけですが、視角的にも空間的にも異なった空間となっています。ではコミュニケーションスペースの内部を見てみたいと思います。このように、全体がルーバーで囲まれています。ルーバーで調整された光が壁や屋根を通して、室内に入り込むことになっています。またこのルーバーによって中からも外からも人の気配を感じられて、人とのつながりが感じられると思います。では一体どんな人がここに住んでいるのでしょうか。図面でそれを説明したいと思います。まずユニット2ですが4人の年配の女性がここを利用しています。どのように利用しているかというと、野菜をここまで毎朝アパートで運んできて、コミュニケーションスペースで商売します。そして、商売が終わったあとにプライベートスペースで休憩して帰ります。図面でいいますと、ここがユニット2のコミュニケーションスペースでここがプライベートスペースにあたります。つづいてユニット3を説明します。ユニット3には40代の夫婦と10代の娘2人が住んでいます。商店街に住むのをきっかけに親子の絆を強めようと、妻と娘二人で趣味の洋裁をしています。作ったものを安く提供しています。最近では近くにたちよった常連の人達も手伝うようになりました。空間でいいますと、ここがユニット3のコミュニケーションスペース、ここがプライベートスペースです。次にユニット7の説明ですが、ユニット7では30代の夫婦と小さな子供二人と生活しています。夫は近くの米子市役所に勤めており、徒歩で通勤しています。妻は特技の英会話を生かして、英会話教室を開いています。図面でいいますと、ここがユニット7のコミュニケーションスペース、ここがプライベートスペースです。このようにコミュニケーションスペースは商売をする人もいれば、会話をす

るだけという人もいます。それで、様々な用途がありますが、その人がコミュニケーションをとることを目的としていれば、自由な使い方を決めることができるわけです。結論として、商店街に住むということは、住む人々に多くの利点があるとともに、商店街が人の住む町として、新しい町となることによって、かつてのにぎわいを取り戻すことができると考えられます。

■質疑

会場A：コミュニケーションの場とプライベートの場があるということはよくわかったんですけども、全体的にみたときに、あまりにも統一性がないといいますか、はじめて来た人にやさしくないというか、英会話教室があったり、野菜を売ったりするところがあつたり、その辺はどうなっているんでしょうか？

発表：かえってそのようないろいろな店とかスペースがあることによって、いろんな年齢層の人々がそこに集まることができると思うと、ぼくはその方がいいと思っているんですけども。

会場A：人それぞれということで、わかりました。

会場B：大変わかりやすい説明だったと思います。商店街の場合、何が問題かといいますと、店があつても人が買ひに来ない。人が通らないことがあると思います。その場合に、住む機能を加えて、住むということは住む人はその商店街を使うんじゃないかと思ったんですけれども、そこで売ることもされるということは、住む側と売る側が一緒になってるということは、結局その人達だけで利用するだけで、他のところから人が集まつて来ないと思うんですけど、その辺はどうでしょうか？あと仮に住んでいても、夜になるとあそこの商店街は閉まりますから、どこでも買えないとそしたら活性化にならないんじゃないかなと思いますけれども、その辺をどう考えておられるかもうちょっと教えてください。

発表：ここで敢えてコミュニケーションスペースを売る場と名付けているので、そう思われたかもしれないんですけど、ここにはいろんな場があって、営利目的で売っている人は住まないわけです。ですから非営利なわけですから他の商店にとっても競争相手となる可能性はないですし、コミュニケーションをとるという目的でこの場を設けられているわけですから、商店という意味でみんな方がいいと思います。

伊東：今の方の質問ももうちょっと別の言い方をしたかったんだろうと思いますが、こここの商店街に商店を経営してらっしゃる方もずいぶん外に出て行って住んでいらっしゃる方も多いと聞いたんですね。そのために夜はすぐに閉まってしまうし、それは何かここには住みたくないとか、住んでもとても不便だとか、周りがみんな暗かったらもう少し外で住みたいとかしますます悪循環になることがあると思うんですけども、あなたがつくったこの町屋は商店街の店とは何か違う魅力があるのかな？

発表：商店街の店とは違うというのは、非営利目的か営利目的かの違いがあると思うんですけども、この場合には老人が一人で暮らしているというスペースもあるわけです。その老人の方はコミュニケーションスペースをただ単に会話するだけのスペースとしてあるわけです。普通の商店とは全く違うというわけです。そういう面で外から来る人々にも営利目的ではないもっと暖かい雰囲気をもとめてくると思うんですよ。そういう点が周りとは違う魅力だと思うんです。

伊東：あなただけに限らず、他の人たちもさつきからずーっと同じような印象があるんですけども、営利目的じゃなくて、じゃあ誰がそれをたてて、お年寄りに与えてくれるんだろうっていう疑問があるんですけどもね。

発表：そうですね。（笑）それは、普通の企業では成し遂げることはできないと思うんで、たぶん公共団体が運営するという形になるのではないかと思います。今のところはそう思っているんですけども。

伊東：はい、どうもありがとうございます。（笑）

まつもりかずゆき

■ 8. 「看板建築」松森一行 明石高専5年

発表：看板建築とは衰退著しい商店街において、スポンサーにより看板を募り、看板により既存の建物である鳥取銀行を街づくりセンターとして再生利用することによって、セルフビルトにより空店舗を再生する看板プロジェクトです。看板とは広告がなされた建築資材のことを言います。米子本通り商店街の人々がこの鳥取銀行の後をどうしようかと考えています。そこで、次のような意見がきました。そうだ、商店街の拠点としよう！しかし、資金が足りないなあ。街づくり基金をつくって、そこから資金を得て、そこから街づくりセンターをつくろう。話し合いは続きまして、この商店街の問題ってなんだろう。数多く見られる空店舗ではないのかな。街づくり基金の看板とユニットフレームを貸し出して、空店舗の中を気軽に安く使えるようにしたらしいんじやないかという意見がでました。ということで、街づくり基金ですが、米子の商店街の街づくり協議会やボランティアの人々を母体として街づくり基金を設立します。そして看板を出してもらうスポンサーを募り、そこでスポンサーに広告を出す建築資材を購入してもらい、その収益で街づくりセンターを運営していきます。次にその資金を利用して、鳥取銀行後を商店街の人々や、ボランティアの人々、近くの幼稚園、小学校、中学校の子供たちなどによって、床のタイルが貼られたり、色が塗られたり、みんなの手でまちづくりセンターの姿へと変えていきます。この街づくりセンターは商店街における街づくりや空店舗づくりの拠点となります。ここには街づくり協議会事務所というのがありまして、これは街づくり基金の窓口となっております。街づくり基金に参加したい人はここを訪れます。ここに多目的室、ホールがあるんですけれども、これらはこれからの街づくりについての話し合いや商店街の催しに利用されます。スポンサーから集められた看板は作業スペースにて加工されて、街づくりセンターのファサードについていきます。ここでファサードの変化をみてみましょう。第一段階として、鳥取銀行の後に、街づくりセンターとしての新しい機能が加えられます。第二段階としてスポンサーからの看板が街づくりセンターのファサードにつきはじめます。第三段階として、看板がファサードを覆います。ここから空店舗への看板の利用がされていくことになります。第四段階では、空店舗で利用される看板がはずされていき、加工がなされています。空店舗が埋っていくにしたがって、看板が減っていきます。この商店街に昔からある鳥取銀行のファサードがもっている商店街の記憶というものが、看板をとっていくにしたがって、見え隠れするということになります。第五階、看板が利用されて、なくなっていくと、また街づくり基金の募集がなされます。もどってきた看板や新しく出された看板がファサードについていきます。このファサードの看板の増えたり減ったりがこの街づくりへの参加や空店舗利用の成果、まさにこれが看板となるのです。看板がそろったので、空店舗の利用者を募ろうということで、新聞や雑誌、口コミ、ラジオ、テレビ、看板をつかっていろいろ宣伝しよう。ということで、いろいろな利用者が相談に来ました。利用者は街づくりセンターのコーディネートルーム、この2Fのこの部分ですけれども、どんな店を出すのかを話し合って、店舗の構成の仕方や使用する看板の数、ユニットフレームの数、素材を決めます。ユニットフレームとは1800x900のモジュールの素材を組み込むことが可能なフレームです。いろいろな素材を組み込むことによったり、構成の仕方によって、ユニットフレームは性格を変えていきます。ベニヤ板などにするとパーティションになったり、棚をつけたり作業のテーブルをつけたりできます。このフレームはボルトで接合でき、組み立ても簡単です。一度構成しても、もう一度構成し直すということが可能です。このセルフビルトによって、様々な世代間のコミュニケーションが生まれて、話し合い助け合いが生まれて、それぞれの世代を理解し合う機会をつくりだし、コレクティブな商店街へと生まれかわります。ではAさんの例を見てみます。82才のおばあちゃんなんですねけれども、自慢の漬物をみんなに食べてほしいと空店舗の利用を決めました。街づくりセンターでコーディネートして、作業スペースでセルフビルトを行い、組み立てられた空店舗の様子です。ここではフレームでパーティションと漬物を置く棚、作業机を構成しました。このような街づくり基金、空店舗の利用を

活性化として提案したいと思います。

■質疑

脇田：建物の利用のイメージがちょっとわからないんですが、ホール、多目的室とありますが、簡単には説明されたような気がするんですが、もうちょっと具体的にそこではどういうことをしていくのか説明してもらえませんか？

発表：窓口があり、ここでは事務的な作業をするところですが、この多目的室ではこれから将来について話し合います。この屋外と室内の作業スペースで看板の加工や空店舗で利用するユニットフレームの組み立てを行います。空店舗を利用するわけですが、今の空店舗は休憩室やトイレになっているわけですが、そこが埋っていくと必要な数が減って行くので、休憩室的な性格も取り入れて、トイレも組み込みました。

脇田：商店街の会議や地域の催しに使うということがホールのところに書かれているのですが、これはつまり町内会の集会施設のようなイメージでいいのでしょうか？

発表：そうですね。商店街の話し合いの中から将来の商店街というものを見出しているということ、その一つの手助けというか一つの方法ということで、この看板とユニットフレームというのを提案しました。

伊東：ここに取りつけられた看板が再生利用されていくというプロセスというのはわかったんですけども、一番最初のスポンサーを募ってここに看板を出してもらうというのでは、あなたのイメージではどんなスポンサーがいて、どういう人たちがここに看板をスポンサーシップしてくれるんだろうというのが見えて来なかっただけです。

発表：はい。看板というのはいろいろな目的というのがあって、企業、個人、その国や地方公共団体などの看板、広告もすることができます。

伊東：ただでさえ、衰退して人がこないとか夜はぜんぜん人が通らないとかいうそんな通りに企業が看板なんか出してくれるだろうか？意地の悪い質問かもしれません。それからテレビとか新聞とか何かコネクションすると言つてましたが、それはどういう意味ですか？

発表：この取り組み自体がまさに看板ということで、ここからこう発信していくことで、この仕組を宣伝することになりますし、それに付随して企業の看板というのも広告されるのではないかと考えています。

樋野：ひとつ質問します。この施設の看板は空店舗に利用するというのですが、この施設の利用が増えれば増えるほど、空店舗が多くなるということで、商店街にとっては好ましい現象ではないわけですね。逆に、商店街が繁盛して、空店舗が出ないとなったら、この施設は機能しないという矛盾も含んでいると思うんですけども、どうなんでしょうか？

発表：衰退しつつある、この商店街に歯止めをかけて、新しく転換していく装置としてこの看板建築というものを考えました。

樋野：ということは、歯止めがかかった時点では看板は動かないということですか？

発表：空店舗だけではなくて、ユニットフレームと看板というシステムはどんどん波及していくと考えていますから、終わってしまうという考えはないです。

会場：実際にこのセンターができた時に運営をして下さる方はどういう方にお願いしたいと考えますか？例えば学生を入れてほしいとか、企業になるのか、第三セクターになるのかとか、かなり運営をやるということが大事な部分をしめていると思うんですけども。

発表：まあ、母体となるのは街づくり協議会とボランティアの方々ですけれども。

会場：例えば職業とか年齢層とか。

発表：全く関係なく、すべての様々な世代の人が参加していくことで、互いのカルチュアを理解しあってもっとよりよいものになっていくんじゃないかなと思っています。

最終審査経過

伊東：それぞれの入賞者には大変がんばって発表してくださいました。とても難しいテーマだと思いました。我々でもいい回答がだせるかどうか自信がないような問題で、それを審査するのはとても大変だなと思って聞いておりました。最初に申しましたように、ある程度いくつかのパターンに分けられるのではないかと思いました。まず敷地として与えられた銀行を商店街全体のネットワークの拠点にしようとしているような案がいくつかありました。例えばこの小林さんの「学びの形で変わる～Change myself～」とか、最後の松森さんの「看板建築」、またこの中川さんの「nurture street」も商店街の中にデザインカレッジをつくっていくという提案でしたね。また、商店街の発展は前提にしているのですが、比較的単体として考えている案として、この永尾さんの「職人養成プロジェクト」という案、このリサイクルの問題を扱った北野さんの「RECYCLE OR DIE」というプロジェクト、また商店街に住むという「立体町屋」を提案している高橋さんのプロジェクト。またこの「商店森」の大塚さんのプロジェクトと「死と廢」の沢田さんのプロジェクトはもう少し視野を広げて自然のなりゆきに任せるとか、外側からものをみるような印象をもった作品など、それぞれ違いますけれども大きく3つのパターンに分かれると思います。それではこの審査は30分以内で決めなくてはいけないということですから、まずは樋野さんから、すばり印象に残っているとか、これがいいんじゃないかというザックバランなご意見をお願いします。

樋野：発表者のみなさんは8分間の発表という、質問時間をいれても16分間という非常に短い時間での発表ということで言いたいことの半分も言えなかつたのではないかなと思いながらも、いじわるな質問をして、誠に申し訳ありませんでした。今、伊東先生からもおっしゃいましたように、類型的なパターンができると思います。その中で、私自身も難しい課題だったかなと思います。あの場所だけを計画しても商店街の活性化につながるのかと問われれば、やや疑問をもたざるを得ないところがあります。しかしながら、この商店街の活性化の拠点づくりとして、このような課題にたいして真正面からきちんと取り組んだことを評価したいと思います。そういう意味から小林さんの「Change myself」が現状分析がしてあることを評価したいと思います。それから中川さんの「nurture street」は町の広がりを求めた、商店街の空き店舗を利用したことを評価したいと思っています。ただ、教室分散ということに対しては多少問題点もあるかと思いますが、とりあえず2点にしぶらさせていただきました。

伊東：ありがとうございました。それではつづいて脇

田さんどうですか？

脇田：はい。事前打ち合わせを全くなしでしゃべっていますが、重なるとしゃべりにくいですね。一つはこの「Change myself」が気になります。ただ、今日のいろんな質疑の中で、またみんなの発表の中で問題点が浮き彫りになりますし、地元の商店街の人々ががんばらないのに、外からなんだかんだ言ってもしょうがないよという問題がひとつあると思いますが、そこでこの「Change myself」の提案というのは経営者と地域住民との学び合うというのが視点としては大切なんじゃないかなとは思います。ただ、これは具体的にどうやって学び合うのかというのを見てこないので、これは商店街がこれまでやっていた会合を繰り返しているだけとも受け止められし、外から経営のプロを呼んできてその講習をやっているというような、これまでと同じような学び合いの在り方をやっていても何もかわらないんじゃないかなということがあります。地元の人たちのパワーを育てながら考えるという意味でおもしろいかなと思いました。それからまた重なるんですが、この「nurture street」は松江でも同じなんですが、中心市街地が戦後衰退していくという問題をずっとみたりすると、ひとつは学校が中心市街地からなくなつていったというのが非常に大きな問題となつていて、かつては市街地の近辺に学校があつたけれども、今は郊外にでてしまつて、若い人達が町を歩かなくなつたんですね。そういう意味では学校を再び中心地に呼び戻すというのは、考え方としてあるのかなと思います。そこでこの案を押したいと思います。あと気になっているのは、リサイクルの「RECYCLE OR DIE」と、商店街に住むという「立体町屋」の2作品です。住むというのは基本だと思いました。人がいないのに賑いもないというのでとりあえず住むという話はあると思います。ただ、じゃあ住めばいいのかというわけにもならなくて、商店街活性化のために、その一角に高層マンションを建てたからといって、そこに住んでいる人たちが本当にそこで買い物をするのかと言つたら、それはしないわけで、それにはしきが必要なんですが、そこまでは踏み込んでいないので、そこは気になるのですが、住むというのは基本だと思うので挙げたいと思います。それとこのリサイクルの案は新しい産業を産むというか、古着だとかそういうものが見直されつつある中で、うまく時流を捕えた案ではないかなと思っています。というわけで、以上4案を押したいと思います。

伊東：はい。ありがとうございました。ぼくがまあいいかなと思ってた案とは完璧にずれちゃつたんですが（笑）。ぼくは共通に質問していたのですが、何かリアリティがないなあと、思ってい

たんです。誰がこれを作るんだろう？ということを考えていません。つまり自分が経営者だったらこんなことにお金出して作るんだろうか？あなたたちも、社会人一歩手前なのだから、それぐらいの社会性はあるべきなんじゃないかと思って聞いていました。その中で一番がんばっていると思ってたのが、「看板建築」ですね。彼は看板をどうやって集めてくるかというところはあんまり説得力はなかったんだけれども、とにかくお金をもってくるんだという強い意思があって、そのお金をつかって何かをしようという、一応論理的に循環しているところが、説得力があると思いました。また彼はこの建築をきっちり説明していて、アップでこの模型を映したときに、古い建物のまわりに看板がたくさん取りついている姿がなかなかおもしろいなと思ったんですね。またこのように看板がとれたりくつついたりしていけば、建築の表現としてもなかなか魅力的だと思いました。町は生きていて、変わっていくものだということを形で表現しているところをぼくは評価しました。

あとはこの「立体町屋」ですが、彼も建築をデザインとして説明したいという意思がはっきりしていて、ぼくは好感をもちました。どこまでリアリティがあるかというのは、ぼくも質問した通りですが、やっぱりここに何か魅力的なものをつくって、とにかく人に住んでもらって、それから住む人を増やしていくことですね。「死と廃」の沢田君がひとつぐらい何かをつくってもだめだと言ってましたが、ぼくはひとつ何か魅力的なものがあれば、町は変わっていくと思っているのです。しかし、これを一体誰が作るのか？という点では考えこんでしまいますけれども、ともかく人を住まわせたいというこの提案は、まちづくりにとって、積極的なことだと思います。

それから、この「Change myself」と「nurture street」はぼくはあまり魅力を感じなかったんですね。というのは、どうしてこの建築が必要なのかがぼくにはよくわからなかったからです。銀行自身が変わろうとすれば、それぐらいのことは銀行がやるべきだし、今の建物で今の組織でやればいいじゃないと思ってるんです。そのあたりがぼくには納得できないということと、この「nurture street」のデザインスクールのもの、若い人が集まって面白いということですけれども、ここにデザインスクールを作らなくても、もっと今ある学校ががんばれという気がするんですよね。ここに空店舗を利用して、本当に学校が成立するのかというのにはかなり疑問があります。

まあ対立的な状況になったので反論を言っていただいた方がいいと思いますが（笑）。

あとはこの職人のプロジェクトは気持ちとして

はわからなくはないですが、実際にやるとなると、デパートでの職人を呼んできてそこで作って見せるような、やらせに近いものになるんじゃないかな。なぜこの場所で？と考えると、職人がものをつくるというのは、その土地と結び付いて伝統的に続いているわけで、場所と離れてしまったときに、これが成立するかどうかは、疑問をもちますね。

あとやっぱり、気になるのはこの「死と廃」のプロジェクトです。これは建築家が建築を提案するプロジェクトではないけれども、若いロックの人がロックでいいそうなことをここで言ったような印象があって、「大人たちおまえら何やってんだよう！」みたいな感じで、一方ではいやだなあと思いながらも、みなさんも帰り際にには気になりながら帰るというようなインパクトがあったんじゃないかなと思います。

脇田：「nurture street」のデザインスクールですが、これは私はぜひ押したいんですね。先ほどの伊東先生の話ですが、私はここに米子高専ができればいいということを提案したいんです。この案でおもしろいのは学生がものを売ったり、地域の人もいろいろと空店舗を活用したりとかで教育プログラムも内包していて、ここに交流が生まれる。実は私は松江で学生を教えていて、来週から授業の一貫で町なかで喫茶店をするんです。これは実際に自分でものを売ってみて、そこから社会を学べということなんですが、こういうことって、実はすごく必要なことで、そこから町を変えていくことができるんじゃないかなと思っています。ですから、ぜひともこの案は押したいと思っています。

伊東：だったら、なぜ古いものをリノベーションしていくことから考えていかないのか？ということが疑問ですね。せっかくこのように点在している町屋で、ここは川と商店街の両方に面していて、車のトランスポーテーションの問題を除けば、本当はすごく魅力的なつくりになっているので、そのあたりのことがもっと積極的に提案していればよかったなと思ったんですね。

樋野：私は2点しか言ってなかったのですが、実はこれは言い訳でもなんでもなくて、「看板建築」も3点のうちのひとつということで印をつけていたんですね。ただ、発表を聞いていて、これが最初のうちは稼働すると思うんですが、それが一時ぴたっと止まってしまって、強風がふけばたばたと看板がなるようなみすぼらしい施設になりかねないなあという気がしたので、三角ということで、先ほどは言わなかったんです。1次審査の時から注目はしていました。

伊東：「nurture street」の学校についてはどうですか？

樋野：今、本当に学生が学校に勉強しにくるのだろうかという思いがしております、遊びにくるのが目的じゃないかなと。そういう面では問題あ

りかなとは思っていたんですけどもね。果たして全国から米子を目指してくるには、よほど立派な先生がいないと来ないなという気がしてたんですね。ただまあ、学生がいるってことは、確かに町の活性化になるかなとは思っています。今は年寄りしかいませんから、若い人がいればという気がしています。

伊東：やっぱりこれが一押しですか？

樋野：一押しというわけではないですが。

伊東：ここでちょっと、実際にこの辺りに住まれている方にご意見を伺ってみたいのですが、いかがでしょうか？ どれがいいということでなくとも、本日の感想でもかまわないので。

会場A：商店街から来たもので、やはり現状に一番マッチしていると思ったのが、「看板建築」ですね。他の方のよかったです。現実的には手が届きにくいかなと思ったんですね。そこで「看板建築」なら少し努力すればできるかなあと思っていました。

伊東：学校はどうですか？

会場A：そうですねえ。

伊東：あんまり若い人に来られちゃ困るとか？

会場A：そういうわけではないですが。実は商店街でもこういうことを考えたことがあります。今、もうひとつ銀行跡地のところに「れいのろおど館」という鉄道博物館をつくったんですね。もう12月4日からオープンするんですが、これをつくるまでにいろんな方に案をいたしました。米子高専の学生さんにも考えていただきました。結局「れいのろおど館」というのに決まったのですが、やっぱりいろんな条件というのがあるものですから、手の届くものでないと実現が難しいんですよね。その点、今日一番参考になったのが「看板建築」でした。

伊東：ありがとうございました。他にこの辺りにお住まいの方はいらっしゃいませんか？

会場B：今日の審査では、夢を与えるような提案のおもしろさか、実現の可能性が高いものかどちらを考えいらっしゃるのでしょうか？

伊東：それはもちろん学生さんの提案で、ここに住んでない方も多いですから、夢であってもかまわないのですが、ただ夢といつても全く架空の夢を描くのではなく、町づくりというからには、どういう根拠にもとづいて自分が夢を描いていくかということははっきりする必要があるんじゃないかなと思います。だからすぐ実現するかというと、どれも実現しないと思いますけどね。

ではもう一度この辺で整理してみますと、今の感じだと、「nurture street」「Change myself」「立体町屋」「看板建築」あたりでしょうか。でももう一度、一つだけ押すとしたらどれでしょうか？

脇田：ひとつだけなら「nurture street」ですね。大学な

り高専なり高等教育機関が町並みにあるというのがいいですね。これは自分がこういう職についていることもあるかもしれません、実は松江の中心市街地に昭和2年に建ったあるビルがあって、そこに私がまちかど研究室という学外研究室をつくって、そこでいろいろとゼミをやったりして、地元の人たちと交流したりということをここ何ヶ月間はじめたところなんですね。それで学校が地域に出ていくことはすごいパワーになるなというのは確信しているので、「nurture street」はぜひ押したいなと思っています。

伊東：では今の意見を総合しますと、「nurture street」か「看板建築」だと思いますが、樋野さんいかがでしょうか？

樋野：はい、また言い訳がましくなりますが、「看板建築」は1次審査の時からいいなと思っておりまして、人口の少ない人通りの少ない商店街ではと考えだとやや減点かなと思いますが、第一印象ではこれが一番だと思っておりました。また本日来てはじめに模型を見たときもこれかなとは思っていました。

伊東：では「nurture street」と「看板建築」を比べたら「看板建築」ということによろしいですか？

樋野：はい。

伊東：では審査委員長権限も含めて「看板建築」ということでいいでしょうか？

会場（拍手）

伊東：住んでおられる主婦の方のご意見もありましたので、松森一行さんの「看板建築」を最優秀賞ということにさせていただきます。

伊東：では2等賞はおのずと「nurture street」になるかと思いますが、よろしいでしょうか。「nurture street」の中川紗織さんに決定いたします。

会場（拍手）

伊東：あともう一点の三等賞は、今の意見ででてきているのは、「Change myself」か「立体町屋」かあるいは「RECYCLE OR DIE」の3つあたりかと思われますが、いかがでしょうか？ 脇田さんは「Change myself」でしょうか？

脇田：はい、まあ「Change myself」はふつうすぎるかなとか、ちょっとつめが甘いかなという気はしています。そこに比べると、住むというのは非常に大切なことだと思うので、商店街に住むという「立体町屋」でいきたいと思います。

伊東：ちょっと変わってきましたね。樋野さんはいかがですか？

樋野：はい、まあ「Change myself」も押していましたが、「nurture street」が入ったからにはこれと似た案ということで、残念ながらということですね。本当のことをいうと、一番、真正面から課題を受け止めているなというところは評価した

いと思いますが、類似した案よりはちょっと違ったタイプを残したいということで、残念ながら。

伊東：はい、それでは三等賞は「立体町屋」です。

会場（拍手）

伊東：まあ、「Change myself」の方には、また次回がんばっていただくということで、他の5つの作品は佳作ということにさせていただきたいと思います。

会場（拍手）

伊東：それでは審査講評ということで、全体の総評をどちらかお願い致します。

脇田：さきほども言ったことですけれども、商店街活性化のための施設ということで、プログラムを練った案が結構多かったと思うんですけれども、現実的な問題を考えると、そのプログラムをどう実現するかという実現のプロセスをきっと押さえる必要があるんじゃないかなということは強く感じました。当然、建物を作ったからそれでいいということにはならないと思うので、それをどう生かして、まちづくりにつなげていくのかという実現の方法、つまり集会所をつくったからそれで人が集まるということはないわけで、そこでどのように人を集め、そこでどのような議論をして、どのようにしてまちづくりにつなげていくのかという踏み込んだ話があつたらもっとよかったですかなと思いました。

伊東：はい、ありがとうございました。では樋野さん、いかがでしょうか？

樋野：はい。まずは1次審査の時から107点の作品を見てきたわけですが、1次審査の時は1時間ちょっとで107点から何点かにしぶるということで、並み大抵な作業ではなかったのですが、あるいはもしかすると、見落とした作品があるかもしれないということで、審査員に見る目がないと腹立たしく思っている方もいらっしゃるかもしれません。実はどれかはいいませんが、ここにはその数点に絞ったときになかった作品ができているんですね。それと途中で質問しましたが、これはすべての作品について言えることですが、商店街が衰退した原因のひとつに、車社会に変わってしまったことに対応できない場所ということがあると思います。じゃあ、残る商店街は車に対してどうするのかという回答がなかったかなあと思いましたね。それから米子市民のシンボルである加茂川に無数の橋がかかっておりますが、あれも生かしようによっては商店街と一体となった施設として考えようがあるなあと思っています。今回はこのような提案が少なかったなあと思いました。1次の段階では敷地に水をためるという案がいくつかありましたが、残念ながらここには残っておりません。しかしながら、やはり加茂川をどうするかという課題は残っているなと感じており

ます。

伊東：はい。私も今のお二人と同じようなことなんですが、今日聞いていて、やはり社会性がないいうか、またはピュアというか純粋にものをえているのかなと思いました。例えばこの大さんの「商店森」という案ですが、どなたかメントしていただいて、みかんの実が腐ってく狭間で生活しているのはどうでしょうか？いうことでしたが、これはみかんが腐っていくということは考えてないんじゃないかと思う、ですよね。縁になっていくのはきれいじゃないかというぐらいにしか考えていないと思うんですね。何かそういうところで詩を読んでいようなどころがあつて、もうひとつ建築をつくることは生きしいんだということを気付かなつくれないんじゃないかなと思います。そのため傷つけられることはたくさんあるだろと思います。そして、例えば「Change myself」のアイデアもプログラムとしては説得力あると思いますが、どうして、このデザインでなければならぬのかということを説明してほしかたですね。このデザインは悪いデザインではないけれども、ものをデザインするらには、ここがなぜガラスなのかとか、ここなぜリニアになっているかとか、全部一つずが相手に納得できるように説明できないとそ建築は成り立たないわけですね。この方だけはないけれども、提案するプログラムとその建築のデザインに距離があるという気がします。この提案だからこそ、このデザインなのだとわると、なるほどなあと思うんですがねえ。別の言葉でいうと、そこでひとつ集中するエネルギーが欲しいなあという印象を強くもちました。

しかし、模型ひとつひとつもきれいにきちとよくできているし、1回目のコンペティションとしてはレベルが高い良いコンペだと思いました。みなさん、これからもぜひがんばってください。どうもありがとうございました。

会場（拍手）

008

■看板建築

▼明石工業高等専門学校 5年

▲松森 一行



□□設計主旨□□

看板建築、それは衰退の著しい米子の商店街において、〔まちづくり基金〕より“カンバン”を募り、“カンバン”により既存の建物である鳥取銀行をまちづくりセンターとして再生させ、その“カンバン”を再生利用することでセルフビルドを行い空き店舗を再生しようとする、“カンバン・プロジェクト”である。“カンバン”とは、広告のなされた建築資材のことである。

まちづくり基金：商店街を中心に組織されるNPO・まちづくり協議会・ボランティアの方々などが母体となり「まちづくり基金」を設立し、その基金を通じて国、地方公共団体、企業、個人などのスポンサーより“カンバン”を募る。スポンサーには建築資材を購入してもらい、広告を施す。この“カンバン”を空き店舗利用者に貸し出し、店舗を構成する。

まちづくりセンター：まちづくり基金にて集められた“カンバン”は、まちづくりセンターのファサードを覆いはじめ、そこから“カンバン”を取り外し空き店舗へと利用される。このファサードの“カンバン”の増えたり減ったりがまちづくりへの参加や空き店舗利用の成果を示すこととなり、正に“カンバン”となる。

ユニットフレーム：ユニットフレームに組み込む素材により、フレーム自体が性格を変えていく。ユニットフレームはボルトによって他の構造体やフレーム同士を接合する。そのため特別な技術は必要無く、誰でも簡単に組み立てる事ができる。セルフビルドが可能である。

以上のような楽しみ、手法を用いて、商店街の空き店舗利用を通じ様々な世代が集まりセルフビルドを行い、そうすることにより異世代間のコミュニケーションが生まれ、互いの世代を理解し尊重しあえる機会と場を持つ、コレクティブな商店街とすることを提案する。

□□Question&Answer□□

Q 1：発想の源は何ですか？

スケッチブックへのらくがき

Q 2：今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

せんだいメディアテーク

Q 3：好きなアーティストは誰ですか？

リチャード・ロング（芸術家）

Q 4：今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

締切り迫る卒業設計

Q 5：将来、どのような建築をつくってみたいですか？

人々の考え方やまち 자체をも変えてゆくような建築

Q 6：一番行きたい国（場所）はどこですか？

アフリカ

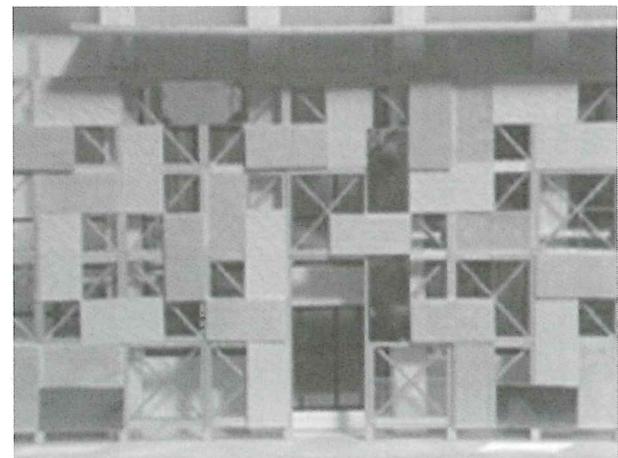
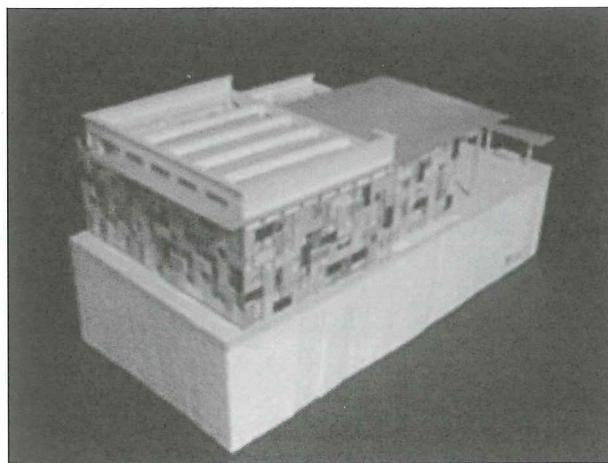
そこで何がしたいですか？

壮大な大地にて自分を見つめ直す

□□設計競技についての感想□□

シンポジウムの前日に米子に入ろうとも、前々日からの徹夜状態は終わらなかつた。模型を土台にあわせて、プレゼンの原稿を考える。焦って考えるが頭が回らない。気付けば朝がきていた。

シンポジウム当日緊張して弁当も喉を通らなかつた程である。発表時の記憶が断片的にしか無いのだが、当日撮影された自分の映るビデオを今観ると、緊張仕切つた自分がいて、とても恥ずかしく思える。私にとってシンポジウムのプレゼンテーションまでは、辛く長かった。今回のコンペを終えて、取り組んで来たその中で大きなものを得たような気がする。設計競技に参加できたことはとても良かったと思う。シンポジウム・公開設計競技の立案、準備、運営をされた米子高専の皆様に感謝の意を表したい。



012

nurture street

▼石川工業高等専門学校 4年

▲中川 紗織



□□設計主旨□□

STEP1 education profession

要求：これから約21世紀に活躍できる若いアーティストを求めていた。
提案：デザイン分野における技術・知識を学び、社会に貢献できる人材となるような、学生の活動の場デザインカレッジをつくる。

可能性：この場所から、各分野で活躍するアーティストが生まれる。プロを目指す学生が学びに来ることで、商店街がにぎわう。

STEP2 creation

要求：学生は各分野のデザインを学んでおり、その発表の場を求めていた。
提案：空き店舗を利用したギャラリーや、ストリート性を生かしたショーケースを行なう。

可能性：自分の作品を発表することで、独自のスタイルをアピールできる。
作品を見にきてくれる人たちで商店街がにぎわう。

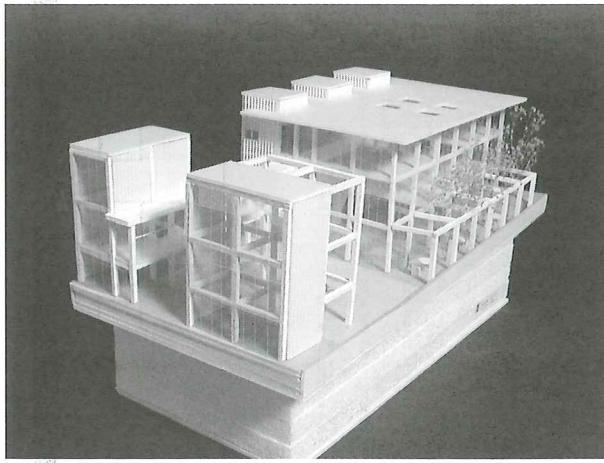
STEP3 trade

要求：プロを目指す学生たちの中には将来、自分の店を開きたいと希望する者が多い。
提案：商店街という場所性と関連させて、学校の休日を利用して空き店舗にインディーズの店を開く。

可能性：自分たちで店の経営を工夫することで、商売のおもしろさや厳しさを学ぶことが出来る。学生が経営する店というのは、流行を取り入れていくことで仕入れる品物は年を取らない。

STEP4 culture

要求：若者だけではなく、いろいろな年代の人も呼び込みたい。



提案：自分の趣味を生かせる、セミナーや創作体験教室を開く。
可能性：いろいろな年代の人たちが、地域の中で自分の好きな活動が出来る。
地域のコミュニケーションとして、その作品を売るバザーが開かれる。

STEP5

卒業した学生が、独自ブランド店を開いたり、今度は人におしえる立場となつていいけるような、人材育成の場であつてほしい。
若者も子供もお年寄りも、創ることを楽しむことで、お互いの存在を認め合えるような、コミュニケーションの場であつてほしい。

□□Question&Answer□□

Q 1：発想の源は何ですか？

米子の商店街と同じような衰退傾向にある地元のある商店街で、アパレルデザイン科の学生が、商店街の商品を使ってストリートファッションショーを開催しました。これは、イベントとしての集客効果と、中高生のイメージが強い商店街に若者をひきつけるきっかけになると思いました。しかし、イベントとしての企画は、その瞬間に人が集まるだけで、活性化したとはいえない。それでこの企画を提案し、実行に移したのは学生であり、このような新しい活動を行つていいける学生が商店街を学びの場として利用できたらいいと考えました。

Q 2：今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

広島平和記念資料館・丹下健三

Q 3：好きなアーティストは誰ですか？

建築家：きめられません・・・。
歌手：bird, SILVA

Q 4：今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

英語の勉強をこれからやろうと思います・・・。

Q 5：将来、どのような建築をつくってみたいですか？

一人でもいいから、今まで一番印象に残っている建築と言つてもらえるもの。

Q 6：一番行きたい国（場所）はどこですか？

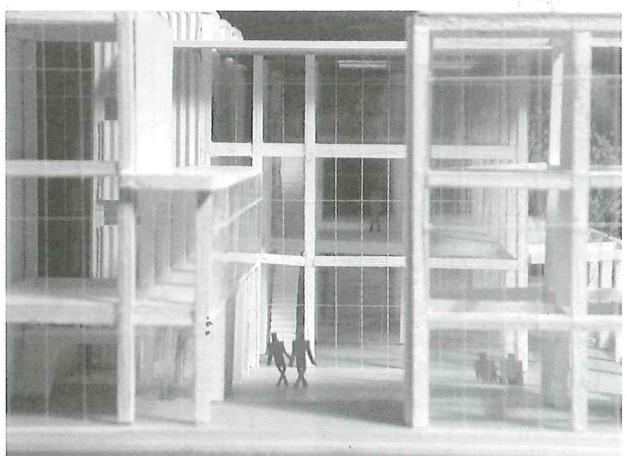
カナダで思いっきりスキーがしたい！！

□□設計競技についての感想□□

まず、このコンペにとりかかったのは9月に入ってからで、かなりギリギリの状態で、図面も納得のいくまでつめることができませんでした。でも、いつもの設計課題とはちがい、テーマについてプログラムとしての提案を考えるところから進めていけたので、とてもいい経験でした。

当日は、緊張のしすぎで、言いたいことの半分も言えなかったことに、情けない気持ちでいっぱいです。これをいい機会だと思って、次へのステップにしたいと思います。他の高専生の作品を見ることができたのも、良かったと思います。

米子高専のみなさん、ご苦労様でした。すばらしいコンペにして頂いたことに感謝します。

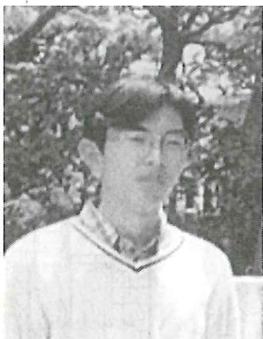


085

■商店街に「住む」－立体町家－

▼明石工業高等専門学校 5年

▲高橋 援



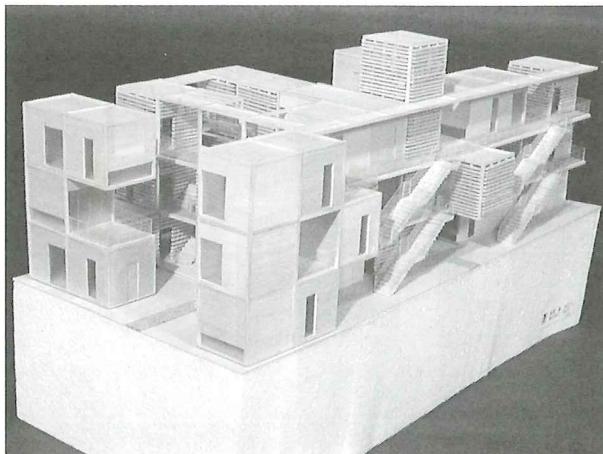
□□設計主旨□□

商店街に「住む」

人々を都市の中心部に戻すために、人々の生活の場つまり住宅を商店街の空き店舗に挿入する。これにより今までの商店街の典型的な構造を変える。そこに住むのは主に今まで商店街に住むことができなかつた人々である。商店街に住むことにより次のような利点が考えられる。!通勤時間の短縮：都市の中心部には会社が集中しており、また駅が近いことからそう言える。"子供の健全な成長：商店街という独特的のコミュニティの中で住むことにより、子供は人と接する機会が増え健全な成長につながる。#人が集まる：大規模店舗にはない新しいat homeな店舗の出現により、人が集まる。

立体町家

挿入される住宅は二つの対の空間により構成される。“住む場”（private space）と“売る場”（communication space）である。“住む場”は壁に囲まれた閉鎖的な空間、“売る場”はルーバーに囲まれた開放的な空間となっている。“売る場”的利用の仕方は、人とのコミュニケーションを目的としている限り、住む人が自由に決められる。これらのユニットの寸法は内法3.64 [外法4.04] × スパン3.84 [] という米子の商店街の細長い地割の中から採用した。この対の空間を立体的に組み合わせることにより、一つの住戸ユニットをつくる。更にこれを立体的に組み合わせて一つの集合体をつくる。この過程においてユニットとユニットの間にヴォイドが生まれる。ヴォイドはユニットに光・風といった自然を取り込むとともに、人々の会話を呼び起す役割を果たす。



□□Question&Answer□□

Q 1：発想の源は何ですか？

まちを歩くこと

Q 2：今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

住吉の長屋

Q 3：好きなアーティストは誰ですか？

レンゾ・ピアノ

Q 4：今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

卒業設計真っ最中（2000年1月現在）

Q 5：将来、どのような建築をつくってみたいですか？

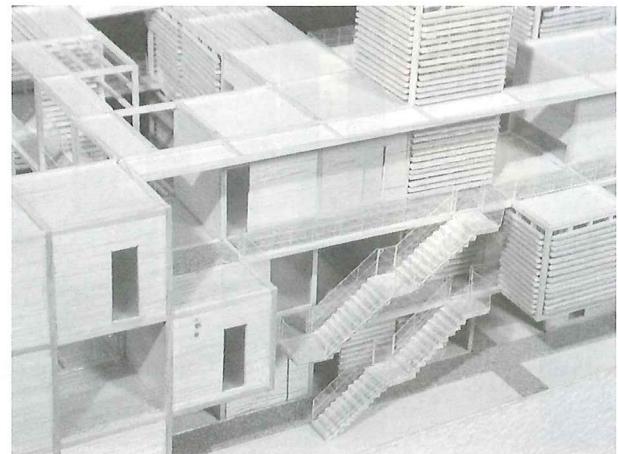
- ・既成概念にとらわれない建築
- ・場に合った建築
- ・長い間、人に愛される建築

Q 6：一番行きたい国（場所）はどこですか？

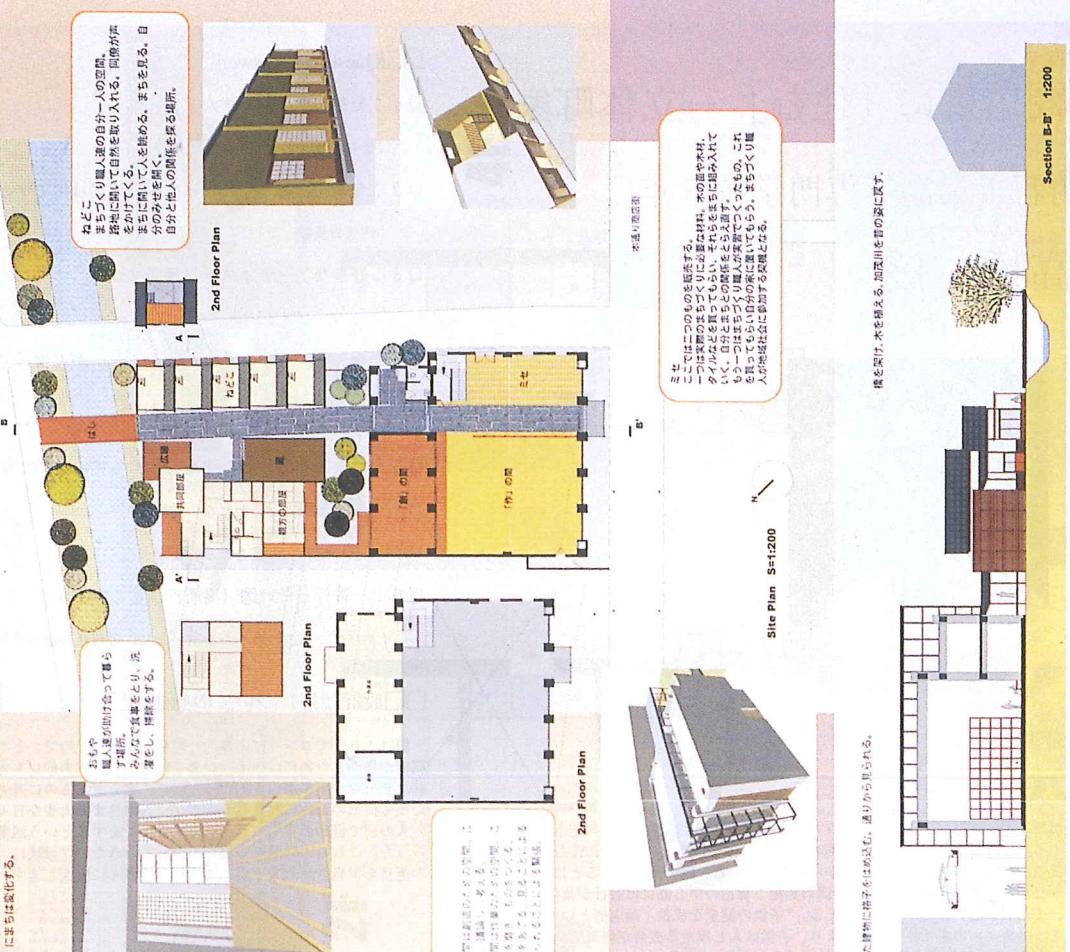
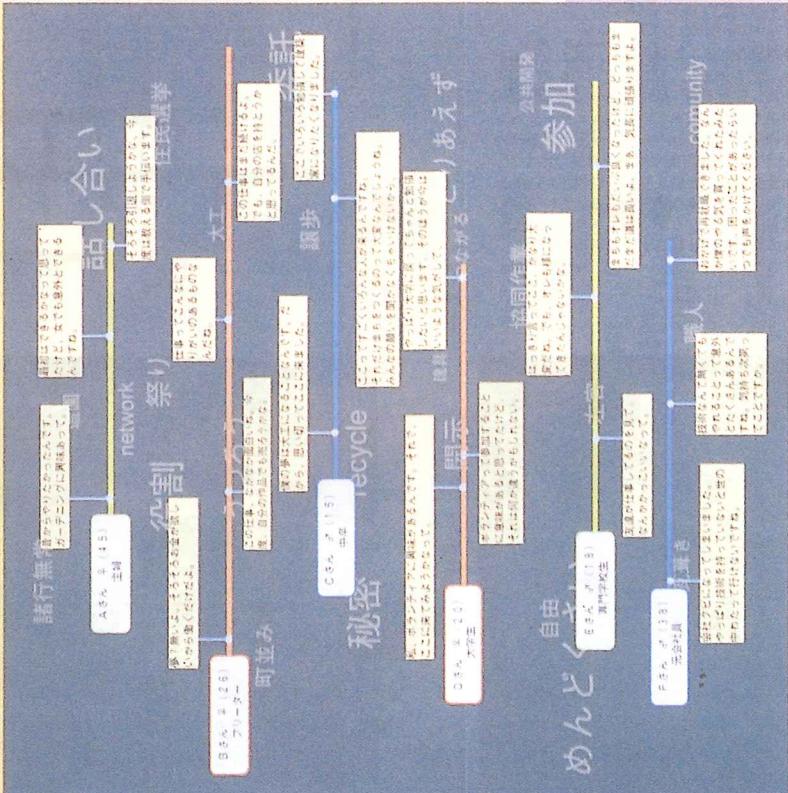
イタリア 古い町並みを歩いたり、近現代の建築を見学する

□□設計競技についての感想□□

僕はこれまでコンペに応募した経験がなかったので、とても良い経験になった。期間が長かった割には、手際が悪く精神的にも体力的にも大変だった。特に与えられたテーマが奥の深いものだったので、案を考えるのに苦労した。一次審査を通った後も模型の制作に難航しシンポジウム前日まで大変な日々が続いた。当日も大勢の人の前で自分の案のプレゼンテーションをするという滅多にない経験をさせもらった。これらの経験を今後に生かしていきたい。最後に、長期間にわたりコンペの運営を担当された米子高専の学生の皆さんに感謝します。



「まち」をつくる～まちづくり職人養成プロジェクト～



橋を架け、木を積える、加茂川を昔の姿に戻す。

がつて脚行だった婦物に格子をはめ込む。通りから見られる。

池の中の路地。真ん中を貫く道は研工住をつなぐ。

卷之三

Section A-A' 1:200

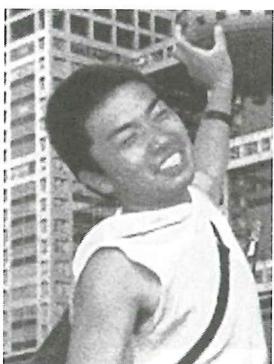
Section B-B' 1:200

102

「まち」をつくる ～まちづくり職人養成プロジェクト～

▼明石工業高等専門学校 5年

▲永尾 達也



□□設計主旨□□

現在の商店街は「まち」ではなくなっていると思う。人が住まなくなり、人のつながりが消え、売るための装置となっている。そこで、かつてのような商工住が一体となり、コミュニティをつくり出しているような「まち」の姿に戻す契機となりうる「まちづくり職人養成所」を計画した。これは「まちづくり職人養成プロジェクト」という一般市民が「まちづくり職人集団」という団体を結成しまちづくりに参加するための事業に付随した施設である。

工：工房

まちづくり職人集団は実習や座学を通して、まちづくりの基本的な技術・知識を学ぶ。と同時に、今必要と思われるまちづくり事業で直接働くことでも学習する。地域住民がまちづくりに参加できる機会をもち、将来必要なまちづくりのリーダーを育てることができる。

住：おもや・ねどこ

まちづくり職人集団は経験豊かな職人を招いて、その人に弟子入りする。彼らはこの間、この施設で共同生活を送る。まちづくり職人として施設・加茂川・商店街の維持管理に努め、知識・技術だけでなくまちづくりの理念も身につける。地域と新しい関係を紡ぎ出すことも要求される。

商：ミセ

まちづくり職人集団に参加しない一般市民にもまちづくりの認識を深め参加できるように、ここで2つのものを販売する。1つはまちづくりの施工に使う材料で、タイルや木の苗などを市民に買ってもらい、それをまちにつくりつけていく。もう1つは職人たちが実習でつくったもので、それを買ってもらって家や地域に置いてもらう。住民とまちと職人との新しい関係が生み出される。



このような「まちづくり職人養成所」や他分野の同様の施設をつくることで、地域住民の変化を促し、まちがそれと同じ速さで変化していく。これによって商店街はゆっくりではあるが確実に変化し、かつてのようないいわいにある「まち」へと変わるだろう。

□□Question&Answer□□

Q 1：発想の源は何ですか？

自分なりの答えを見つけ出そうと考えるプロセス。

Q 2：今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

ビーター=ズントの温泉施設
藤森照信のタンボボハウス
宮本佳明のゼンカイハウス

Q 3：好きなアーティストは誰ですか？

Number Girl, eastern youth, pre-school

Q 4：今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

英単語を覚える。ひげともみあげをのばす。

Q 5：将来、どのような建築をつくってみたいですか？

新しいのにそこに何年もあるかのような建築。
年がたてばたつほどよくなる建築。
自分の家。

Q 6：一番行きたい国（場所）はどこですか？

雪国。

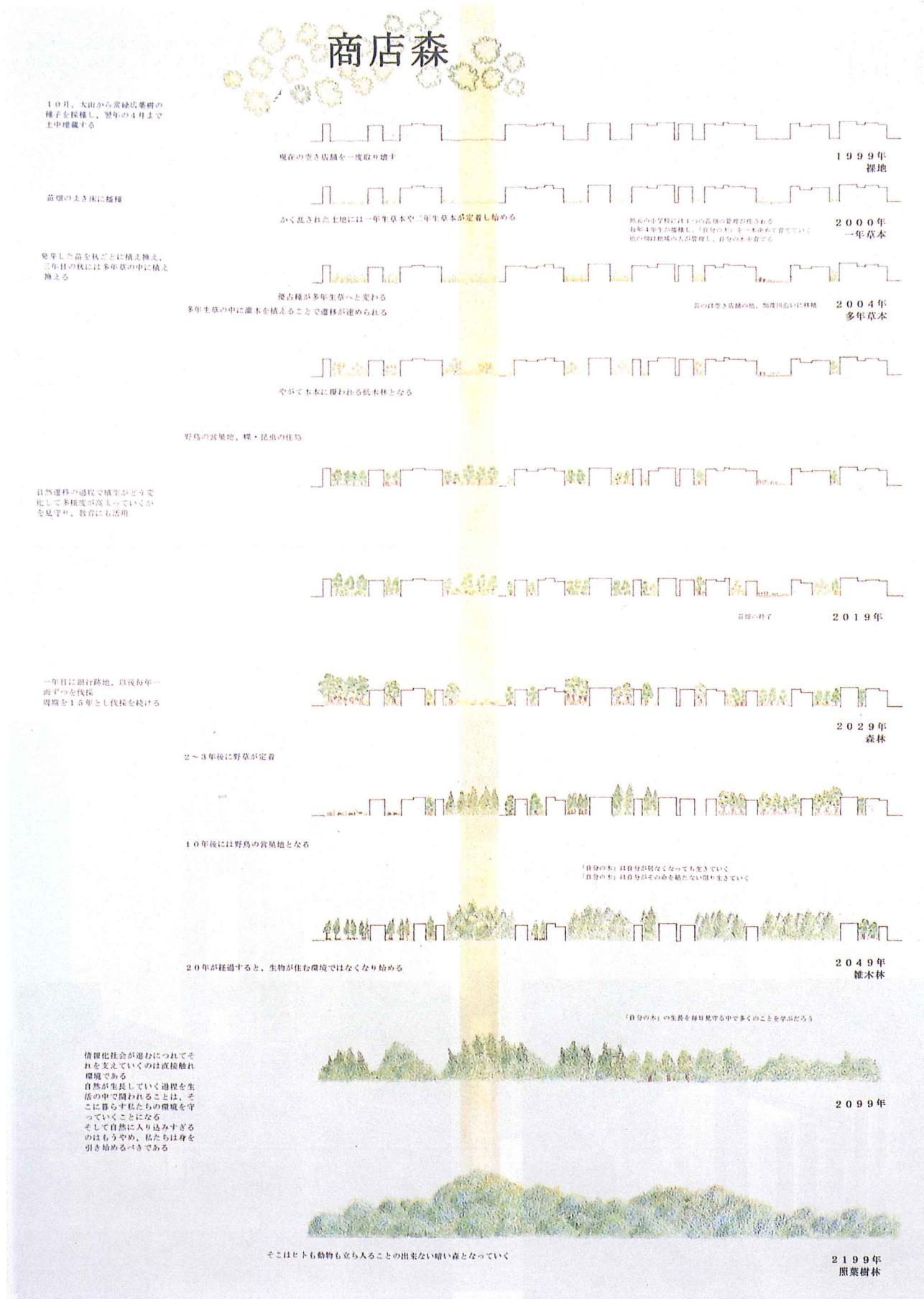
そこで何がしたいですか？

スキーと温泉。

□□設計競技についての感想□□

うれしかった。ワクワクした。おいしかった。感心した。感動した。緊張した。焦った。考えさせられた。納得した。いい経験になった。面白かった。疲れた。ほつとした。





016

商店森

▼明石工業高等専門学校 4年

▲大學 美沙



□□設計主旨□□

今は建築を考えるときにはそんなことを考えなくなつたのですが、コンペの時期は特に「人はやがて滅んでいくものである」という考え方頭の中の大部分を占めていました。人が生きて文化などが発達したことによって商店街は生まれて、もつと発達しそうしたことによって商店街はなくしていいものとされてきていると考えたときに、人が生まれたときにもうその方向に向かっていたのなら、それに気付ける時代にいる私はどうすべきなんだろうと思いました。

昔の何かがいいとか、昔は何かがあったと言つても、たとえ頑張ってもそれを取り戻したとしても、もっと先を見れば結局この流れは止まらない。いつなのは分からぬけれど、流れの先には人のいい世界があるんだと思いました。商業的な経済的な活性化とは違った活性化が起きれば、その後には経済的な活性化も起ると考え、現在空き店舗である建物を壊し、そこに地域の人々に「自分の本」を一本ずつ育ててもらおうと思いました。

その時は本を植えたことによって人が本当に変わっていくなんて信じていなかつたのですが、実際に事例があることをお聞きしたことで建築を考えていなかつたということに気付きました。自分の考え方を思い直そうというのではないですが、気付いたことによって考え方方が少し変わったとは思います。

□□Question&Answer□□

Q 1 : 発想の源は何ですか？

舞台や旅行からテレビやそれ違った人まで見て感じたことから生まれた私の考え方です。一番源まで辿るとするところ環境に生まれたことなので両親だと思います。

Q 2 : 今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

カナダ、プリンスエドワード島にあるホテルの裏にある古い教会
ベルギー、ブリュッセルにあるベギンハ修道院

Q 3 : 好きなアーティストは誰ですか？

大沢たかお、ユーベル・ド・ジバンシー

Q 4 : 今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

今は一つに決められないので毎日の生活全部、と思ってはいるけれど、時間も足りないし実行できていません。

Q 5 : 将来、どのような建築をつくってみたいですか？

夢は訪れた人が一人でも心から何かを感じてくれる建物、一緒に建ててくれる人に共感してもらえる建物です。ただ教会を建てられれば、という思いもあります。実際には建物を建ててになるかは分かりません。

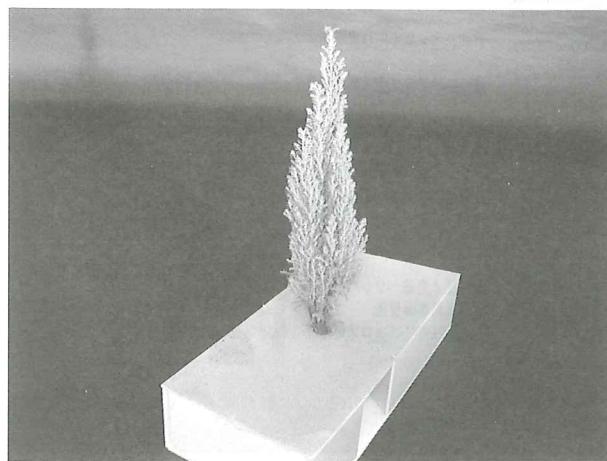
Q 6 : 一番行きたい国（場所）はどこですか？

スペインのコルドバの憧れてきた街並みが見える場所を見付けて一日その場所で過ごすことです。（場所もやりたいこともたくさんあるので全部現実させる気です。）将来、日本も含めてこの国というのが見つかってそこに暮らせばと思います。

□□設計競技についての感想□□

コンペの作品は私が高専に入ってからどういう考え方になったのかが、はっきりと出たものでした。特に最後の文に表れていたと思います。今は私の考え方と建築の考え方の違いに少し気付いたつもりです。米子でお話を聞いて気付いたのですが、帰ってきてからも図面を見てもらう機会が増えて、建築学科ではない人からも最後の文について言われることが多く、実感しました。それをきっかけに自分がどういう道に進むのか考える時期らしく色々なことが一気に押し寄せました。今は悩みつつとりあえず興味のあることや好きなことはたくさんあるし、今しかできないこともあります。

今回のコンペで米子に行かせて頂いて本当にいい経験になりました。





平面図兼配置図 1:200

死と廃

スタレルナラ スタレヨウ ナクナルノナラ ナクナロウ
コノマチハ モウ イキカエラナイノダカラ
モウ・・・ キエテシマオウ
ダレモ ダレモ タスケラレナイ トマレナイ

シュエントキスウニ
ミチビカレルママ オチテイコウ

クロイ ウミ ハイイロノ ソラ
ケガレタダイチニカコマレタ
コノセカイデ
アナタハ ナニヲオモウ

ジカンハ トマラナイ
ダレニモ トメラレハシナイ

ジカントモニ ハテテイケセカイニ ミライハナイ
ワタシニ アスハ アルノ?

ナクスモノハモウナイ アトハ シヌダケナノカナ?

生い茂る雑草と枯果ててしまった細い木
地面を覆う無数の木の葉
黒くなっていく壁

その中に 存在する 建物

商店街に溶け込まない外観
廃れる街と人の心の具現
灰と化す街の先駆

夏の植物と同じ様に栄えた街
それは遠い記憶のこと

木が葉を枯らすように 今は 秋の終わり
太陽も雲に覆われ 僅かに光が差すだけ

光を遮る街は影が消える
しかし それは
人がいないことを隠すため?

一ツノ建物デ街ハ生き返ラル

人々が変ワラナケレ
何モ変ワラナ

何モ愛着ノナイコノ土地ニ
私ハ何モ想ウ事ハナイ

コレハ街ノ人ソレゾレノ問題
ナンジャナイノダロウカ



鏡ヲ觀クト 自分ガ見エル ソノ奥ニハ街ガ映ル
アナタハ何ヲ感ジ 何ヲ想ウ

何度見テモ鏡ノ中ハ美ワラナイ

自分ニ目ヲ背ケテイタイ氣持チ
街ニ目ヲ背ケテイタイ氣持チ

今ノ街ニ対スル想イハ
人ソレゾレ
自分ヘノ言葉モ イロイロ

街ノ人ハドンナ答エヲ出スノ?

商店街ノ衰退 ソレハ
私達ノ精神ガ原因
コレハ私達ノココロノ問題



018

死と廃

▼石川工業高等専門学校 4年

▲沢田 大輔



□□設計主旨□□

「街を生き返らせるのは、街の人である」
この作品の設計主旨である。無責任とも考えられる言葉である。しかし、これは当たり前の事である。
つまり、私が「死と廃」を創っただけであり、だからといって私に街を活性化させなければならないという義務ではない。また、これは具体的な問題をテーマに掲げた virtual でしかない。だから、virtual の中でしか出来ない real なモノを創造しようとした。
仮に建築物（デパート etc）を創るとしよう。それによって街が生き返る。何ら問題はないように思えるが、私にとっては本当に解決したようには思えない。これは本当の活性化に成り得るのかということ。
いくらその店が儲かったところで、他の店は今まで通り客は来なくて潰れてしまうのではないかということ。その問題も含め、全員で衰退という問題に向き合わなければならぬと感じた。
仮に今の状態が絶望的であっても、本当に悩んでいるとは思えない。だって、テレビを見て笑っているでしょう。隣近所と雑談だって交わしているでしょう？
衰退することは正しくない？
これが指す意味。例えば、この世の中が全て正しいと仮定するならば誰も何も疑いはしない。しかし正しいという概念はそれだけでは成り立たない。正しくないと思う感覚があるからこそそのもの。両者は、相対的であり、それ以上でもそれ以下でもない。
死があるから、生を感じ、生と死は常に背中合わせ。街の繁栄も衰退も同じことではないだろうか。ただ、この事実を見つめ直して欲しい。その為の空間を創造した。

□□Question&Answer□□

Q 1：発想の源は何ですか？

Q 2：今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

荒野にある石造りの壊れた建物

Q 3：好きなアーティストは誰ですか？

M A L I C E M I Z E R G a c k t
アーティスト=建築家を指すならば、いない

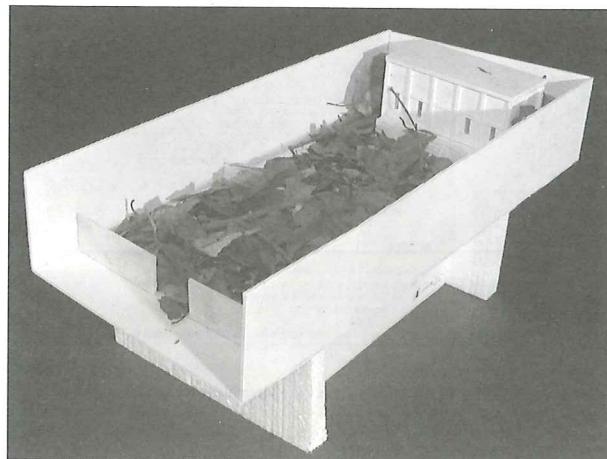
Q 4：今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

Q 5：将来、どのような建築をつくってみたいですか？

ヨーロッパ（特にフランス） 映像作品の創作

□□設計競技についての感想□□

言葉を使うと見方が偏ってしまうから、本当は発表などせずに、ただ、写真や図面を純粋に、先入観を除いて、多くの人に色々と感じて欲しかった。ある程度は意図的にそうなるように創ってはあるから。
作品が仕上がった時点で、自分の中では、表現が完結しているし、更に、あの作品は、時間が経つごとに私の中で、持つ意味が絶えず変化している。
表現する方法が建築であっただけで、私は建築家じゃない。この作品には、他にも意味があって、あえて言葉にはしないが、作品の奥に込められた私のその想いを、一体どれくらいの人が感じ、理解してもらえたのだろうか。





現状

場所：県都郡・木子市 本通り商店街 五番サンロード商店街

土地：木子市は兵庫県西部に位置し、商業・農業に栄えてきた

商店街の規模：全長 712.5m 総店舗数 152店

木子通り商店街 全長 425m 総店舗数 93店

元町通り商店街 全長 280m 総店舗数 59店

顧客状況：現在、大人気の店舗・コンビニエンスストアの出現により

商店街を利用する人は全世代において減少気味である

商店街の利用者の高齢化も進んでいる

5つの問題点と解決法

①商店の個別化 →個（商店）の存続に加え、それ以上に様（商店街）の存続を地域で考える必要がある

②商店のセンスの低下 →新しいセンスを取り入れるとともに、古き良きものと残す

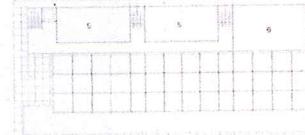
③商店街自身の意識低下→新しい意識の導入と意識改革が必要

④店主の高齢化 →次世代への引き継ぎの必要性

⑤利用者の減少 →来訪の必然性



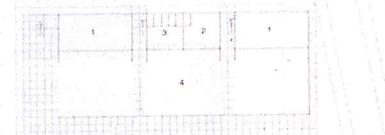
SOUTHWEST ELEVATION S=1/300



3F FLOOR PLAN S=1/300



SOUTH EAST ELEVATION S=1/300



1F FLOOR PLAN S=1/300

各種学びの場の位置

- 芸術関係
- 情報・放送関係
- ファッション関係
- スポーツ関係
- 工業デザイン関係
- 音楽関係
- 商業関係
- 料飲関係

1. 会議室
2. W.C.
3. W.C.
4. レクチャールーム
5. 企画相談室
6. 活性化利策企画室

対策として

この状況を考えると、特効的にひとつ建物でこの街を変えることは困難である

今回は最終的に商店と商店街全体の変化（意識・世代など）がもたらされる活性化的な提案をして、長期的なスパンで活性化を試みていく必要があると考える

具体的な提案内容の流れ

[1] 目的

建物を利用して……

1.米子中心商店街活性化事業企画室の設立

企画企画室の構成・実行

→ひとつの企画を全体ですることによる連携感

→商店街住民の意識改革

企画企画室の設立

各商店がドアバナー、店主の相談を受ける

→高齢者の現状を改善

ここは商店の意識と実際の不可分性を学ぶ場となる

→住民の意識の活性化

豊富種目を利用して

インク・シルク・スクール制度の導入

1.商店街の要素をひきつけて提出し、それぞれの

分野の学びの場を指す

2.学びの場での住民・地域住民が入り交じって

研究・制作

3.学びの場で同時にアシストをしてもらは

→研究会実業作品・商品の販売・販売を行

ここは商店の実践を学ぶ場となる

→商業の形が生まれることでの市民体の活性化

定着

これらによって

商店街の人々 → 学びことで得る新しい知識だけでなく、より実

験的なつながりと接することで得る、新しい

出会いもある

地域の人々 → 新しい知識、出会いとともに、次世代の授業など、

貴重な面倒のノウハウを学べる

理論を学び2つ商店街を獲得する → 実践する → 實験・研究の実施、想いを活かす

[II]

目的

店舗2Fを利用していく……

1.プロフェッショナル・スクールの設置

→活動の範囲もなく、学びたい人が全国から集まってくる

→またまた人々による既存商店の利用

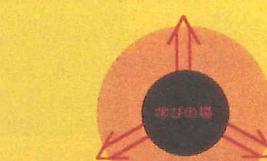
2.空店舗2F部分を各種学びの場としてゾーニングとともに、

→アーケード2Fの層化を進めることで

→学びの場が商店街全体に広がっていく

3.空店舗1Fは引き続き実践の場として利用していく

4.商店街全体で学びの形が繰り広されていく



定着

これらによって……

商店街の店舗（テナント）と学び（学びの場）が一体化した商店街が

生まれる

また、様々な人のつながりも生まれる

例えは、テナントとして登録する（商店）

→学ぶこと教える人（学び）

空店舗のオーナーと学ぶ人（学び）

ここには商店街・コンビニにはない心の交流がある

さらに、こうして生まれた新しいセンス・意識による若年層の引き

つけ・リターンをねらう

→商店街の次世代への引き継ぎ、新しい考え方の導入

インク・スクールなど、情報機器を利用した世界との商売・情報交換

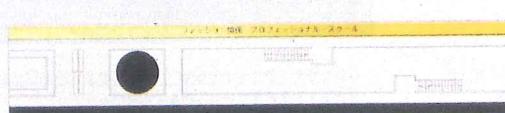
→商店街で生まれた研究結果・作品・商品の販売

→世界を舞台に学びの形が広がる

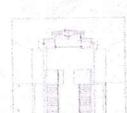
学びの形は繰り返し、米子商店街は発展し続けていく……

Change myself

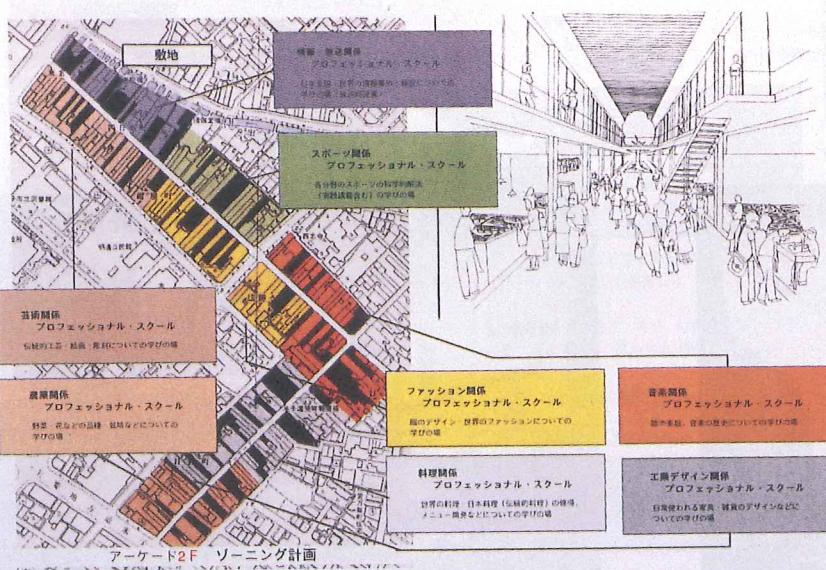
～学びの形で変わる
人・街・心・そして自分～



ARCADE 2F FLOOR PLAN S=1/200



ARCADE SECTION S=1/200



029

Change myself

～学びの形で変わる人・街・心・そして自分～

▼石川工業高等専門学校 5年

▲小林 健介・木田 千尋・山木 洋平



□□設計主旨□□

商店街というものはやはり商い、つまり経済を根底に持っているものである。そして、活性化を試みるのであれば、最終的に経済的な再興を遂げることが理想なはずである。

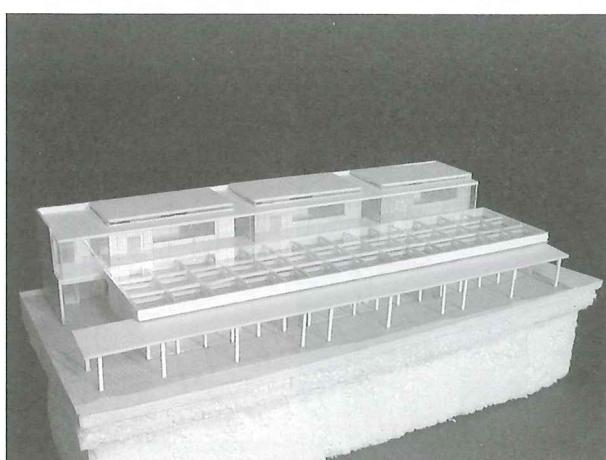
提案をするにあたっては、現状からみられる問題点を洗い出し、その解決を図るとともに、最終的に経済に結びつくようにということを念頭に置いた。同時に、商店街が持っている、知識や情報のやりとりや親切といった、人ととの交流、つまり「心と心の商売」という点にも着目した。このような商店街独自の良さをさらに伸ばすことも活性化には重要であると考えたからである。さらに現在おられた状況を考慮すると、特効的な提案での活性化は難しいとみて、長期的なスパンでの提案方法を試みた。

これらの概念を基にしてできた具体的な提案が、商店街に「学びの場」をつくるというものである。長期的なスパンの提案であるため、その内容は大きく2つの段階に分けられる。

まず第一段階では、、主に学びの場による学びの形を地域に定着させることと、既存商店の店主や地域住民の意識の改革を図った。そして第二段階では、定着した学びの形をプロフェッショナル・スクールの設置により商店街全体に広げ、商売と学びが一体となった商店街をつくりあげることが目的である。

これによって、集まった人々による既存商店の利用や、次世代の育成による経営者の高齢化問題の解決、新しいセンスの獲得など、経営・経済の再興を遂げることができると考えた。さらには学びの場で互いに学び合う中に、人と人のつながりや、心と心の交流が生まれてくる。ここに大型店舗やコンビニエンスストアにはない、商店街のあたたかみを見い出すことができる。

こうして人が変わっていき、街が変わっていき、精神的にも経済的にも商店街が豊かになっていく。学びの場によって学びの街をつくる提案はそのキッカケになるのである。



□□Question&Answer□□

Q 1 : 発想の源は何ですか？

小林：いくつかの雑誌で建築家たちの作品を見たり今まで学校に残された作品を参考にして考える。 本田：本能 山木：取り組むべき事を理解し、考え抜けば自ずと出てくるよう・・・

Q 2 : 今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

小林：ミースのヨーロッパ時代のけっこういわれるバルセロナ・パビリオン（実際見た事はないが雑誌を見てすごくひかれた） 本田：ありすぎてわからない 山木：J.M. ベイのルーブル美術館増築。様々な文脈から導かれた、フランスにおけるガラスのピラミッド。入念なりサーチとそこからくるカタチに説得性が素晴らしいと思う。実際に見たことはないですけど・・・

Q 3 : 好きなアーティストは誰ですか？

小林：近代建築の巨匠ミース・ファン・デル・ローエ 本田：Sugar Soul 山木：ACO, HI-STANDARD, reach, Shout Circuit, etc...

Q 4 : 今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

小林：卒研をがんばっている。締切りが近いし死ぬ気でやります。（本当にひまな時は競馬を少々。馬ならまかせなさい。） 本田：卒研、ピアノ、語学 山木：精神的にオトナになるコトかなア・・・

Q 5 : 将来、どのような建築をつくってみたいですか？

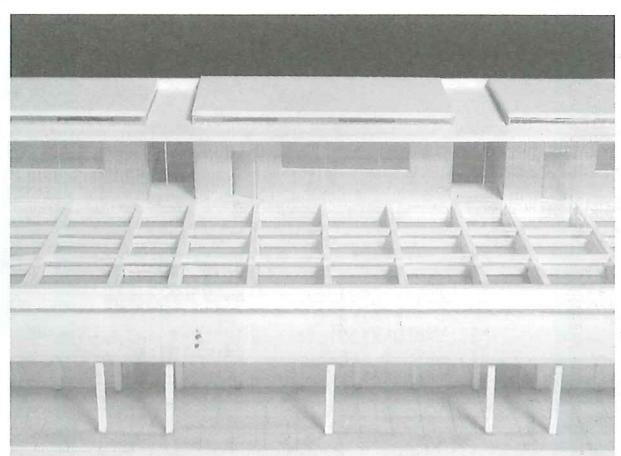
小林：特にこういう建築というものはないが仕事をくれた施主さんがすっげー喜んでくれるもの。 本田：人に愛される建築。 山木：どのような・・・つて言ってもまだ見えてないかも・・・。とりあえずいつかやりたいのは自邸の設計計画。

Q 6 : 一番行きたい国（場所）はどこですか？

小林：今はアメリカ。そのうちヨーロッパの方にも。ミースがいたイリノイ工科大学にいってみたい。そのうちミースの建築をすべて見にいきたい。 本田：ヨーロッパ。Architectの歴史を実際に見て学びたい。大学に入って設計製図を学んでみたい。いろんな国の人と話してみたい。その中で生活してみたい。小澤征爾さんが指揮するベルリンフィルのオーケストラを聞いてみたい。 山木：建築とは関係ないけど、カナダでアウトドアを満喫したい。

□□設計競技についての感想□□

小林：シンボジウム、設計競技を含め、事務局の米子高専にはたいへん感心しました。初めての事でありたいへん難しい事でしたが、よくがんばってくれましたと感謝しています。前の年に呉高専で行われたシンボジウムに参加しましたが、設計競技が加わるだけでここまで変わるものなのかと驚くばかりであります。全体的にはとてもよかったです。 ただ設計競技とシンボジウムにすごく差を感じてしまった。設計競技自体はやはりすごいと思うが、シンボジウムがすごくさみしく感じた。もっとひどくいうと手を抜いているように思えた。せっかく両方しているのだから華やかさがあつてもいいと思った。 本田：今回の設計競技に参加したことほども良い経験になったと思う。特に公開審査がよかったです。建築家の伊東先生と自分のアイディアをめぐってディスカッションできるなんて、なかなかできない経験だった。このようなコンペが高専の建築学科を確実に活気づかせると思った。 山木：コンペに参加するというのは実は初めてだったけれど、作品制作の日々も当日の公開審査も非常に良い経験になった。今回のコンペを通じて、いろんな事を楽しく学んだと思う。公開審査という形も、審査の過程が見られる事で、各々のプレゼンテーションが見られるし、結果発表の緊張感も含めて良いものだったと思う。ただ、短時間で結果が決まってしまうというのはちょっと残念かも・・・。まあ公開審査なら仕方ないか・・・。最後に事務局の皆さん、このような機会を与えていただきありがとうございました。そして、お疲れ様でした。



RECYCLE OR DIE

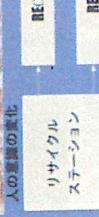


コンクリート

男子の商店街を歩いて見ると、かつてはにいだら木造店舗が並んでいた。しかし、多くの店舗が倒壊され、その跡には新しい店舗が建っている。また、高層ビルが建設され、多くの店舗が閉鎖され、その跡には飲食店や高級住宅が建設されている。本來、木造店舗は古風で、木造空間が街の中のスタイルを形成する。しかし、木造店舗は耐震性が低く、火災時に燃えやすい構造である。

四つの壁

日本全国の先駆者たちが、資源を効率的に利用する方法を研究している。しかし、資源を効率的に利用するためには、資源を効率的に利用する方法を確立する必要があります。そのため、資源を効率的に利用する方法を確立するためには、資源を効率的に利用する方法を確立する必要があります。そのため、資源を効率的に利用する方法を確立する必要があります。



Information

この商店街に新しい制度を導入する。一つの商品が複数の資源で構成される場合、資源として資源を再利用する。資源として資源を再利用する場合、資源として資源を再利用する。資源として資源を再利用する場合、資源として資源を再利用する。

リサイクルステーションは設置された。資源のうち、木や紙、金属、プラスチックは一回、他の資源へ譲り受けられ、木や紙、金属、プラスチックは二回、他の資源へ譲り受けられる。資源のうち、木や紙、金属、プラスチックは三回、他の資源へ譲り受けられる。資源のうち、木や紙、金属、プラスチックは四回、他の資源へ譲り受けられる。

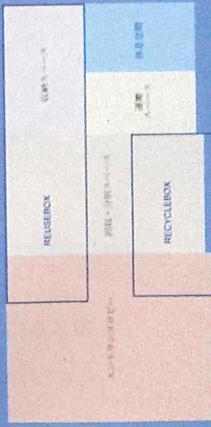


Figure 1-20

Figure 1-20 illustrates the concept of recycling through four stages: REUSE, REDUCE, RECYCLE, and REVERSE.

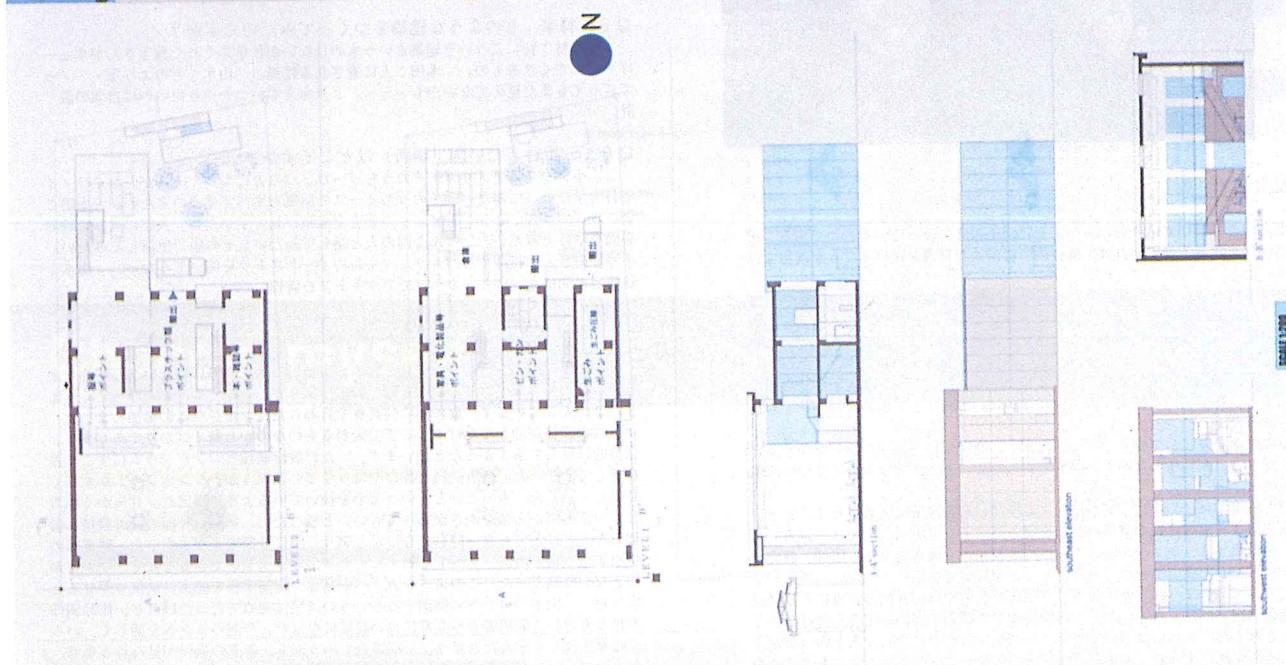


Figure 1-21

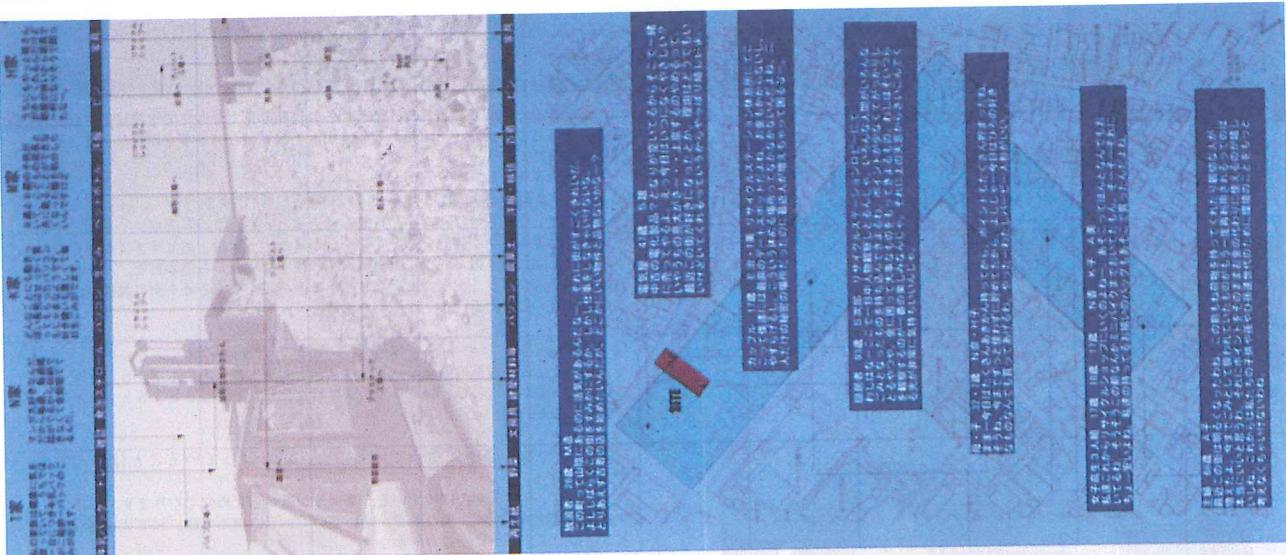


Figure 1-22

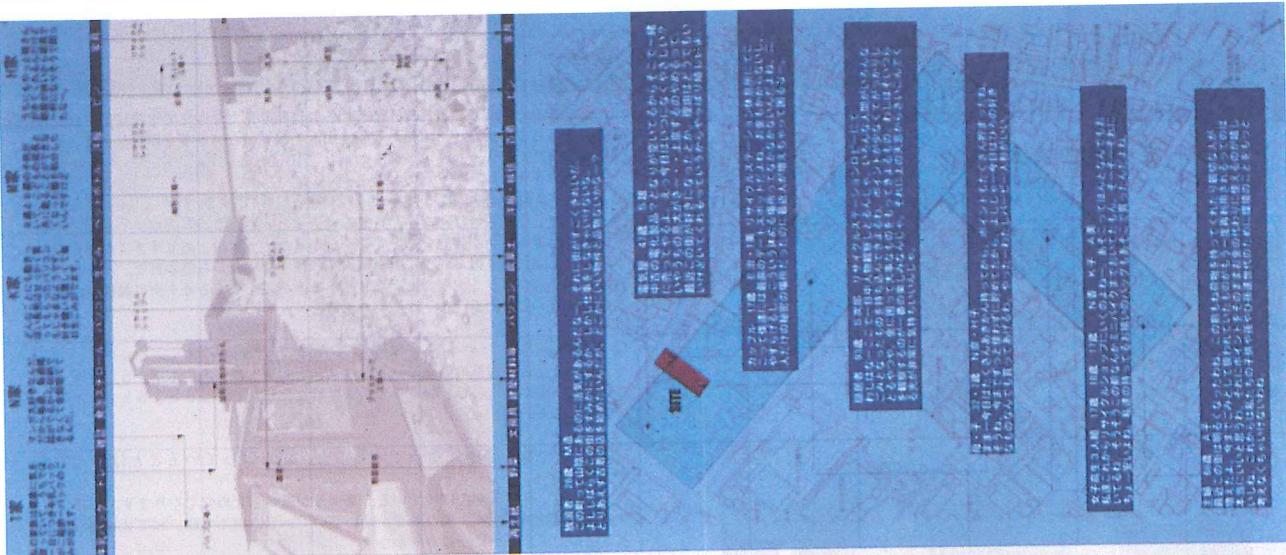


Figure 1-23

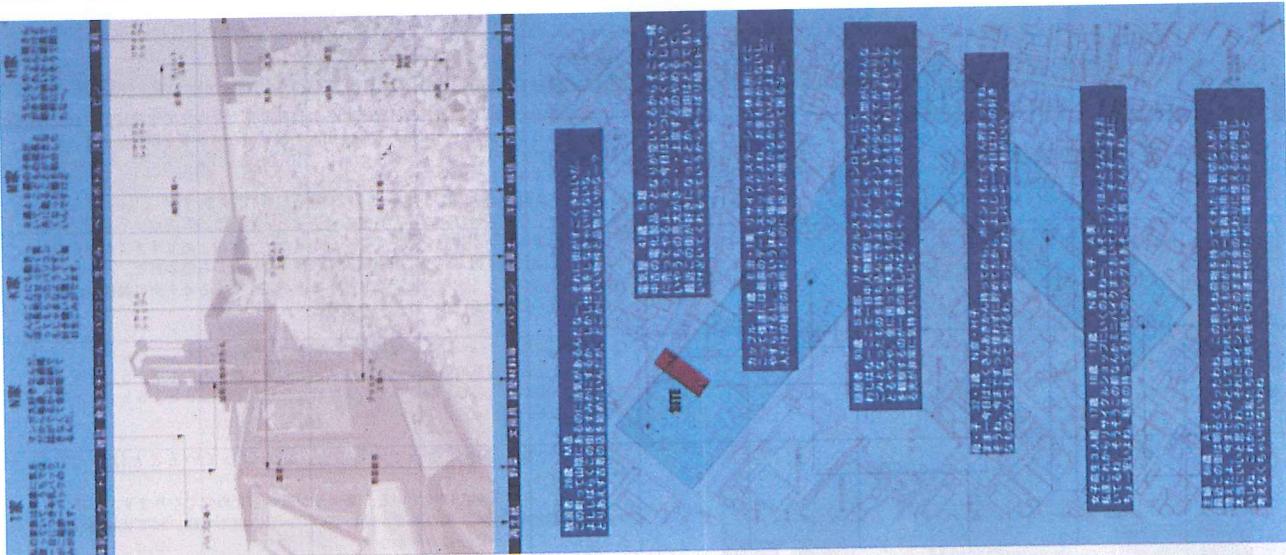


Figure 1-24

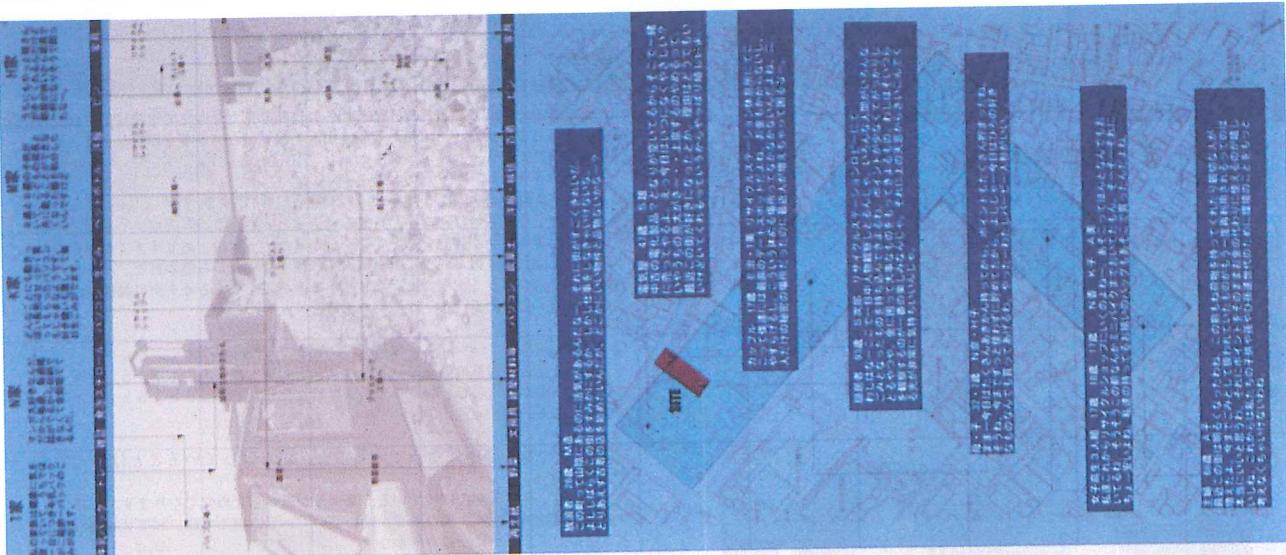


Figure 1-25

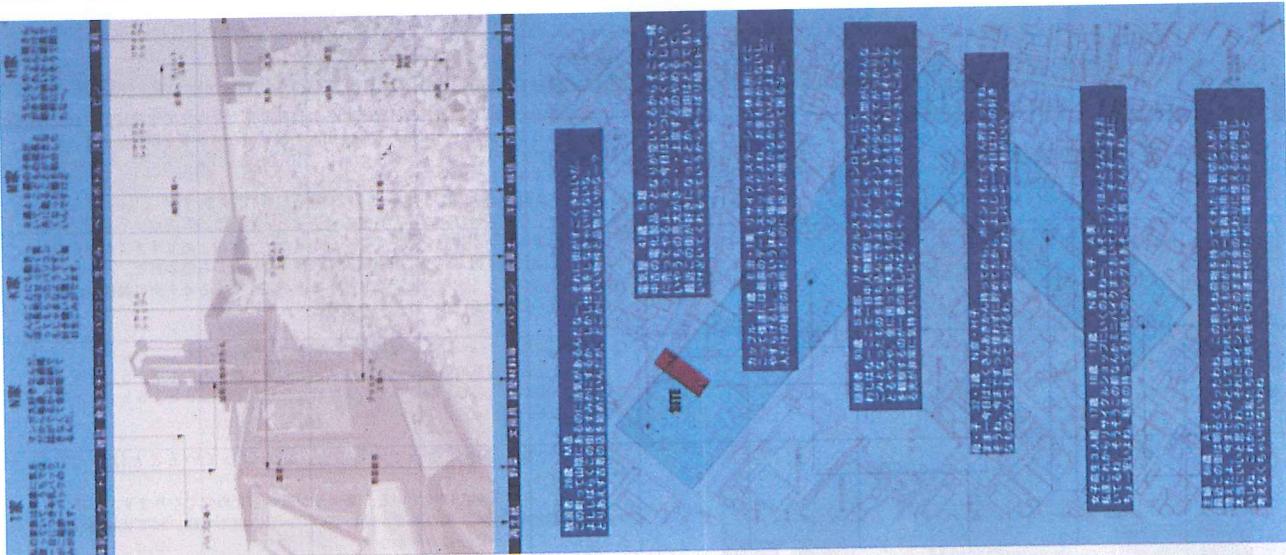


Figure 1-26

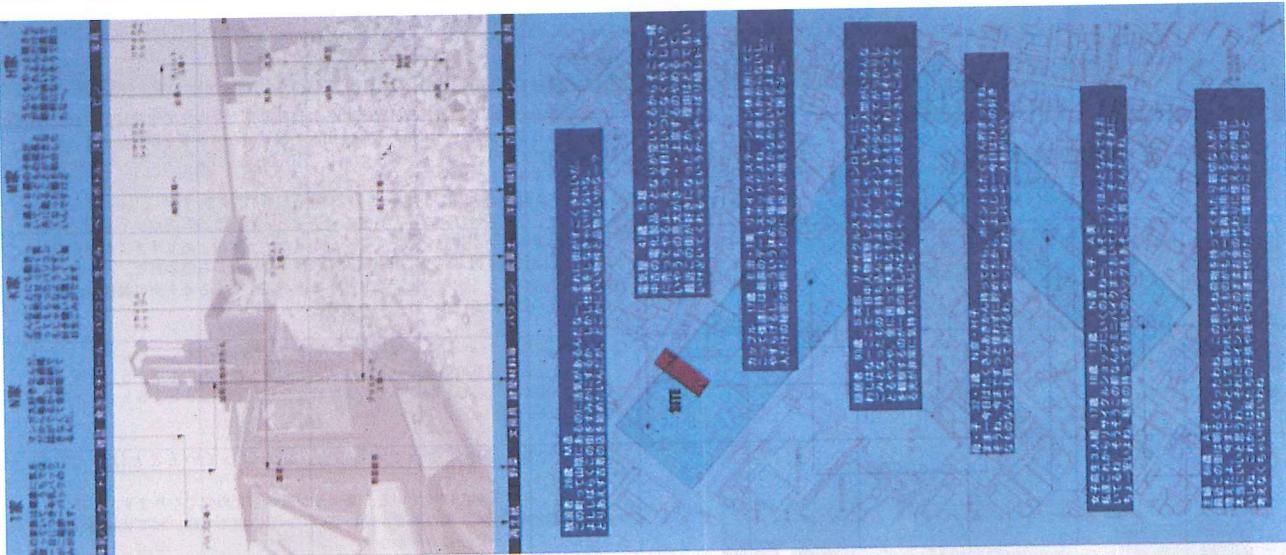


Figure 1-27

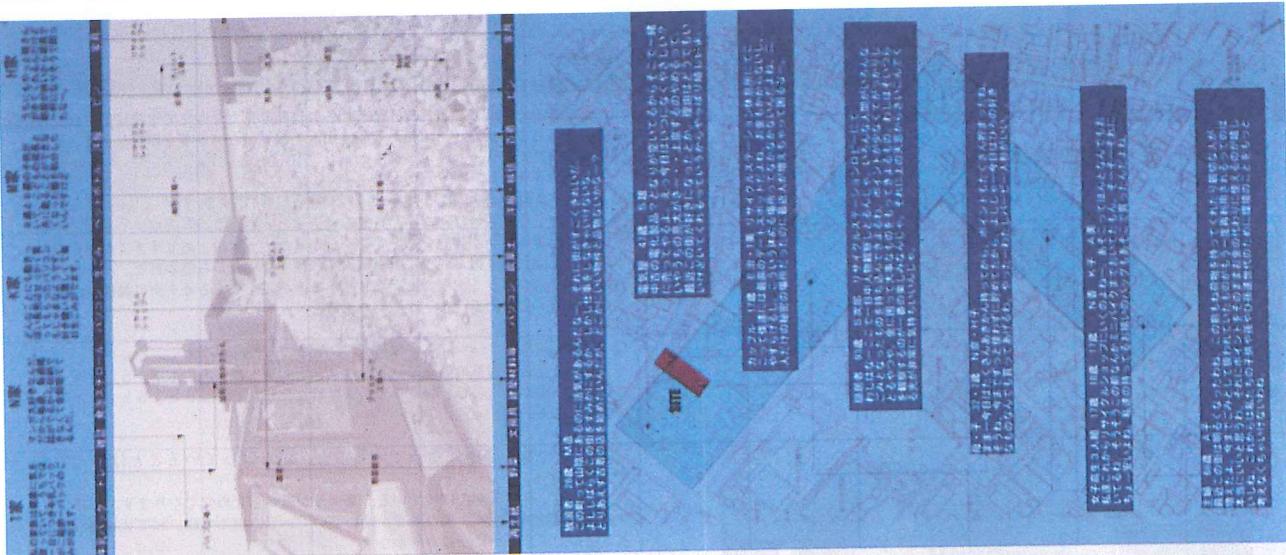


Figure 1-28

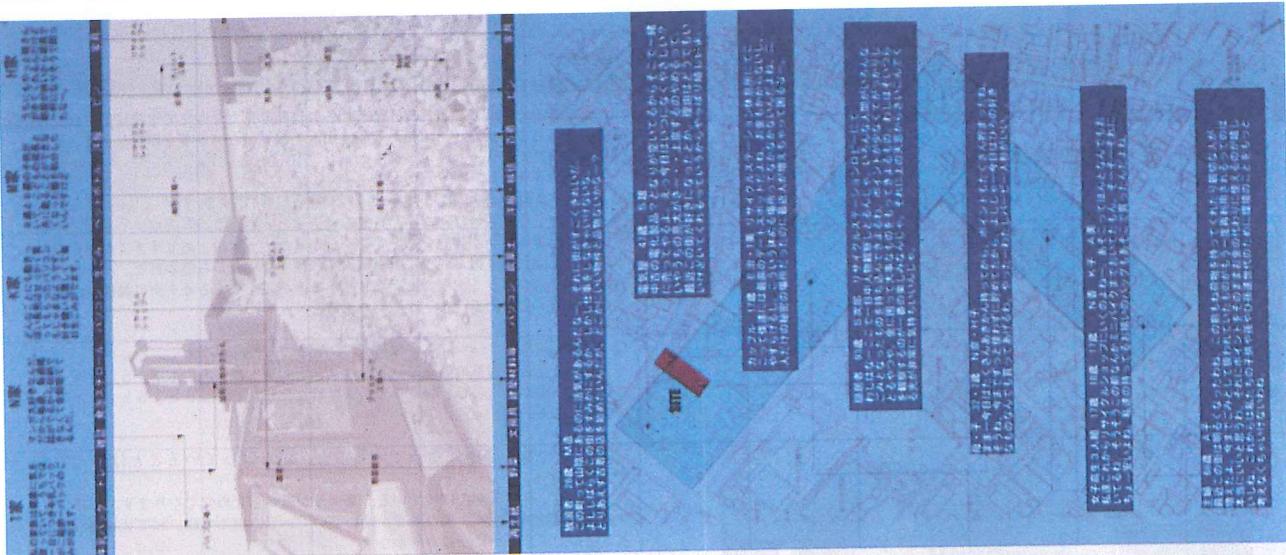


Figure 1-29

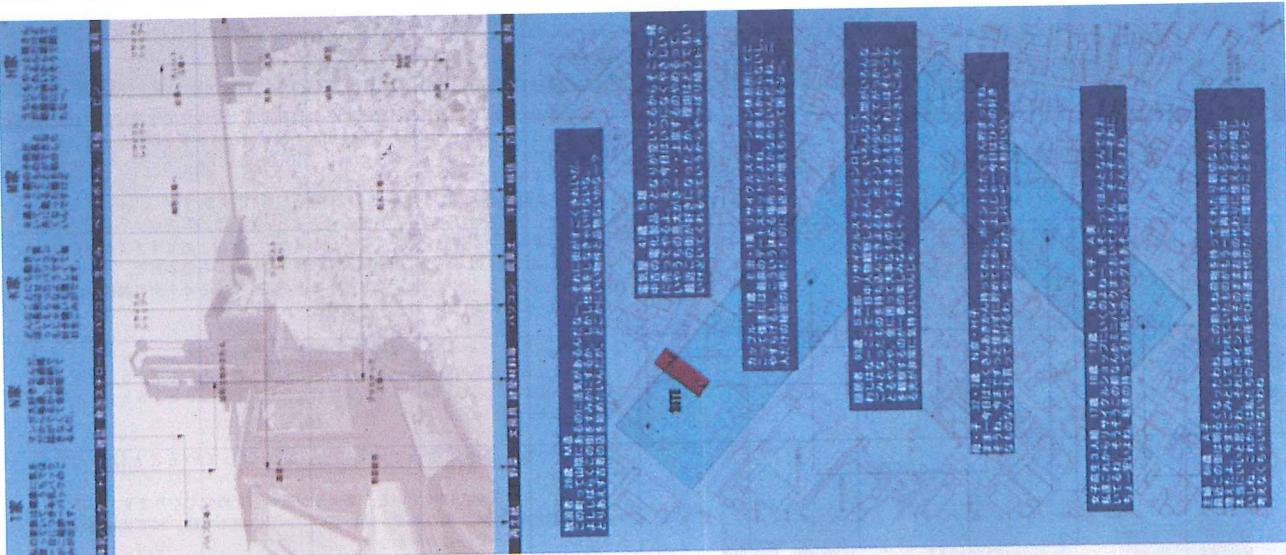


Figure 1-30

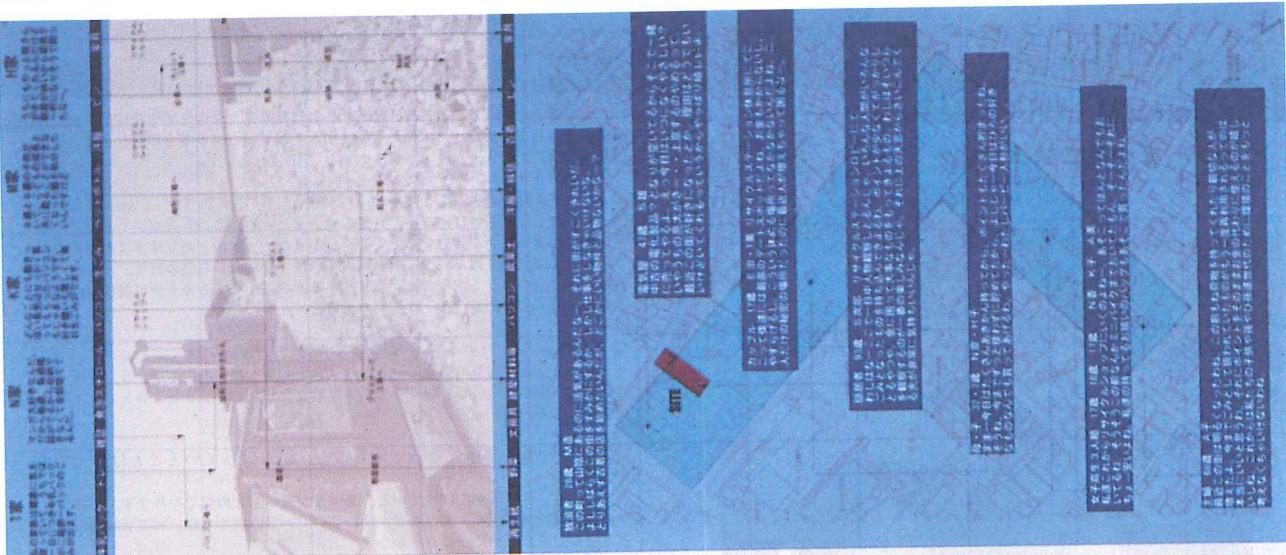


Figure 1-31

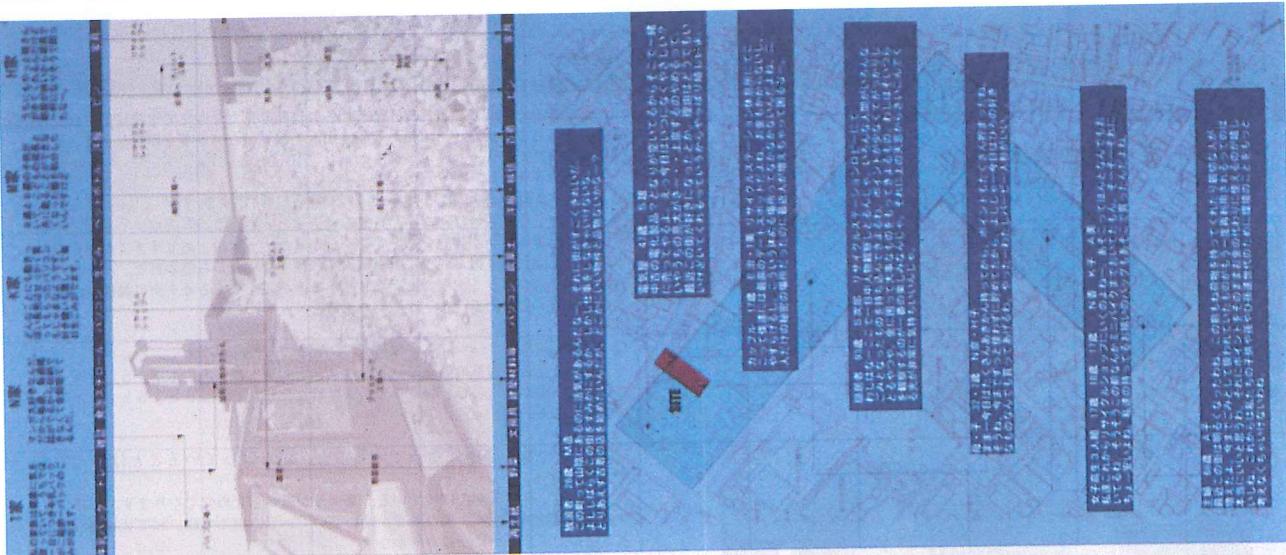


Figure 1-32

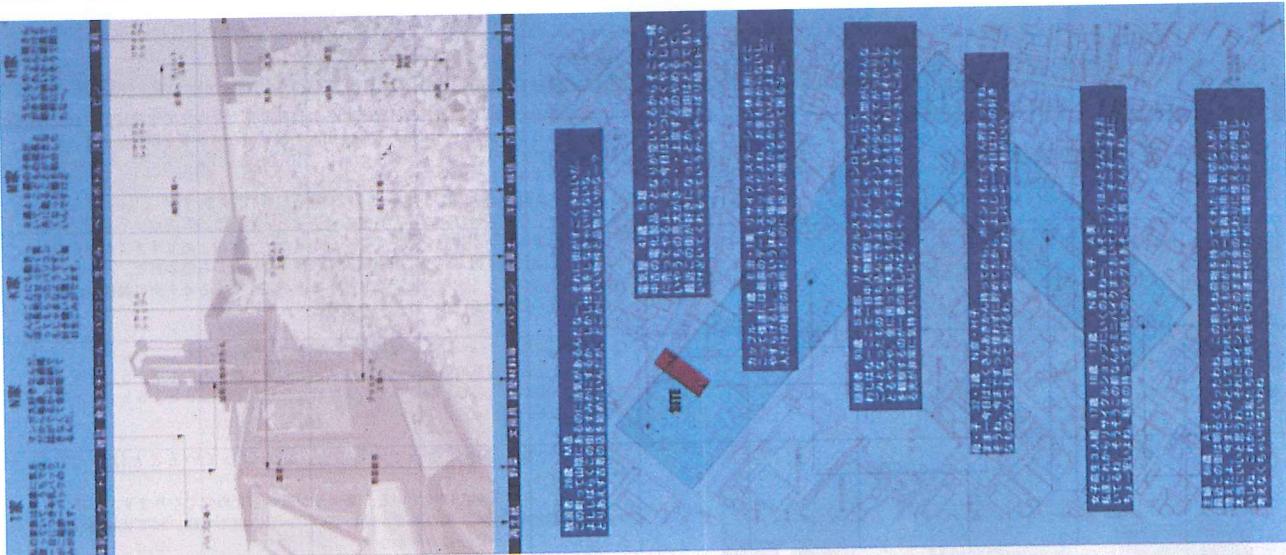


Figure 1-33

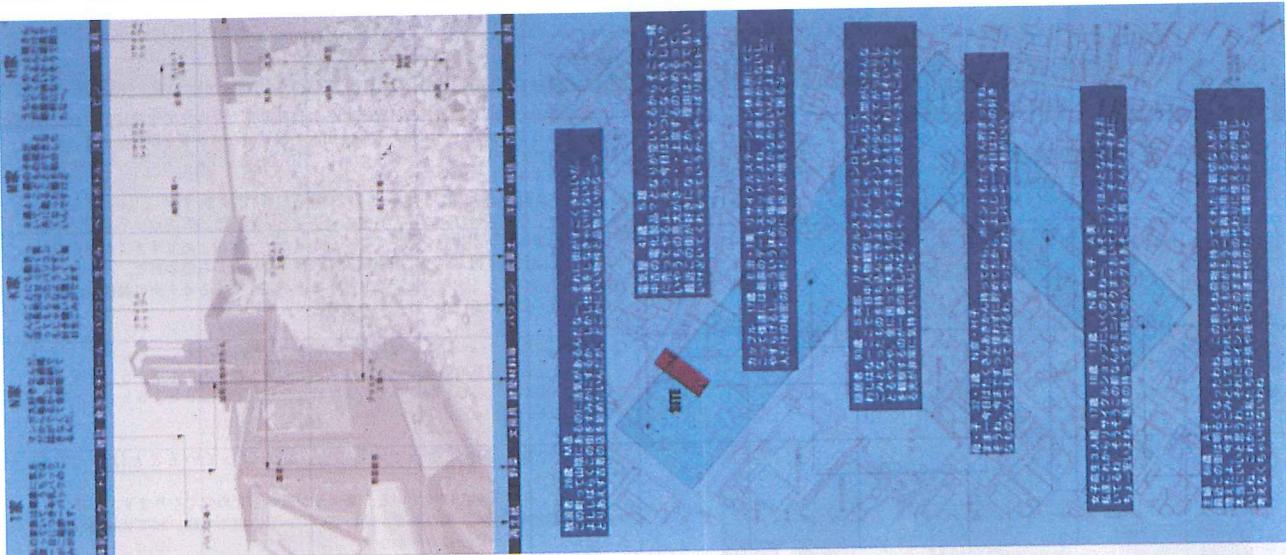


Figure 1-34

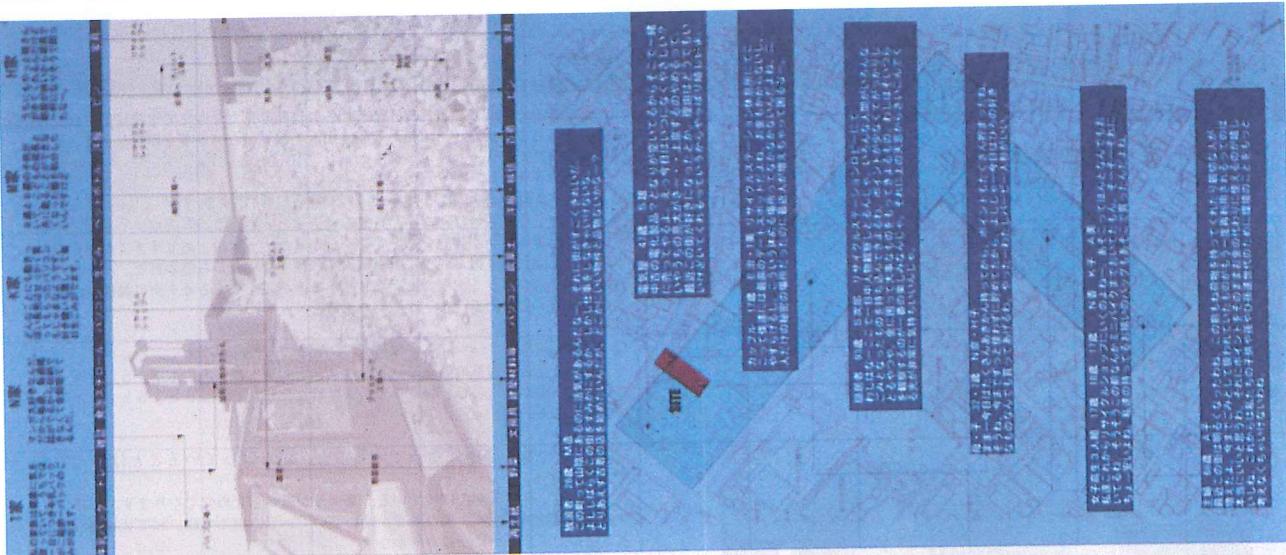


Figure 1-35

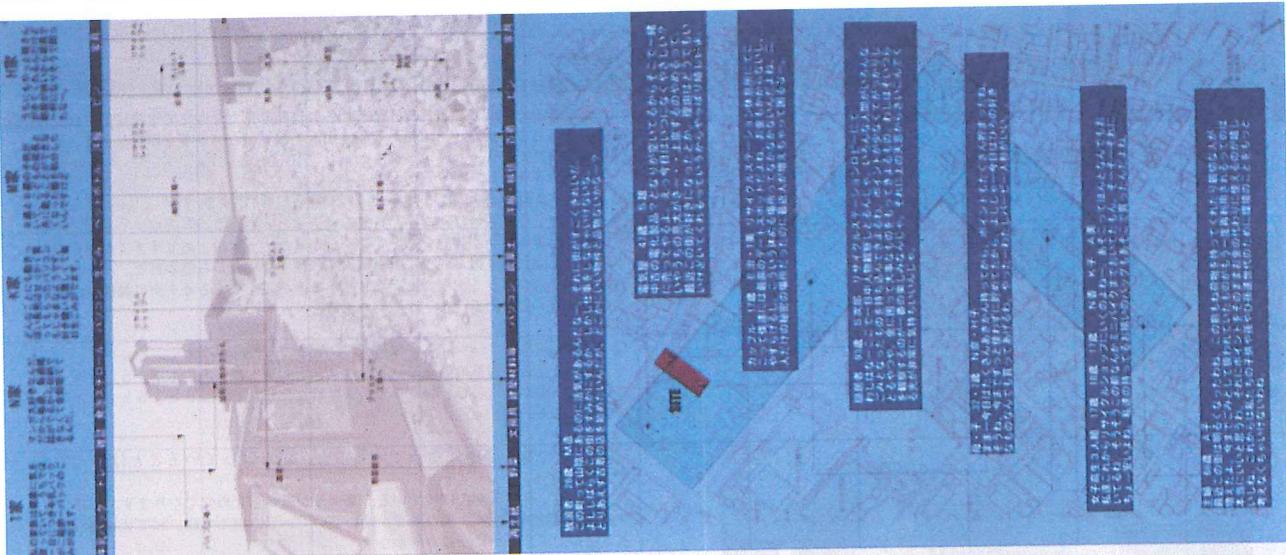


Figure 1-36

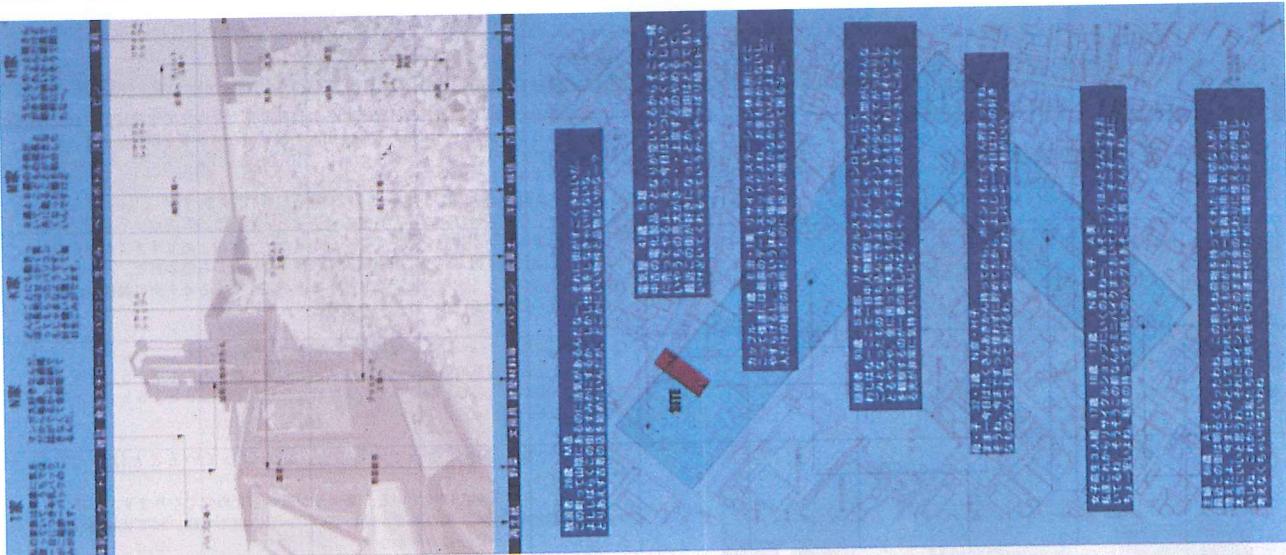


Figure 1-37

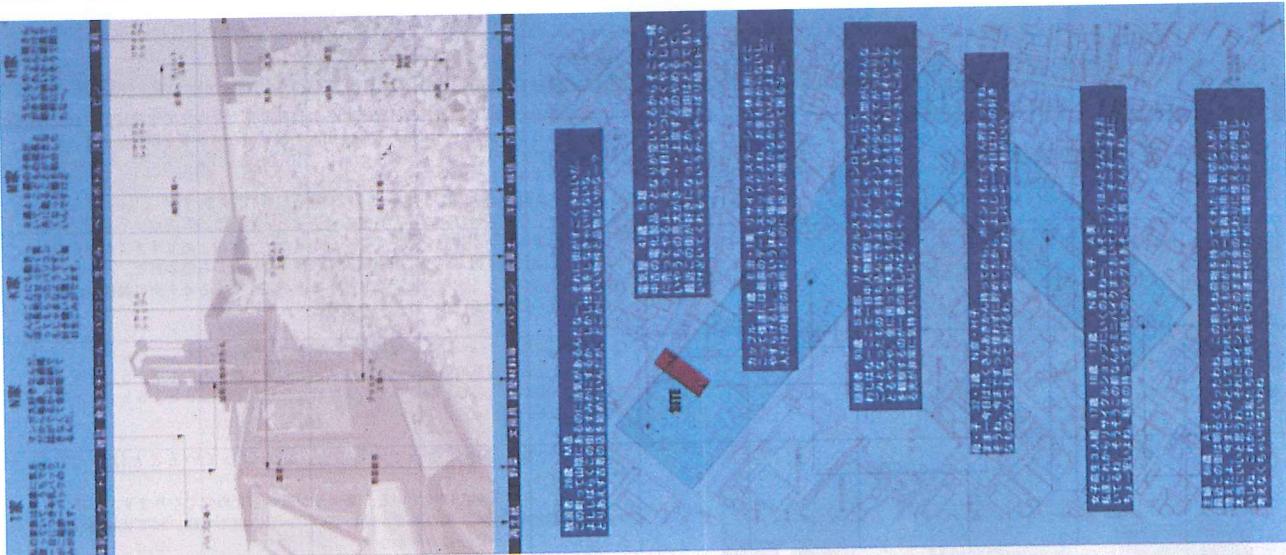


Figure 1-38

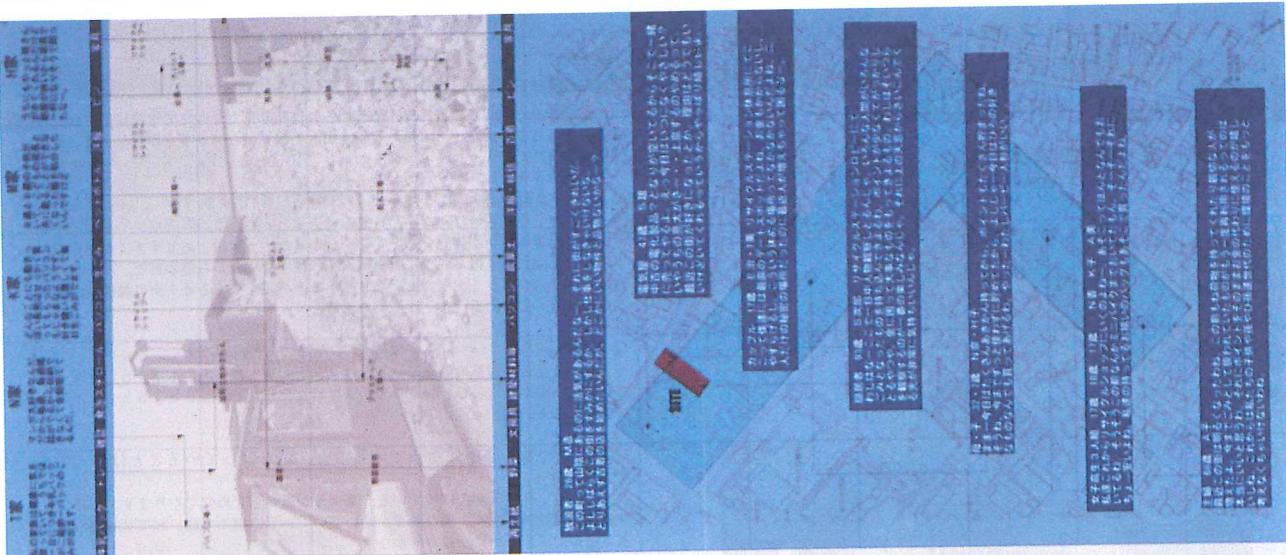


Figure 1-39

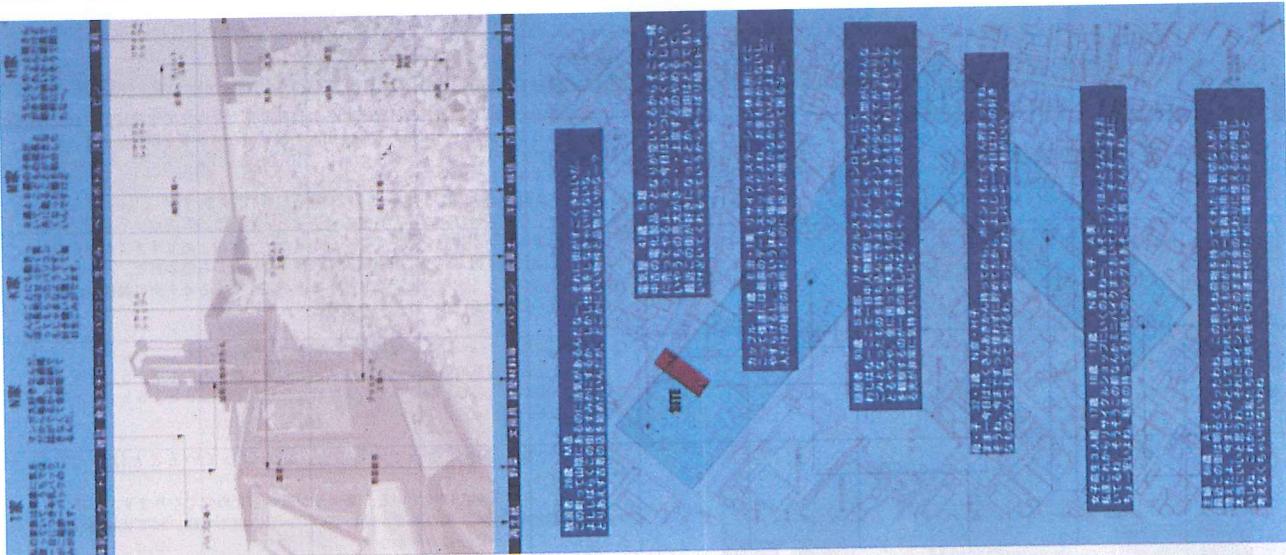


Figure 1-40

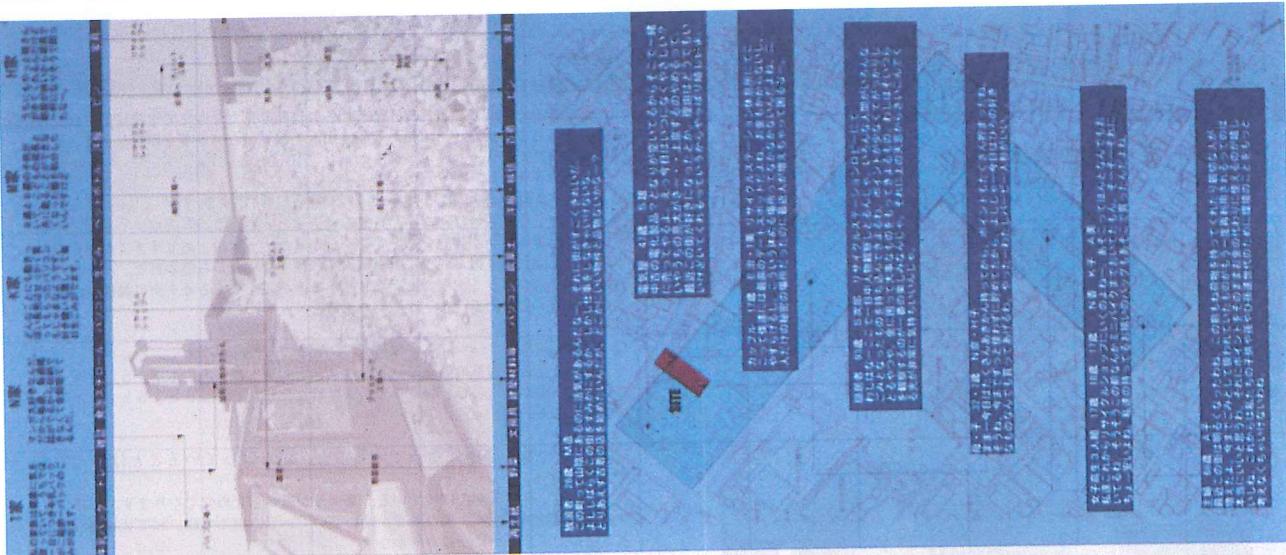


Figure 1-41

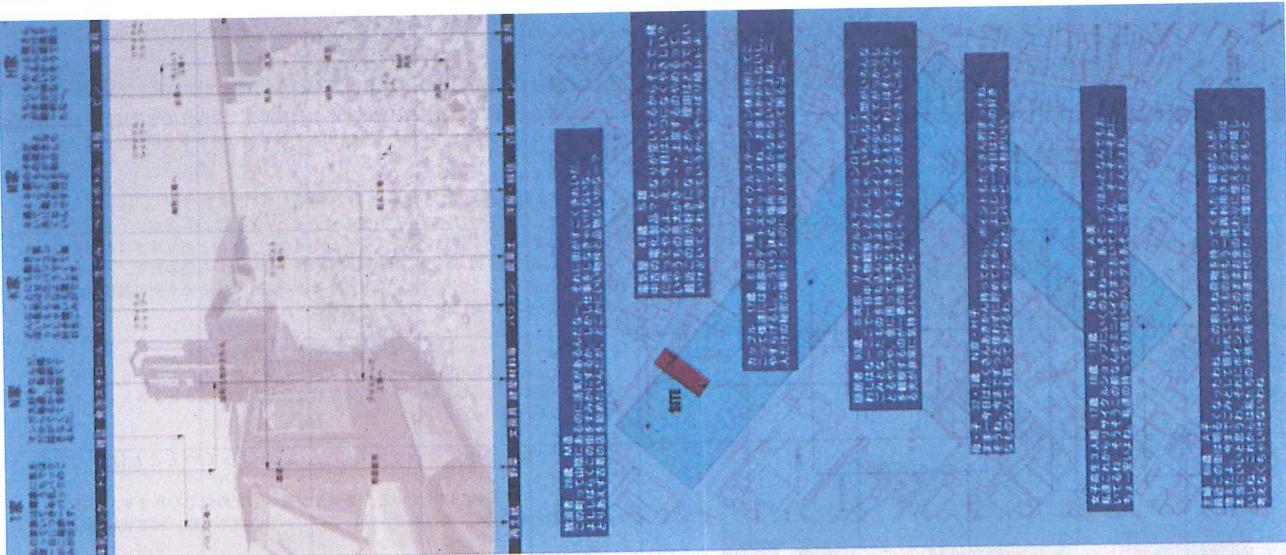


Figure 1-42

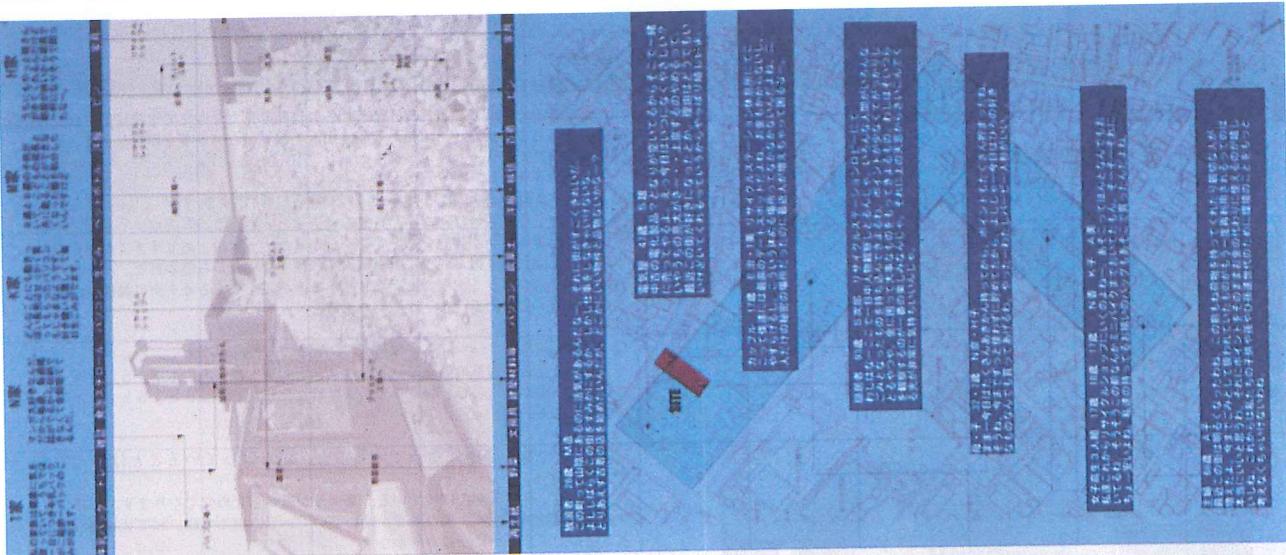


Figure 1-43

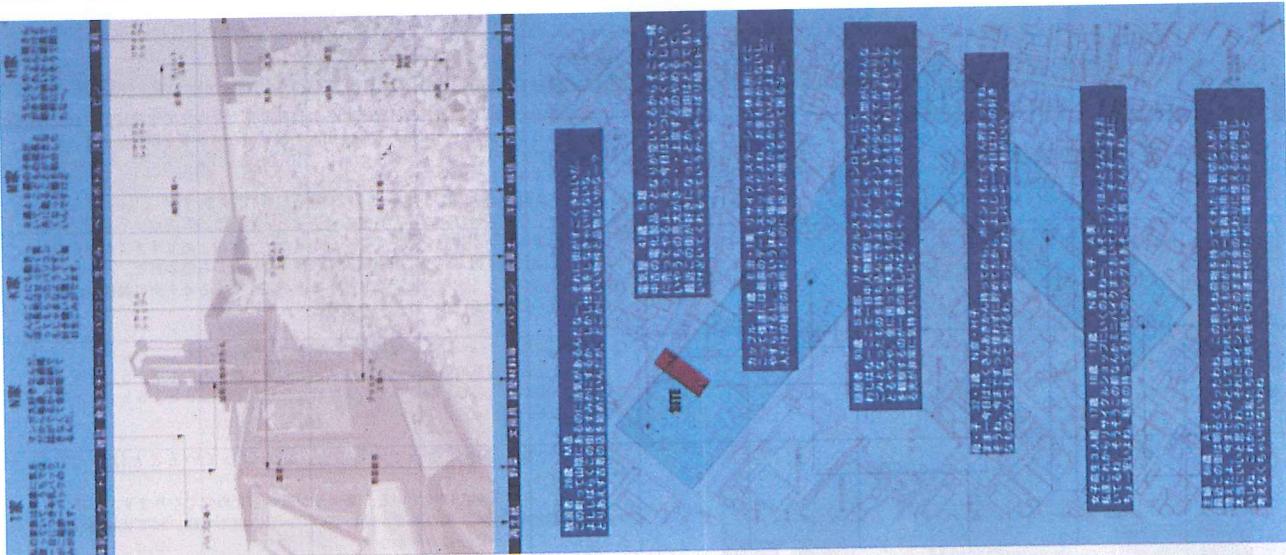


Figure 1-44

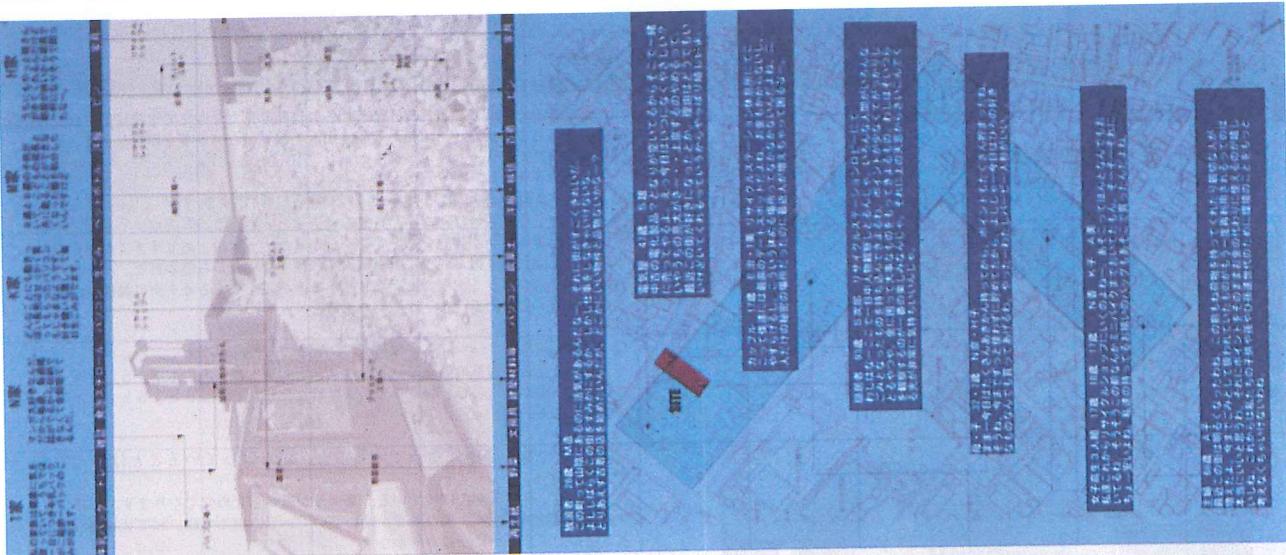


Figure 1-45

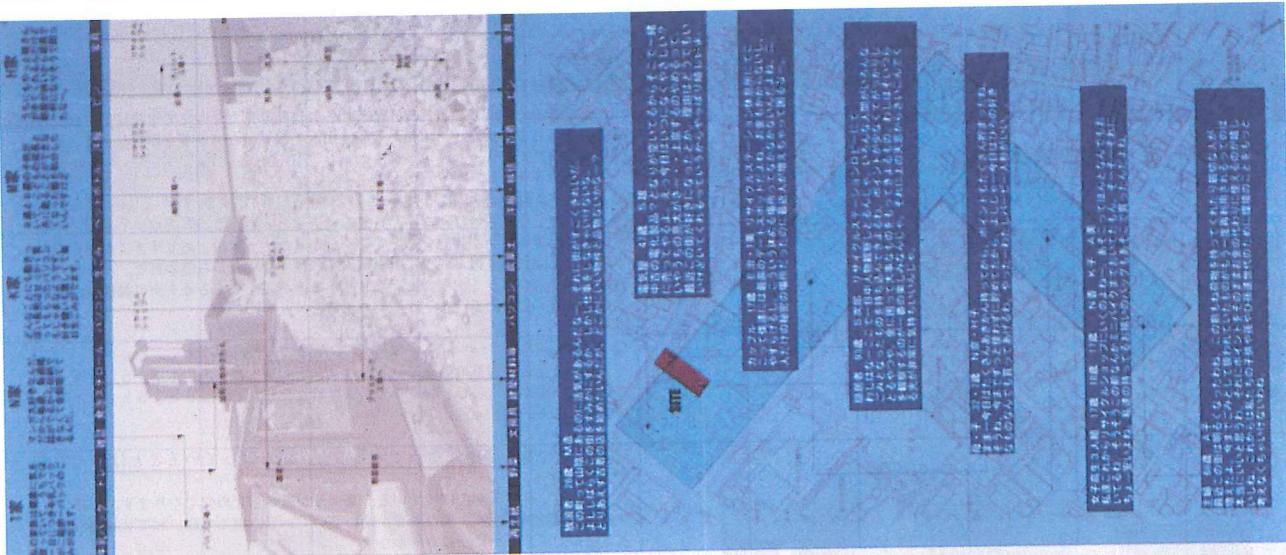


Figure 1-46

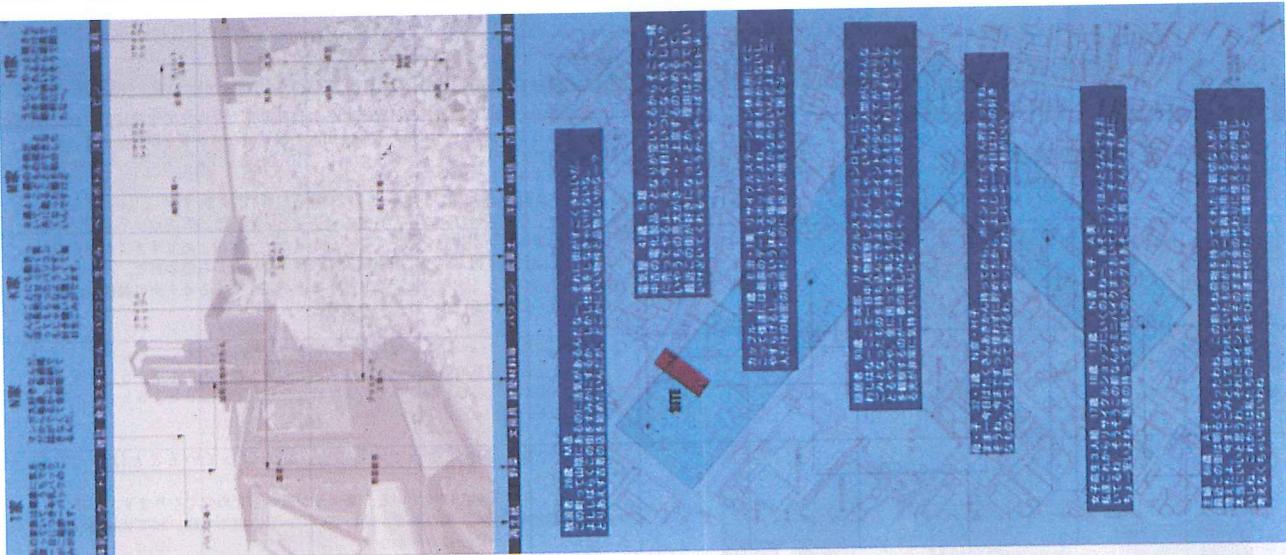


Figure 1-47

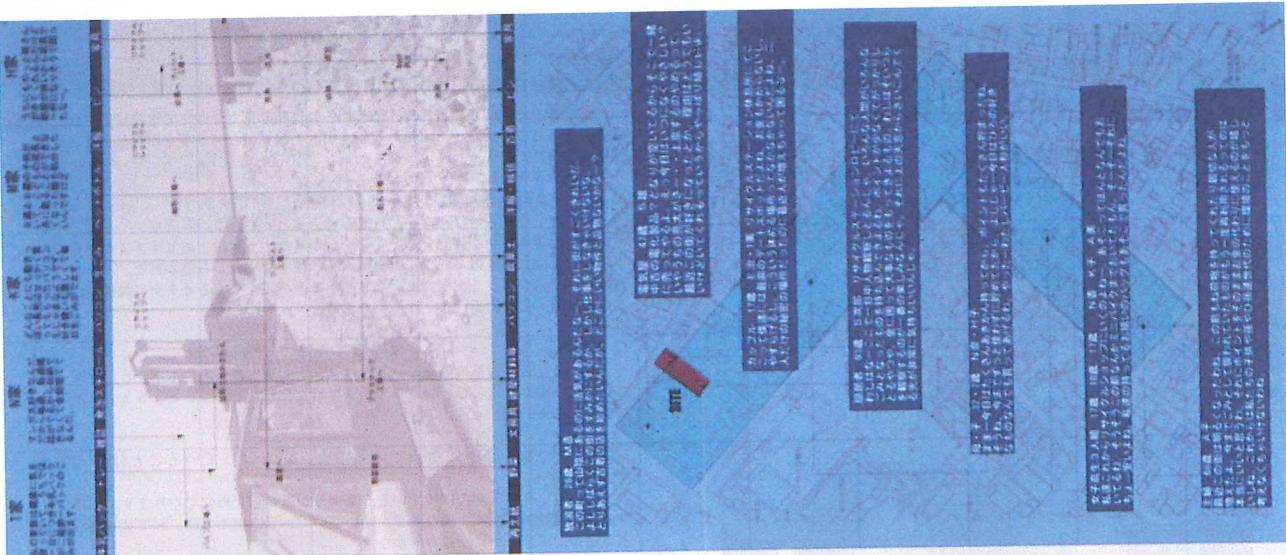


Figure 1-48

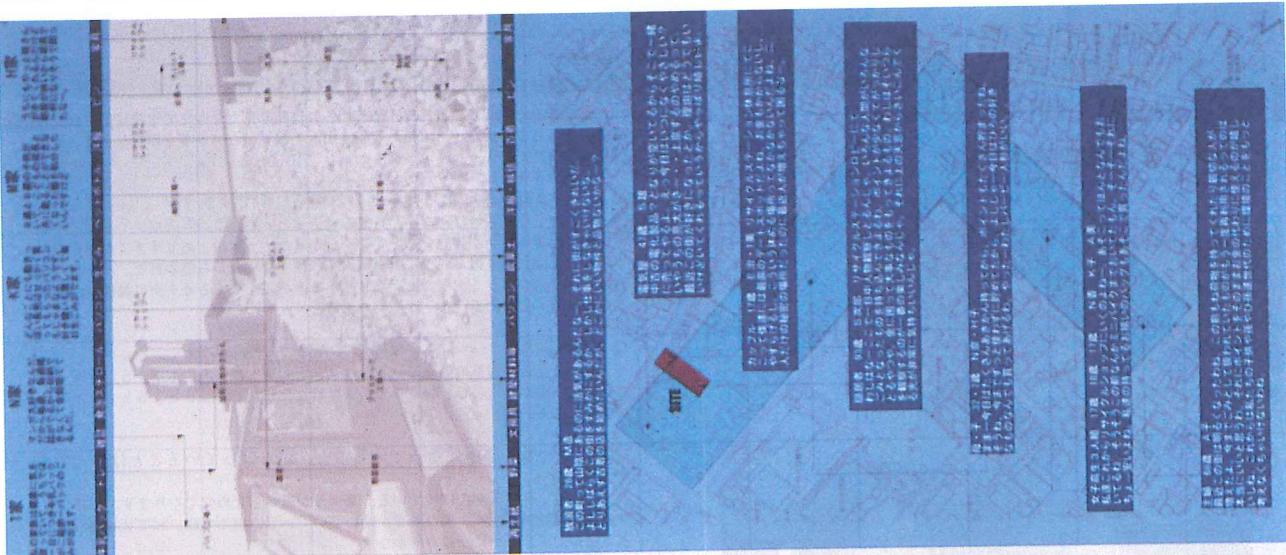


Figure 1-49

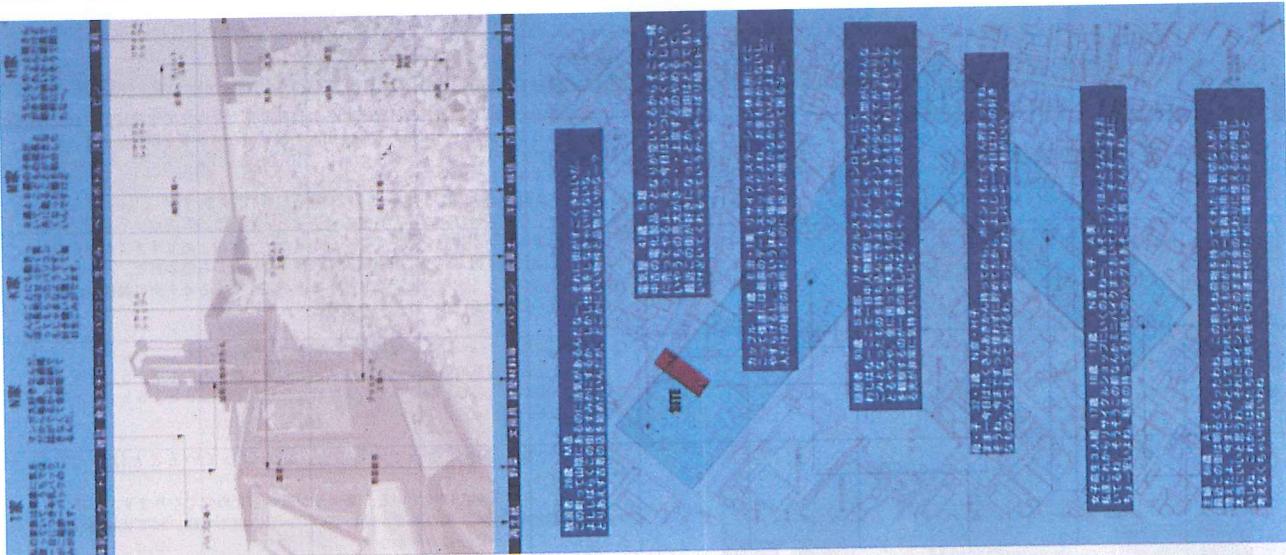


Figure 1-50

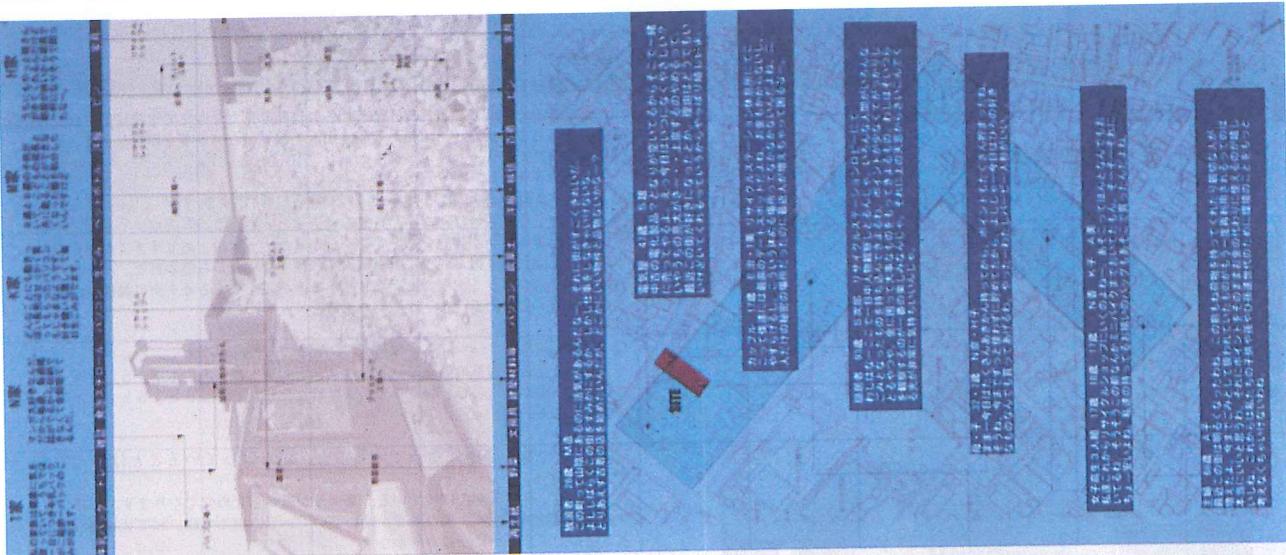


Figure 1-51

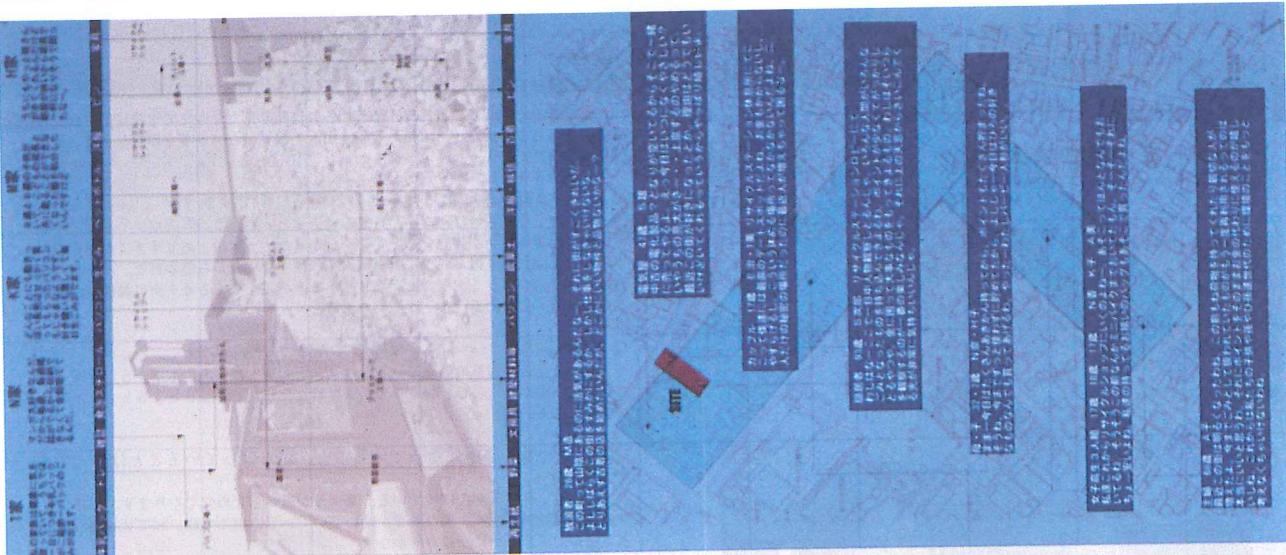


Figure 1-52

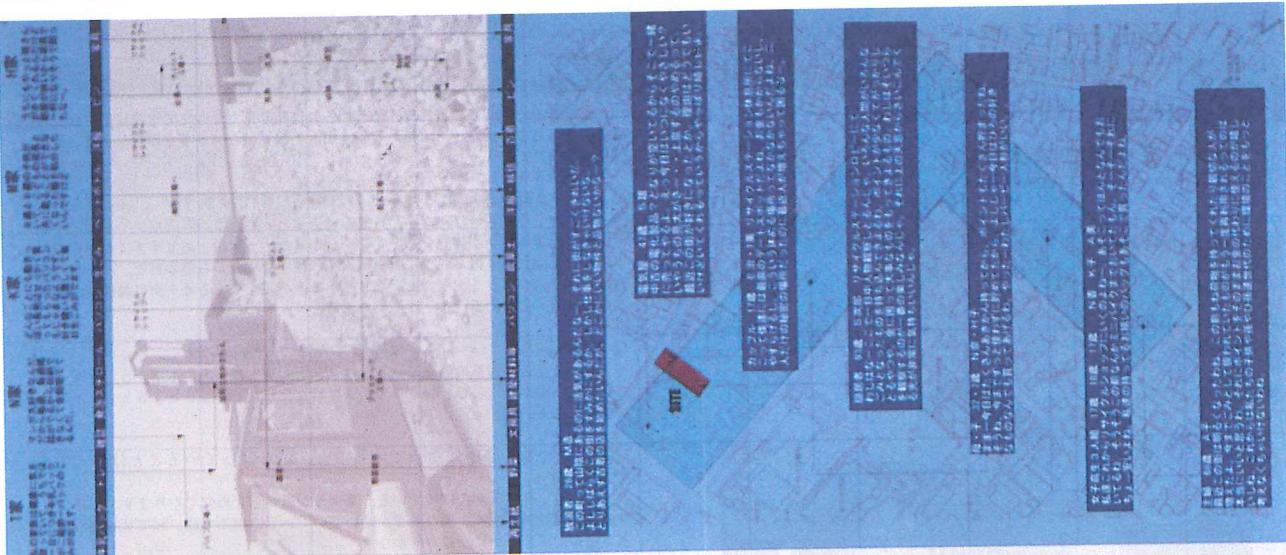


Figure 1-53

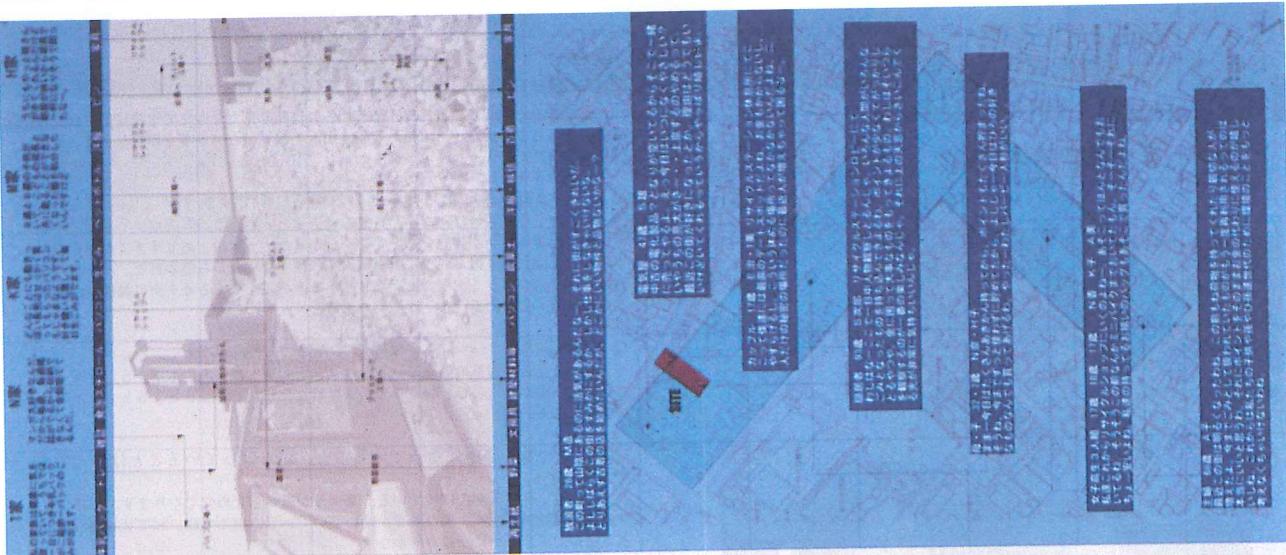


Figure 1-54

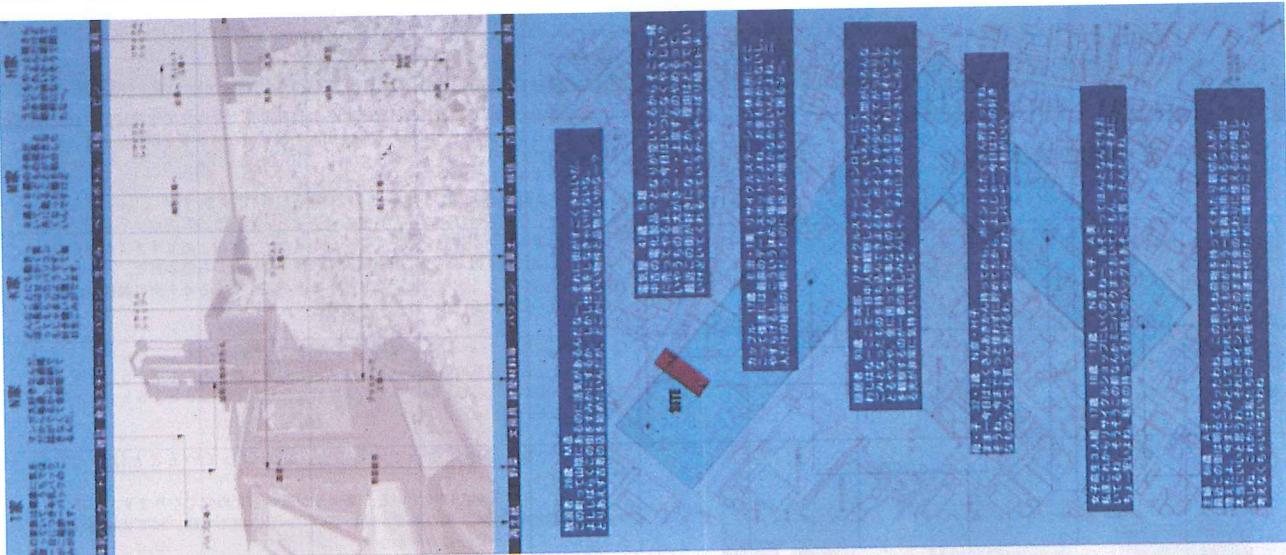


Figure 1-55

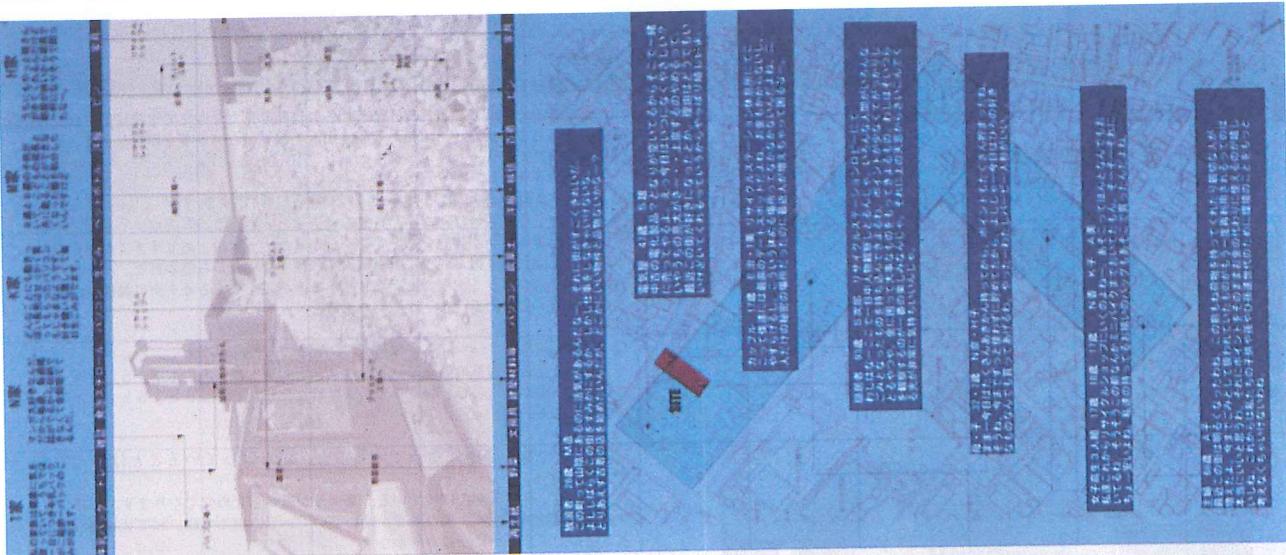


Figure 1-56

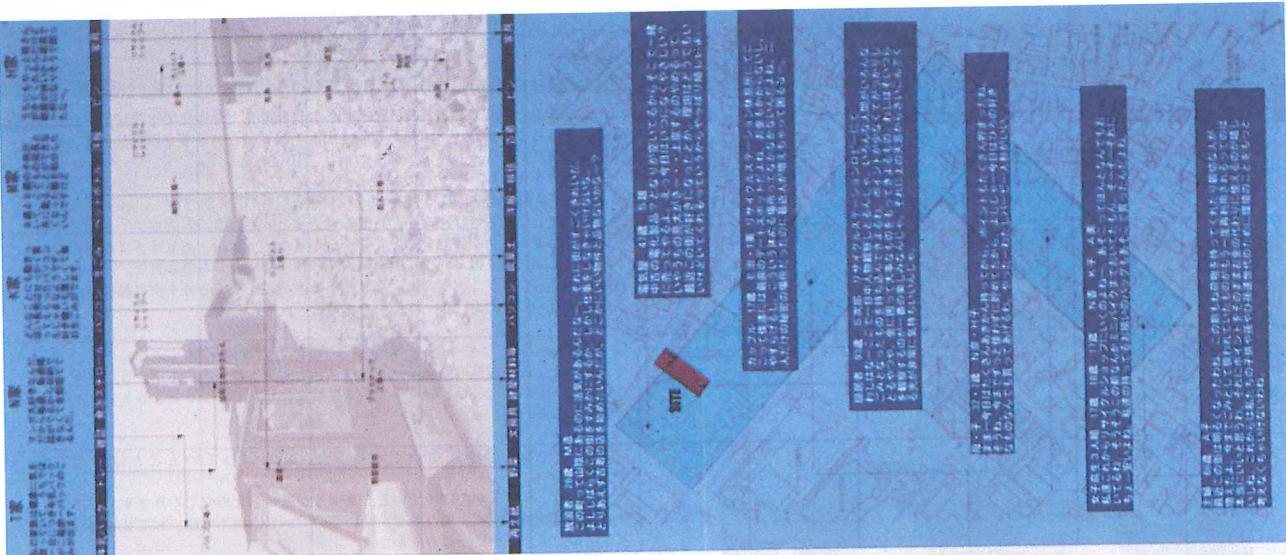


Figure 1-57

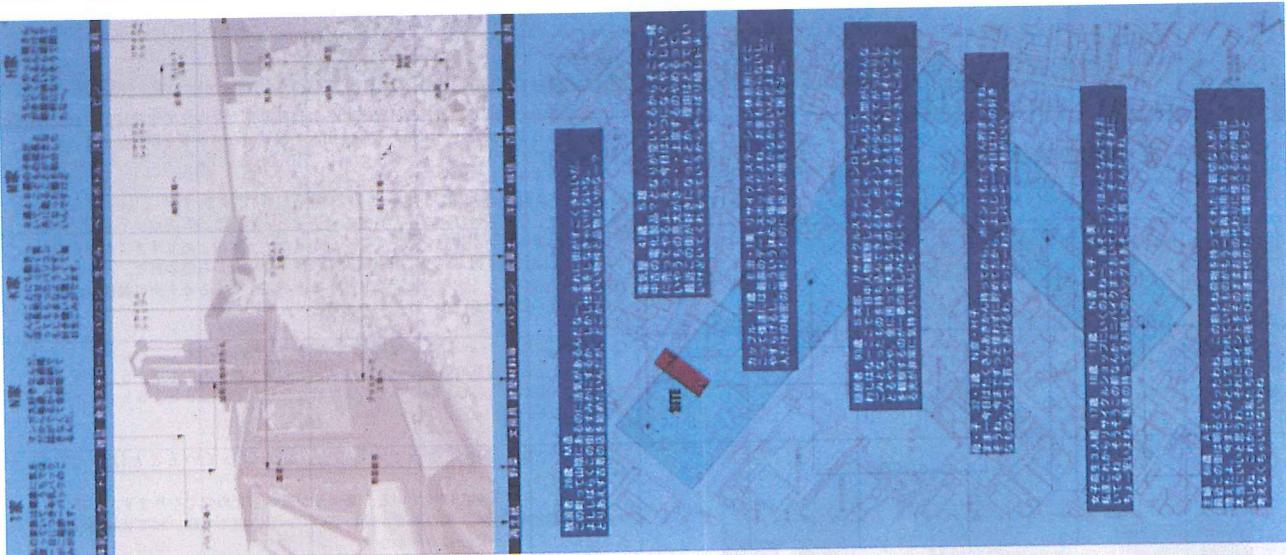


Figure 1-58

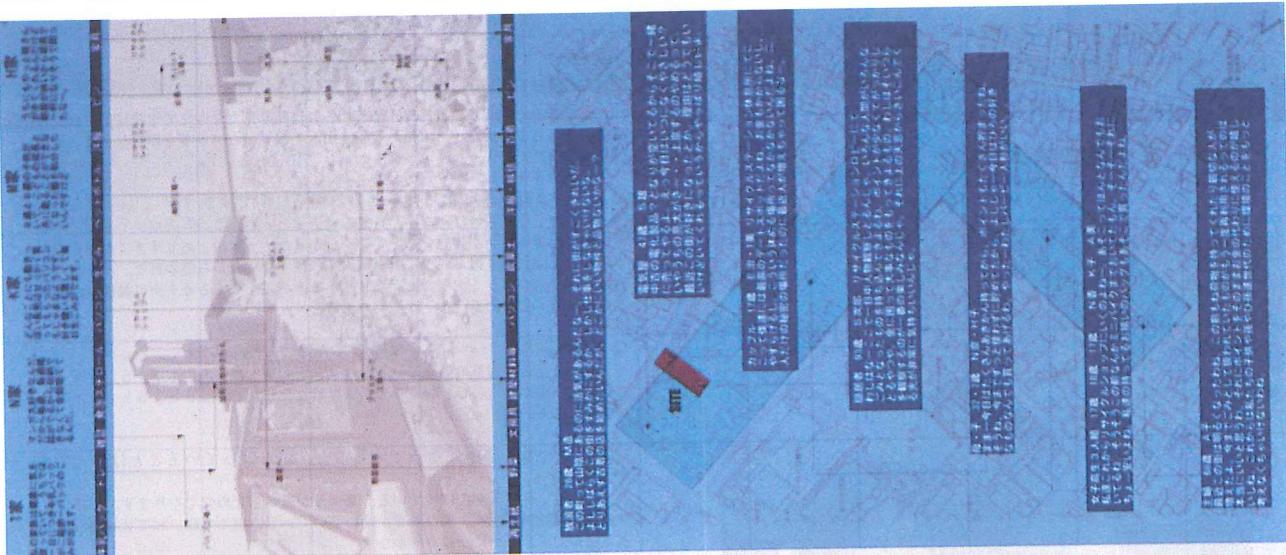


Figure 1-59

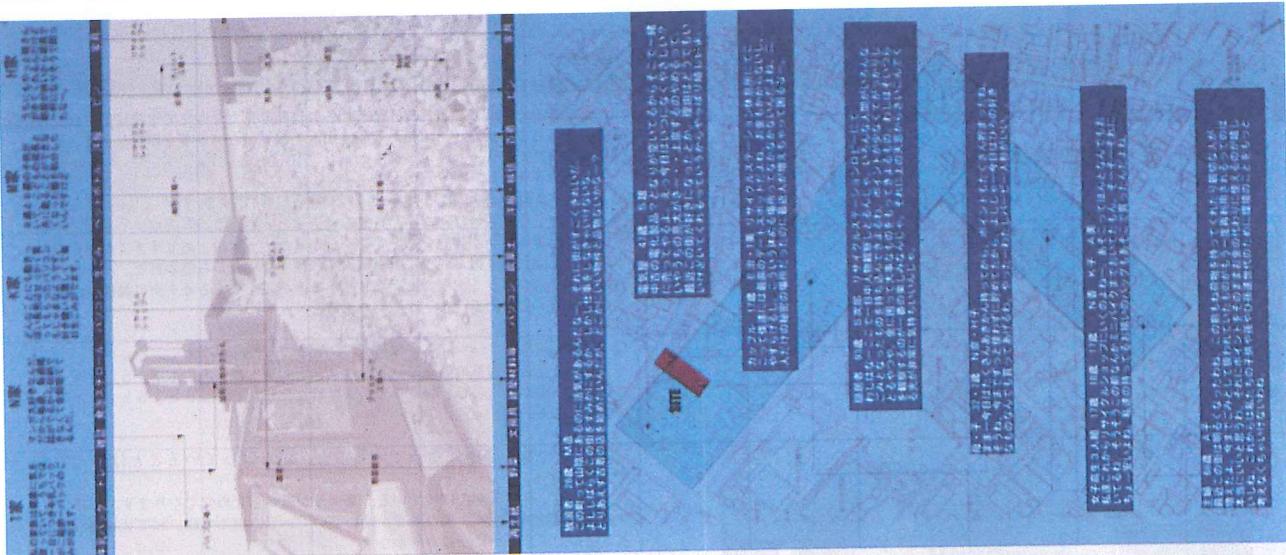


Figure 1-60

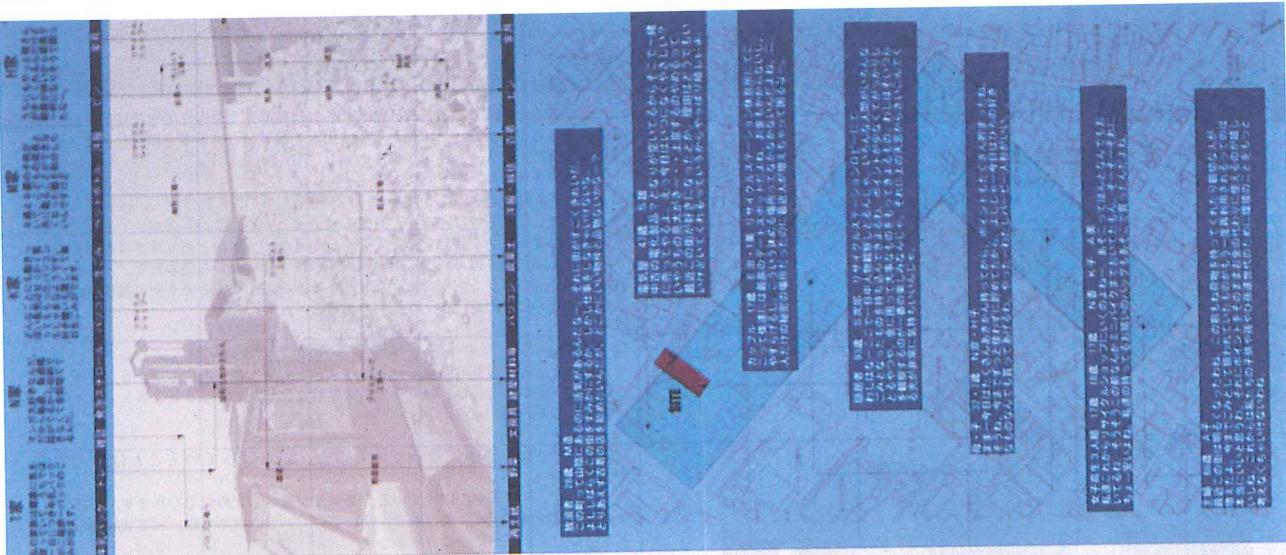


Figure 1-61

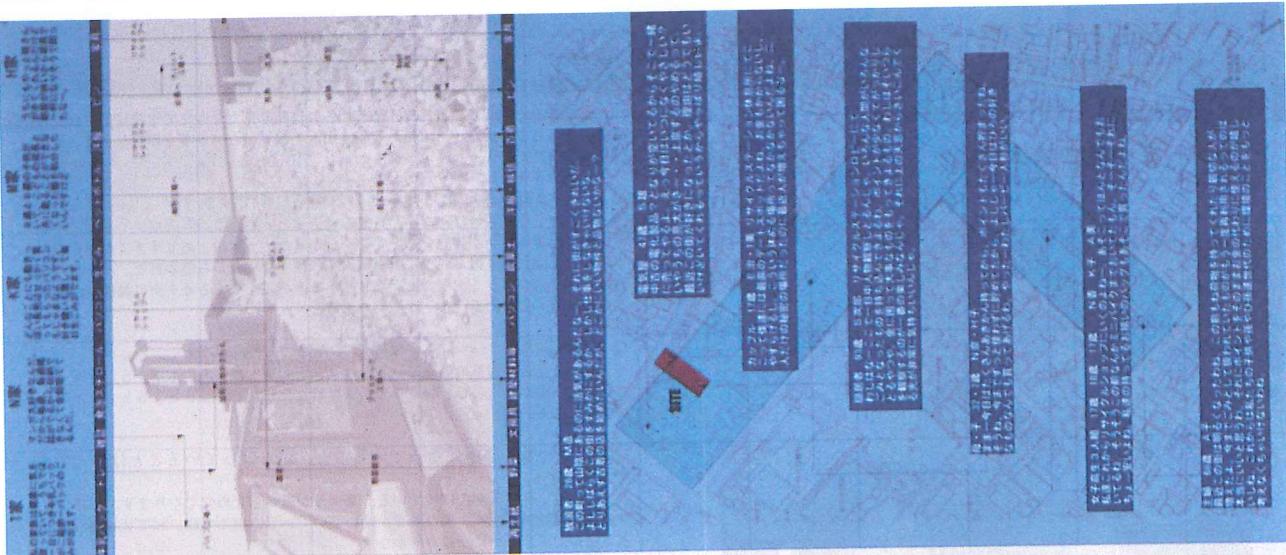


Figure 1-62

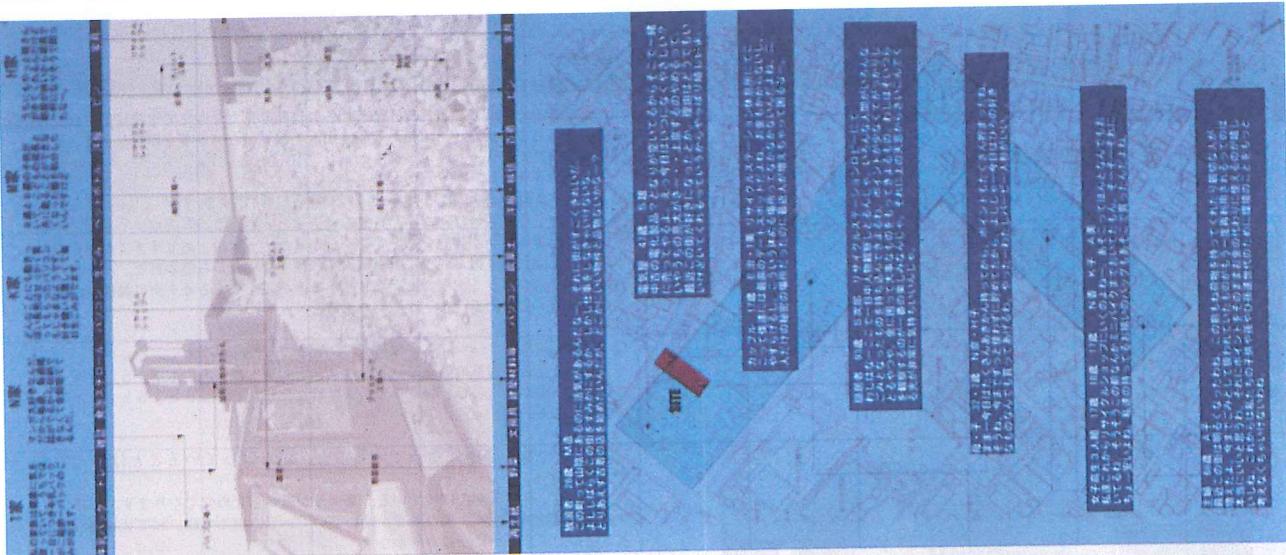


Figure 1-63

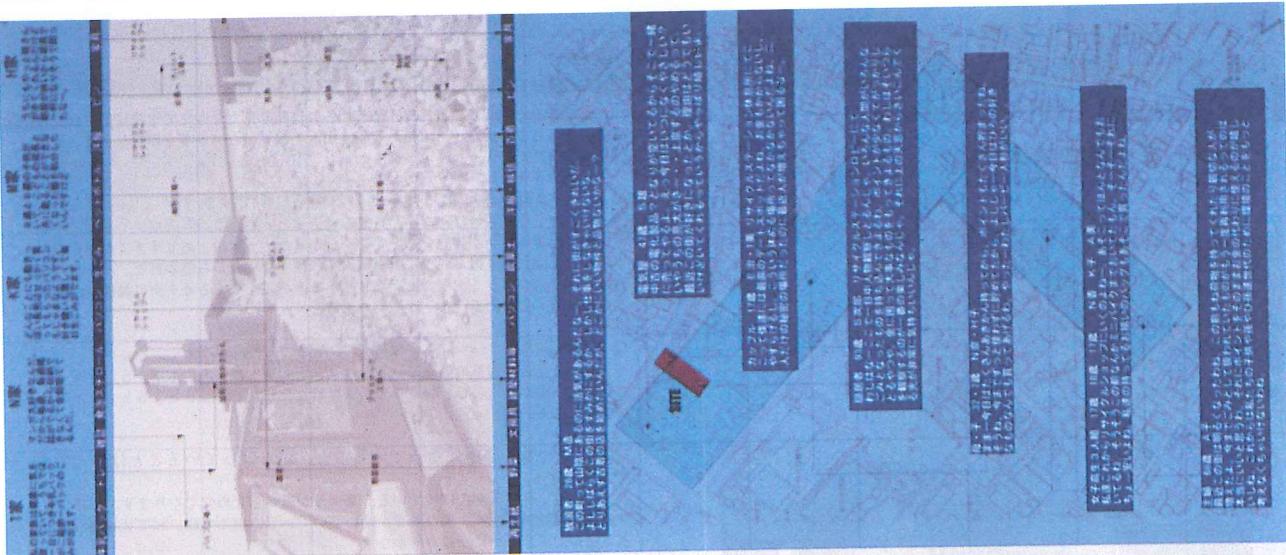


Figure 1-64

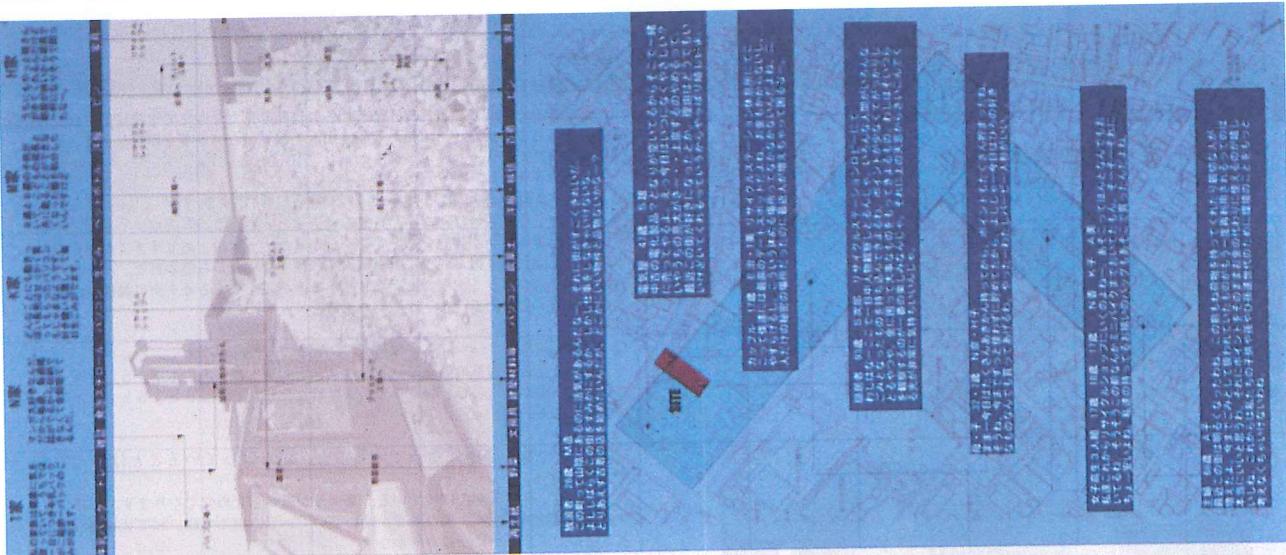


Figure 1-65

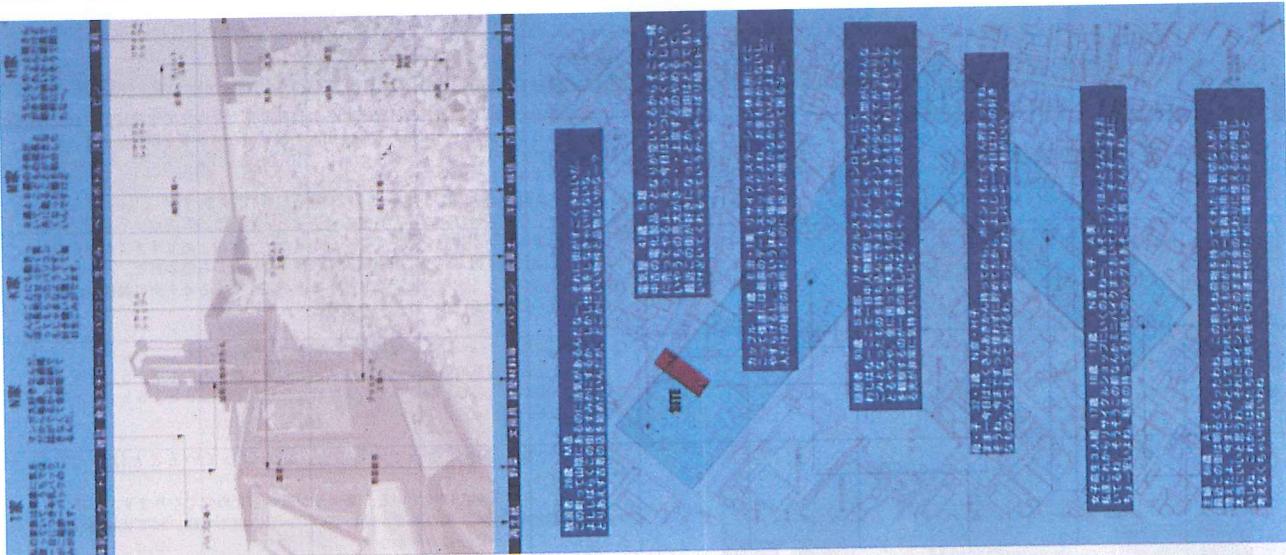


Figure 1-66

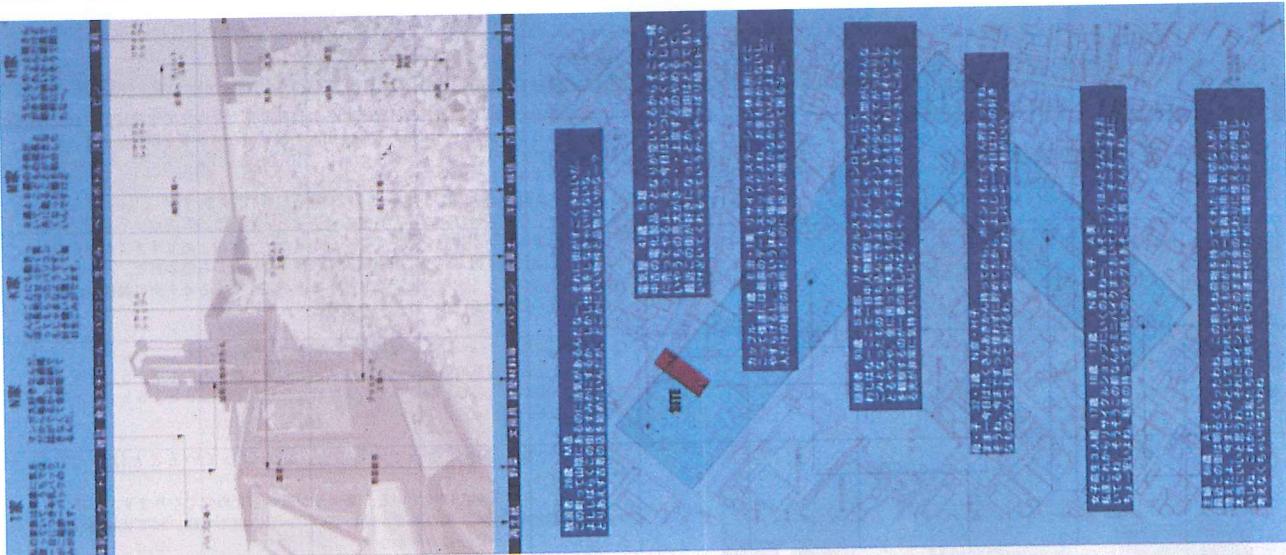


Figure 1-67

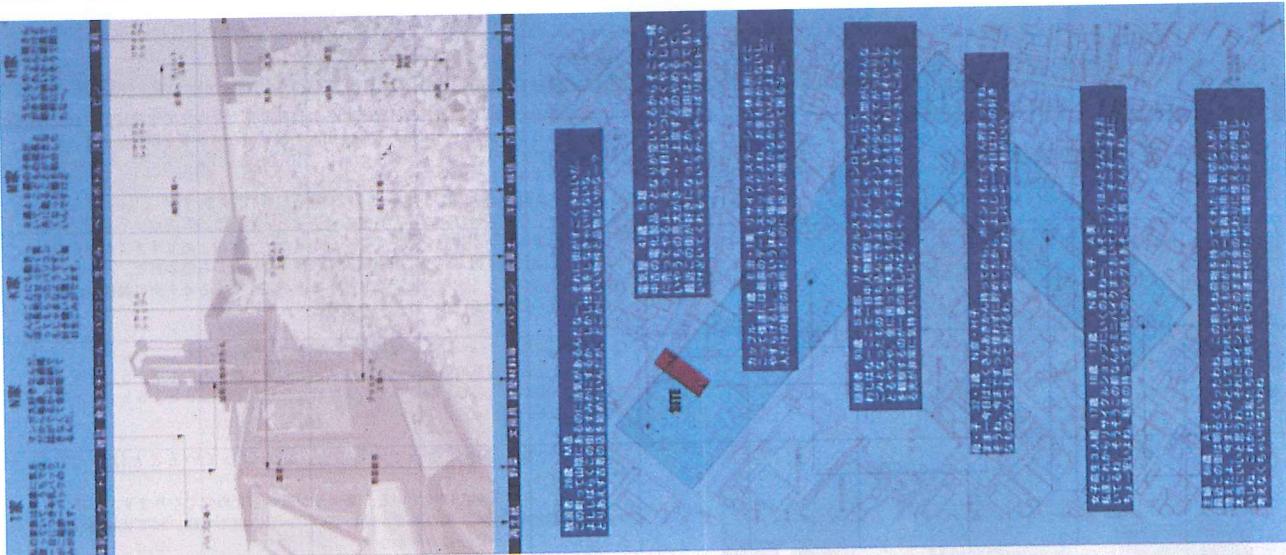


Figure 1-68

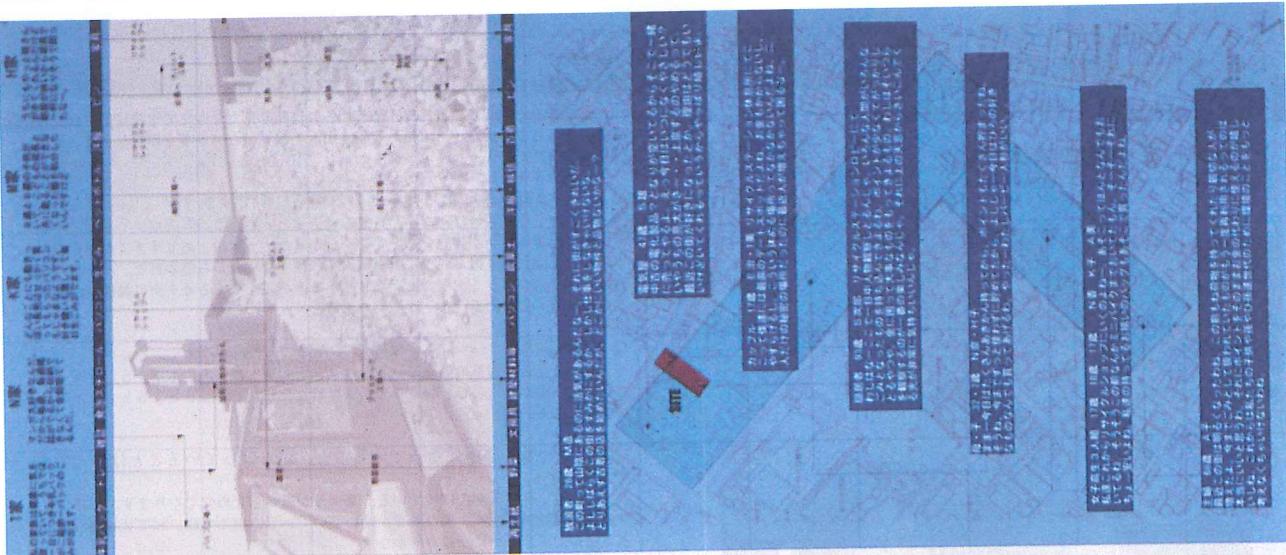


Figure 1-69

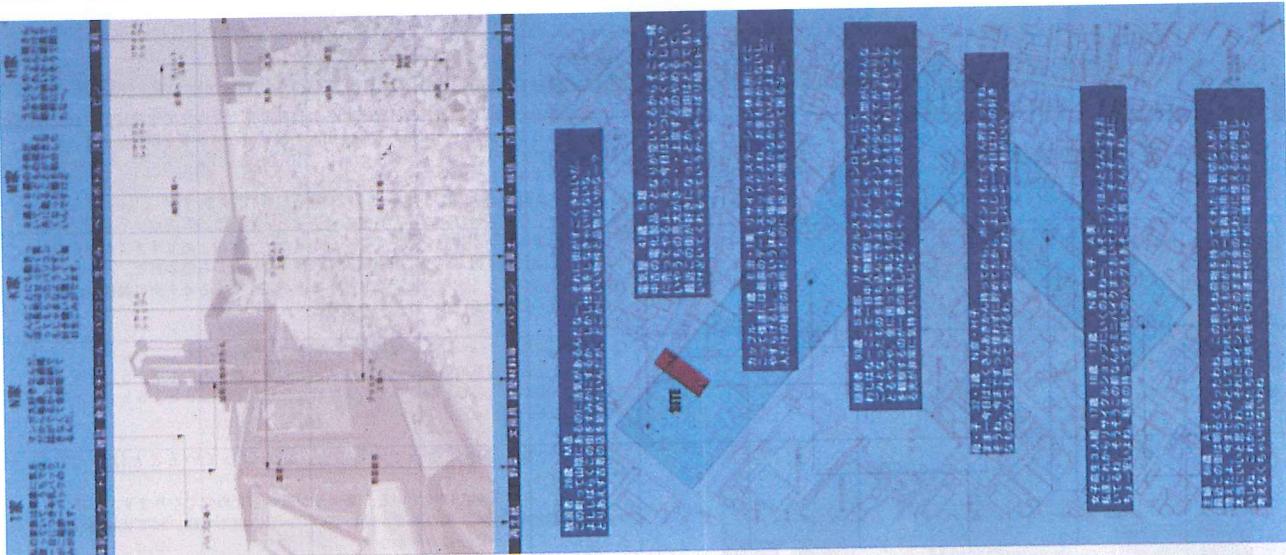


Figure 1-70

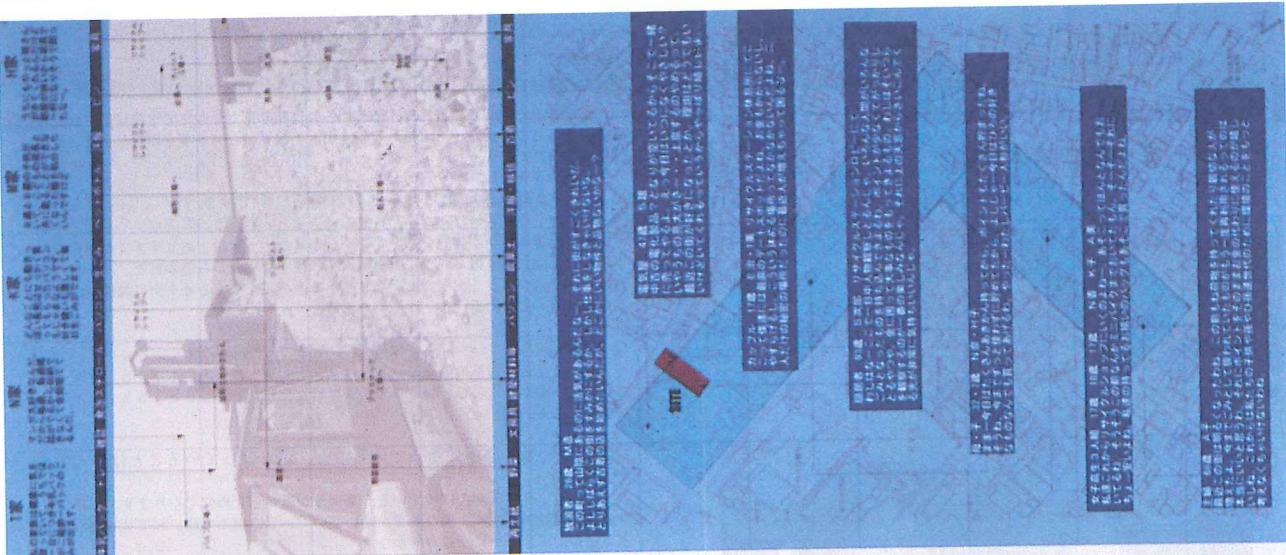


Figure 1-71

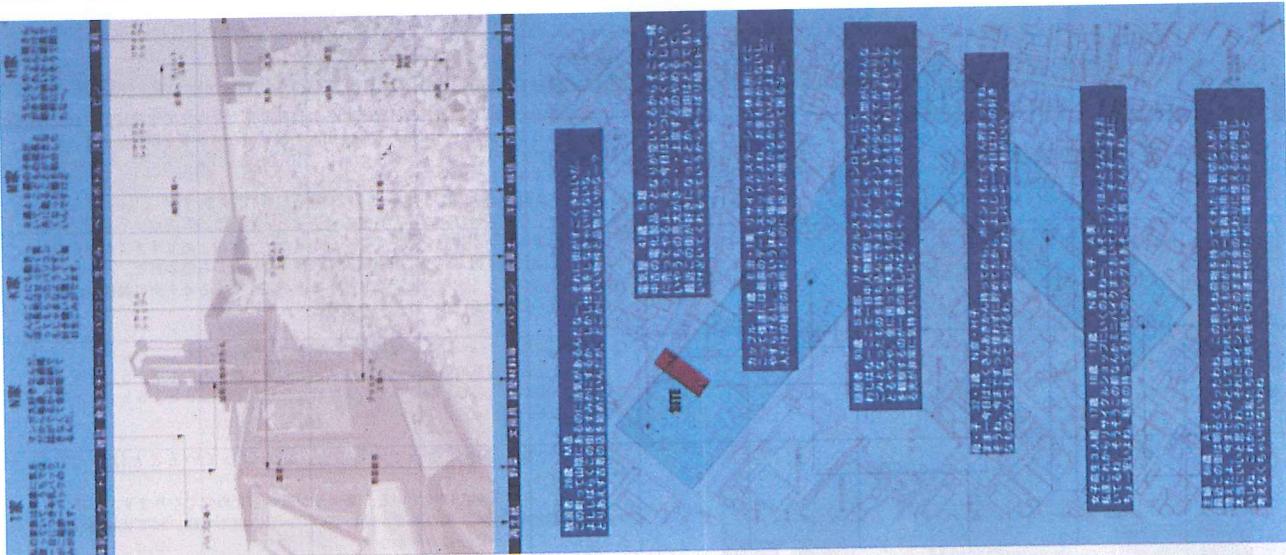


Figure 1-72

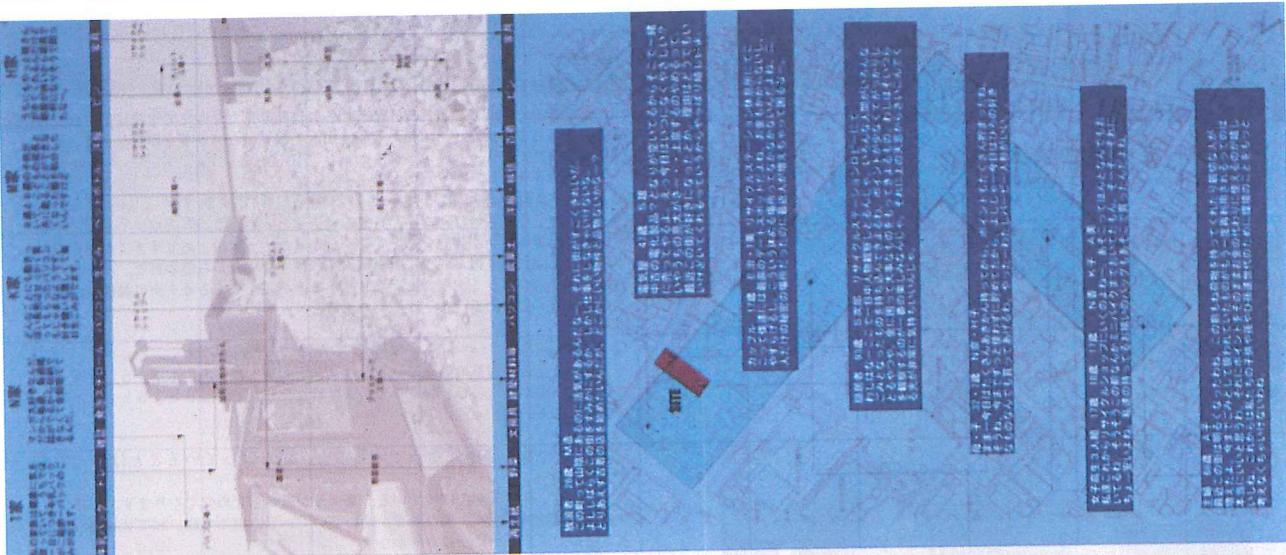


Figure 1-73

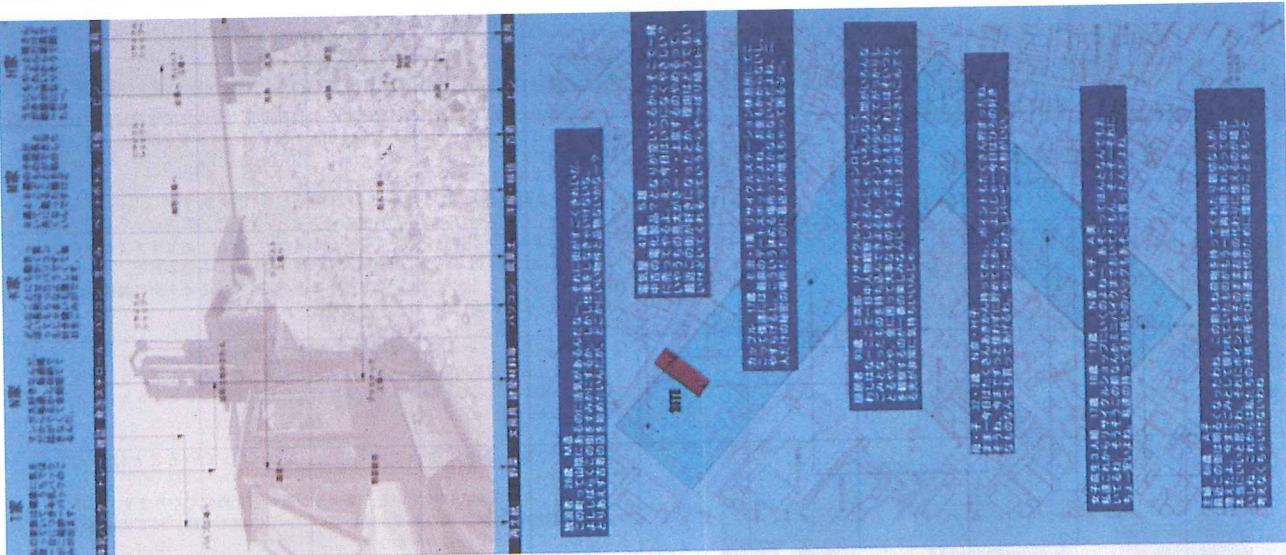


Figure 1-74

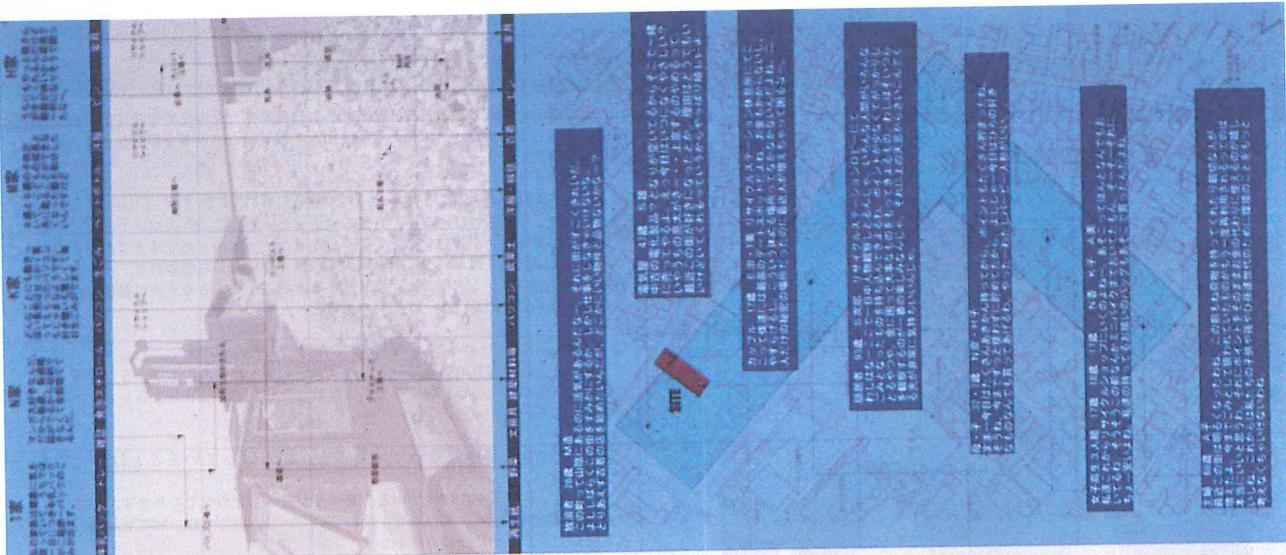


Figure 1-75

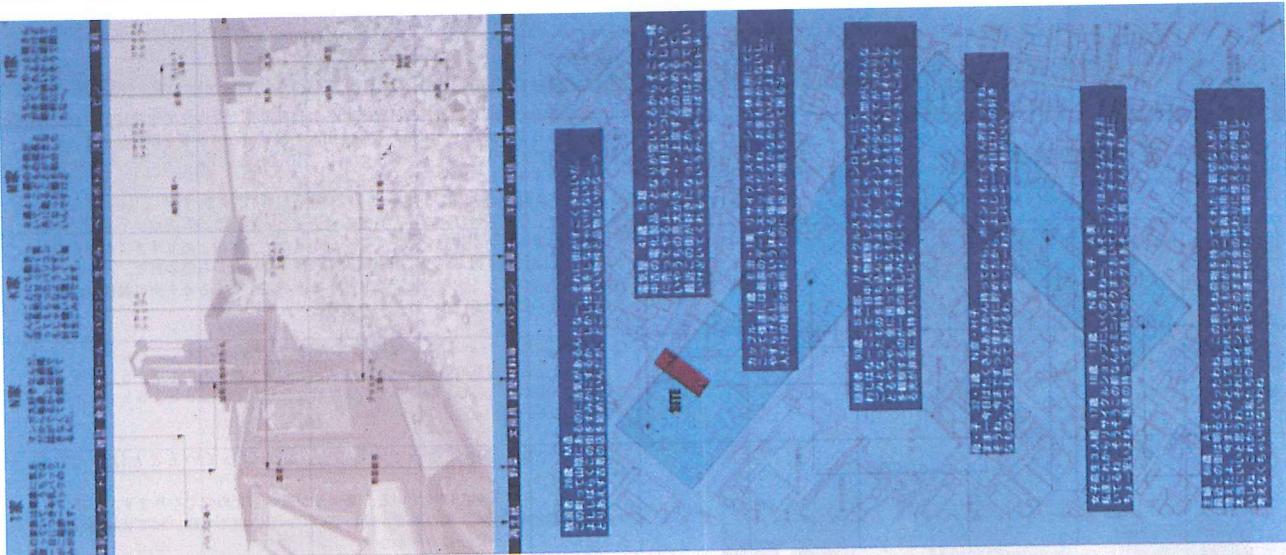


Figure 1-76

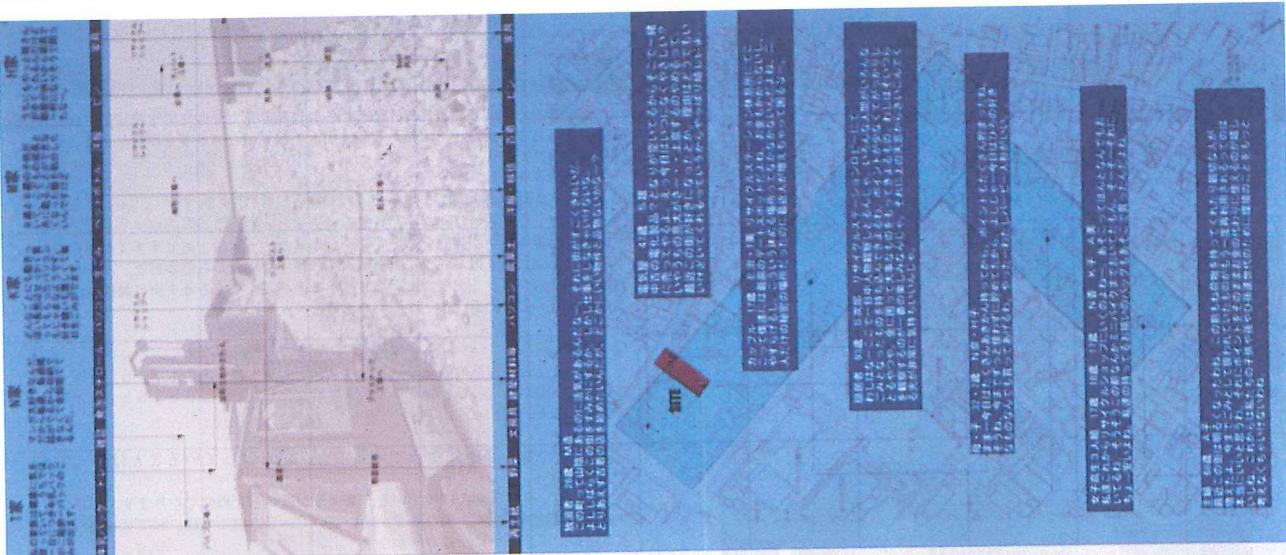


Figure 1-77

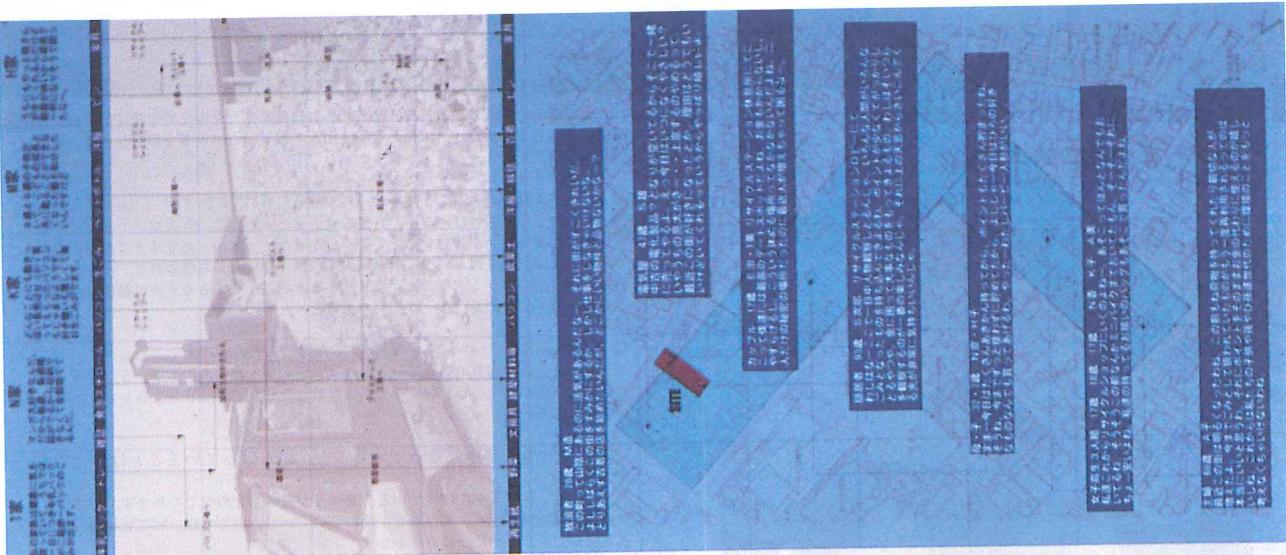


Figure 1-78

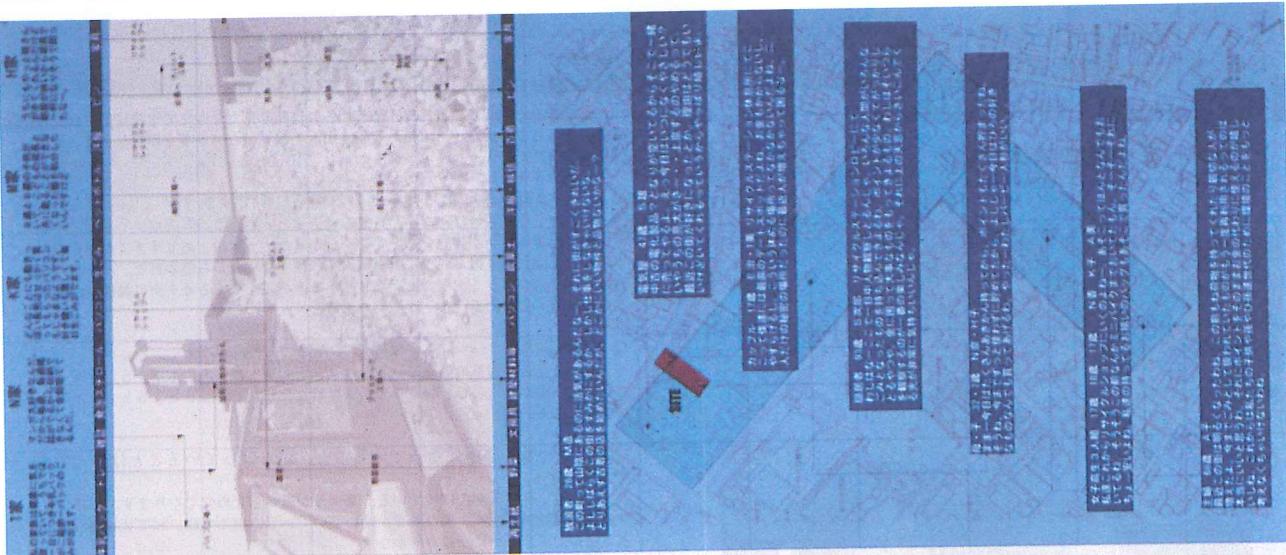


Figure 1-79

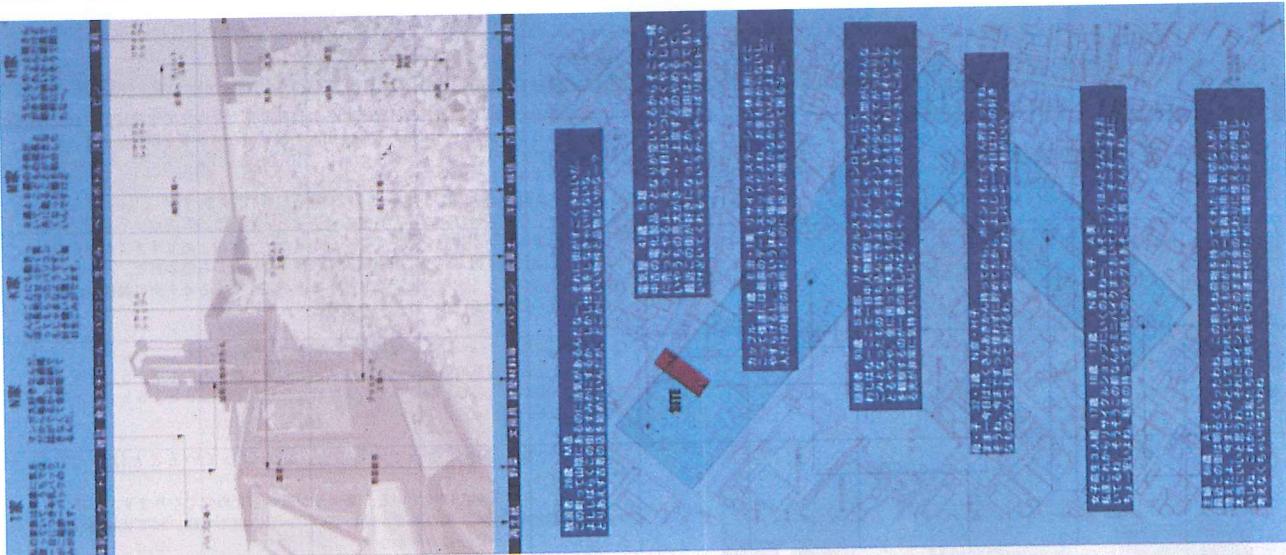


Figure 1-80

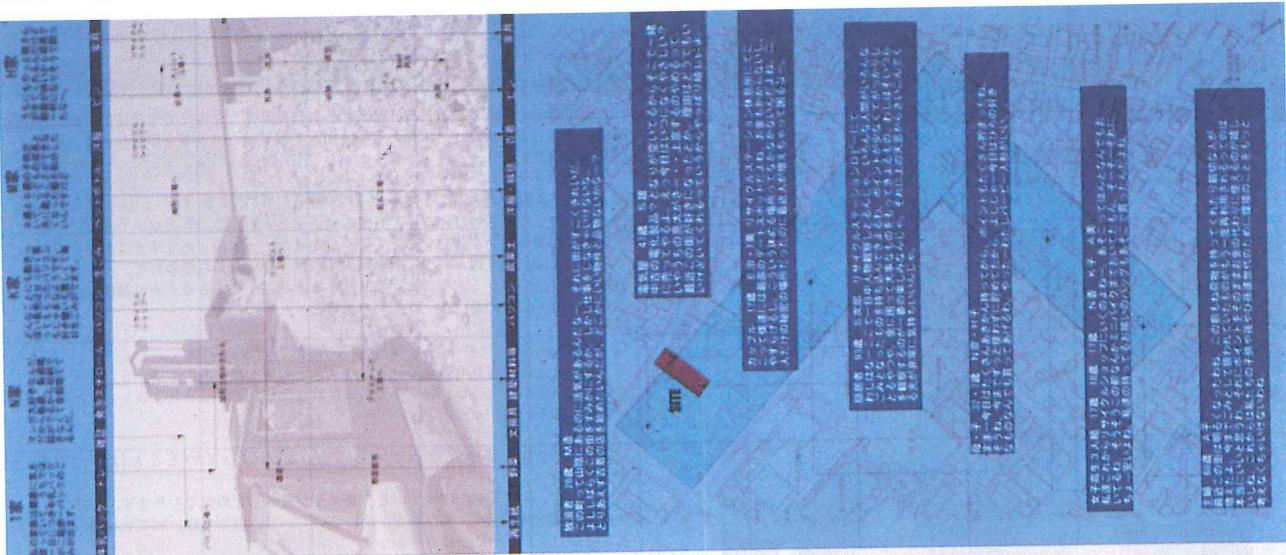


Figure 1-81

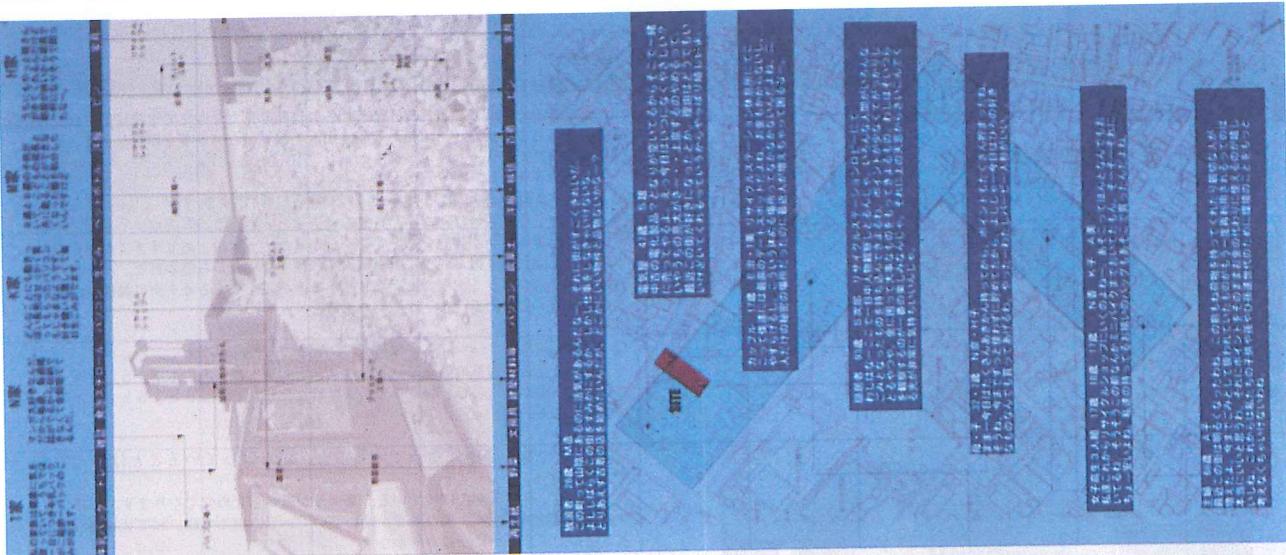


Figure 1-82

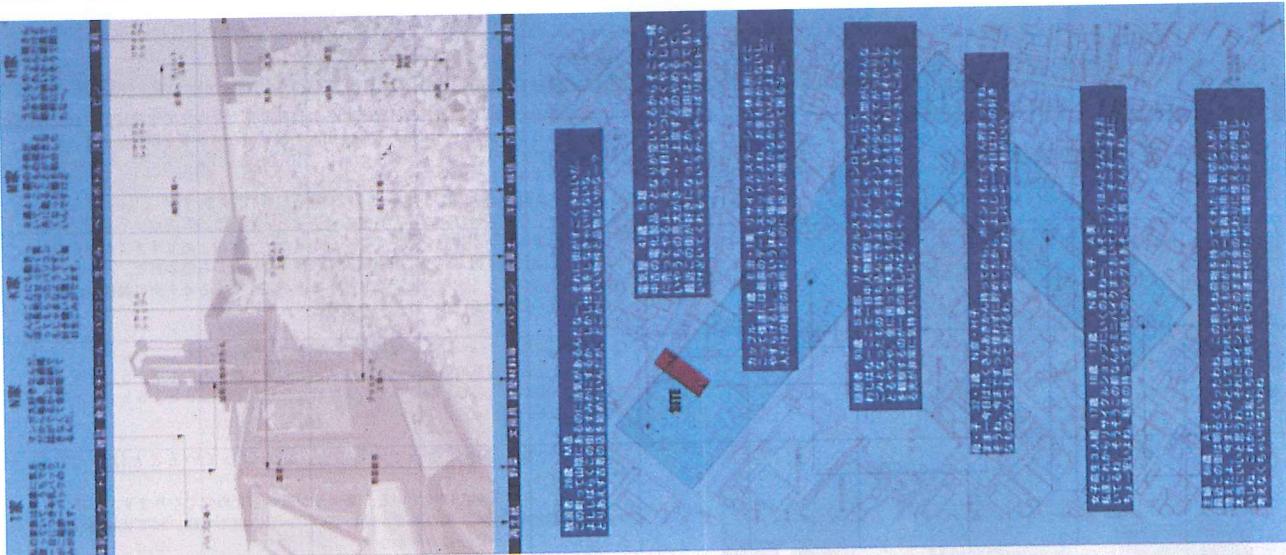


Figure 1-83

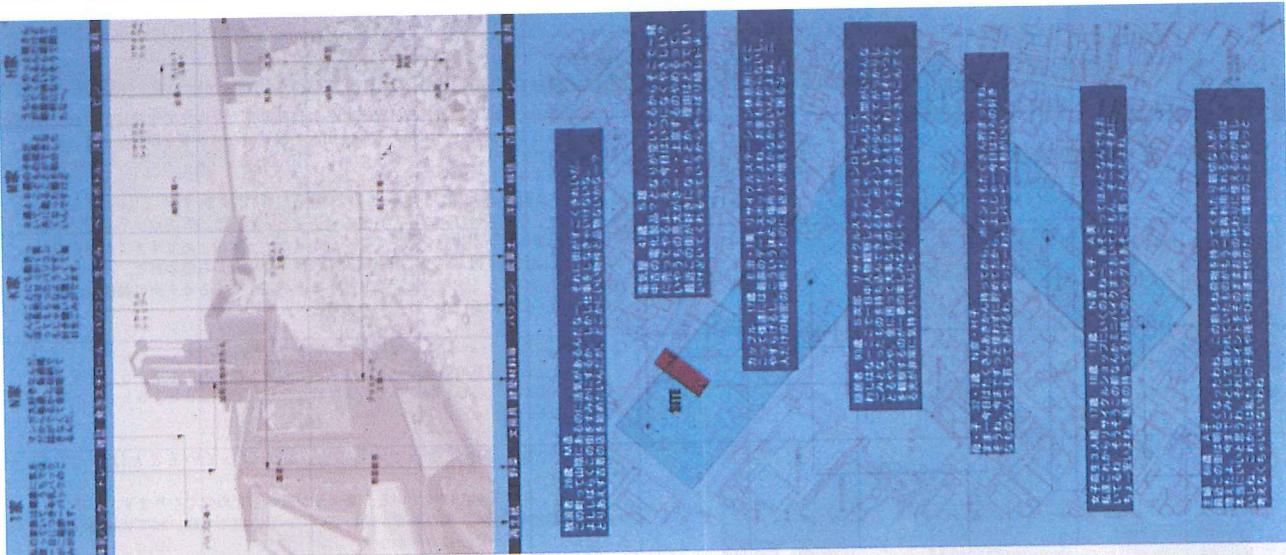


Figure 1-84

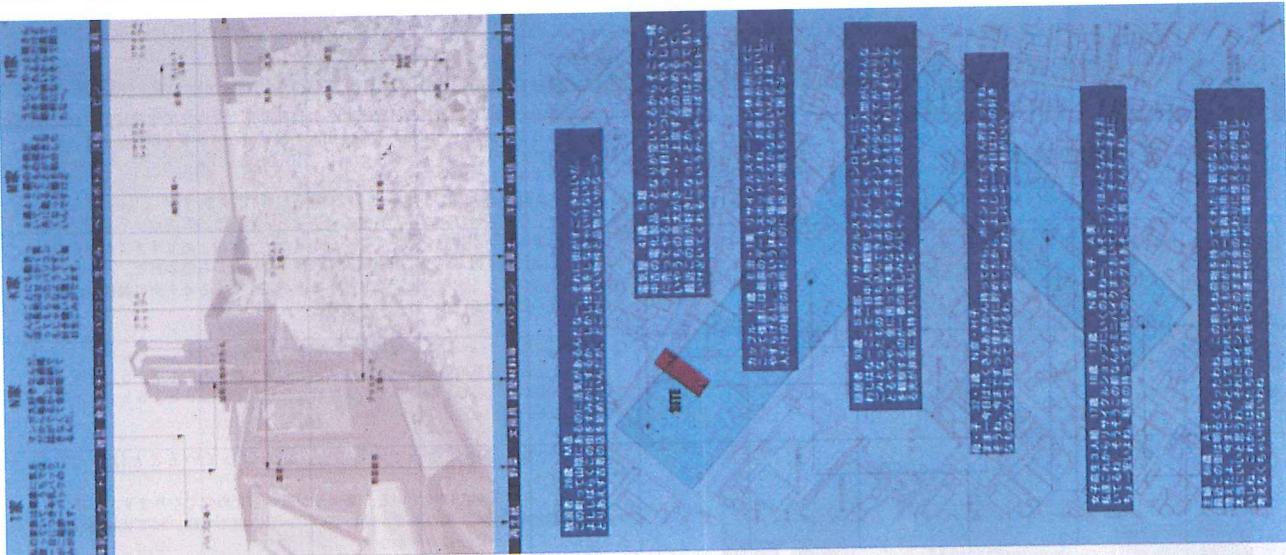


Figure 1-85

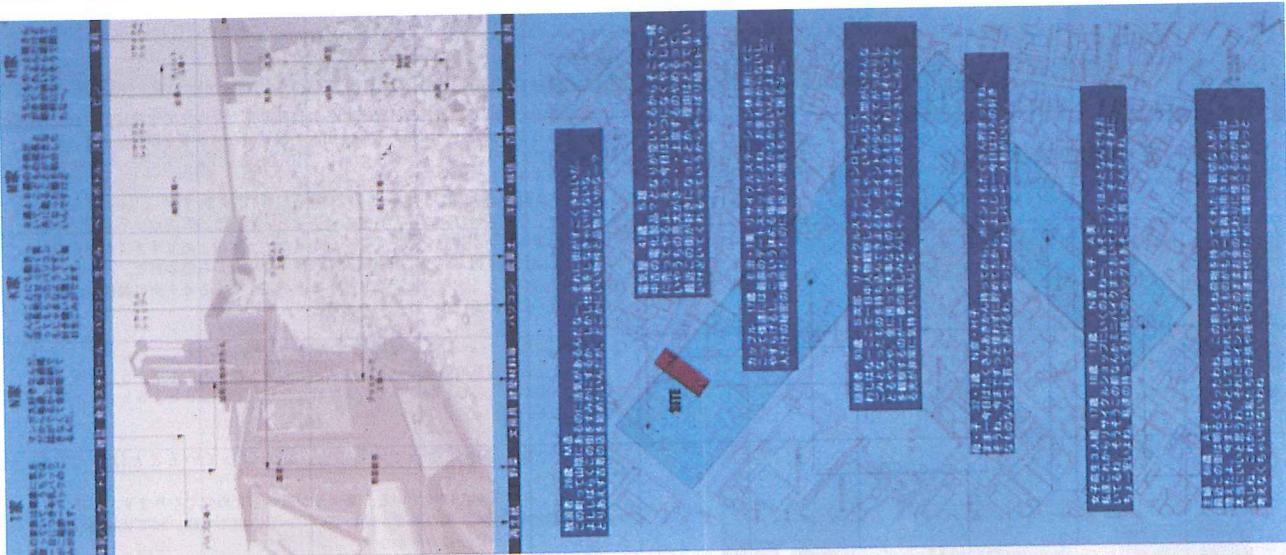


Figure 1-86

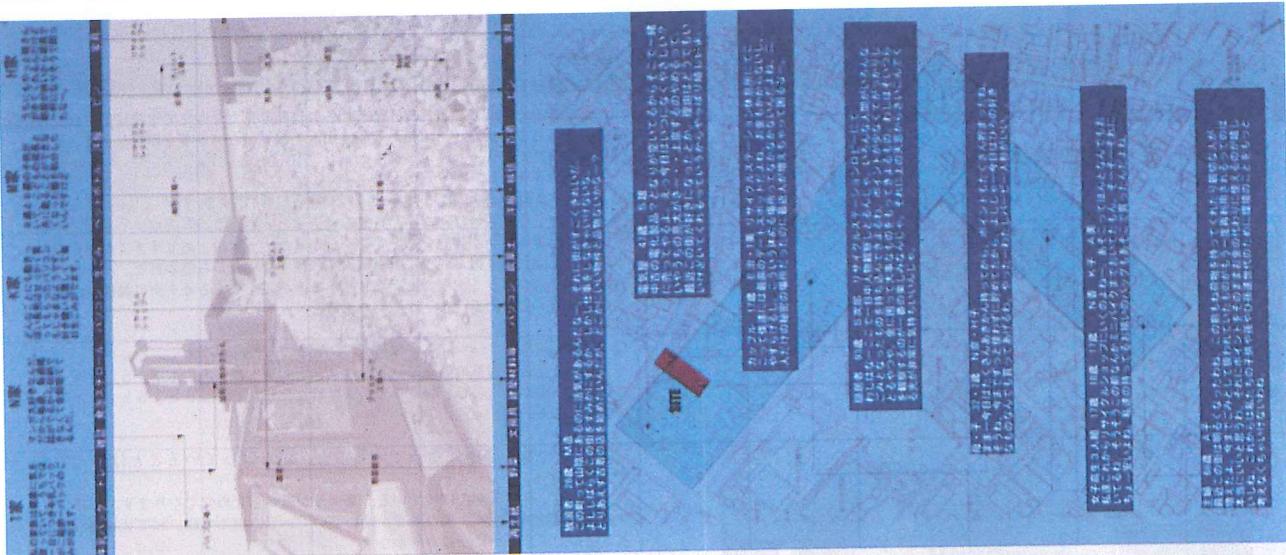


Figure 1-87

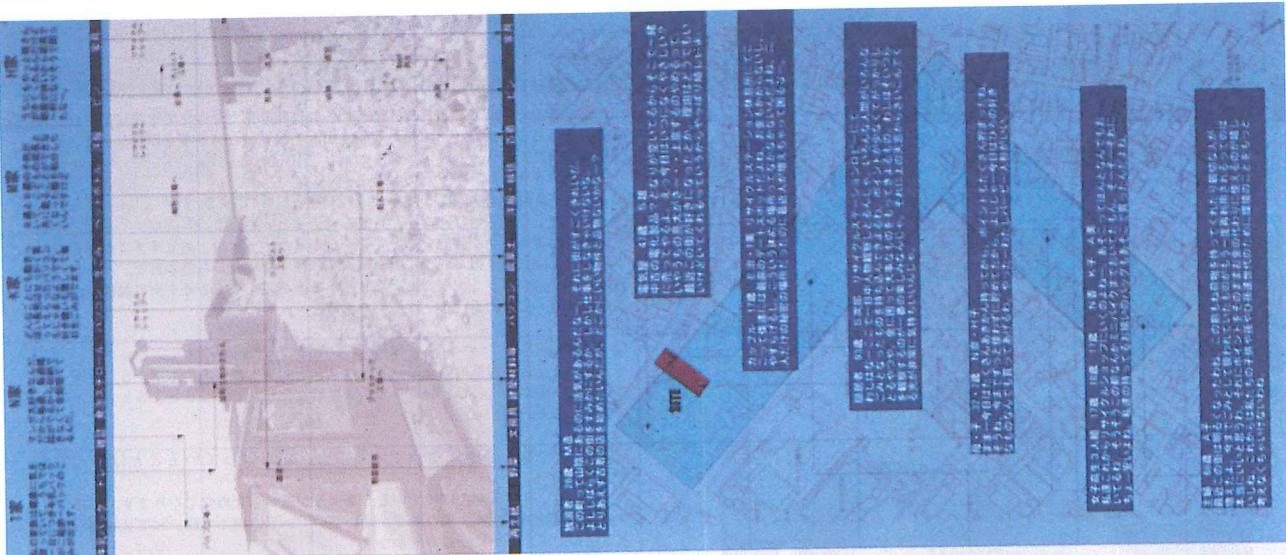


Figure 1-88

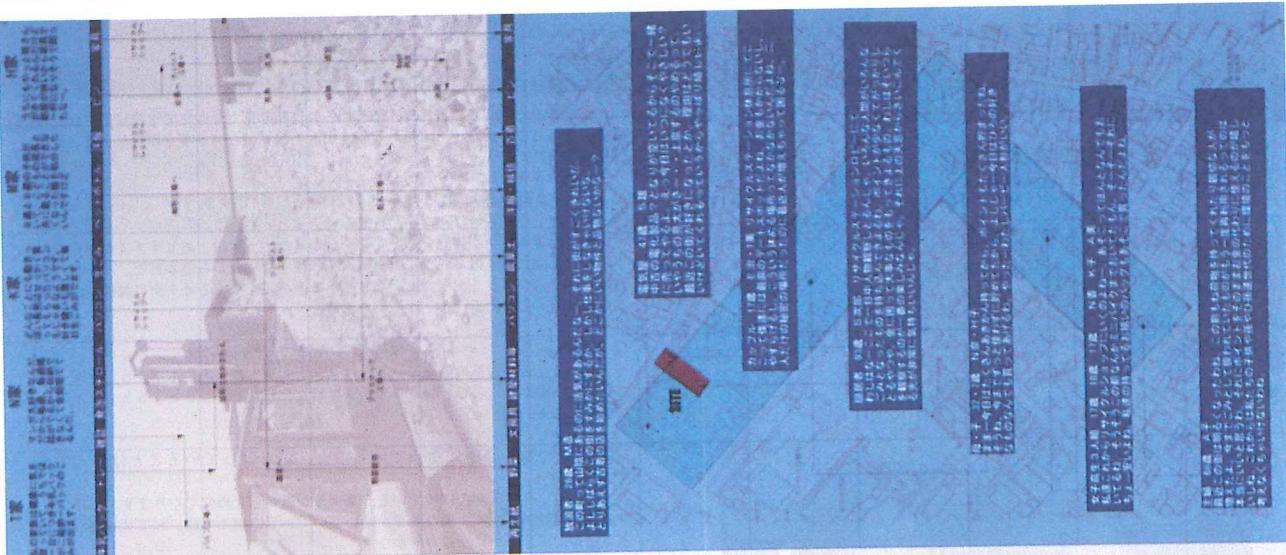


Figure 1-89

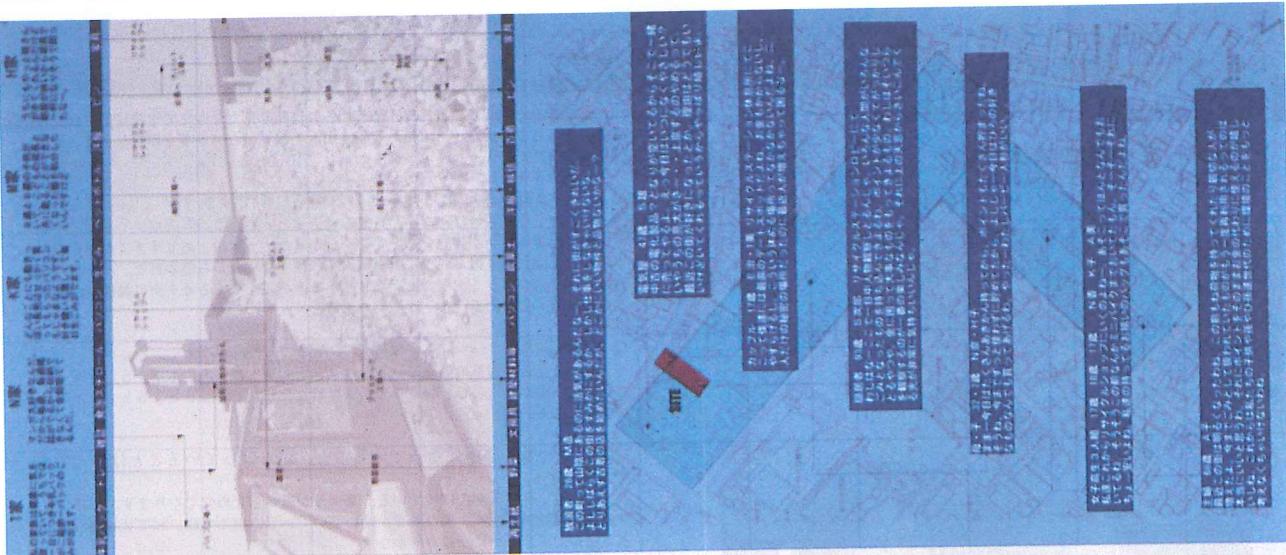


Figure 1-90

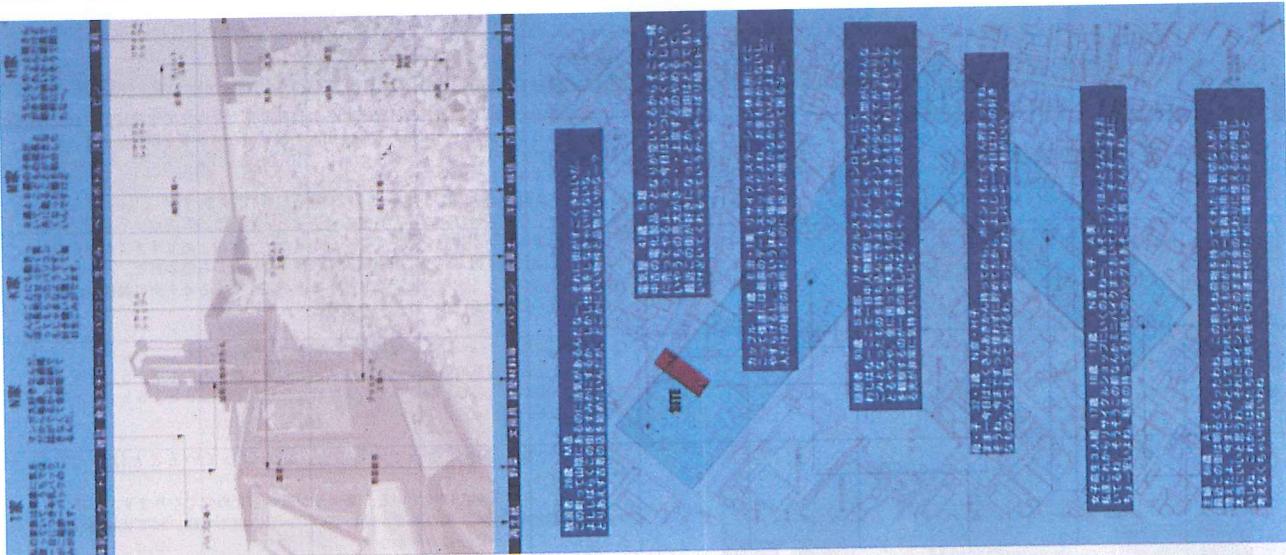


Figure 1-91

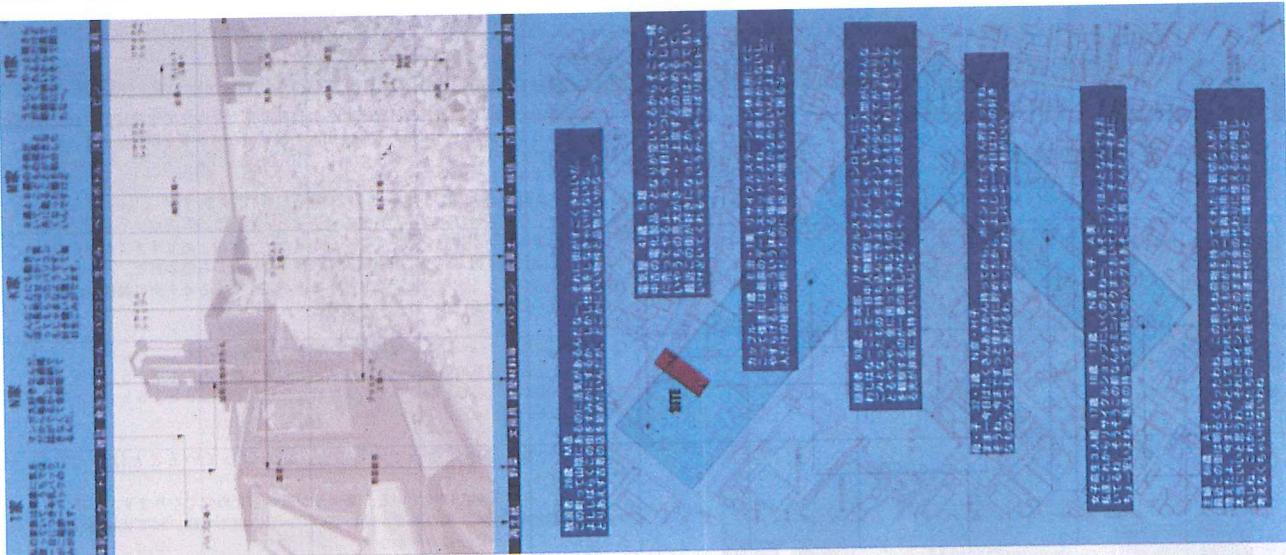


Figure 1-92

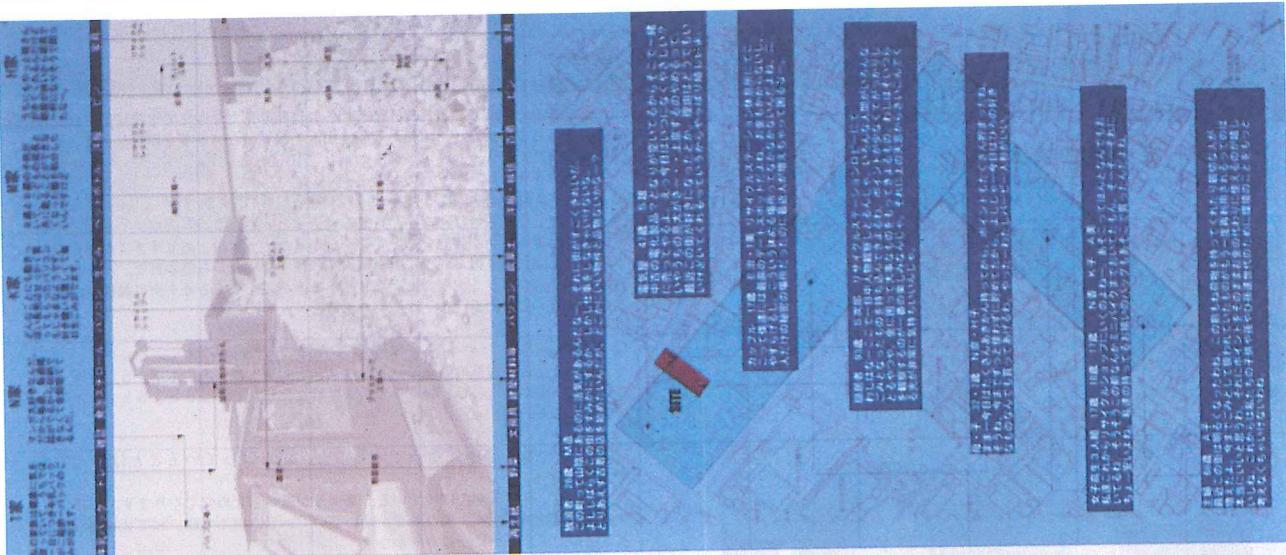


Figure 1-93

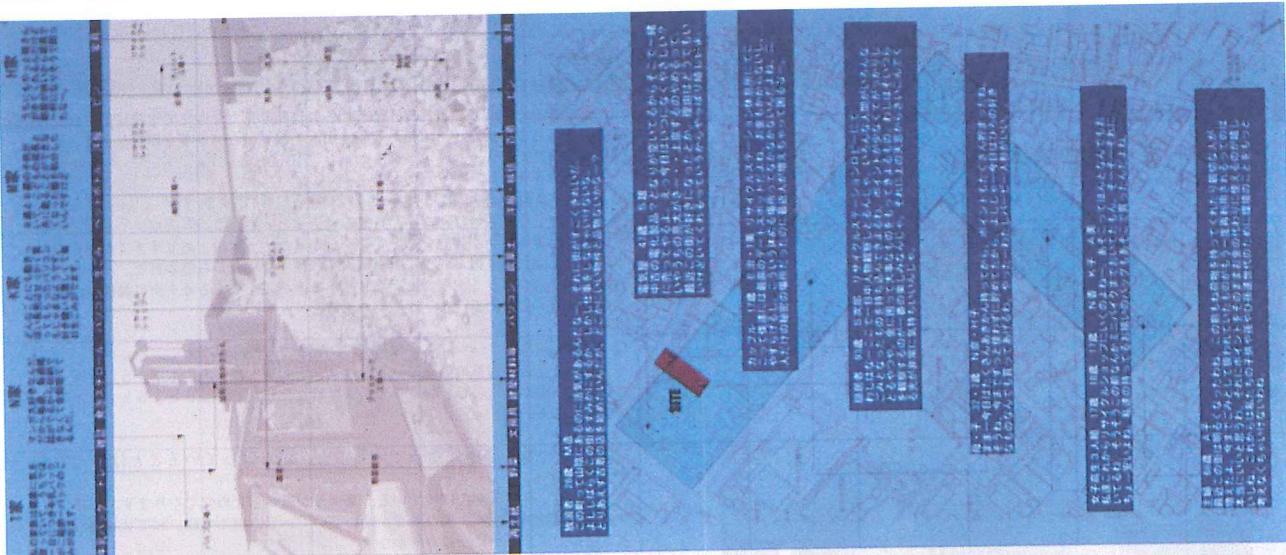


Figure 1-94

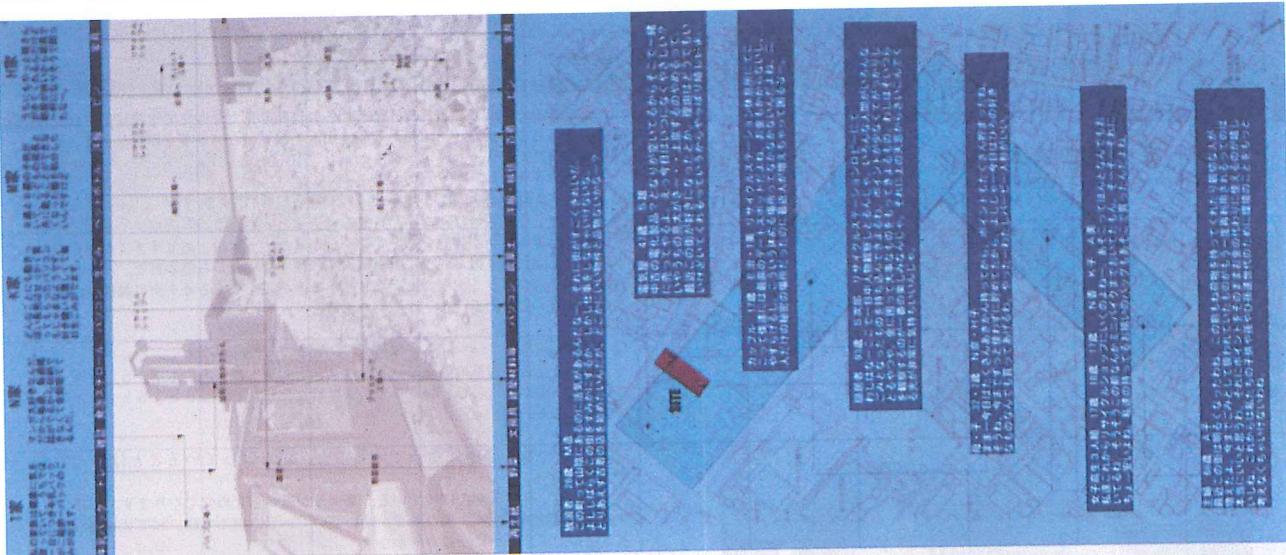


Figure 1-95

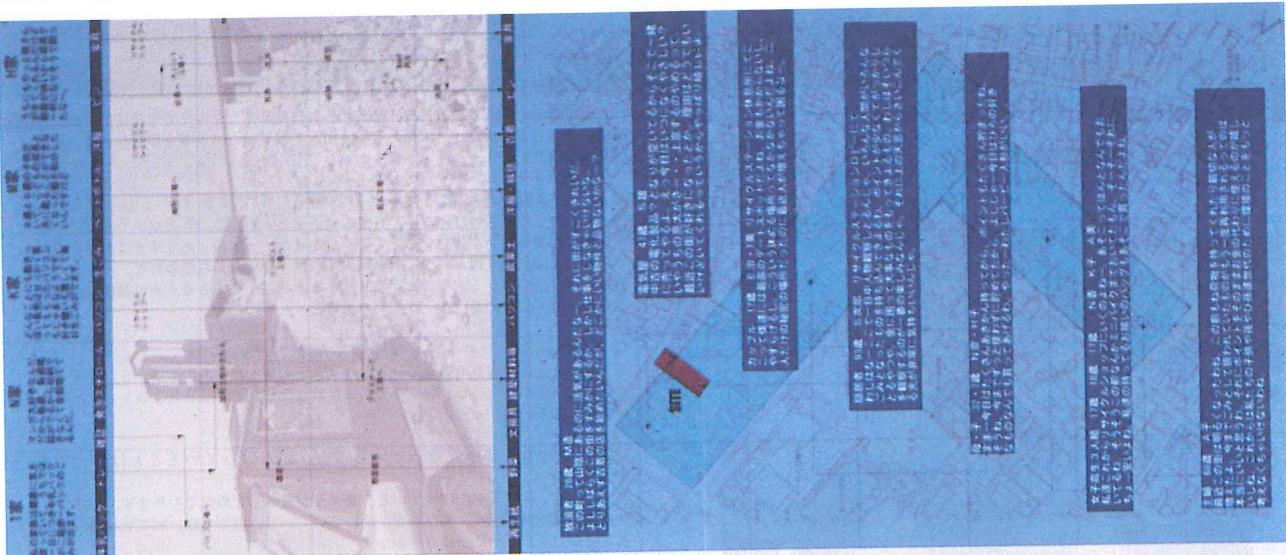


Figure 1-96

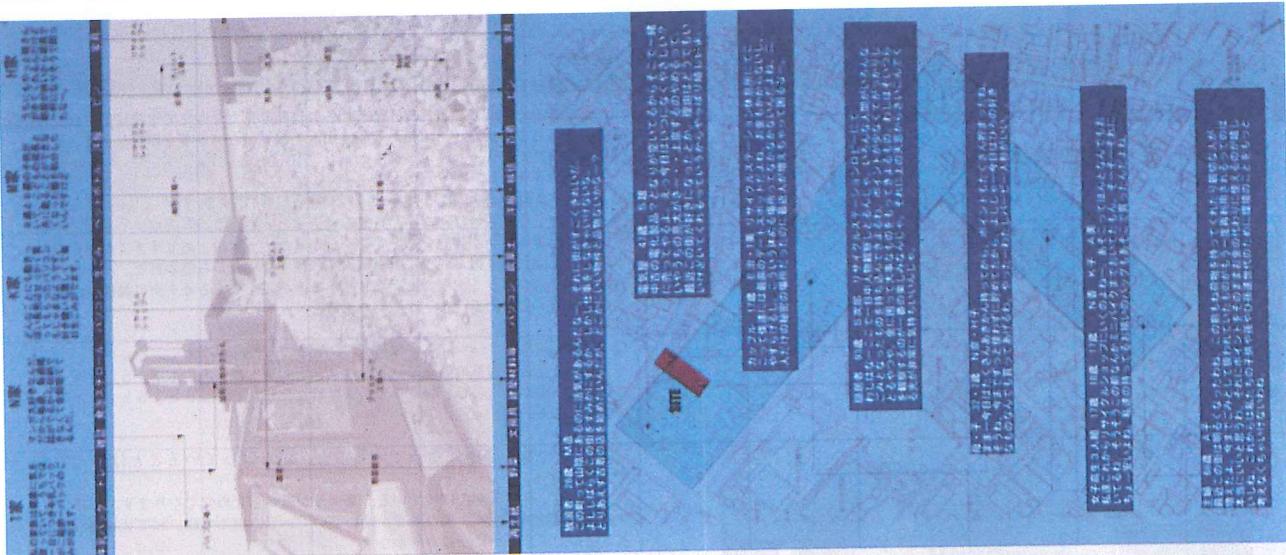


Figure 1-97

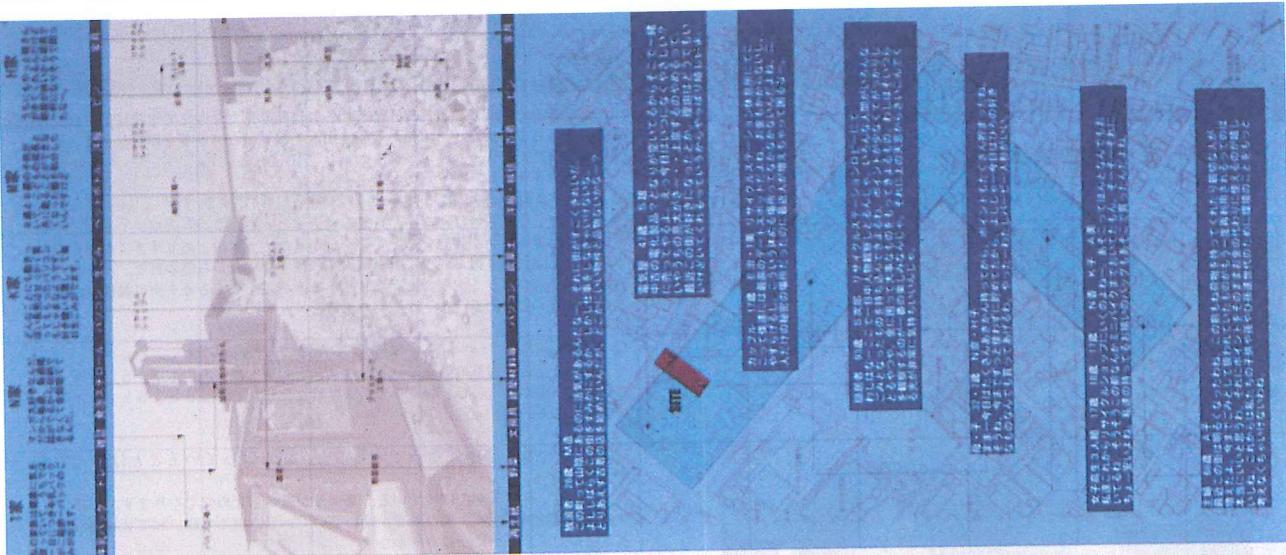


Figure 1-98

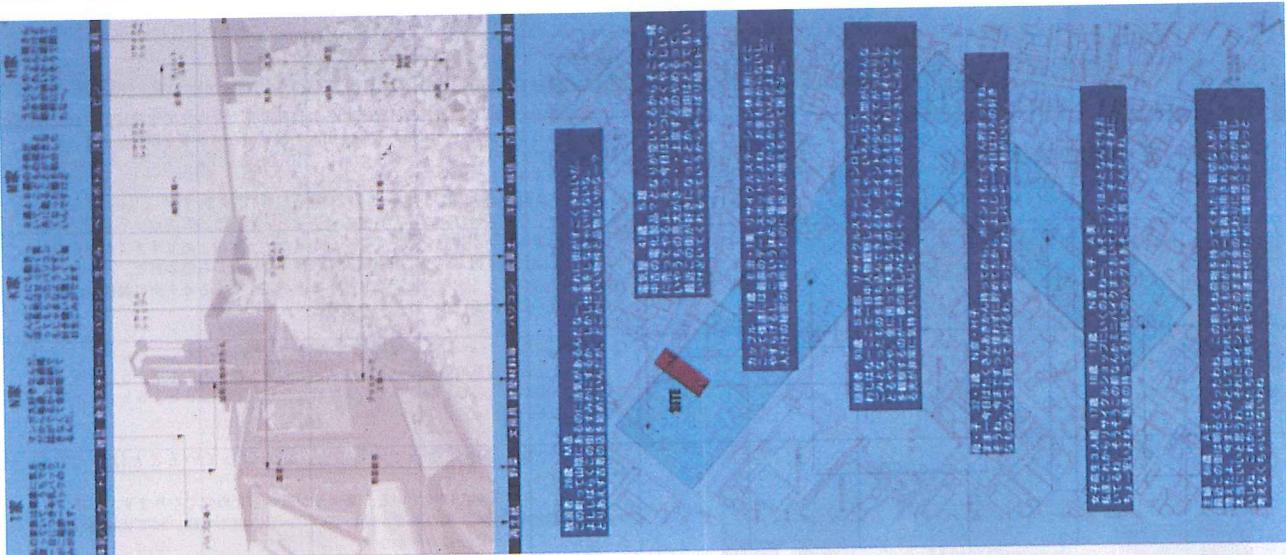


Figure 1-99

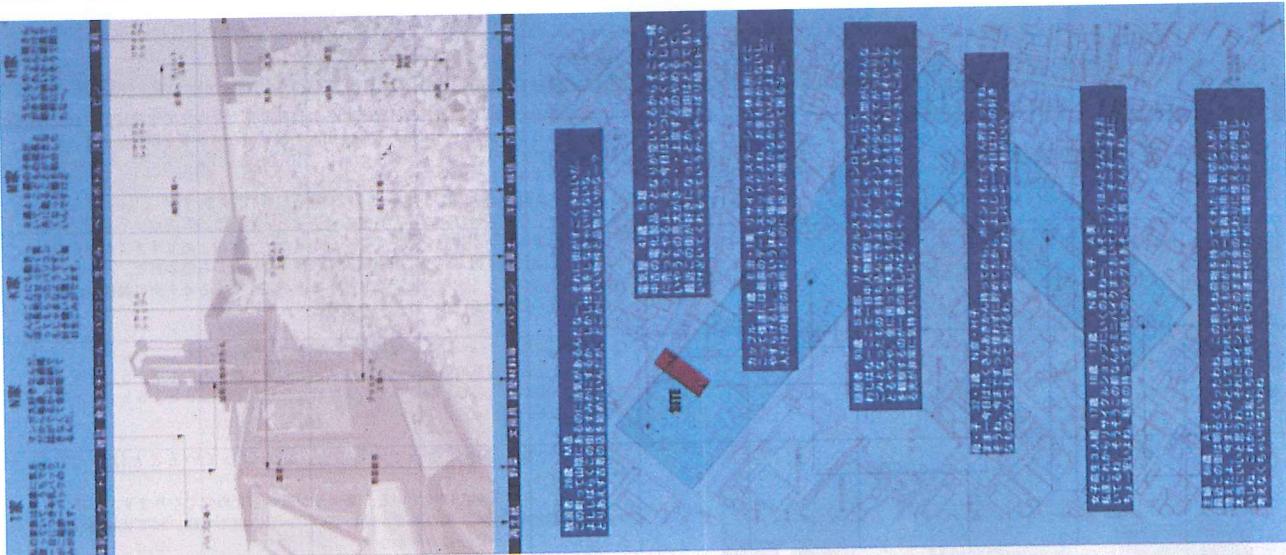


Figure 1-100

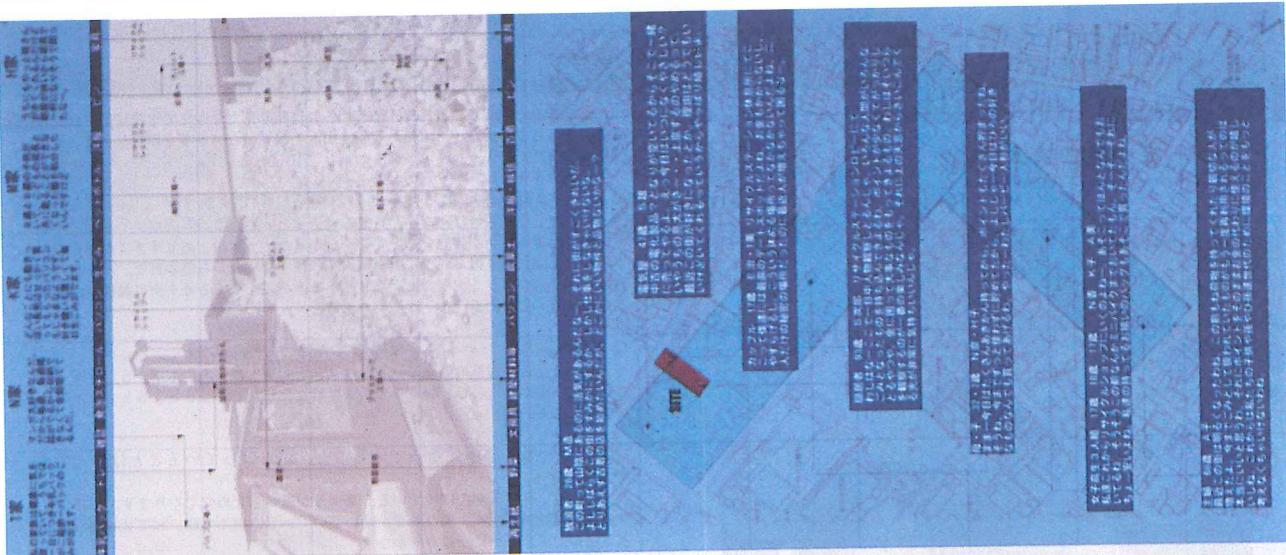


Figure 1-101

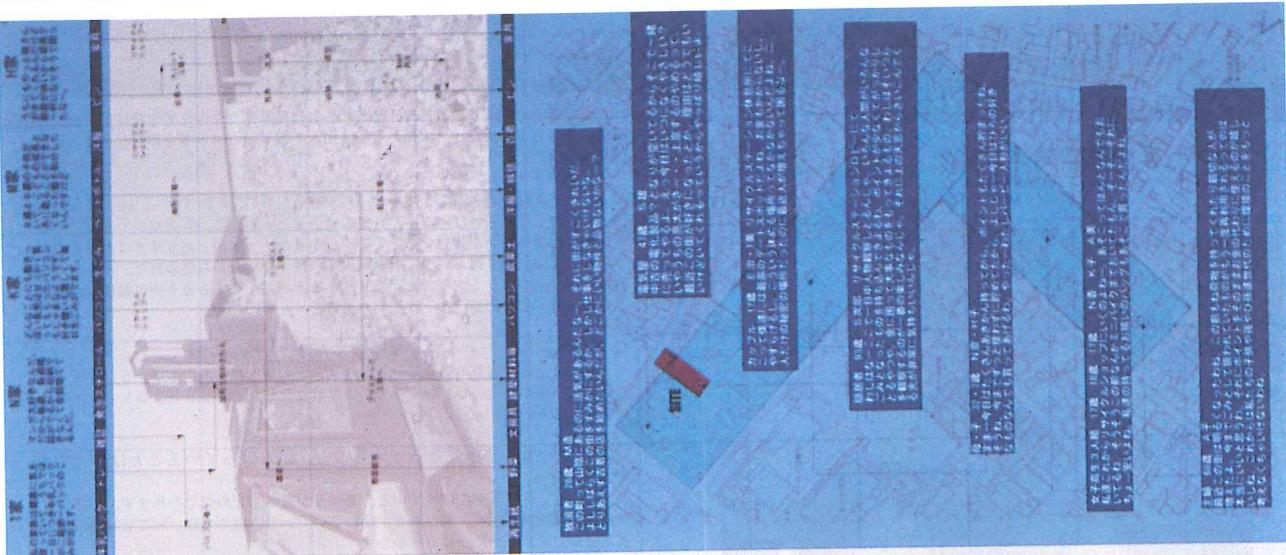


Figure 1-102

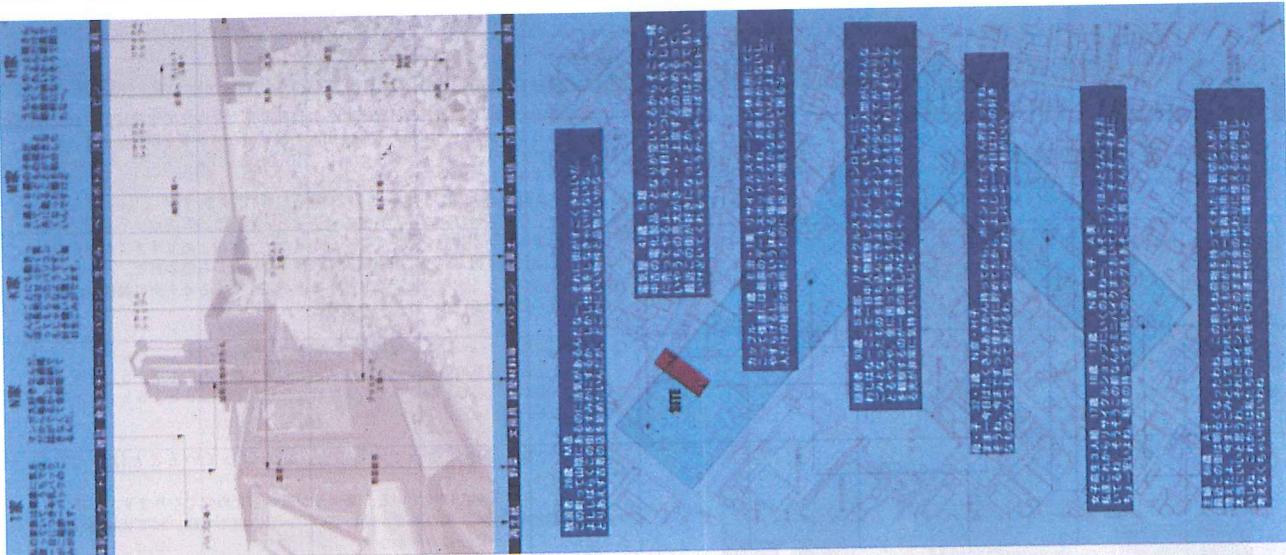
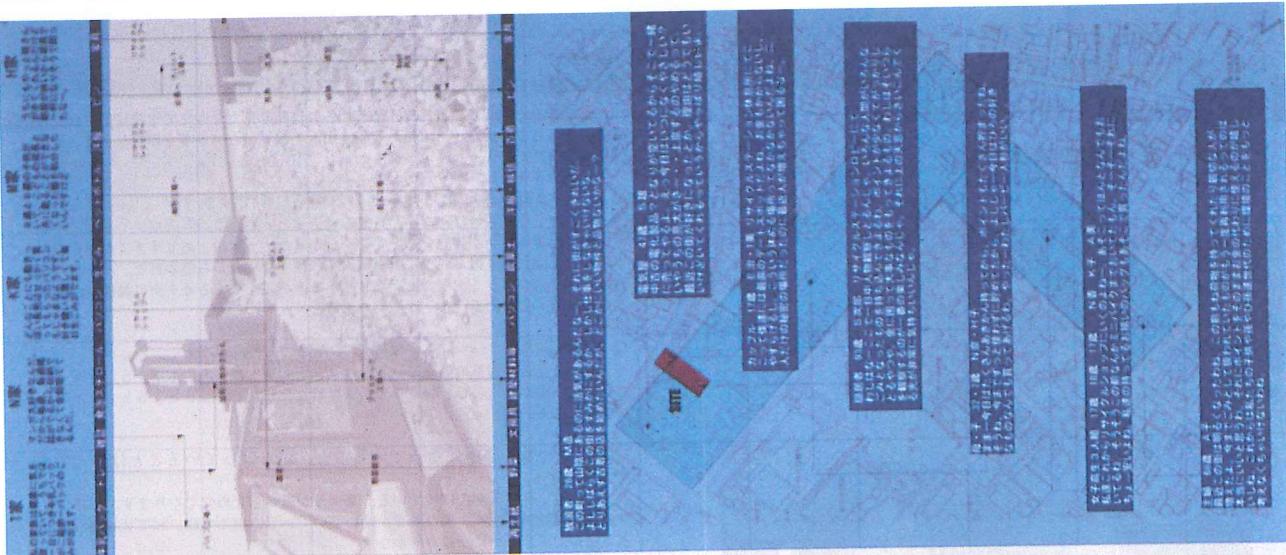


Figure 1-103



064

RECYCLE OR DIE

▼明石工業高等専門学校 5年

▲北野 雅士



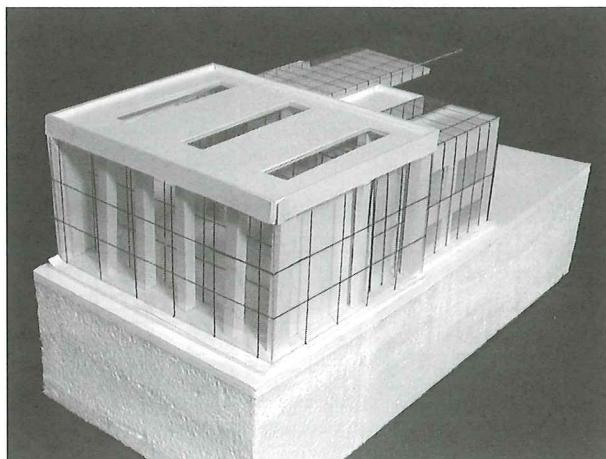
□□設計主旨□□

米子の商店街を歩いてみると、空き店舗が多く通行人も店に入らず、素通りしてただの通路となっている。また近年ごみ埋立地、焼却炉の慢性的な飽和状態やダイオキシンの発生など今まで放置ごみの処理方法が問題となっている。本案では商店街にREUSE、RECYCLEのステーションを設け、その空間が街の中心となり、また集められたリサイクル資源が商店街で新たな市場を形成する地域に根差した商店街の活性化を試みる提案である。

日本は他の先進国に比べ、格段に環境意識が低い。行政は経済活動を常に優先させるが私達はそれを特に問題に思うことすらない。そこで4つのREの意識を持つてもらう必要があると考えた。ここではReuse・Recycleの意識を市民にもたらし、時間の経過と共にそれがReject・Reduceに発展していくことをもう一つの目的とする。一人一人の環境意識を高めて人と人のつながりを強め、活力のある街を創り、それが周りにも波及し、やがて国家の制度を変えさせるような力になりうることを期待する。

コンセプトを実社会に反映させるため、この商店街に新しい制度を導入する。一つ私たちが要らなくなった服、家具、電化製品そして普段価格がないと思われている 生ごみ、カン、ビン、雑誌類などをリサイクルステーションにもっていくとその価格や量に応じてカードにポイントが貯まる。集まったポイントで商店街の商品を買うことができる。

リサイクルステーションに集められた資源のうち生ごみやびん・かん・プラスチックは一旦、他の場所へ運ばれ加工されてびん・かん・雑誌・ダンボール・古紙・繊維製品・腐葉土等に姿を変え、再び商店街に戻ってきて店に並ぶ。服、電化製品、家具などは選別され、商店街の空き店舗で売られる。商店街はポイントと交換でリサイクルステーションから金銭を得る。リサイクルステーションは集めたりサイクル資源を空き店舗で売ったり、業者や農家にリサイクル資源として売るなどで、金銭を得る。



□□Question&Answer□□

Q 1 : 発想の源は何ですか？

ニュース 「早稲田大学の取り組み」

Q 2 : 今まで一番印象に残っている建築は何ですか？

ファンズワース邸

Q 3 : 好きなアーティストは誰ですか？

ミース、ジェームス・タレル（芸術家）、ブルース・ナウマン（芸術家）

Q 4 : 今一番、夢中になっていること、がんばっていることはなんですか？

卒業研究

Q 5 : 将来、どのような建築をつくってみたいですか？

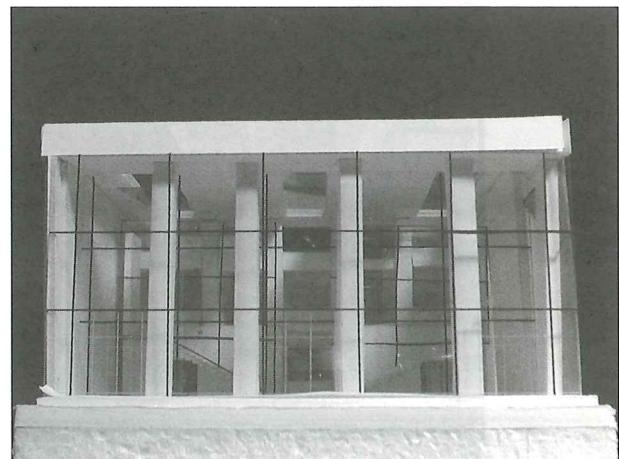
学校

Q 6 : 一番行きたい国（場所）はどこですか？

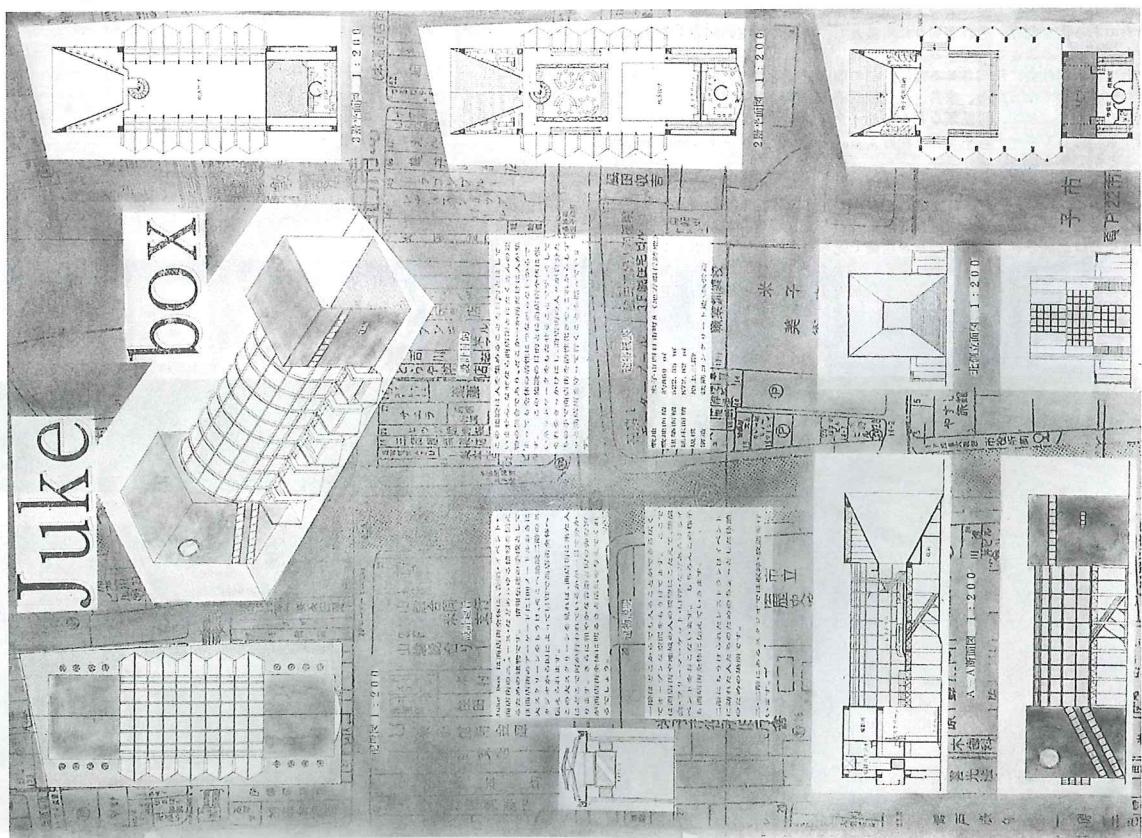
アメリカ 住む

□□設計競技についての感想□□

コンペの当日、会場で米子高専のコンペに対する熱意に驚いた。と同時に自分の不真面目さに罪悪感を覚えた。模型制作があまり好きではない私は模型制作になかなか取り組もうとせず、つくり始めるのが遅く、何度も徹夜して完成させた。当然プレゼンテーションもうまくいかず、すばらしい舞台で醜態をさらす結果となつたのである。しかし得るものは多分にあった。先の間違いも次に生かせるだろうし、商店街の活性化というテーマでどのように活性化させるか、またそのためにどのような用途の建物を計画すればいいかと考えるのは、有意義であった。シンポジウムで公開設計競技が続いているべきではないでしょうか。



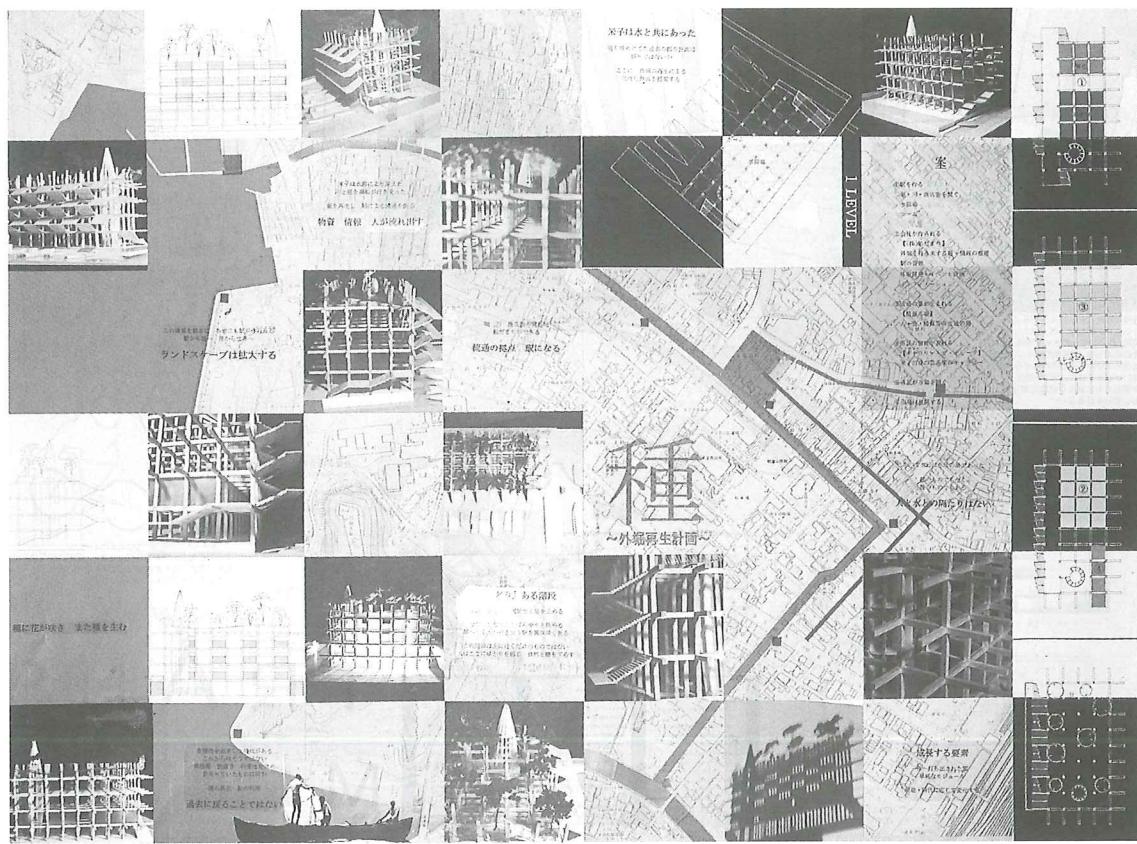
選外佳作



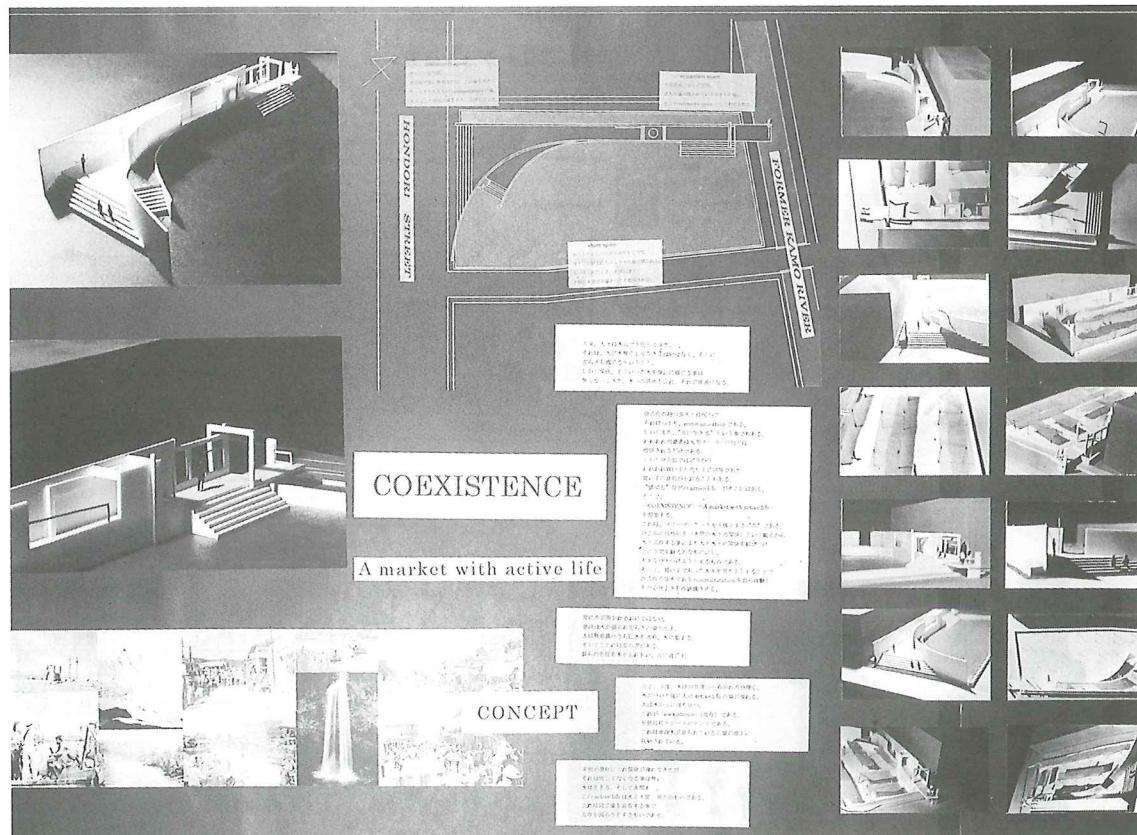
022

高柳 力也・高柳 七子

有明工業高等専門学校5年・1年

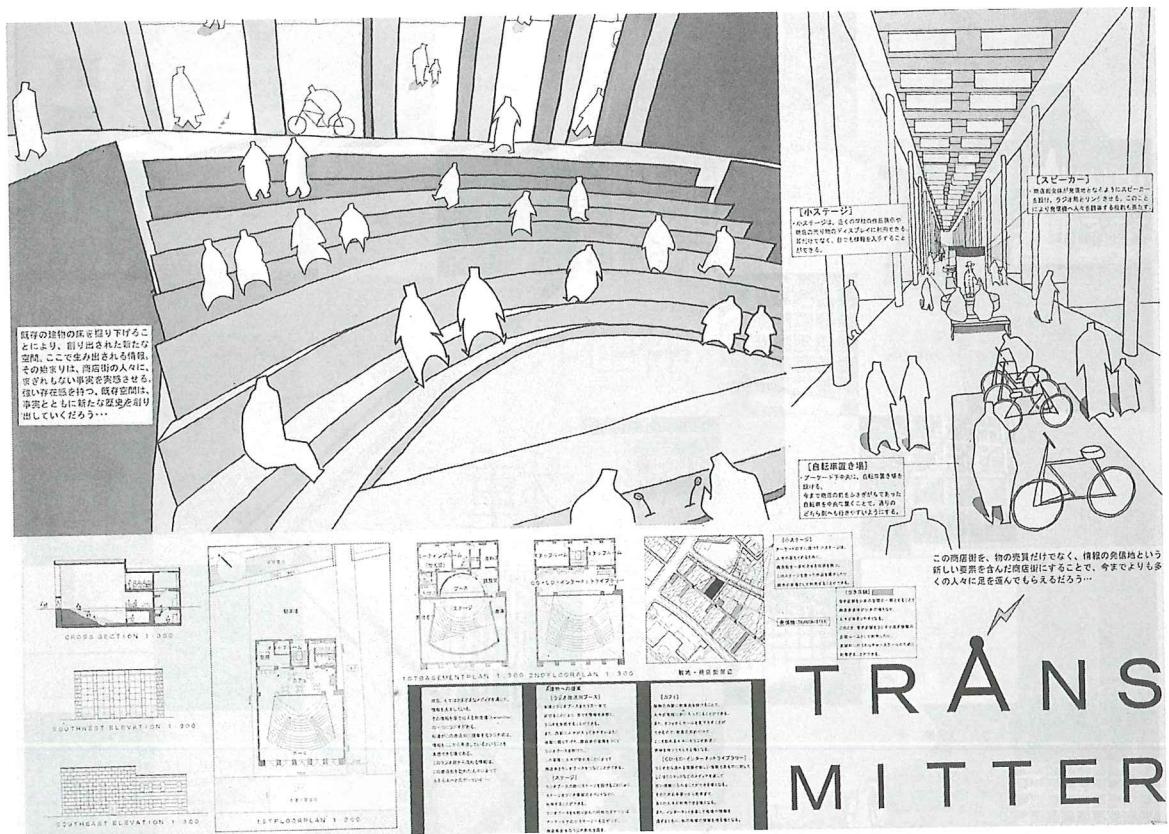


036 森川 真嗣・森地 佑太 明石工業高等専門学校 3年

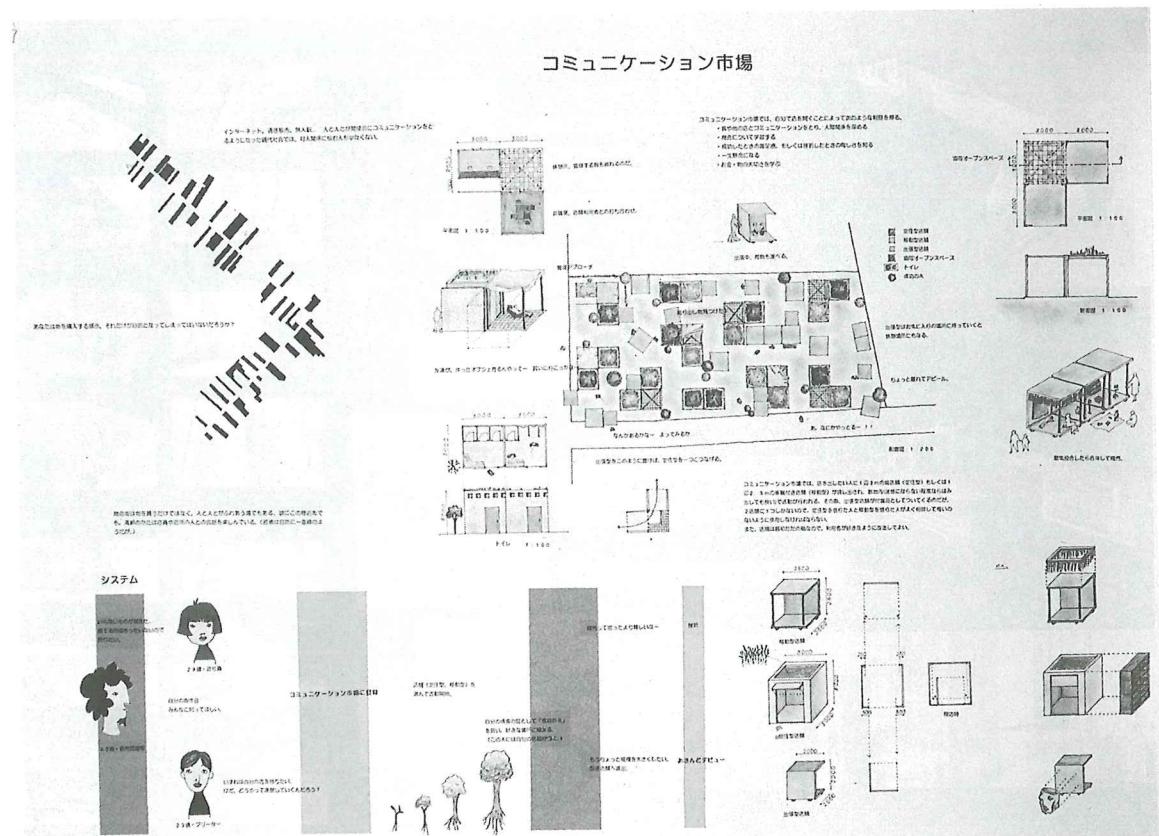


088 福原 進太郎 明石工業高等専門学校 3年

選外佳作



094 庄田 亜希子・杉本 智恵・界 幸成 石川工業高等専門学校3年・3年・



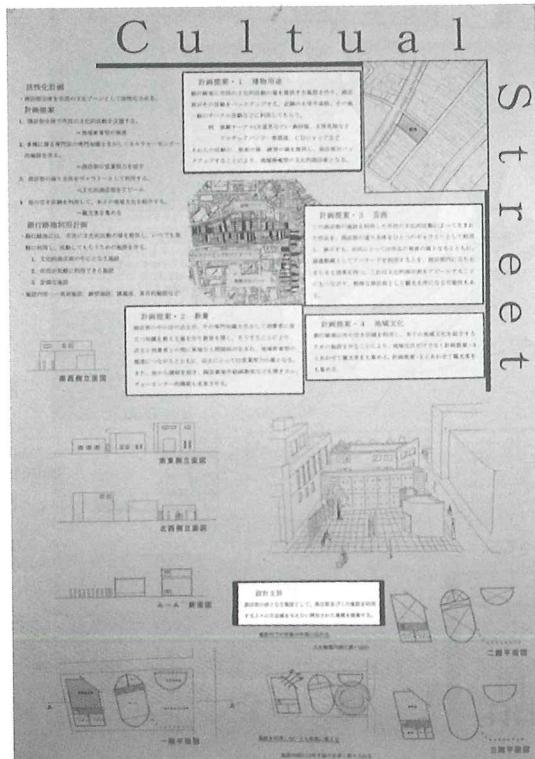
105

森田 紗子 明石工業高等専門学校5年

應募作品

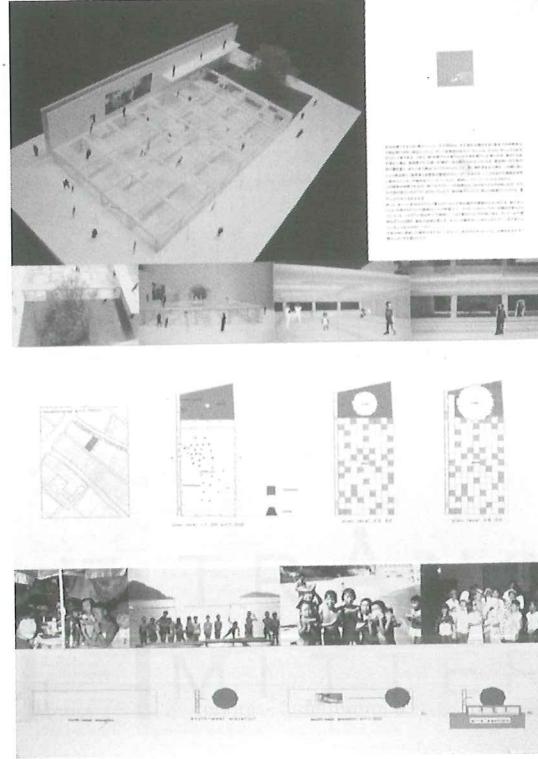
應募作品

応募作品



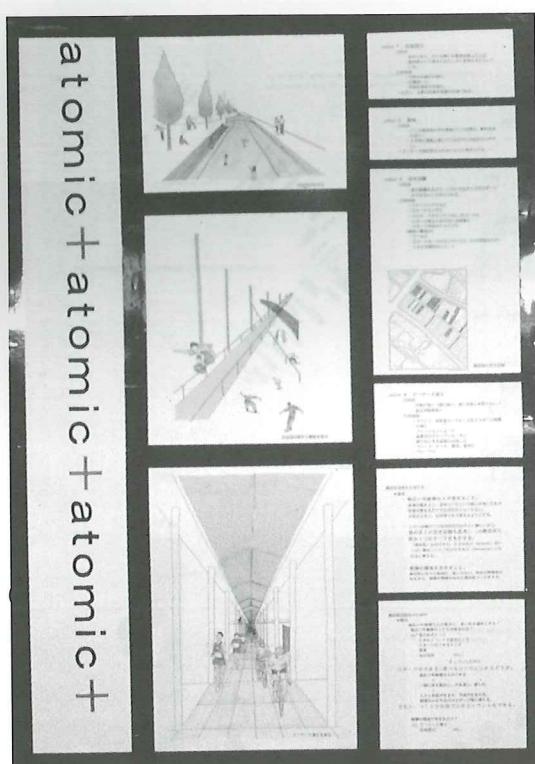
001

大田 浩司
石川工業高等専門学校4年



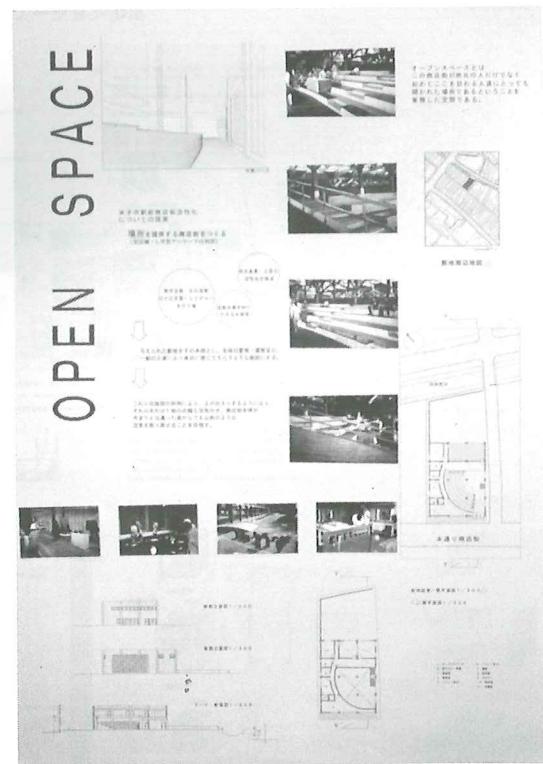
002

佐村 奈都子
呉工業高等専門学校5年



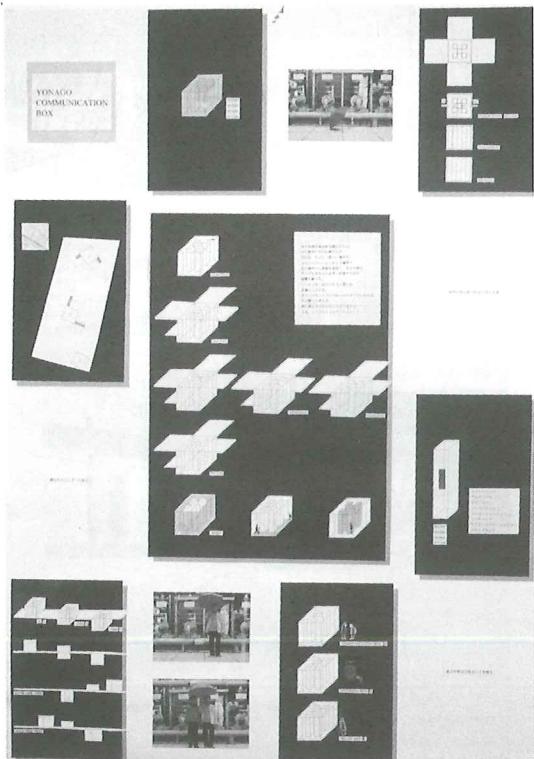
003

沙 恵
石川工業高等専門学校4年



004

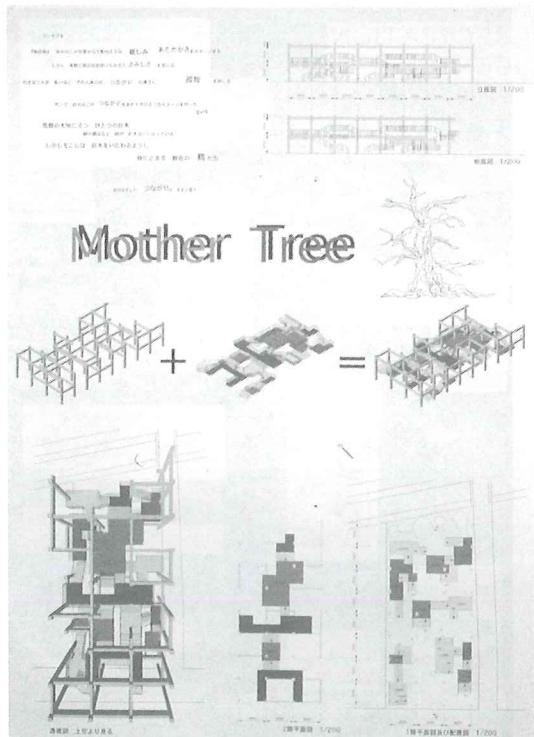
中澤 潤
石川工業高等専門学校4年



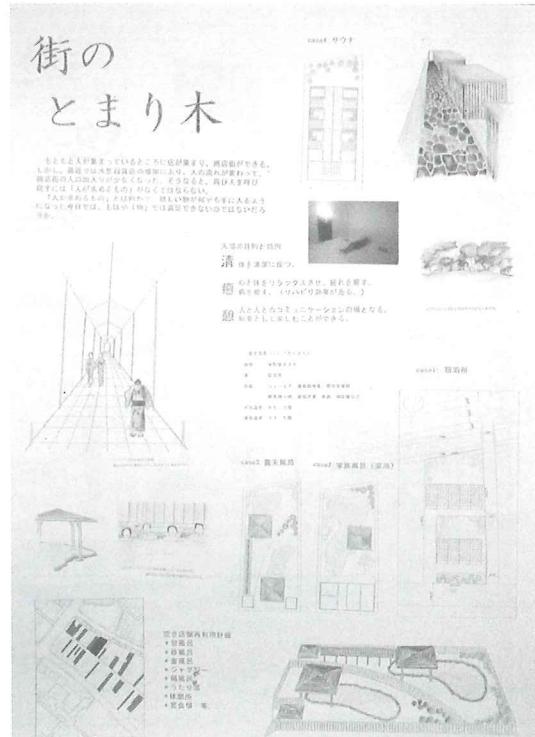
005 土肥 靖子
呉工業高等専門学校5年



006 上原 弘嗣
明石工業高等専門学校4年

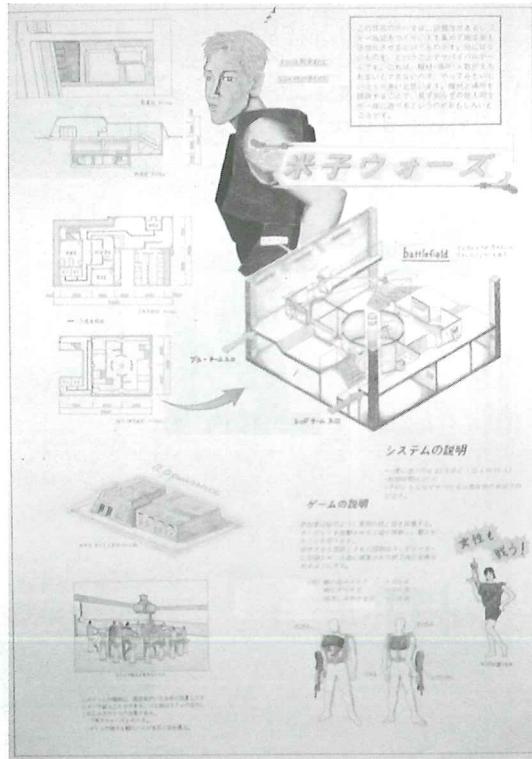


007 秋末 義人
米子工業高等専門学校4年



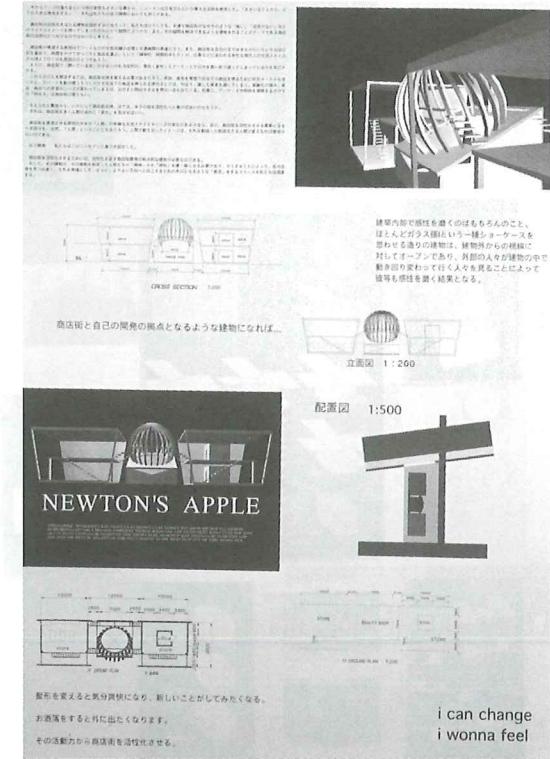
009 馬場 寛・米井 美由起
石川工業高等専門学校4年

応募作品



010

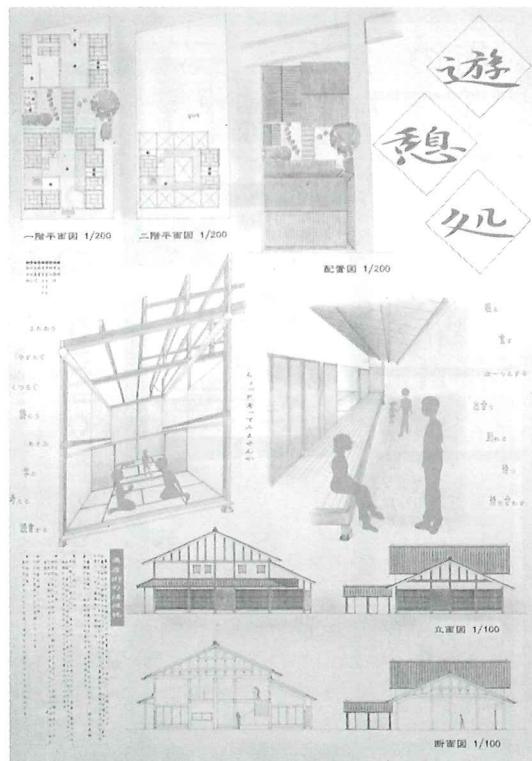
寺井 孝佑
明石工業高等専門学校4年



配置図 1:500

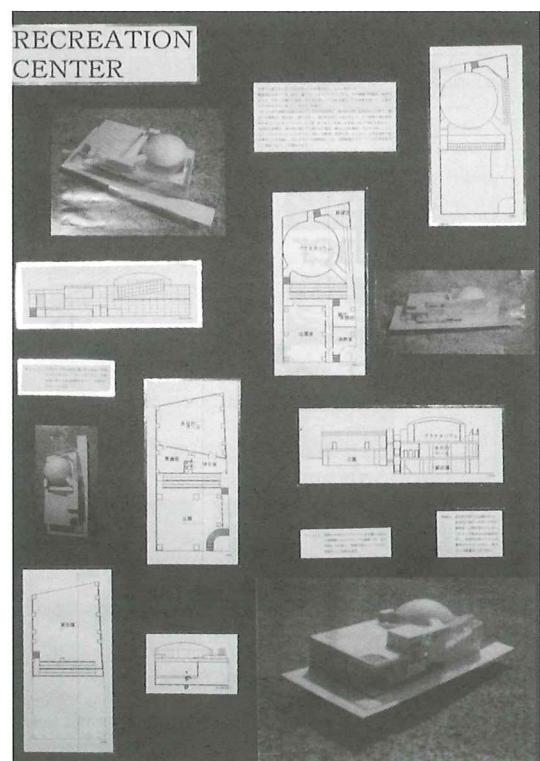
i can change
i wanna feel

011 遠藤真哉・前藤拓朗・江原誠・芦谷裕子
山口博之 米子工業高等専門学校3年



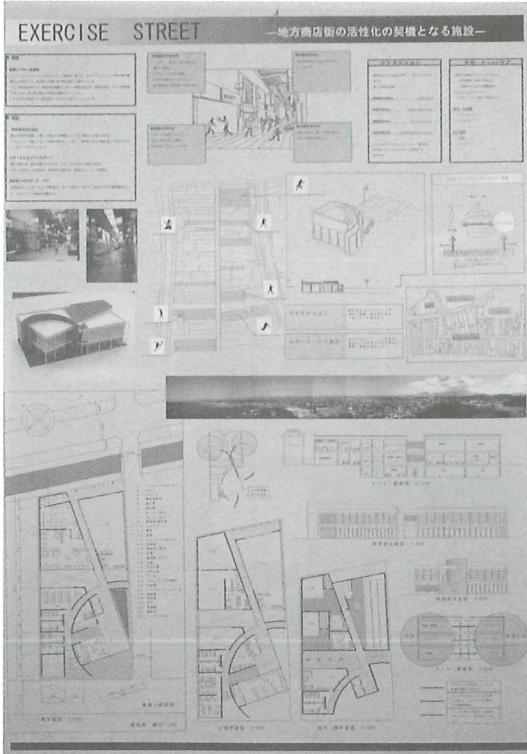
013

川崎 真理子
明石工業高等専門学校3年



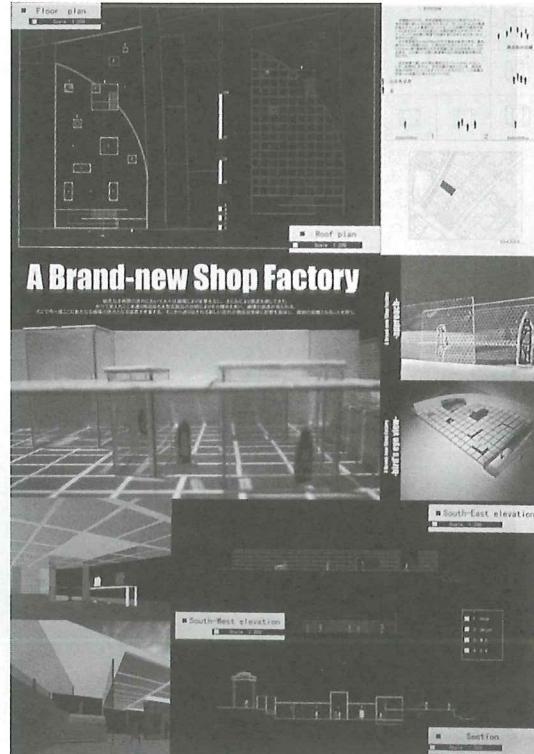
014

石川 普次・穂垣 友康・細川 昌紀
呉工業高等専門学校4年

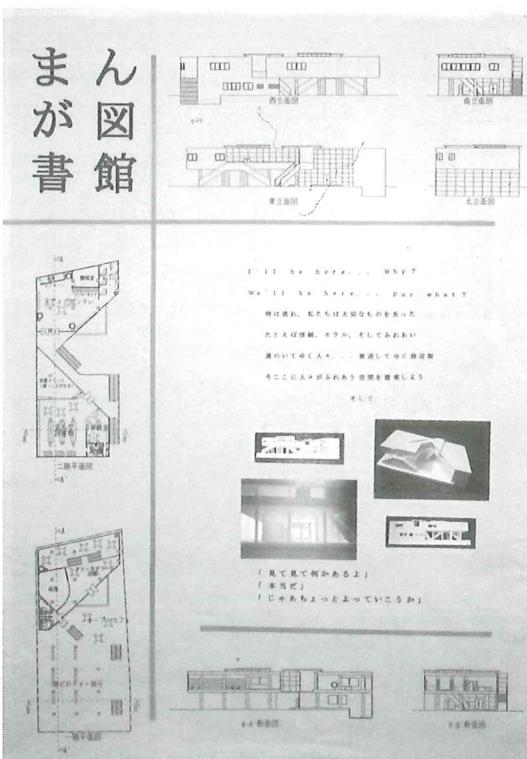


015

深田 正浩・坂本 瑞穂
石川工業高等専門学校4年



017 村田 龍雲・金谷 亮輔・熊尾 隆文
呉工業高等専門学校5年



019

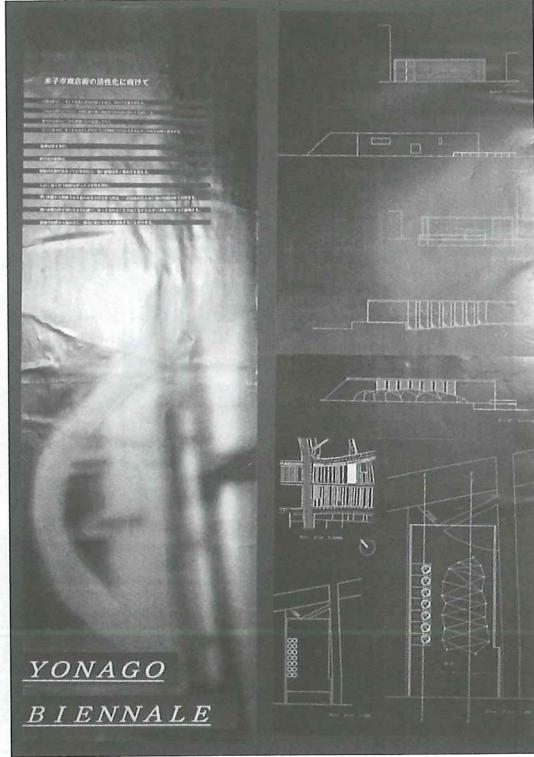
栗原 篤史・三浦 隆志
呉工業高等専門学校4年



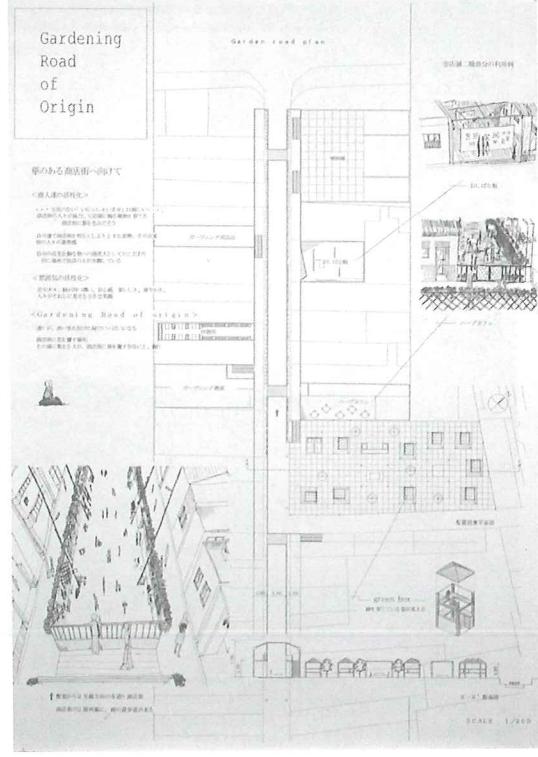
020

羽芝 奈津美
石川工業高等専門学校4年

応募作品



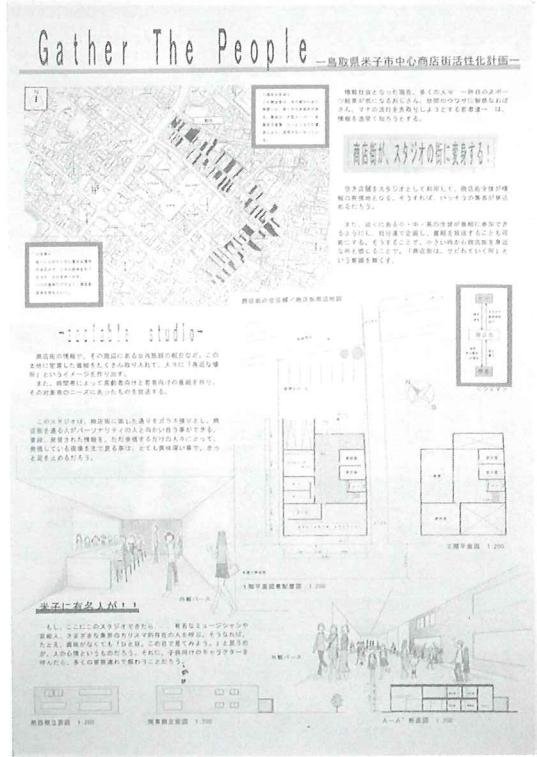
021 山本 仁美・佐々木 貴子
呉工業高等専門学校4年



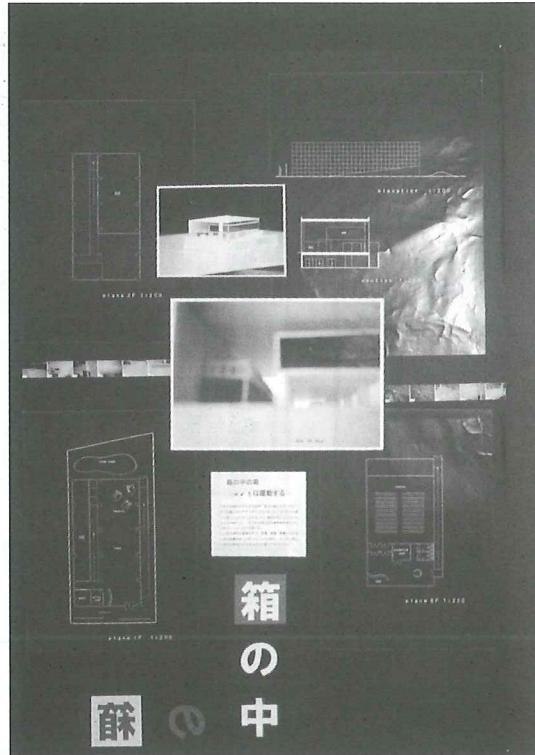
023 宮本 文子
石川工業高等専門学校4年



024 木村 恒子
明石工業高等専門学校4年

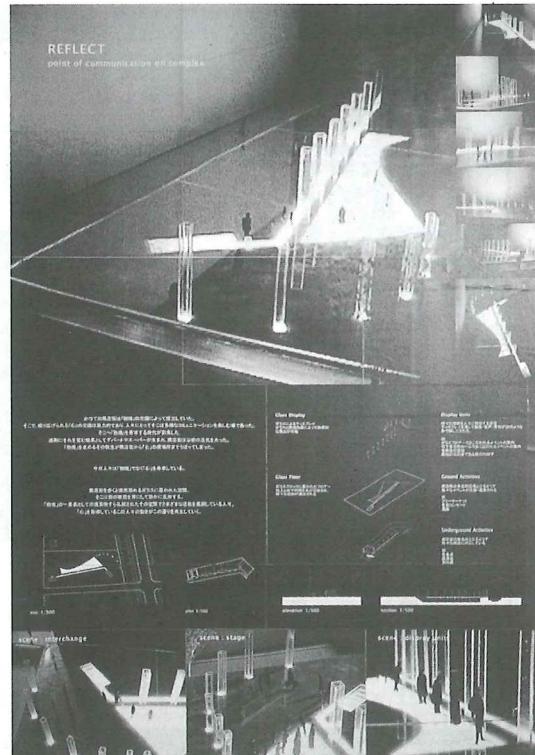


025 田中 梨沙
石川工業高等専門学校4年



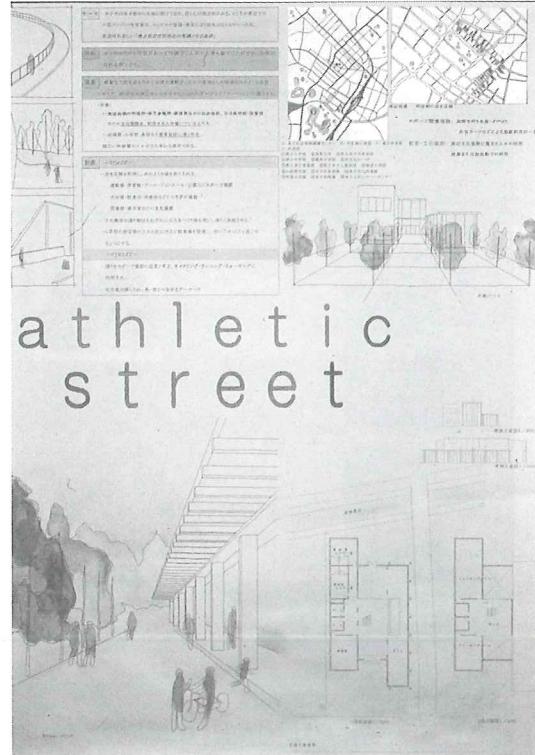
026

甲斐 江梨子・松尾 涼香
呉工業高等専門学校4年



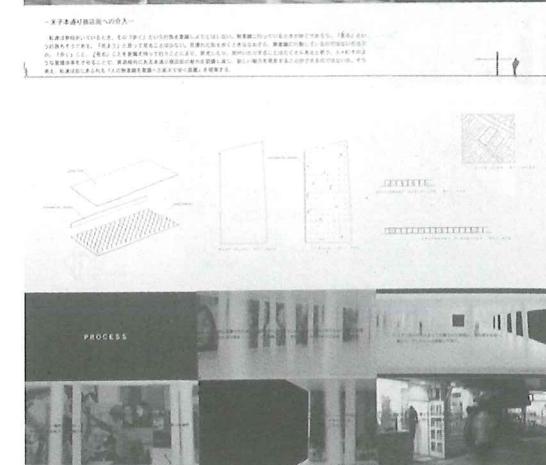
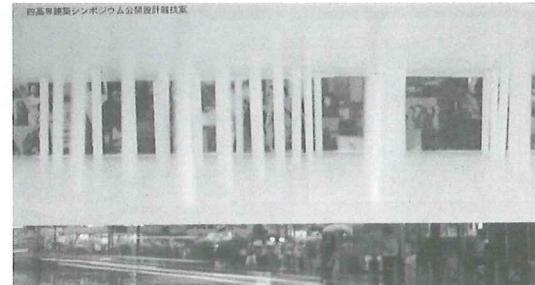
028

花里 真道・針谷 英延・小口 隆行
小山工業高等専門学校5年



027

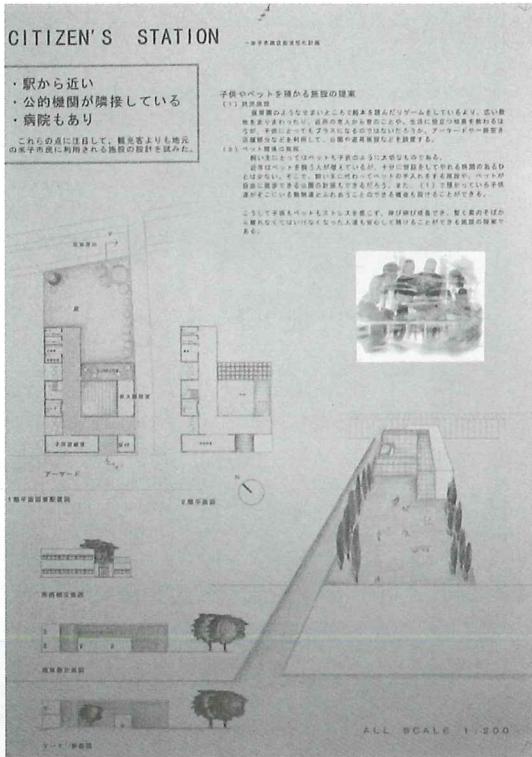
中田 垣紀
石川工業高等専門学校4年



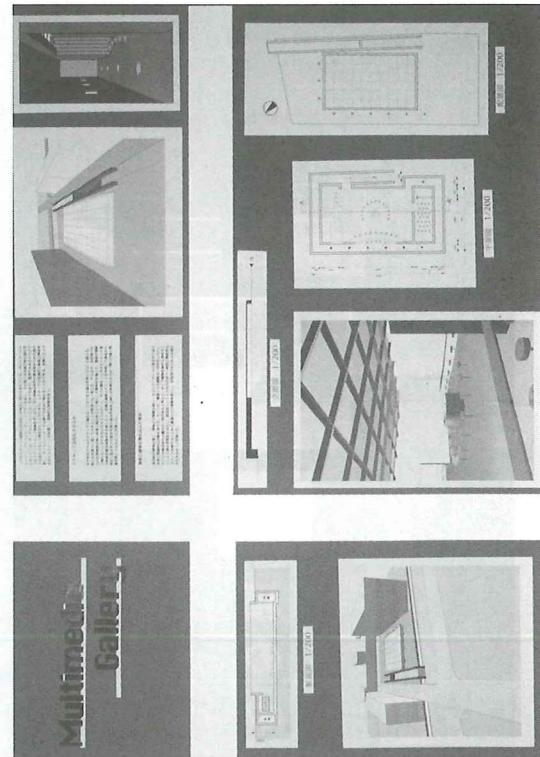
030

山本 剛史・岡 ゆり子
呉工業高等専門学校5年

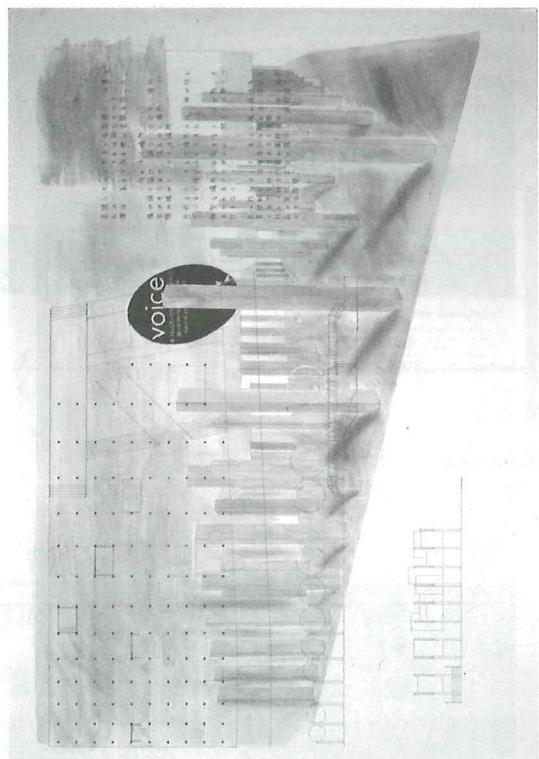
應募作品



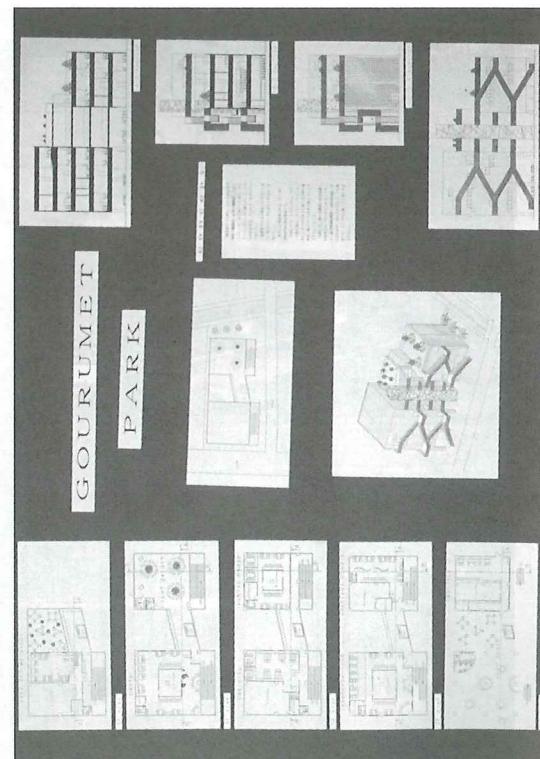
031 前 静香
石川工業高等専門学校4年



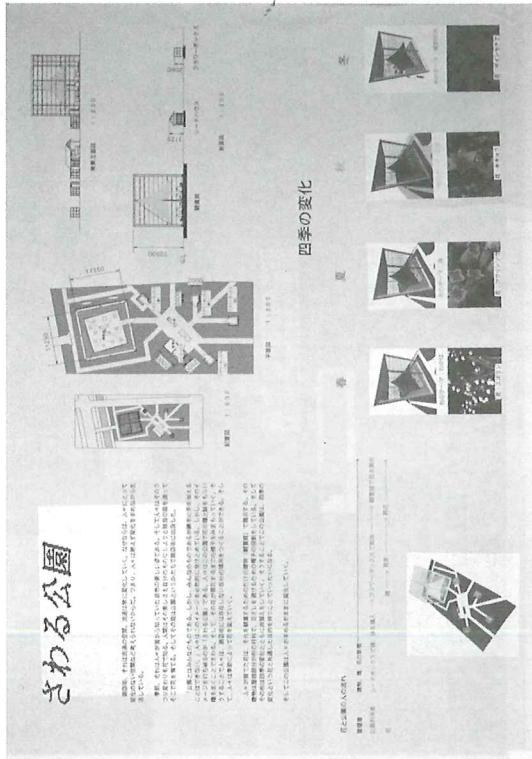
032 門永琢・奥平和根・工裕次郎・中西岳洋
稻坂卓也 米子工業高等専門学校3年



033 宮本 尊史
米子工業高等専門学校5年

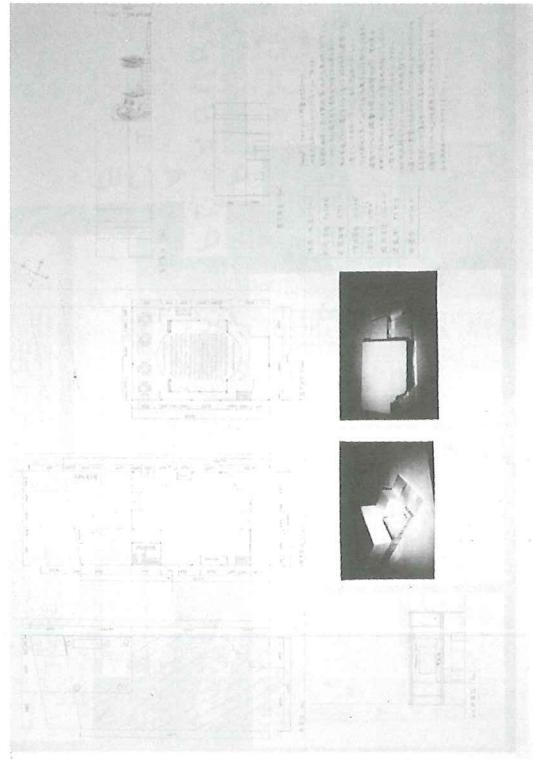


034 高見 奈菜・下村 真純
吳工業高等専門学校4年



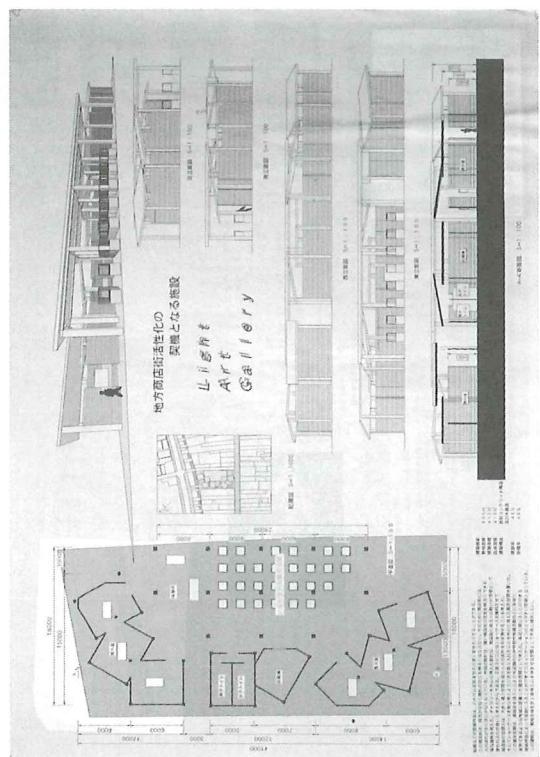
035

嶋田 浩二
米子工業高等専門学校4年



037

ピヤング・ソックヘン・有本 光洋・生田 真也
安井 克幸・小幡 義孝 米子工業高等専門学校3年



038

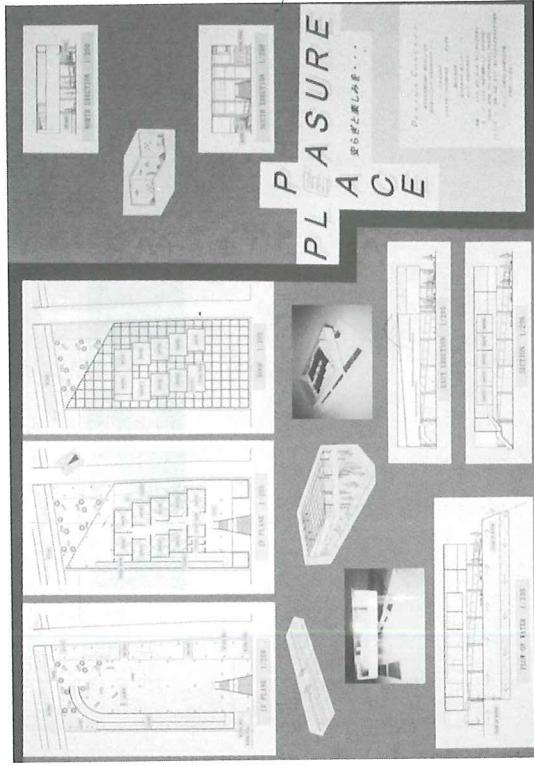
中西 功
米子工業高等専門学校4年



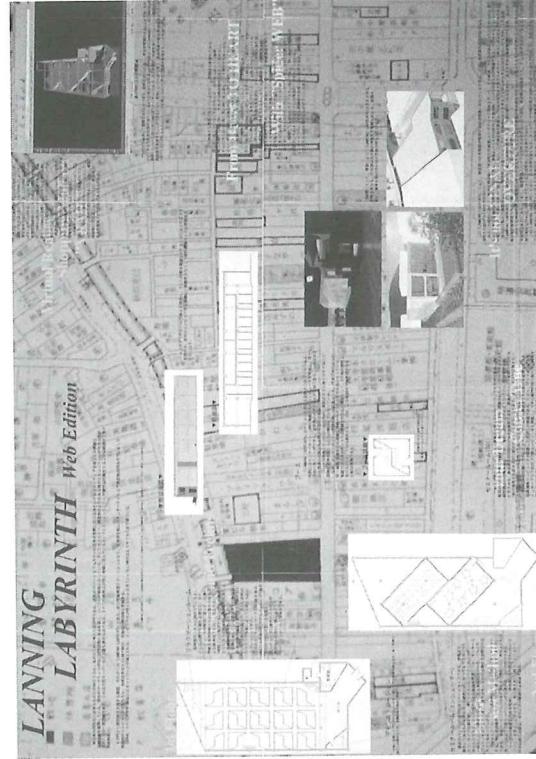
039

岩佐 直子・遠藤 ゆかり・西田 由佳
米子工業高等専門学校4年

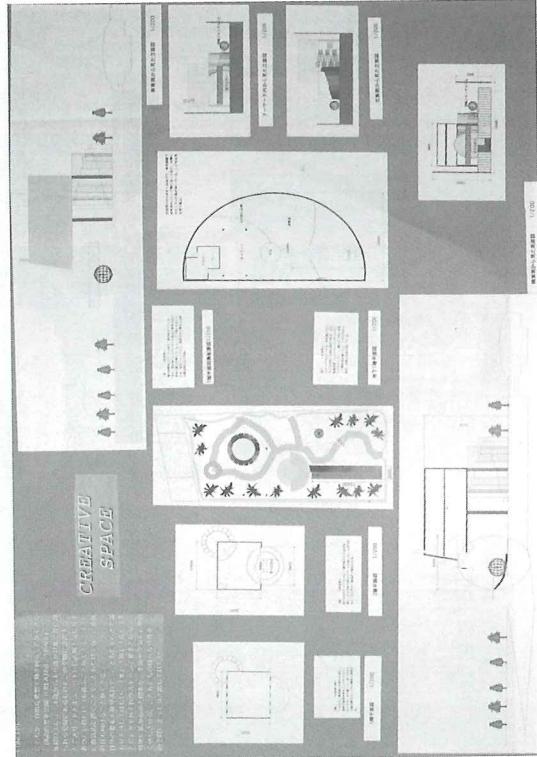
応募作品



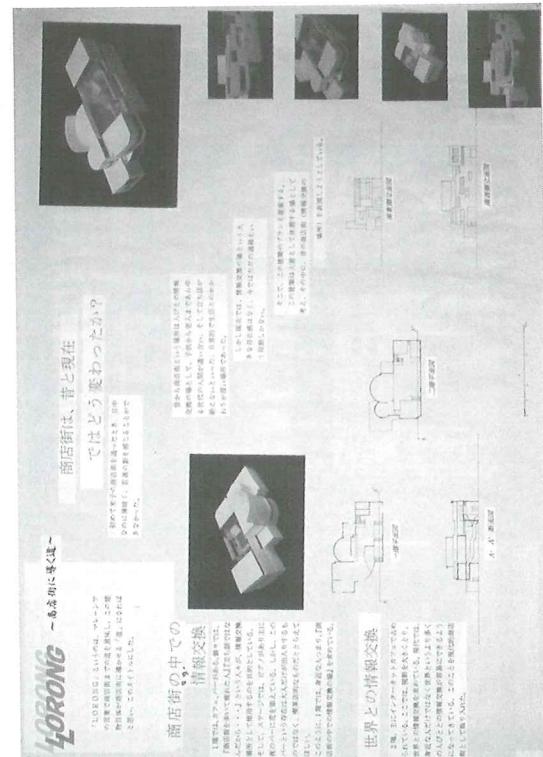
040 江本 晃美・品川 広江・松岡 早苗
呉工業高等専門学校4年



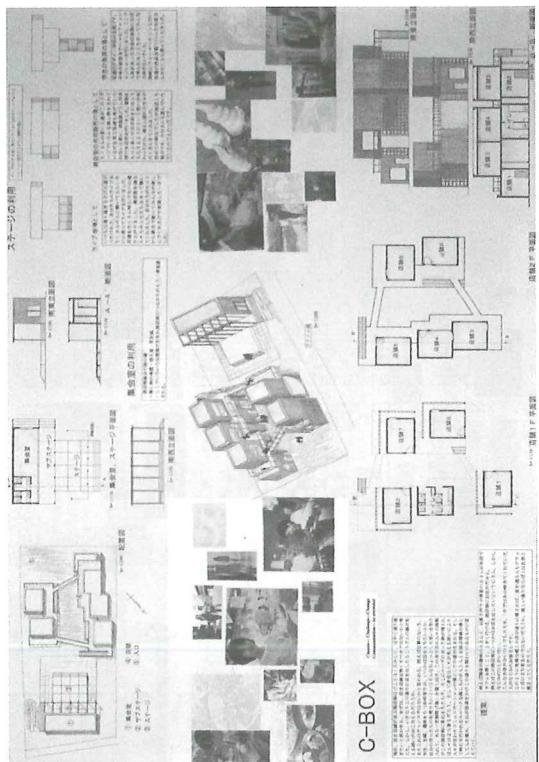
041 森本 隆弘
明石工業高等専門学校3年



042 棚本 景子・竹口 大紀・宮田 征宜
安田 久美・松尾 綾子 米子工業高等専門学校3年

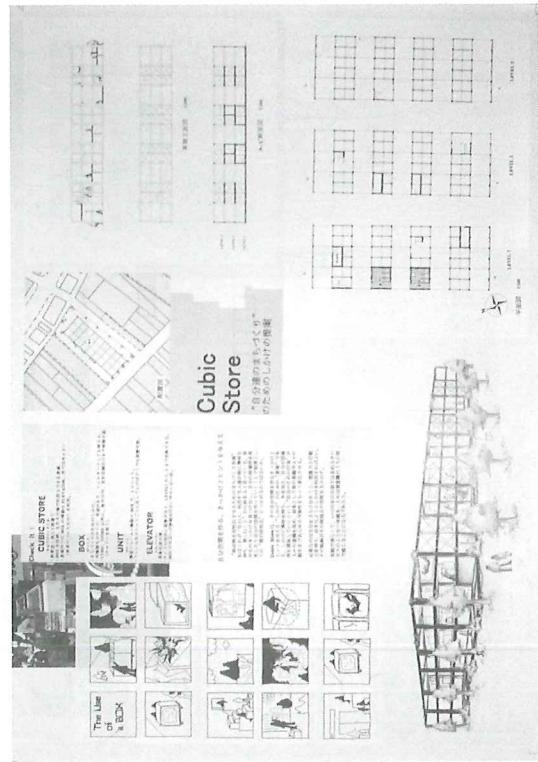


043 ファイズ・村尾 幸洋・山本 哲郎
田原 巍・比留田 薫 米子工業高等専門学校3年



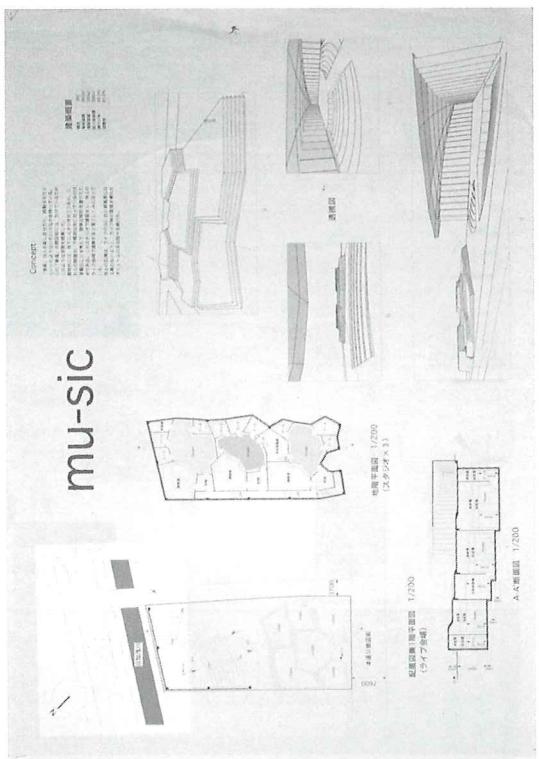
044

寺嶋 美樹
明石工業高等専門学校4年



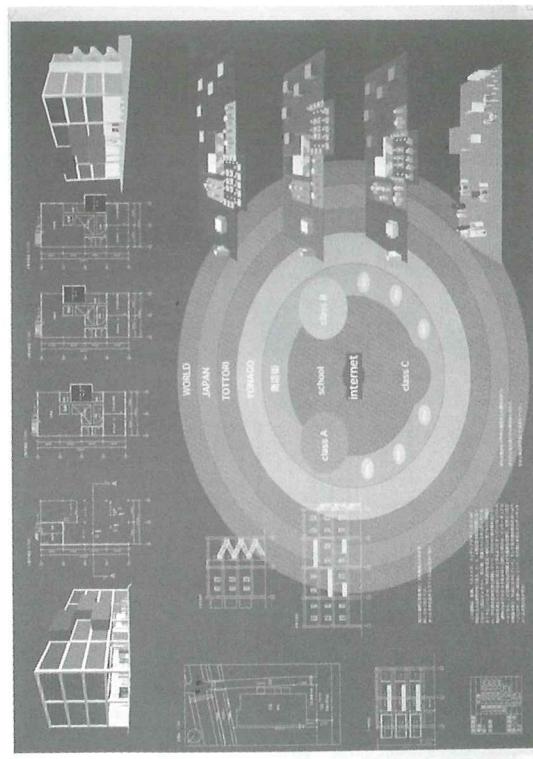
045

山口 加奈子
岐阜工業高等専門学校5年



046

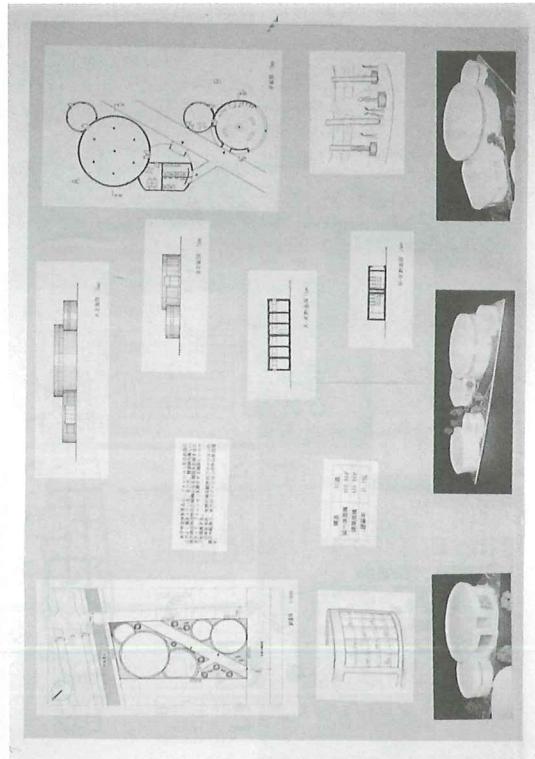
北農 幸生・竹中 郁博・川越 崇仁
米子工業高等専門学校4年



047

松原 千幸・入江 真佐子
米子工業高等専門学校4年

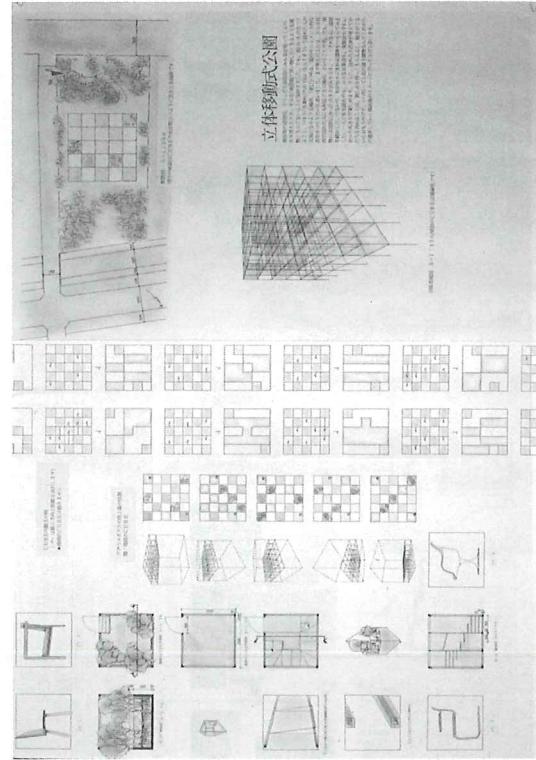
応募作品



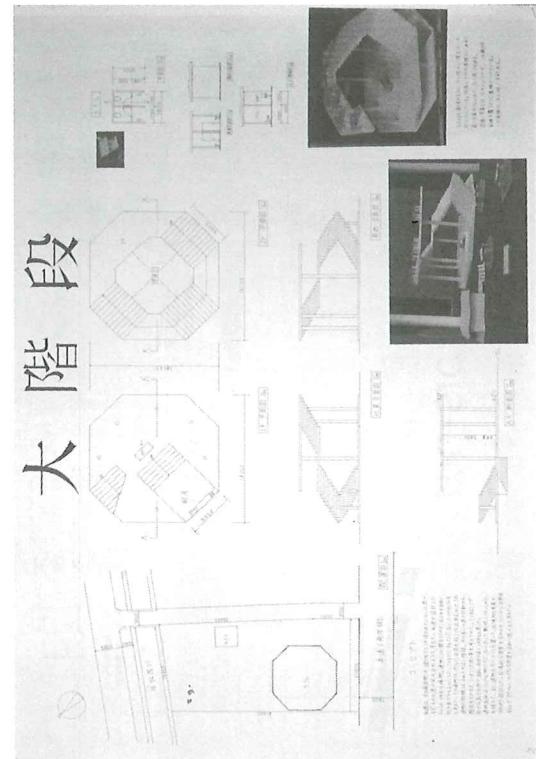
048 日野原 樹理・杉原 夏子
米子工業高等専門学校4年



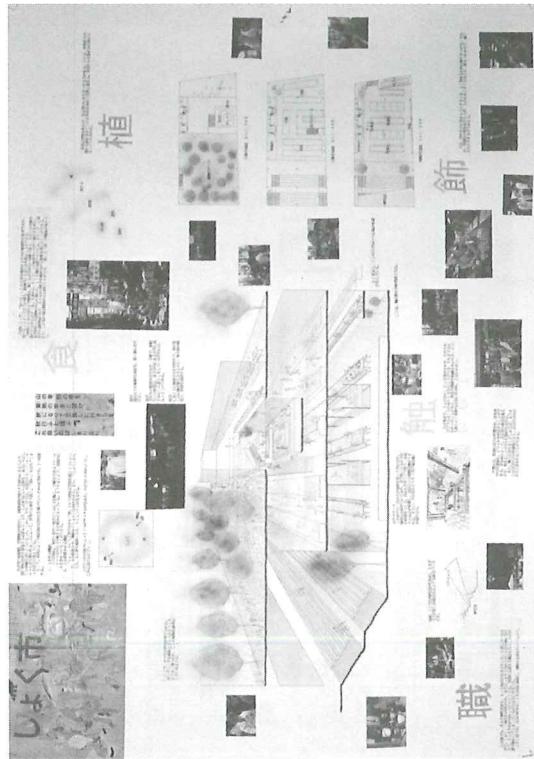
050 和田 亜希子・西尾 麻衣
米子工業高等専門学校4年



049 岸本 典子
明石工業高等専門学校4年

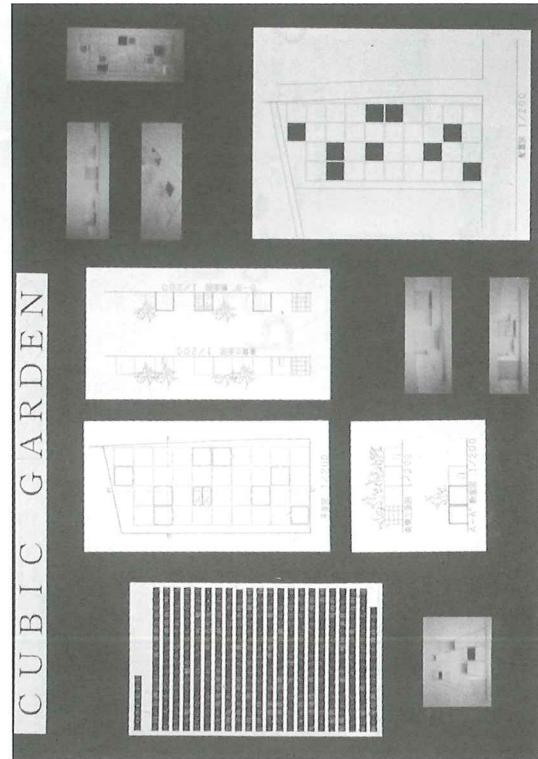


051 田中 万希子・森下 幸恵・森岡 愛
二木 梨香・松下 幸大 米子工業高等専門学校3年



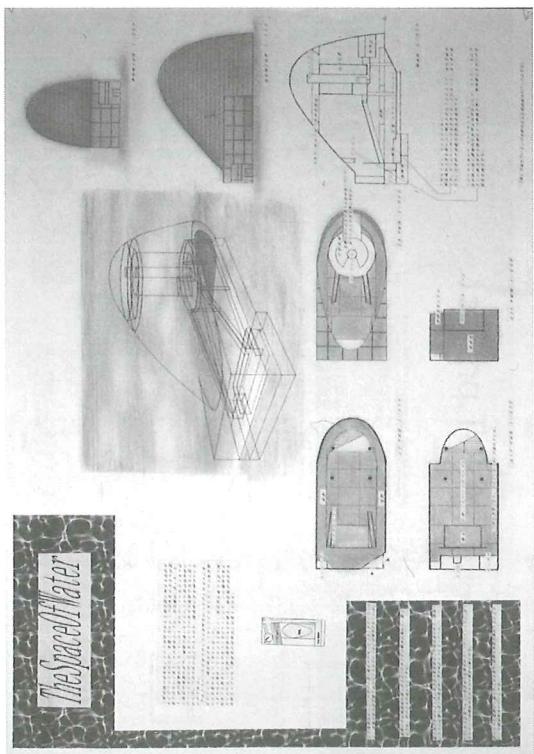
052

西角 麻美
明石工業高等専門学校4年



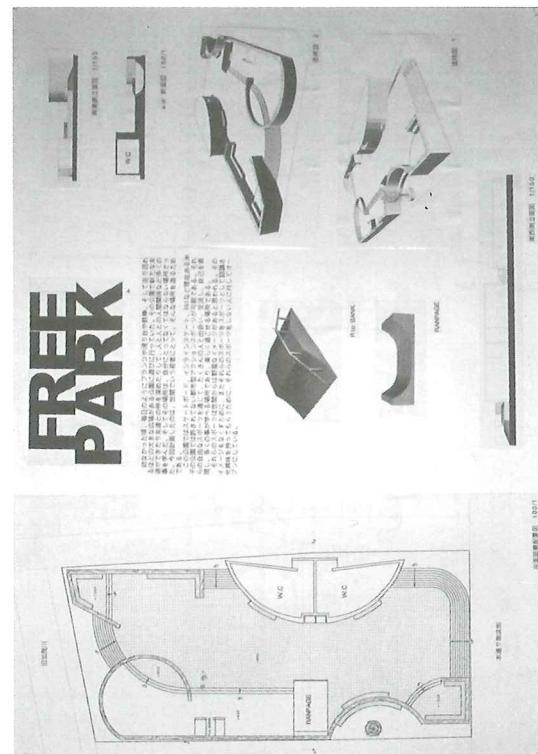
053

河野 圭紀・佐藤 一佑・竹内 大樹
吳工業高等専門学校4年



054

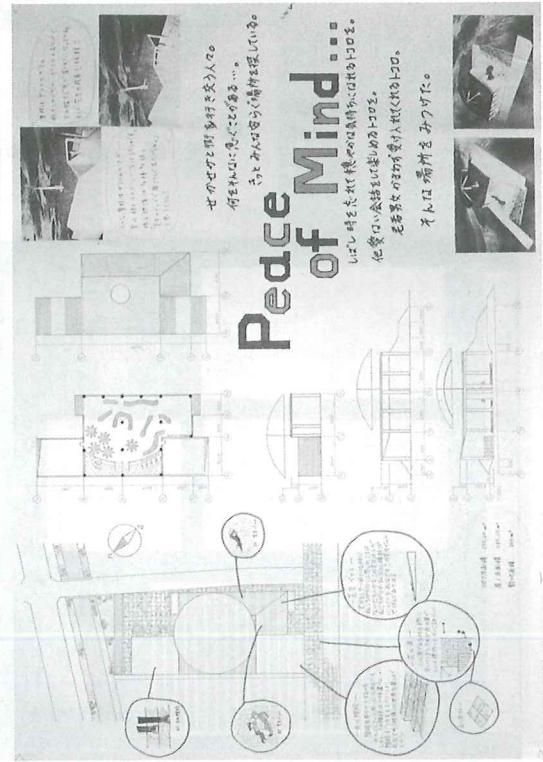
大江 俊輔
明石工業高等専門学校3年



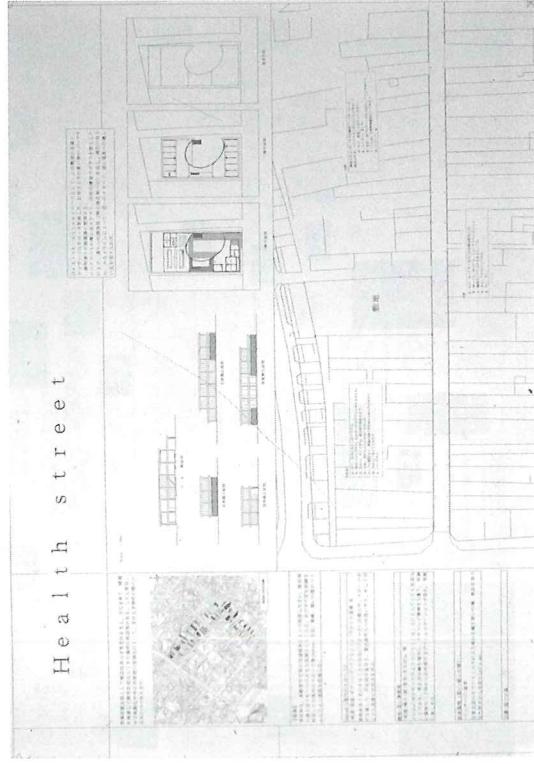
055

佐々木 良介・小畠 祐治
米子工業高等専門学校4年

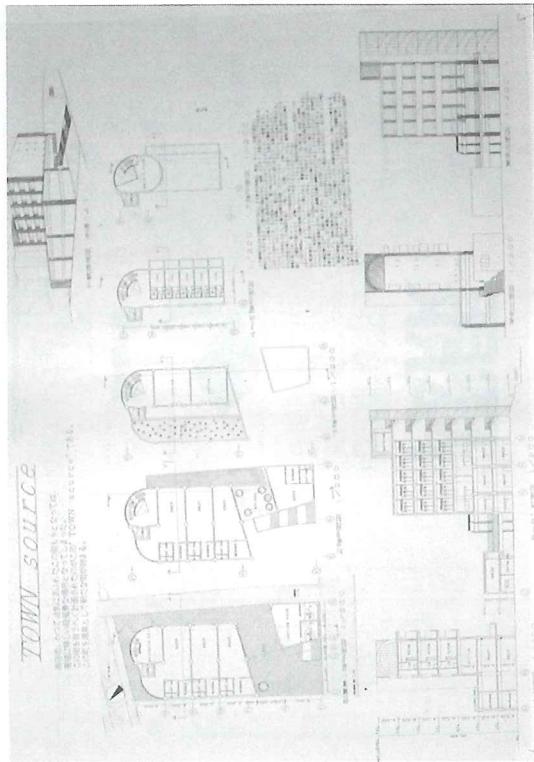
応募作品



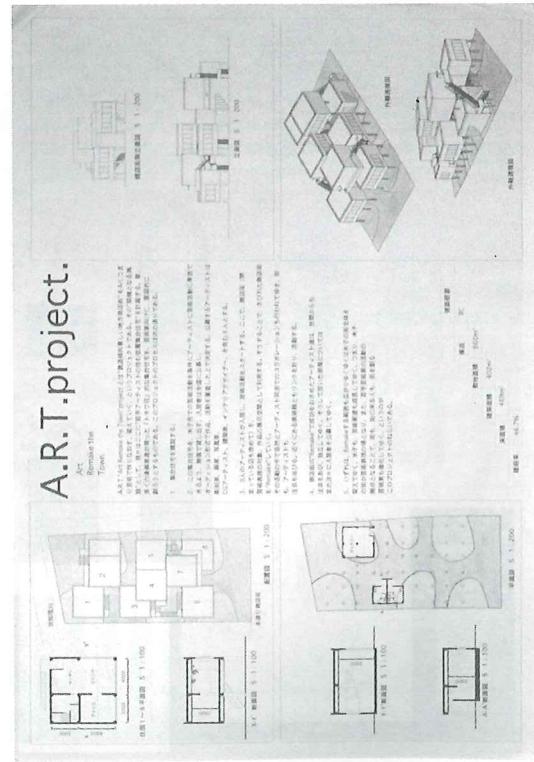
056 西谷 志津香・岡川 久美・両見 知世子
米子工業高等専門学校4年



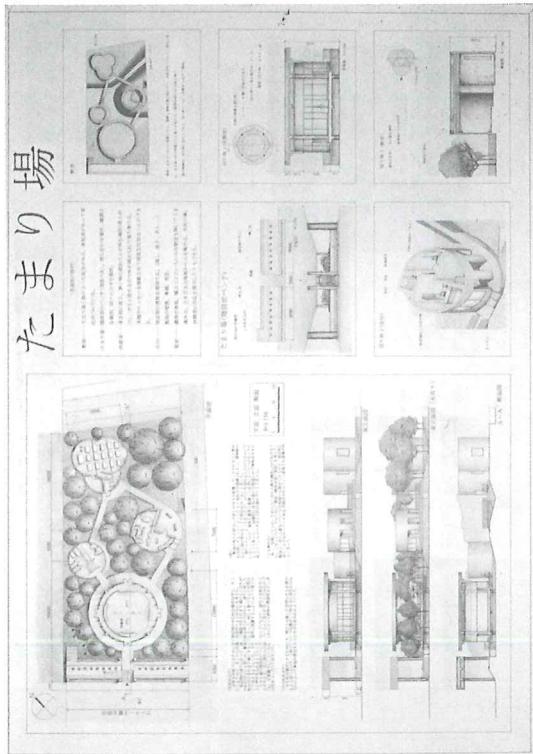
057 木曾 敬資
石川工業高等専門学校4年



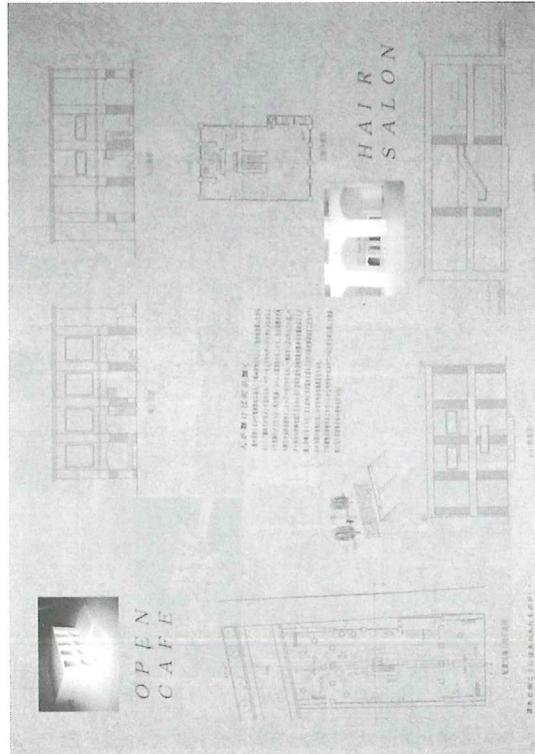
058 廣田 右喬
米子工業高等専門学校4年



059 椿野 穎俊・大塚 利宏・岡川 敬佑
米子工業高等専門学校4年



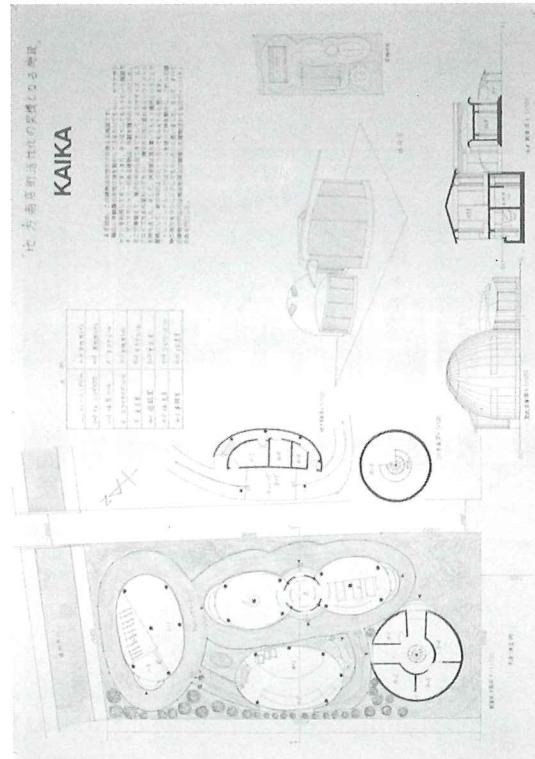
060 太田 涼
明石工業高等専門学校4年



061 足助 晃一・藤田 純・永見 敦
呉工業高等専門学校4年

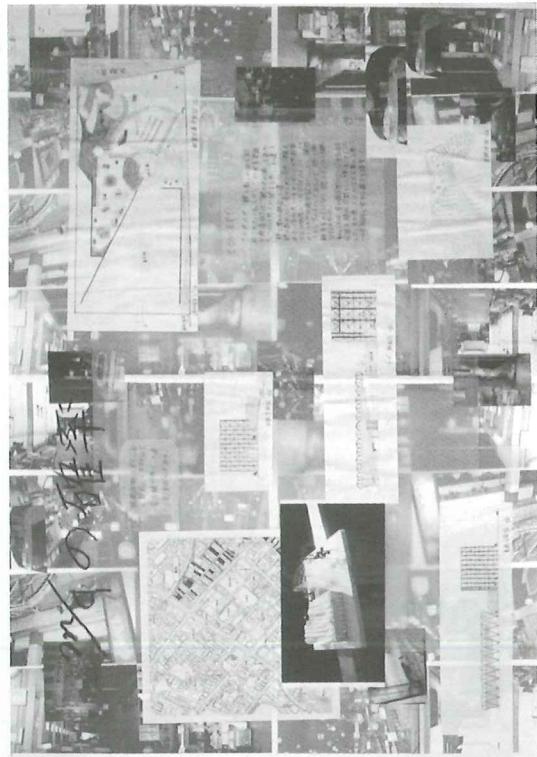


062 田中 猛・WAN SAHRIZAT BIN WAN MAHMOOD
米子工業高等専門学校4年

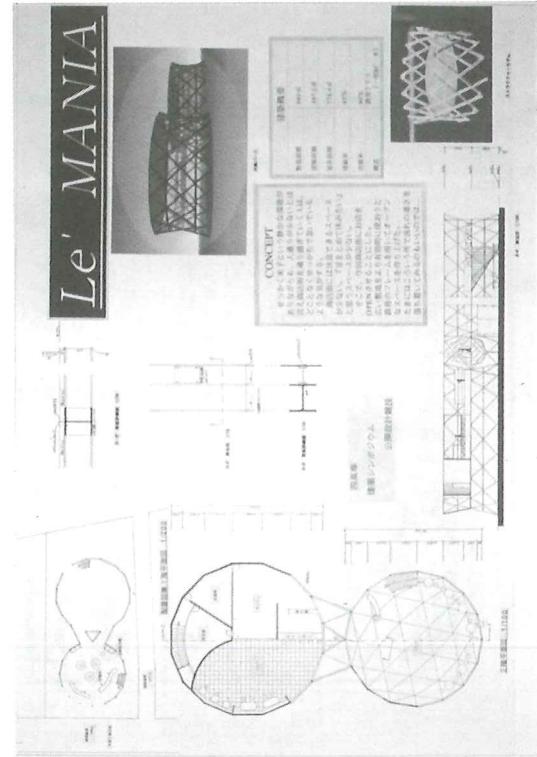


063 澤 享・岡本 雄介
米子工業高等専門学校4年

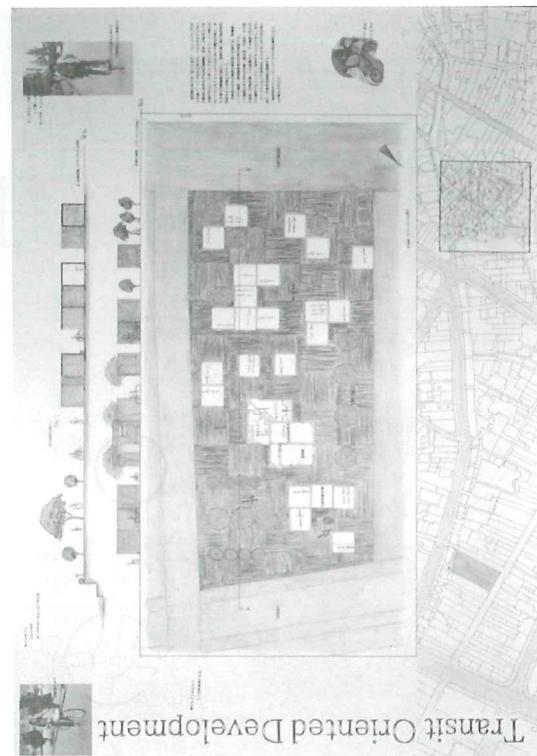
応募作品



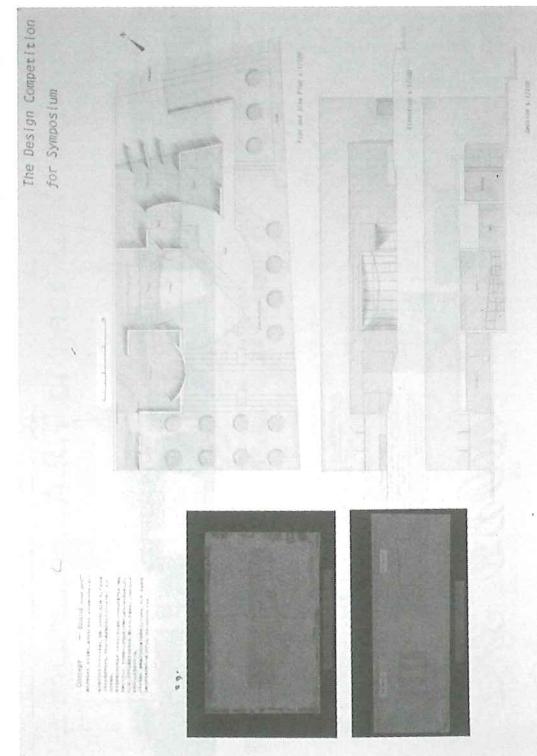
065 水砂 亜紀・小林 弘美
米子工業高等専門学校4年



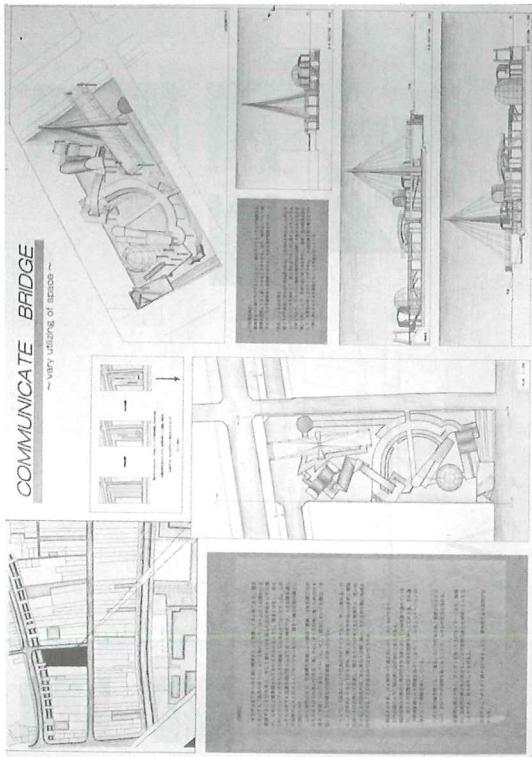
066 福島 亘
米子工業高等専門学校5年



067 柳井 佳奈
明石工業高等専門学校3年

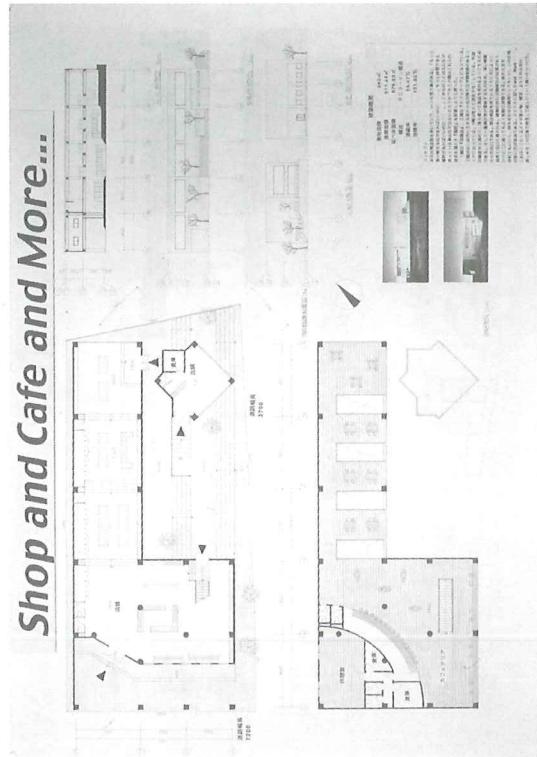


068 石原 啓之
米子工業高等専門学校5年



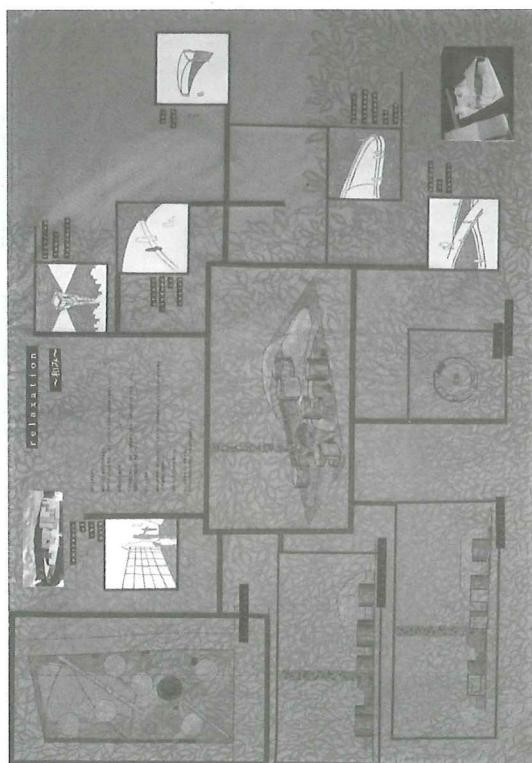
069

白濱 康宏
明石工業高等専門学校4年



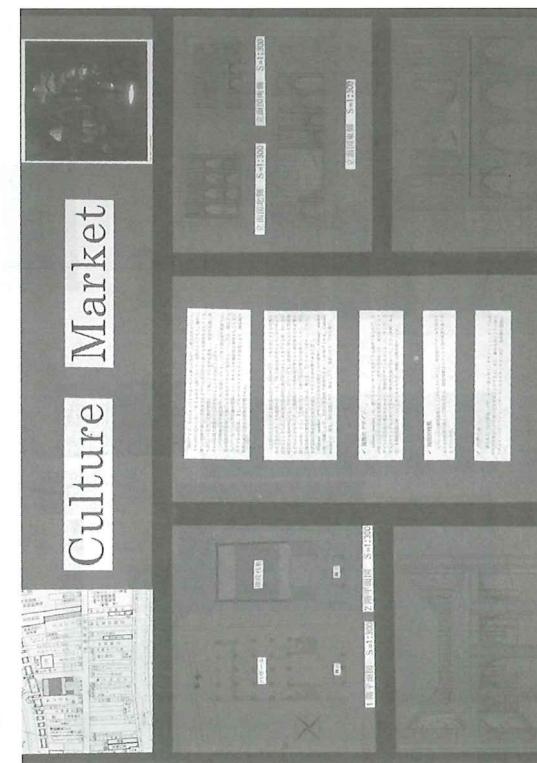
070

山本 訓照
米子工業高等専門学校5年



071

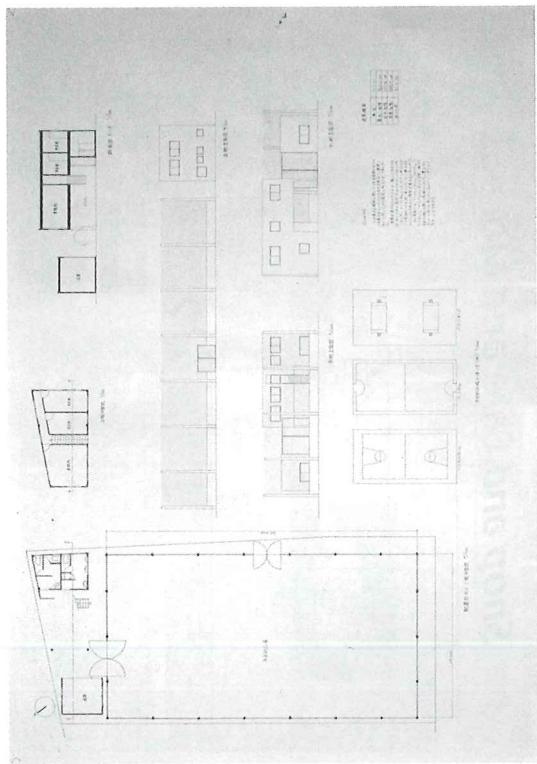
岡崎 愛・横田 芳子
呉工業高等専門学校4年



072

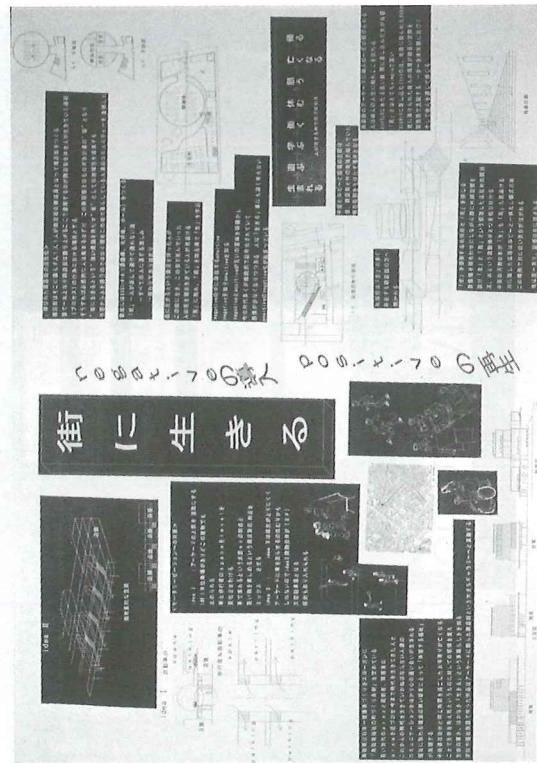
マスミ・メイサム
明石工業高等専門学校4年

応募作品



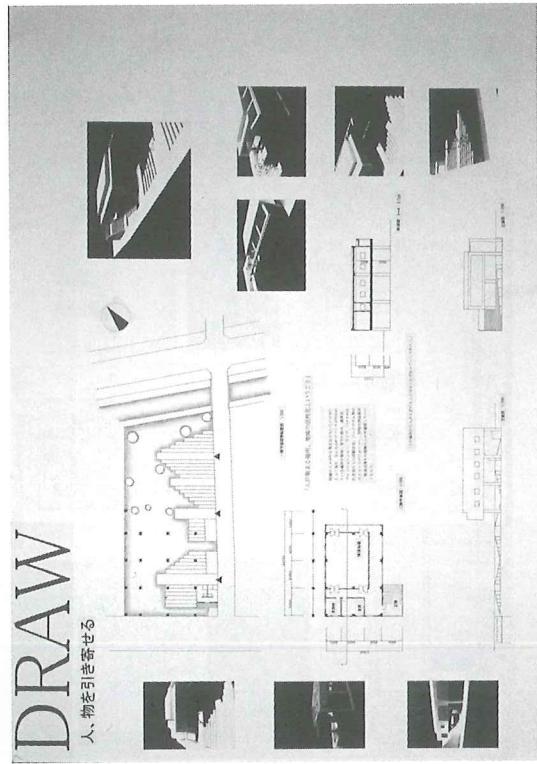
073

多久和 健二
米子工業高等専門学校5年



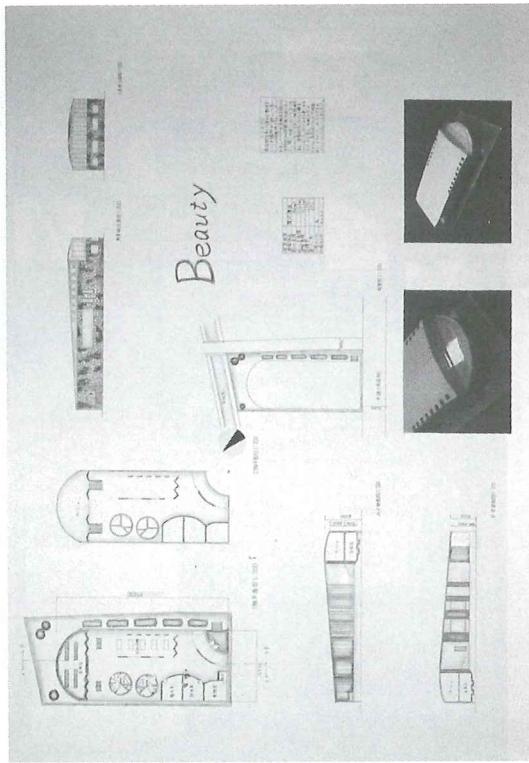
075

桶皮 竜希
石川工業高等専門学校4年



074

内田 紀之・伊達 正洋・平野 富也
米子工業高等専門学校5年



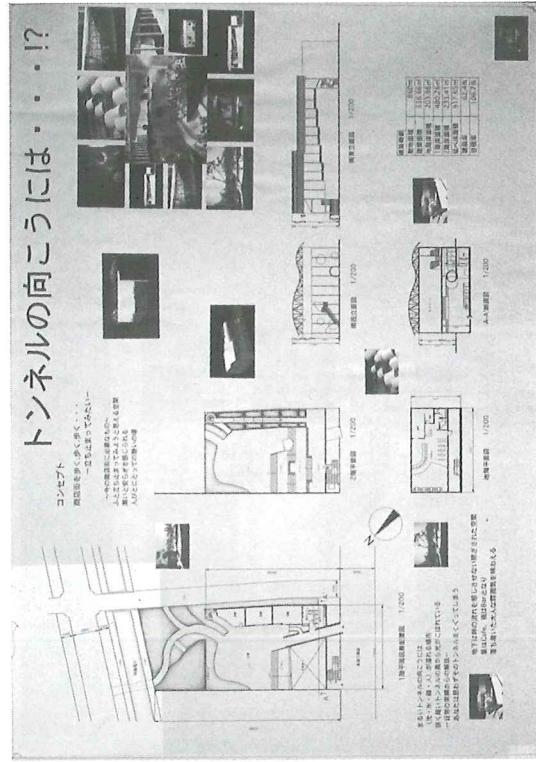
076

岡田 真由美
米子工業高等専門学校5年

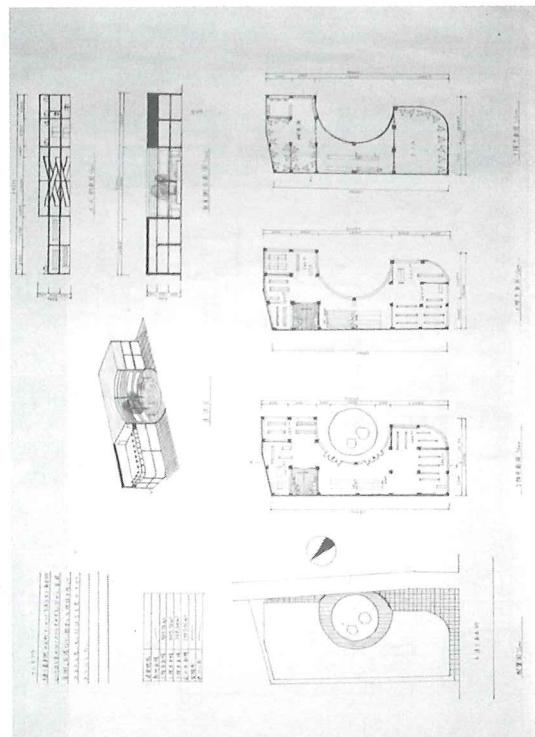


077

林 芙美子
明石工業高等専門学校4年

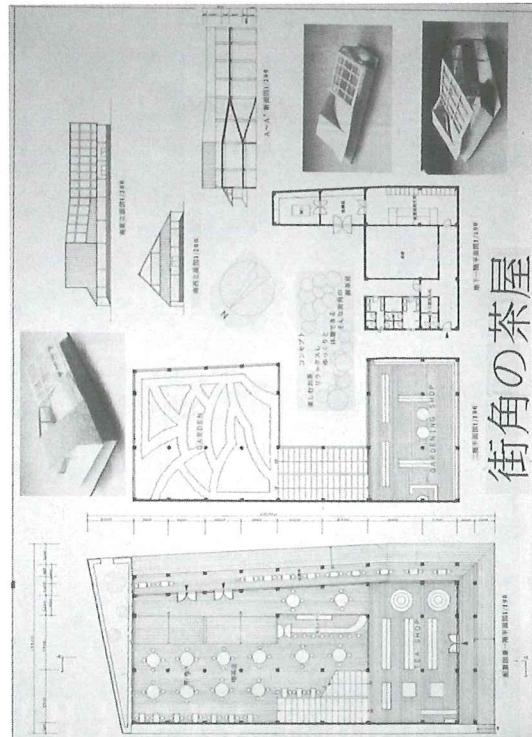


078 瀬上由夏・仲子加代・紅盛宣彦
前田万里・山根佑司 米子工業高等専門学校5年



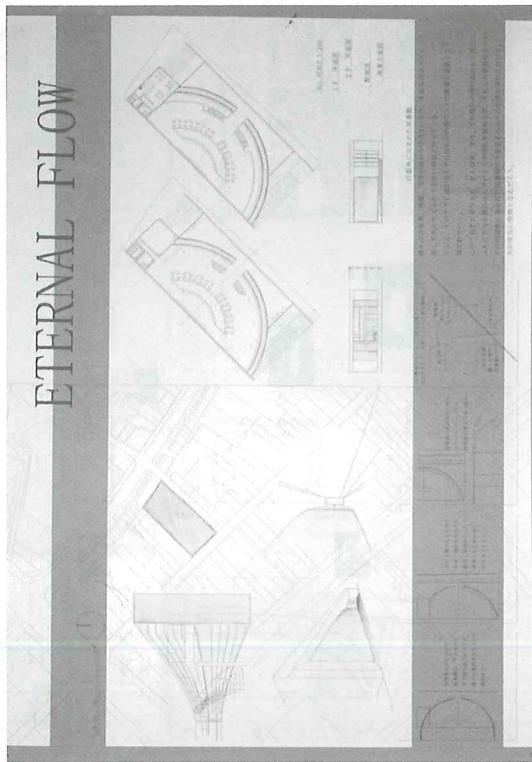
079

岡本 友希
米子工業高等専門学校5年

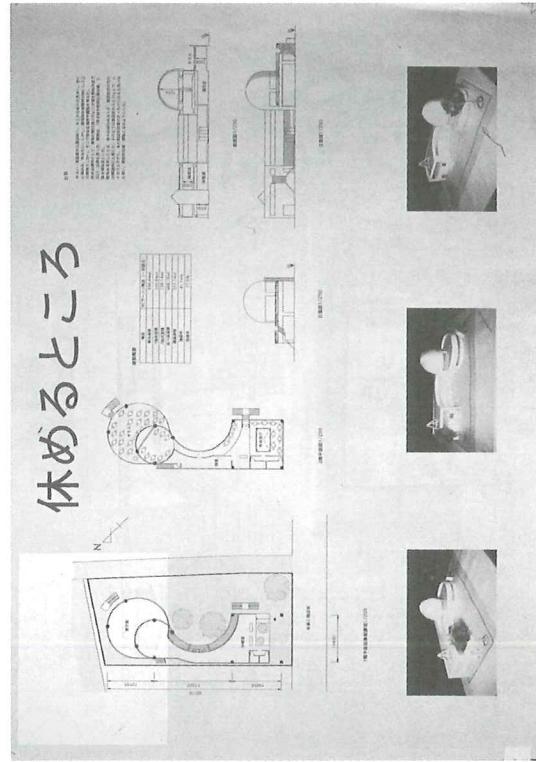


080

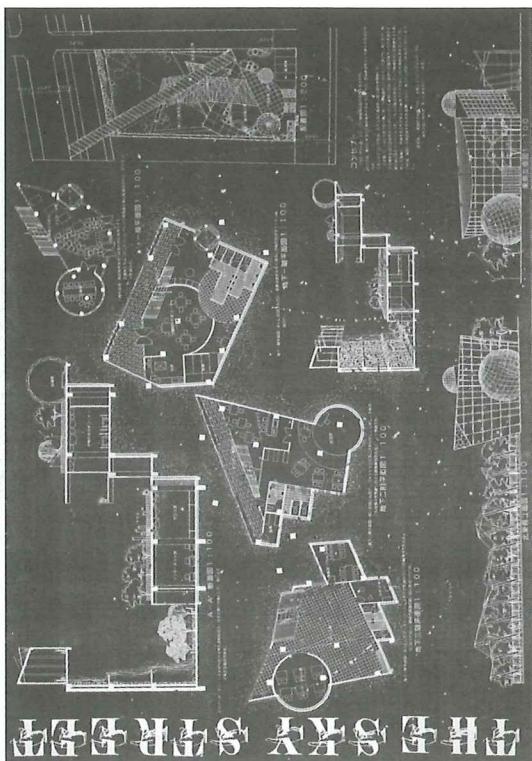
山内健太郎・足澤れい・関本りょう
米子工業高等専門学校5年



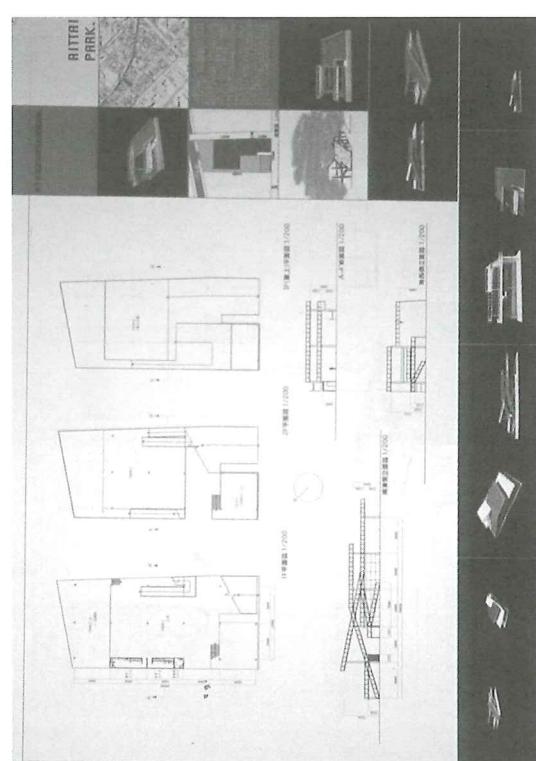
081 風景・内野洋輔
辰野 雄一
石川工業高等専門学校4年



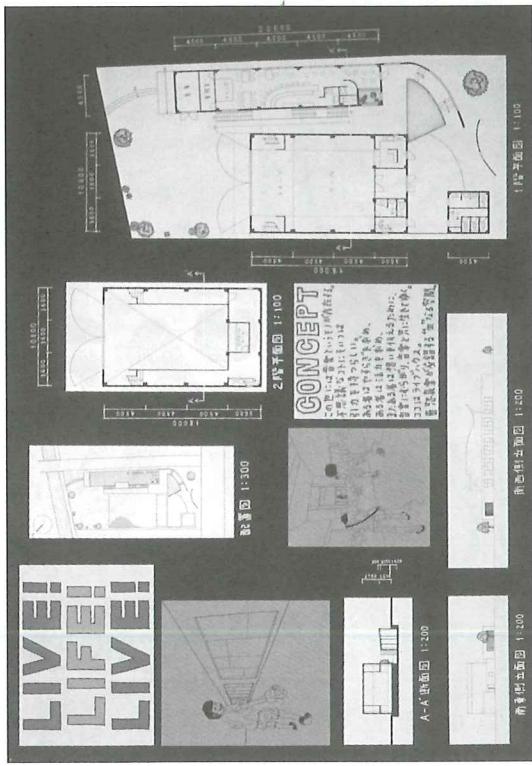
082 赤木 和雄
米子工業高等専門学校5年



083 坂上 美穂
有明工業高等専門学校5年

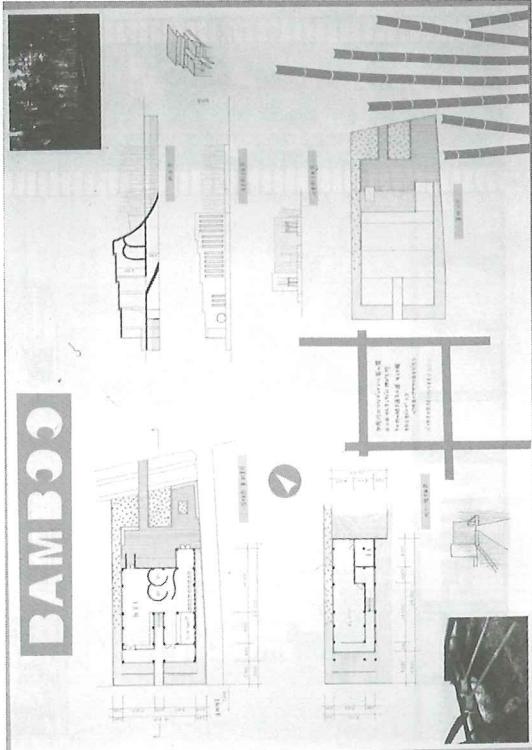


084 大谷 豊仁
米子工業高等専門学校5年



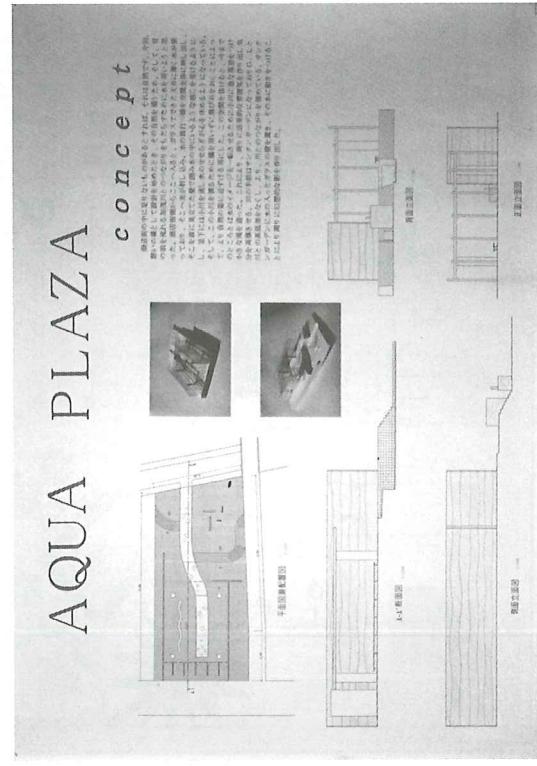
086

岩本 義英
米子工業高等専門学校5年

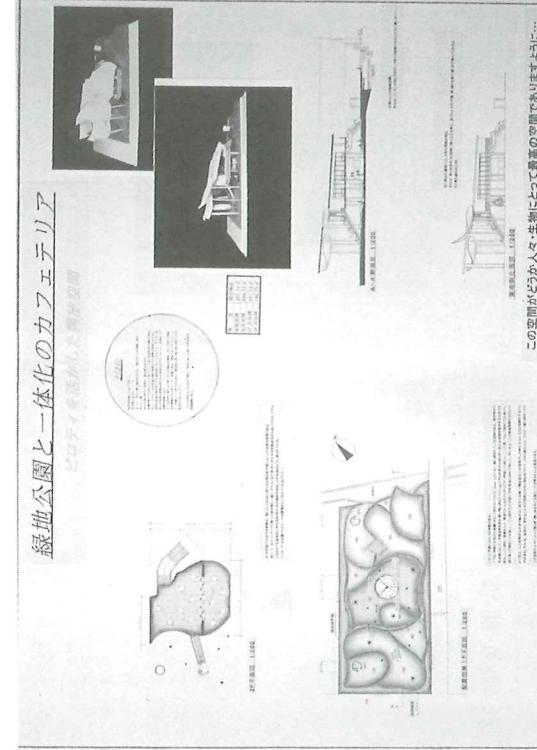


089

木口 紀子
米子工業高等専門学校5年

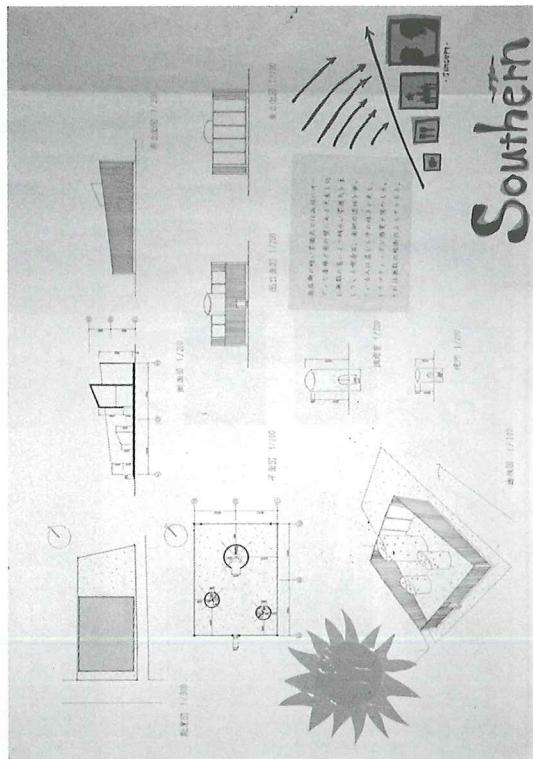


087 倉田 浩充・倉長 哲司・阪井 憲司
呉工業高等専門学校4年

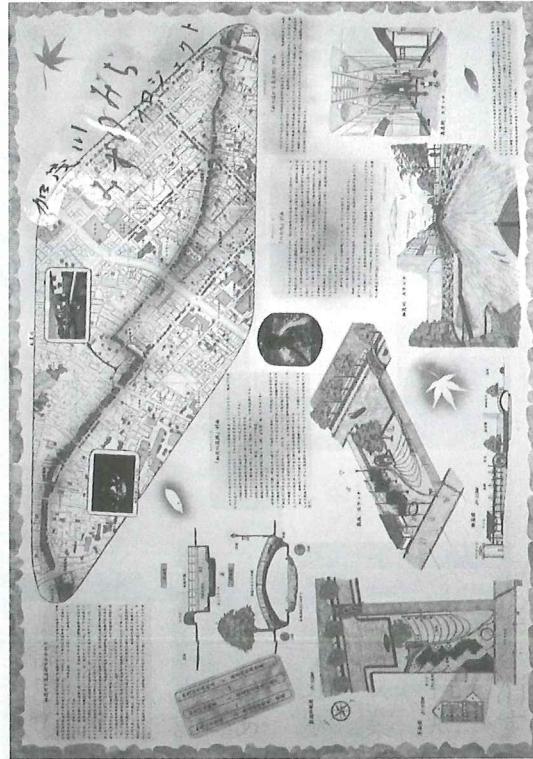


090 御船愛美・加藤香織・大黒裕美・大畠乙女
米子工業高等専門学校5年

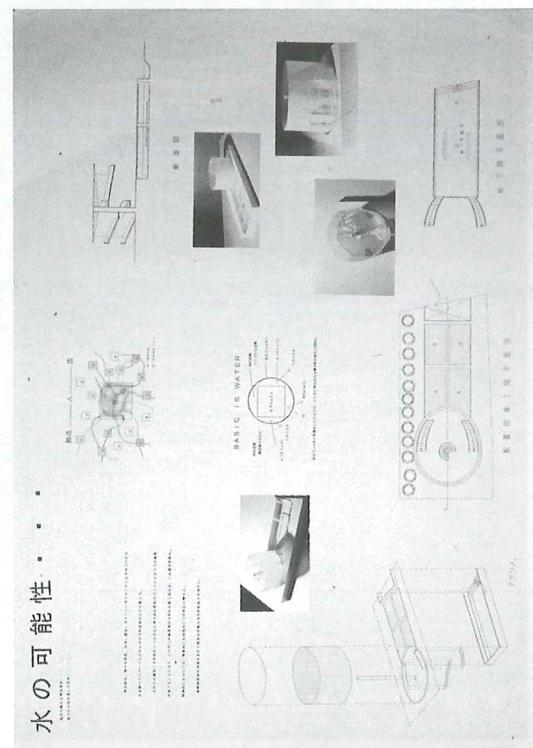
応募作品



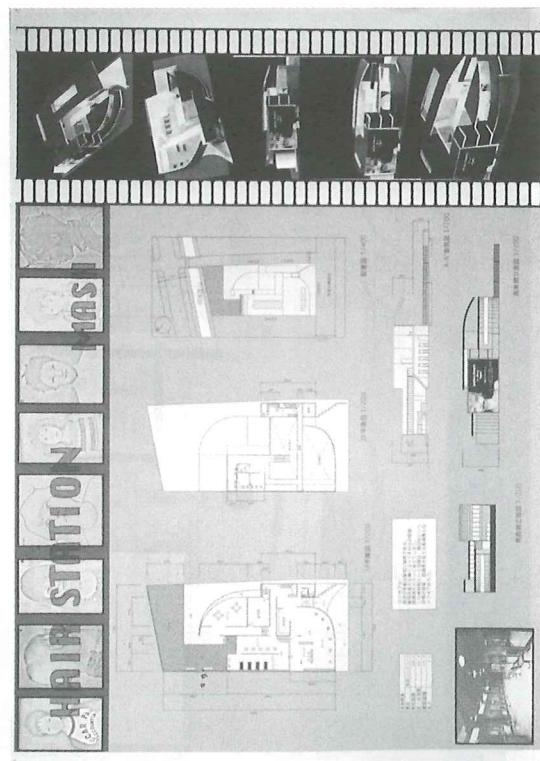
091 木村 しのぶ・岩上 嘉樹・安田 裕子
大坂府立工業高等専門学校4年



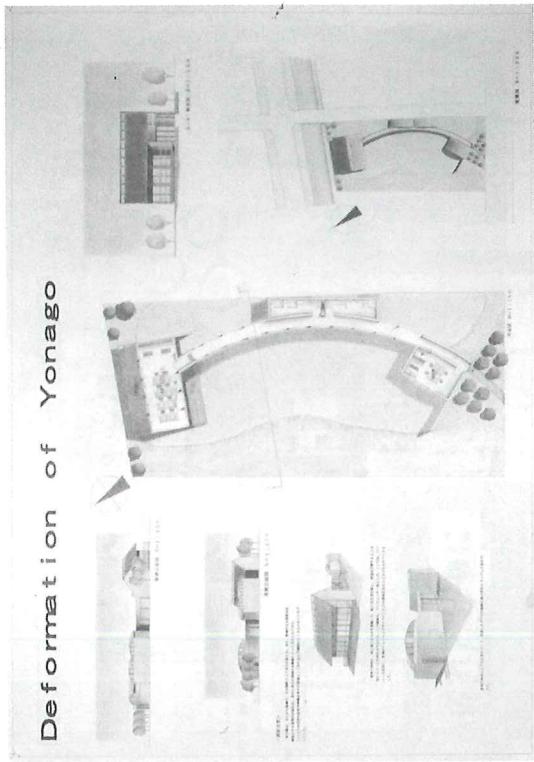
092 菅浪 康二
明石工業高等専門学校4年



093 高橋 大輔・空久保 光・三宅 正樹
呉工業高等専門学校4年

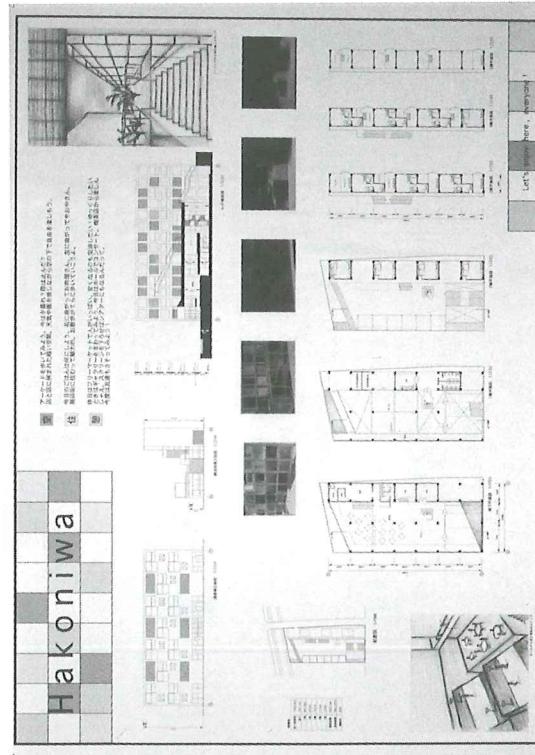


095 太田 真梨子
米子工業高等専門学校5年

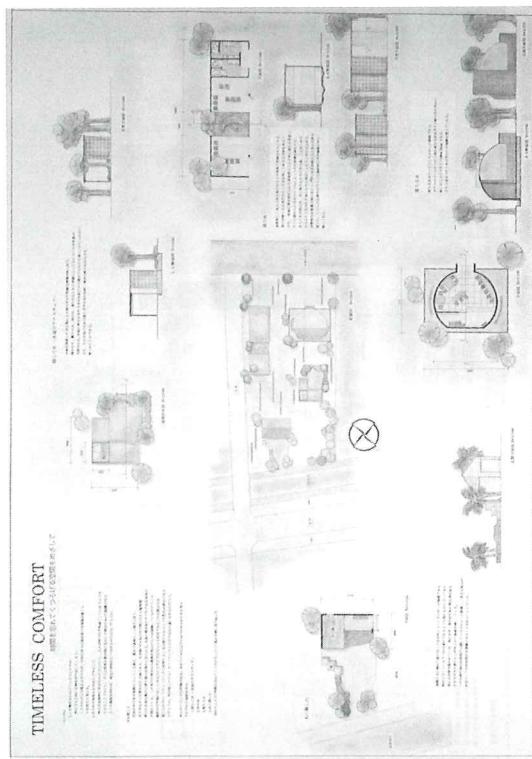


096

中尾 雄介
明石工業高等専門学校4年

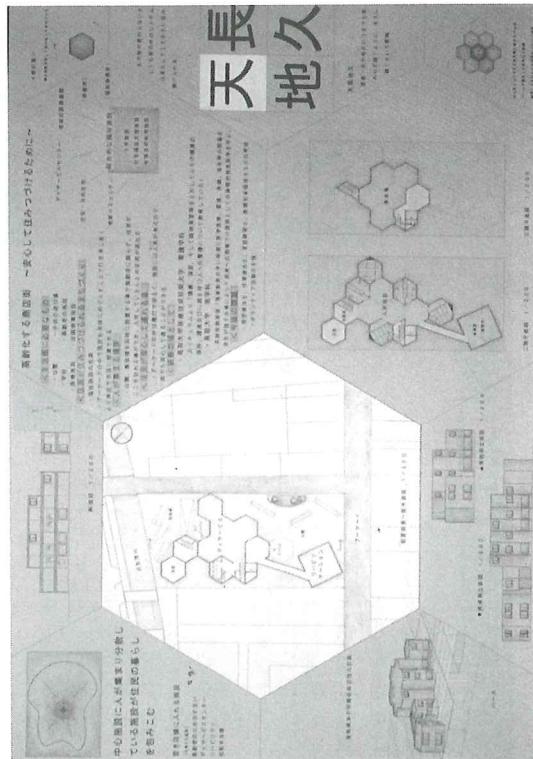


097 足立 佳奈江・阿部 陽・田淵 真知子
米子工業高等専門学校5年



098

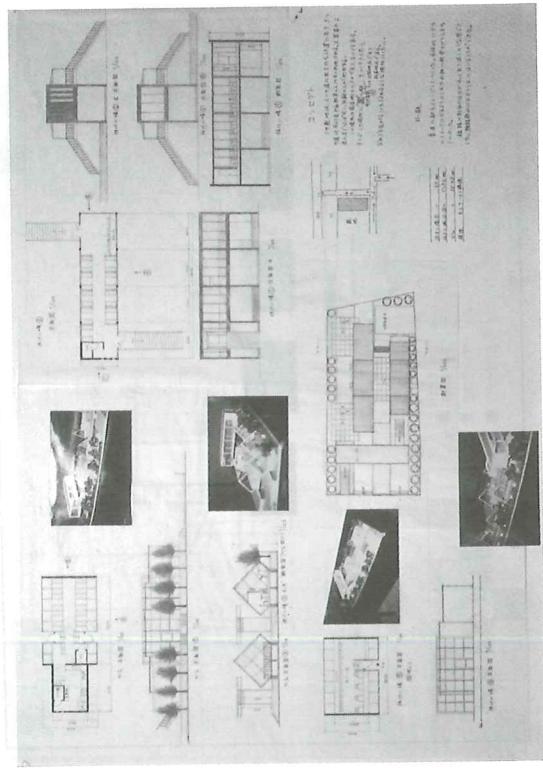
沖野 友美
明石工業高等専門学校4年



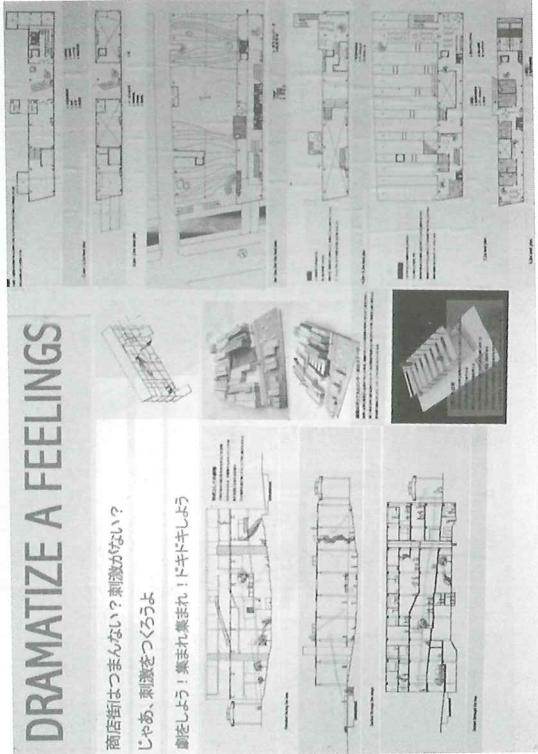
099

中川 かおり
石川工業高等専門学校4年

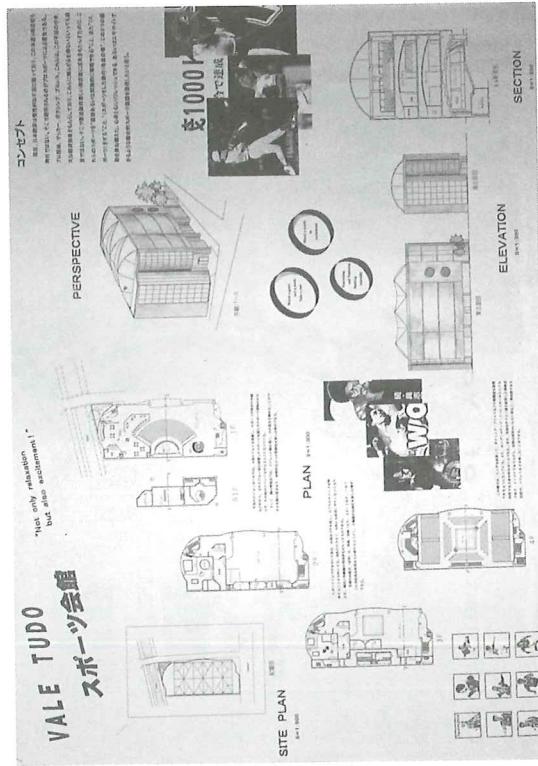
応募作品



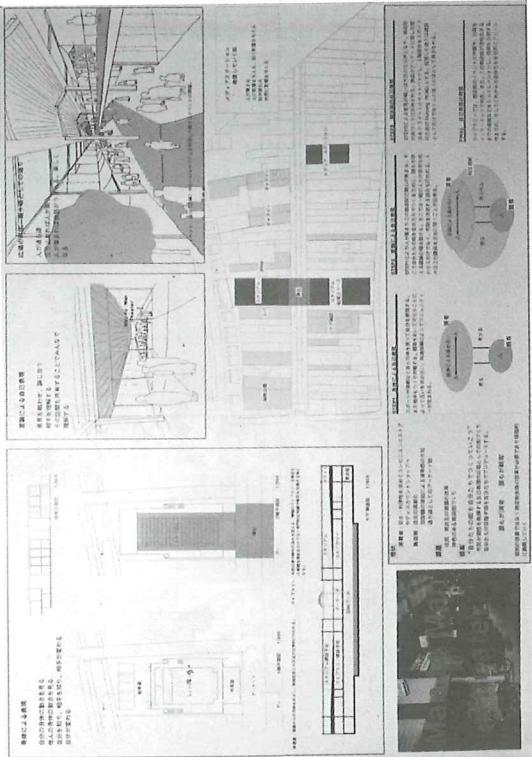
100 滝山 雅人・中村 佳世
米子工業高等専門学校5年



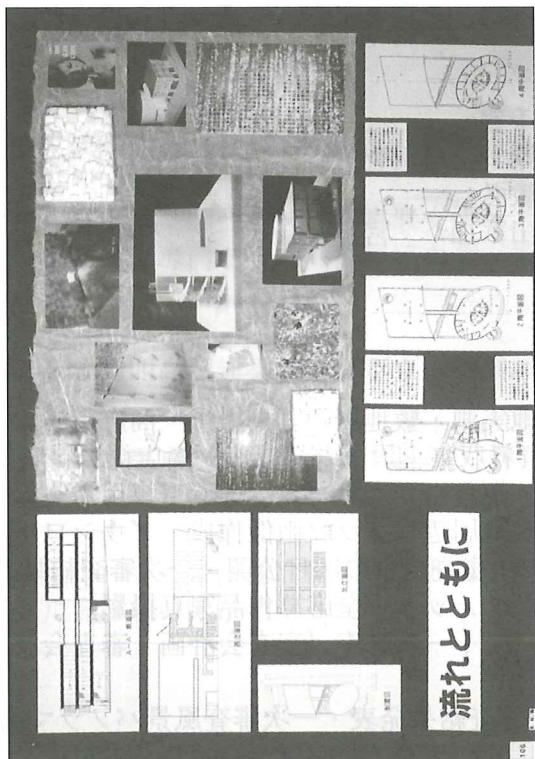
103 塚本 真実子
岐阜工業高等専門学校5年



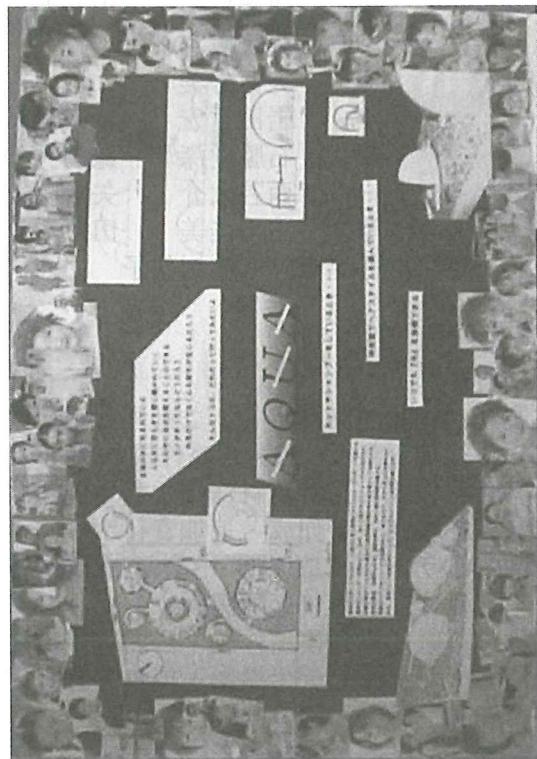
101 天野 大輔・宇津見 真一・吉田 翼
吳工業高等専門学校4年



104 西山 理沙・河原 知子
石川工業高等専門学校5年



106 石井 理恵子・鷲林 紗代・田中 麗子
呉工業高等専門学校4年



107 稲田 千春・小笠 奈津子・若木 彩
米子工業高等専門学校4年

事務局紹介

■建築シンポジウム実行委員 米子高専建築学科

学生スタッフ	3年	吉川哲史		
	5年	伊藤紀美	大谷豊仁	角森真志
		渡部敏春		松本幸大
	4年	大西秀美		
	3年	岩田哲宏	金田和弘	増本千賀
	2年	石脇愛深	鎌田秀一	鎌田剛 戸川智史
		西谷大介	矢倉明絵	吉岡敏弘
	1年	田川佳美	田鍬典子	本位田華加 宮下香奈
指導教官		熊谷昌彦	高増佳子	西川賢治

■活動内容

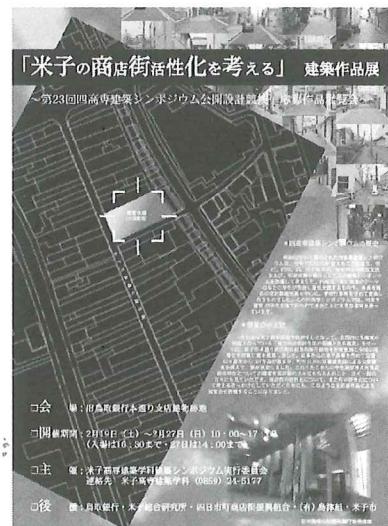
□一次審査（1999.10.8）まで：：計画敷地現地調査（敷地実測・敷地周辺写真撮影・商店街アーケード調査）：：追加資料<6/30発送>作成作業（米子市概要資料収集・地図資料収集・商店街資料収集・質疑・応答資料作成・送付資料作成・敷地周辺ビデオ撮影・編集）：：ホームページ（専用ホームページ開設・質疑応答ページ作成・追加資料ホームページ化・敷地周辺パノラマ画像作成・ダウンロード用敷地周辺図CADデータ作成・同 3次元CADデータ作成・一次審査風景の即日公開・一次審査結果即日発表）：：応募作品管理（応募図面ナンバリング・違反図面チェック・全応募作品写真撮影）：：最終審査に向けて（敷地周辺模型作成・公開審査会場現地調査）：：一次審査（審査会計画・審査会場設営・審査会運営+記録・ビデオ撮影+編集・審査結果速報送付）

□最終審査会（1999.11.20）まで：：ホームページ（一次審査結果発表・一次審査風景パノラマ画像公開・最終審査会案内・最終審査模型作成用CADデータ公開）：：校内作品展示会（展示会計画、設営、運営・アンケート調査実施+集計）：：最終審査会（最終審査会計画+準備+会場事前リハーサル+会場係員打ち合わせ・司会、場内アナウンスに関する準備+計画・進行に関する準備+計画・審査会用アニメーション映像+音楽作成・敷地周辺模型作成・一般用案内送付・審査会運営+記録・ビデオ撮影）

□最終審査会（1999.11.20）以降：：最終審査会（審査結果報告送付・アンケート調査集計・ビデオ編集）：：展覧会（準備+計画・会場設営+運営・アンケート調査集計）：：作品集（準備+計画・写真整理・編集作業）

■展示会について

全応募作品と入賞作品模型の展示会を今回の設計競技の敷地（銀行跡建物）にて2000年2月19日～2月27日の期間で行いました。商店街はもちろん、町の活性化について考えるきっかけにしていたくために地元商店街の方々をはじめ、広く一般市民の方々にも見ていただきました。



展覧会ポスター
(デザイン：米子高専5年 松本 幸大、2年 矢倉 明絵)

■第23回四高専建築シンポジウム

主催

明石工業高等専門学校 建築学科
呉工業高等専門学校 建築学科

石川工業高等専門学校 建築学科
米子工業高等専門学校 建築学科

後援

鳥取県建築士会（社）
鳥取県建設業協会（社）
(社)日本建築学会中国支部鳥取支所
米子工業高等専門学校中海振興協力会
今井書店

鳥取県建築士事務所協会（社）
米子総合研究所
米子書店（株）
米子高専建築会

■第23回四高専建築シンポジウム公開設計競技応募作品展覧会

主催

米子工業高等専門学校 建築学科

後援

鳥取銀行 米子総合研究所 四日市町商店街振興組合
(有)島津組 米子市

■四高専建築シンポジウム公開設計競技1999作品集

編集委員長 和田 嘉宥

編集委員 高増 佳子・西川 賢治

編集スタッフ 伊藤 紀美・岩田 哲宏・大谷 豊仁

金田 和弘・戸川 智史・西谷 大介

本位田華加・増本 千賀・松本 幸大

矢倉 明絵・吉岡 敏弘・吉川 哲史

表紙デザイン 呉工業高等専門学校4年

空久保 光

■編集後記

早いもので、応募要項を発送して1年がたとうとしています。学生の運営ということで、色々大変な所もありましたが、様々な方の御支援のお陰で何とか作業を進める事が出来ました。

そして、この作品集の編集が事実上最後の作業となりました。作品集編集という作業は初めての事で、雑な点も多々あるとは思いますが、自分では良い出来だと思います。作品応募者の皆さんのが、この作品集を見て、高専時代を思い出して頂ければと思っています。

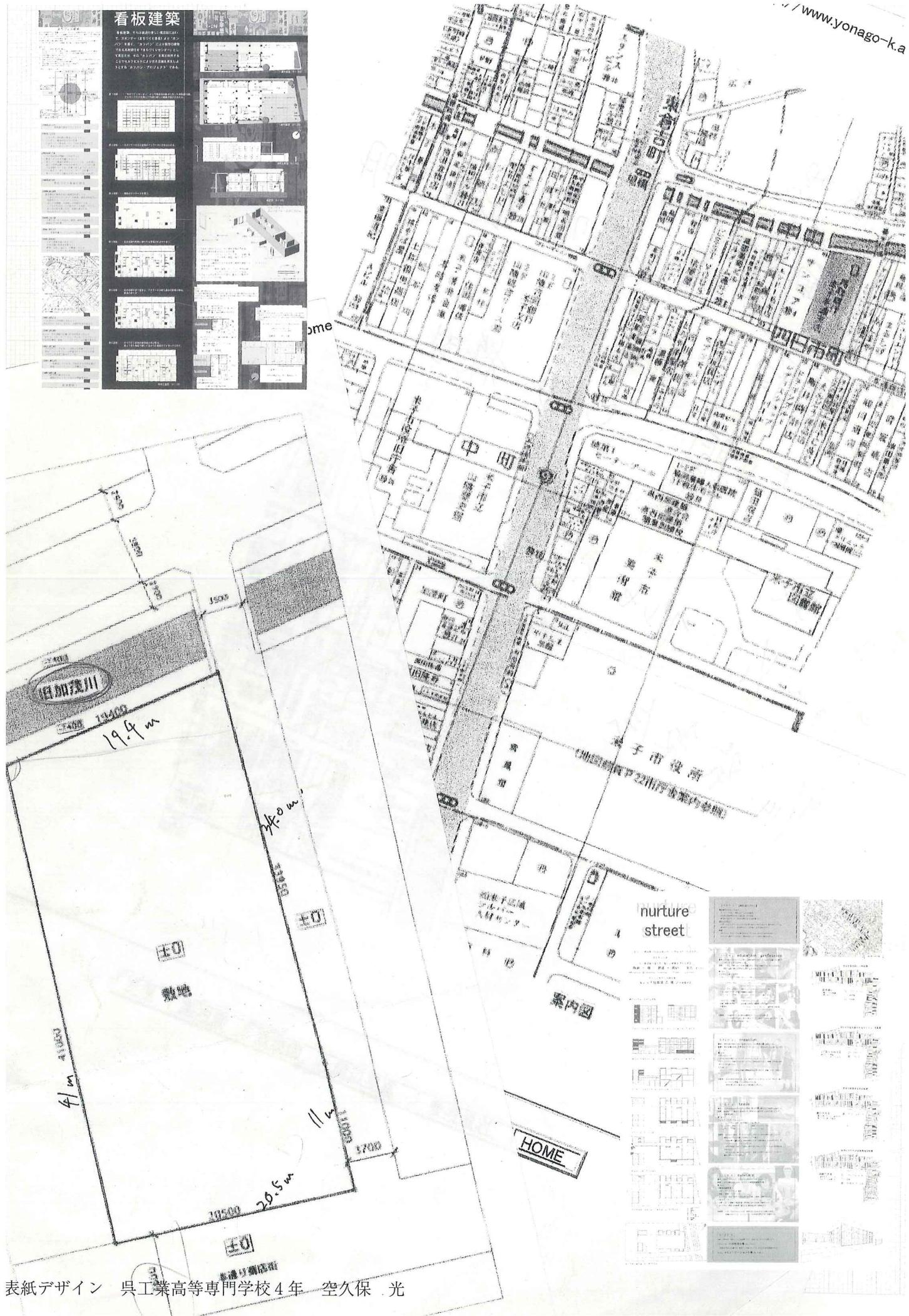
最後になりましたが、審査委員の先生方をはじめ、御後援頂いた皆様、そして作品を応募して下さった学生の皆さんに、深く感謝し、厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

建築学科3年 金田 和弘

四高専建築シンポジウム
公開設計競技 1999

2000年3月発行
編集・発行 米子工業高等専門学校 建築学科
建築シンポジウム実行委員会

印 刷 たくみ印刷株式会社



表紙デザイン 呉工業高等専門学校 4年 空久保 光